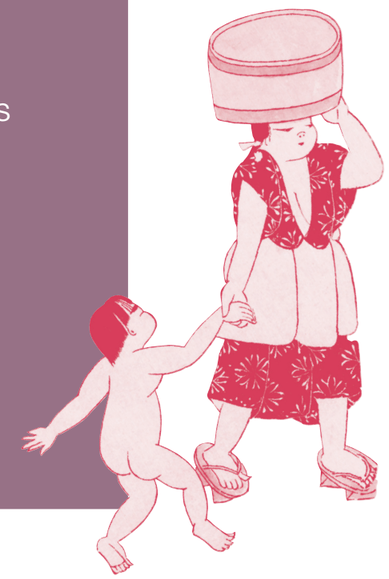
2009年3月
第
5
号

年　報
非文字資料研究

THE ANNUAL REPORT :
THE STUDY OF NONWRITTEN CULTURAL MATERIALS

5







2009年3月　第5号　◎年報　非文字資料研究

神奈川大学日本常民文化研究所　非文字資料研究センター

神　奈　川　大　学
日本常民文化研究所　非文字資料研究センター

年　報
非文字資料研究

THE ANNUAL REPORT:
THE STUDY OF NONWRITTEN CULTURAL MATERIALS

5

神　奈　川　大　学
日本常民文化研究所　非文字資料研究センター

年報 非文字資料研究　第５号　目次

非文字資料研究の継承発展をめざして ……福田アジオ

関東大震災罹災者バラックとその入居者について
——三井家寄贈公設バラックを手掛りに——……北原糸子…… 1

関東大震災後の罹災者収容バラックと
三井諸会社による活動の位置づけ……田中　傑…… 23

東京都慰霊堂保管・関東大震災関係資料について……高野宏康…… 65

検地絵図を読み解く——加賀藩の検地を事例として——……田上　繁…… 95

神奈川県下の農村における民家の持続と変容
——神奈川縣農会の調査資料からみた大正10-11年の民家の様相——……津田良樹……113

変装道具としての市女笠……佐々木弘美……131

図像資料と民俗学……福田アジオ……159

日系チャプスイレストランにおける
フォーチュンクッキーの受容……中町泰子……173

女性に対する呼称語の使用意識
——“小姐”“阿姨”“服务员”を中心に——……宮本大輔……187

執筆者一覧・編集後記

表紙デザイン『絵巻物による日本常民生活絵引』より

非文字資料研究の継承発展をめざして

非文字資料研究センター
センター長
福 田 ア ジ オ
FUKUTA Ajio

2008 年 3 月に，5 年間の事業を達成して，私どもの神奈川大学 21 世紀 COE プログラムは無事終了いたしました．21 世紀 COE プログラムの研究成果は，毎年発行した『年報人類文化研究のための非文字資料の体系化』に掲載すると共に，最終成果として 20 冊に及ぶ研究成果報告書を刊行いたしました．それらによって 21 世紀 COE プログラムの目標は達成できたものと思っておりますが，非文字資料研究はそれで完了するものではありません．世界的研究拠点形成を目指すのが 21 世紀 COE プログラムですから，COE としての事業終了後にそれを継承発展し，研究拠点として活動することが当初から期待されておりました．私どもはすでに申請段階から，事業終了後にはそれを発展させる組織として非文字資料研究センターを設立すると表明しておりました．

2008 年 4 月に非文字資料研究センターが日本常民文化研究所の付置として設立され，21 世紀 COE プログラムの事業を継承しつつ，さらに世界的な研究拠点になるべく活動を開始いたしました．21 世紀 COE プログラムに比較するとずいぶんと小さいですが，COE の施設をそのまま継承し，大きな大学予算を得て，研究に取り組んでおります．基本は非文字資料に関する共同研究を行うことです．COE から引き継いだ課題による共同研究に，新たな課題を加えて，6 つの共同研究を展開しています．いずれも 3 年間を研究期間として，成果を挙げるべく活動しております．21 世紀 COE と同様に，これらの共同研究に関わっている研究者の個別論文を収録し，発表していく媒体として『年報非文字資料研究』を COE から継承して引き続き発行していくことにいたしました．その第 1 号が本書です．21 世紀 COE 時代に年報は 4 号まで発行しておりましたので，その継承発展を表示するため，その号数を引き継ぎ，今回の年報を第 5 号といたしました．

21 世紀 COE プログラム終了時に，私どもが課題として引き継いだのは，非文字資料研究に関する世界的ネットワークを形成して，研究の世界的拠点になることでした．この点は，21 世紀 COE プログラム委員会による事後評価においてもその期待が表明されていました．年報は私どもセンターの研究員の研究成果，研究協力者，奨励研究を受けた若手研究者の研究成果を収録しますが，加えて 21 世紀 COE の関係者の非文字に関する研究成果も積極的に掲載することにしております．さらに，世界各地の非文字資料研究を行っている研究者にも研究成果発表の場を提供し，この年報から世界の非文字資料研究が発展することを夢見ております．世界各地の非文字資料研究者の皆様のご寄稿をお願いいたします．その場合，日本語のみでは不可能なことは明らかです．年報では，日本語のみではなく，英文の論文，中国語の論文も収録し，掲載していくことを考えております．あるいはフランス語やドイツ語，韓国語の論文も収録して参りたいと思います．是非，世界各地の非文字資料研究者，また研究機関の皆様にご支援とご支持を賜りたくお願い申し上げます．

2009 年 3 月

論文

関東大震災罹災者バラックとその入居者について

── 三井家寄贈公設バラックを手掛りに ──

北　原　糸　子
KITAHARA Itoko

はじめに

関東大震災では東京市約 250 万人口の 6 割とされる人々が罹災した．地震後発生した火災によって東京の中心部日本橋区，神田区，京橋区，それに墨田川東岸の本所・深川での被害は激烈さを極めた．罹災者がどのようにして住居，水，食糧を求めて彷徨したかは，震災体験談を通して個別的，断片的に知ることはできても，百万を超える罹災者が一体どのようにして応急的な対応が求められるこの時期を生き延びたのかについてなかなかその総体が把握できない．人々の動きがリアルに伝わってくるような研究がなされていないからである(1)．

そうしたことを明らかにするための基礎的な作業として，ここでは，震災関係資料の調査を通じて明らかになった三井各社の行った罹災者収容バラックに関する資料を紹介しつつ，罹災者収容バラックの概要を把握することからはじめたい．なお，当時「バラック」と呼称されたものは，公設の集団的バラック，集団的に居住する私設のバラック，個人の掘っ立て小屋に類するバラックなどのほぼ 3 つの様態に分けられる（田中傑氏論文参照(2)）．

三井各社は震災発生後の 9 月 5 日，合名，銀行，物産，鉱山，倉庫の各部門から 14 名の委員を選定し，合名会社理事長団琢磨を委員長，小林正直を副委員長として救済事業委員会を結成し，救済事業に取り掛かった．まずは内務省に 500 万円の義捐金拠出を申し出た(3)．9 月 2 日天皇が下賜した内帑金は 1000 万円であったから，これはそれ相応の多額な義捐金であった．なお，同時期に三菱も 500 万円を義捐した．

三井各社の救済事業委員会は，種々の物資の供給手配を開始するとともに，バラック建設を開始した．

東京市が 9 月 27 日に行ったバラックに関する調査で上げられているものを一覧表にすると表 1，表 2 のようになる．ここに上げられている建設主体は表 1 の東京府，警視庁，四谷区，三井，それに表 2 の東京市である．このうち，表 1 に明らかなように，建設主体が「三井」と記されているものはこの段階ではまだ計画段階であったが，10 月中旬にはほぼ罹災者収容がなされた（表 7 参照）．東京市の行った調査の位置づけからして，三井救済事業委員会が行うバラック建設事業は一企業の単なる私的な救済行為ではなく，公的救済の一端を担うものと位置づけられていたことがわかる．したがって，ここで考察の対象とするのは，公設バラックとして位置づけられるものに限ることにする．

1.1　東京市のバラック調査

東京市は調査課が主体となって，まず9月13日にバラックの調査を行った．この段階ではいまだ設置場所とその面積のみが記されるにすぎなかったが，9月27日に行った調査では三井救済事業を含めた公設バラックの概要がほぼ明らかとなった（表1，2参照）．

表1　バラック建設概要Ⅰ（1923年9月27日）

場所		戸数	坪数	建設者	許容人員	現在人員	備考
芝公園	芝新公園	504	15,112	東京府			
	東照宮前	172	516	東京府			
	芝中学運動場	64	192	東京府			
	三角公園	16	48	東京府			
	増上寺境内	64	166	三井建設			
	計	820	16,034		7,500	6,000	
芝離宮	芝離宮	974	3,006	東京府	6,000	576戸3,088	
日比谷公園	テニスコート付近	228	583.9	三井建設			
	旧音楽堂前	700	2,400	警視庁			附便所100坪
	円外三井集会場	54	138.5	三井建設			
	計	982	3,122.4		6,000	5,066	
新宿御苑	新宿御苑	172	971	四谷区	1,300	869	
九段	靖国神社前広場	490	1,680	警視庁	3,000	1,200	
上野公園	池ノ端	768					
	竹ノ台	240	4,800	警視庁			附便所200坪
	凌雲寺東台	378					
	博覧会場敷地	220	500	三井建設			未完成
	計	1,606	5,300		9,000	3,631	
青山外苑			4,000	東京府			社会教育課管理
神宮内外連絡道路			1,800	東京府			未完成・2,3棟収容開始
	計		5,800		10,000	4,795	
麻布今井町三井男爵邸		200	450	三井建設	800	739	完成収容中
浅草本願寺		290	650	三井建設	1,000	未調査	殆ど完成
石川島		70	180	三井建設			建設予定
砂町			500	三井建設			建設予定
大島町			300	三井建設			建設予定
本所業平			300	三井建設			建設予定
麹町上一、二町			350	三井建設			建設予定
神田猿楽町三井男爵邸			150	三井建設			建設予定
築地警察署前			200	三井建設			建設予定
三田四国町			100	三井建設			建設予定

出典『非常災害情報・バラックニ関スル調査』都史資料集成第6巻別冊付録　平成17年

表2　バラック建設概要（東京市営）

建設域	建設箇所	件数	坪数
京橋区	京橋会館、築地小学校前公園予定地、月島2号地、京華小学校他6校	10	4,280
神田区	千塚小学校他11校	12	3,090
本郷区	湯島小学校他1校	2	500
深川区	＊越中島、深川公園、岩崎邸内、猿江御料地、明治第二小学校他5校	10	6,050
日本橋区	坂本公園、浅草橋公園、日本橋倶楽部、＊常盤小学校　他6校	10	3,650
浅草区	浅草公園、待乳山公園、育英小学校他5校	8	4,000
本所区	＊安田邸、糧秣廠、＊外手小学校　他7校	10	4,860
下谷区	竹町（公園予定地）、＊万年小学校	2	1,000
小石川区	＊植物園	1	1,250
芝区	南梅小学校他2校	3	926
麹町区	＊麹町小学校	1	214
計		69	29,790
	＊印　計算値		＊29,820

出典『非常災害情報・バラックニ関スル調査』都史資料集成第6巻別冊付録　平成17年

なお，震災後約1ヶ月になろうとするこの時期，二重橋前広場には軍用天幕に440戸，個人が設けた仮小屋110戸の約4000人，日比谷公園には天幕に1500人，個人の仮小屋310人の併せて6,000人近い人々，それに芝公園には天幕196戸があり，徐々に公設バラックに入居しつつあるとされている(4)．

東京市役所調査課は9月27日以降，個々のバラックの収容者について調査方針を掲げ，詳細な調査を行った．以下のような項目を立て，聞き取り調査のうち東京府の管理するものについては東京商科大学学生が動員され，その結果が調査課によってまとめられた(5)．

調査の目的は，その緒言に明らかなように，「共同バラックハ畢竟スルニ仮建築ノ共同長屋」であるから，「種々ノ困難ナル問題ヲ惹起スルハ想像ニ難カラサル」処であり，今後「管理ノ良否，指導ノ巧拙，監督ノ寛厳」によっては過去の過ちを繰り返さないとも限らないとして，徹底調査をしておく必要があるというものであった．

調査項目は「バラック自体ニ関スルモノ」，「収容者ニ関スルモノ」，「バラックノ維持管理ニ関スルモノ」の3項に分け，それぞれには10目以上の詳細な項目が掲げられている．特に注目されるのは，「収容者ニ関スルモノ」の各目で，以下17目に亘るものであった．

1．収容者ノ資格，2．収容人員，3．世帯数，4．家族数，5．乳児，6．傷病人，7．現住所別収容者分類，8．前職業別収容者分類，9．現職業，10．各世帯現在日収，11．扶養義務者ノ有無，12．扶養者数，13．働キ手ノ有無，14．親類ノ有無，15．財産ノ状態，16．持出荷物，17．衣類寝具，このほか，「バラックノ維持管理ニ関スルモノ」項目では，管理者，自治組織の有無などの調査も含まれている．これらの調査内容は出典に注記したごとく，東京都公文書館所蔵資料から抽出した関東大震災関係資料集，都史資料集成第6巻別冊付録『非常災害情報・バラックニ関スル調査』（2005年）としてすでに公刊されている．

ここでは，バラックの総体の動向とそのなかでの三井各社の救済事業のバラック，特に今井町三井邸内のバラックに焦点を合わせて行くことにしたい．上記の趣旨に沿い，表に摘記したものは調査報告の一部からの抽出に限られていることを予め断っておきたい．

1.2　バラック調査からわかること

バラック起工・竣工・罹災者収容

これらの調査のうち，概要を知るための項目を表3（東京府・内務省が建設主体），表4（東京市が建設主体），表5（三井各社が建設主体）に摘記した．

これらの表中の起工・竣工時期から，公設バラックの起工時期は東京市の待乳山聖天町バラック（表4，no.3）の10月3日の1件を除いて，ほとんどは9月3日～9月15日頃までの9月中旬に集中し，竣工は9月下旬から10月初旬にかけてであったことがわかる．このなかで小石川区が管理者となった植物園バラックは一部既存建物を使用した関係もあり，竣工は9月7日と起工から4日を経て竣工しているが，罹災者収容はすでに起工の翌日の9月4日から行われている．収容開始時期は必ずしも竣工を待つというものではなかった．このように，竣工以前に入居がすでに開始されている事例は表に掲げたもののうち，東京府などの建設したもの8例のすべて（表3），三井バラックの3例のうちのすべて（表5）で見られた．ここからも罹災民の収容の緊急性が窺われるのである．

バラックの居住空間

この調査では，バラック配置の平面図が付されているが，その外観を伝える図は残されていない．

では，罹災者が収容される部屋はどのようなものであったのか．まず，収容される部屋は多くの場合は板の間仕切が付いた6畳，あるいは4畳半であり，畳はなくほとんどが茣蓙か蓆，時にアンペラ茣蓙とある．なお，表5のno.3今井町三井邸の場合の7畳は例外的であり，4畳半が圧倒的に多

表３　バラック収容状況　東京府・区建設分

no	名称	場所	起工	竣工	収容開始	棟（室）	設備	付属施設	収容資格	世帯（員数）	組織	建設/管理	立退予定	調査	頁
1	芝離宮	離宮宮内省用地	９月４日	10月３日	９月15日	28（1,000）	６畳莫蓙、炊事場無し、共同水道27口、２室１電灯宛、便所27	事務所、図書室､巡査詰所、病舎､救療所、保育園、商店120開設予定	制限ナシ	189（1,244）	自治組織、10人常任委員	東京府/東京市社会教育課		調査時期・調査者 10月13日～16日東京商科大学学生	pp13～29
2	三角公園・芝中	芝公園	９月20日	９月20日	９月21日	３（80）	４畳半蓆、炊事場有、水道３、２室１電灯（24燭）、便所２		制限ナシ	133（534）	三角バラック自治組織無 芝中バラックはもっとも完全なる自治組織、村長助役１名、評議員補佐役とす	東京府/東京府	11月中移転予定２、12月中２､近日中５、未定124	調査時期・調査者 10月18日～19日、東京商科大学学生	pp33～42、10月12日『都新聞』記事紹介
3	東照宮前	芝公園	９月10日	建築中もあり	９月12日	31（435）	４畳半莫蓙、炊事場無、水道９、２室１電灯、便所15	商店バラック内24、バラック外18、	制限ナシ	582（2,296）	自治組織、委員選任済み	東京府・内務省/東京市社会教育課	近日中２、10月中４、11月中９、未定534	調査時期・調査者 10月17日～18日、東京商科大学学生	pp55～65
4	芝新公園	芝公園(芝園橋際)	９月10日	９月12日	９月12日	12（504）	６畳莫蓙、炊事場５、水道12、２室１電灯宛、便所９	商店バラック内33、バラック外19、	不記	809（2,970）	各棟２名の委員を選定し、自治	東京府/東京市社会教育課	2,3日中４、10月中６、11月中４、12月中２、1924年１月中１、未定715	10月13日～16日、東京商科大学学生	pp75～86
5	九段バラック	靖国神社境内	９月９日	９月29日	９月19日	70（488）	８畳（34棟）、６畳（36棟）莫蓙、炊事場各戸、水道12、２室１電灯、便所70、	商店バッラク内132	制限ナシ	560（2,649）	各棟より委員１名選挙、代表者を選出、総代４名を置く	警視庁/東京市社会教育課	未調査	10月20日東京市社会教育課嘱託	pp95～106
6	明治神宮外苑バラック	明治神宮外苑	９月15日	10月28日	10月８日	53（1,753）	６畳蓆･莫蓙、炊事場有、水道13、１室１灯火、２室１灯火、浴場２	バラック在住者にして営業者77	制限ナシ	1,883（6,758）	自治会、庶務課３課、事業部８係に各主任あり	東京府・内務省/東京市社会教育課	11月中28、本年中31、1923年１月１、同２月７、来年中11、バラック取払迄９、未定1,795	10月22日事務所に依頼、11月10日提出のものを集計	pp191～207
7	新宿御苑	新宿御苑内	９月４日	９月20日	９月10日	６（172）	８畳蓆、炊事場８、水道あり、間仕切りごとに電灯１宛、便所４	商店１(揚物、荒物)	制限ナシ	328（1,181）	自治組織無	四谷区	10月　中28世帯、11月　中61、12月　中97、見込不明142	四谷区調査、	pp30～33
8	植物園内バラック	小石川植物園内	９月３日	９月７日	９月４日	22（432）	６畳、間仕切板、炊事洗濯場18、水道18、２室１電灯（10燭）、便所20	商店ナシ	罹災者	590（2,134）	１棟に２～３名の代表者、各棟生活係とす	小石川区役所/小石川区役所	11月中５、本年　中153、1924年２月中３、同３月中39、同４月中14、・・・　未定367	11月10日～20日バラック事務所調査	pp245～255

表４　バラック収容状況　東京市営

no	名称	場所	起工	竣工	収容開始	棟（室）	設備	商店ナシ	収容資格	世帯（員数）	組織	建設/管理	立退予定	調査	頁
1	越中島バラック	深川区越中島町	９月10日	10月９日	10月10日	15(286)	６畳莫蓙、間仕切板、炊事場無、水道14、洗濯場14、２室１灯（16燭）、便所33	商店ナシ	制限ナシ	138（410）	自治組織ナシ	東京市/深川区役所	未定	10月10日越中島小学校に依頼	pp131～136
2	常盤小学校バラック	日本橋本石町常盤小学校跡	９月10日	９月27日	10月６日	10(158)	３坪間仕切板、炊事場無し、水道３箇所、各棟外側１電灯	文具､煙草､菓子、薬、魚屋など７商店開設中	制限ナシ	56（311）	震災前小学校付近の居住者の話合にて選任、学校再開時に立退き予定	東京市/常盤小学校長	11月中３、12月中３、未定50	常盤小学校に依頼、10月25日提出	pp150～156
3	聖天町公設バラック	浅草区聖天町待乳山公園	10月３日	10月10日	10月14日	7（110）	６畳蓆・アンペラ、間仕切板、炊事場ナシ、水道４、洗濯場３、２室１灯、便所（大便28・小便14）	商店ナシ	当初象潟警察署管内限定、漸次区内居住者	169(535)	各棟組長１名、部長･副部長選出（役員９名）	東京市/浅草区役所	未定	浅草区役所に依頼、11月１日調査、５日提出	pp215～222
4	安田邸跡バラック	本所区横網町旧安田邸	９月10日	10月３日	10月４日	15(212)	６畳、間仕切ナシ、炊事場ナシ、水道在来、室１灯、便所29	商店ナシ	制限ナシ	282（1035）		東京市/本所区長	未調査	10月10日安田邸跡バラック事務所に依頼、10月17日提出	pp183～190
5	外手小学校敷地内収容所	本所区外手町外手小学校敷地	９月10日	10月３日	10月５日	8（132）	６畳、間仕切板、炊事場ナシ・洗濯場５、水道５、便所29、便所・洗濯場に１灯宛	商店ナシ	本所区民	37（178）	各棟世話人２名選任、配給品受取、構内清掃の指揮監督	東京市/外手小学校長	10月中１、当分ノ内35、未定１	外手小学校長に依頼、10月26日提出	pp145～150
6	万年小学校収容バラック	下谷区万年町	９月10日	10月10日	10月12日	6（118）	６畳莫蓙、間仕切板、洗濯場２、水道５、便所12、２室１灯（16燭）	商店ナシ	制限ナシ	143(568)	ナシ	東京市/下谷区役所	未定	10月15日下谷区役所に依頼、10月末提出	pp107～113
7	麹町バラック	麹町区麹町小学校	９月15日	９月25日	９月26日	4（64）	６畳間仕切ナシ、炊事場特設ナシ、水道４、洗濯場４、便所４、風呂（市より配給４）	商店ナシ	制限ナシ	76（302）	１棟に４人を指名、組合長１	東京市/東京市	12月中１、未定75	麹町小学校に依頼、10月25日提出	pp156～162

表５　バラック収容状況　三井家建設

no	名称	場所	起工	竣工	収容開始	棟（室）	設備	付属施設	収容資格	世帯（員数）	組織	建設主体	立退予定	調査	頁
1	増上寺境内共同	芝増上寺本堂前	９月７日	９月17日	９月12日	7（66）	４畳半蓆・莫蓙、間仕切板、炊事場無、水道境内１箇所、各室１電灯（24燭）	商店無し、増上寺玄関広場に松坂屋呉服店の出張所あり、露店多し	制限	201（806）	管理者（増上寺）	三井家７棟(81世帯)、増上寺は方丈などに120世帯雑居せしむ	10月中22、11月中８、本年中２、未定146、不明23	調査時期・調査者10月18日～19日　東京商科大学学生	pp43～53
2	浅草本願寺共同	浅草本願寺	９月17日	10月６日	９月28日	17(202)	４畳半蓆・莫蓙、間仕切板、炊事場無、水道５箇所、便所12、各室１電灯（24燭）	境内たばこ、絵葉書、魚屋、露店あり	浅草区内者に限定	198（739）	管理者（浅草区)、代表者本願寺職員	三井家寄贈	罹災民は自ら移転するものなしと推定	10月15日浅草区役所員による現在の調査	pp66～73
3	三井邸罹災収容バラック	麻生今井町三井邸内、堂門前、氷川神社付近	９月６日	９月12日	９月12日	33(116)	７畳半、６畳、４畳半、莫蓙、間仕切板、炊事場４、便所７、水道有、１戸１灯火（10燭）	商店ナシ	制限ナシ	174（623）	管理者（三井家）	三井家	今月中５、11月中１、本年中14、1924年２月２、同３月８、未定129	11月３日～５日、東京市調査課	pp162～175



写真１　当時のバラック内部の様子（東京都慰霊堂保管関東大震災関係写真）

い．電灯は多くの場合２室に 24 燭光の電灯１つ，時に 16 燭光の場合もあったが，ほとんどは文字を読むことは困難な明るさだった模様である．炊事場，洗濯場，水道は公園や寺の境内の場合には既存のものを利用し，ある程度の整備が施されたと推定される．下水についても配慮を求められたが，既設水道に付随する下水装置以上の施設上の配慮はなかったところが多い．便所は新設のバラックの場合は１棟の室数に対応する数が考慮された形跡はあるが，入居者に満足を与えるものではなかったことが後に紹介する協調会による避難者バラックの調査から窺われる．写真１はどこのバラックかは明らかではないが当時のバラック内の様子を伝える貴重な写真である．

バラック入居資格

バラックへの入居資格は「制限ナシ」とするものが多いが，この点は建設主体との関係でみていくと，ひとつの回答が与えられる．表１の東京府が建設主体で東京府・市が主管する場合には「制限ナシ」と調査されている通り，実際にも東京市全域，および所在地の区域の入居が圧倒的に多いものの，千葉，埼玉，神奈川などからの入居者もみられる．

また，四谷区が新宿御苑に建てたバラック（表３，no.７）および小石川区が小石川植物園に建てたバラック（表３，no.８）はいずれも区の建設主体であるにもかかわらず，収容者への制限を設けていない．新宿御苑バラックに入居した罹災者の原住所は，1,182 人のうち京橋区が 216 人，ついで四谷区が 208 人となるが，神田，深川，本所の両区からそれぞれ 100 人を超える規模で入居，また横浜市から 22 名の入居者がいる．植物園内バラックの入居者の原住所は 590 世帯（2,134 人）のうち神田区が 131 世帯，浅草区から 95 世帯，下谷・本所・深川がいずれも 60 世帯以上，地元の小石川区も 62 世帯が入居しているが，東京市内に限らず，横浜市，浦賀町からの入居も交じっている．恐らくは御苑にしろ，植物園にしろ，その場所が立地する地元の区を超えた著明な場所であり，ここを目指して避難してきた罹災者を拒むことはできない状況であったのではないかと推定される．建設主体が東京府，内務省などの場合には被災地全般の罹災者を対象としていたことが窺われる．

三井救済事業委員会が設置したもののうち，増上寺境内（表５，no.１），浅草本願寺境内（表５，no.２）の場合はそれぞれの管理者が増上寺，本願寺であるため，管理者による制限が加えられたが，今井町三井邸（氷川町，福吉町を含む）のものについては，「制限ナシ」であった．この点は後の検討で述べることにする．

では，東京市が建設主体の場合はどうか．

表４に見られるように建設主体が東京市であっても管理をバラック建設地の地元区に委ねており，被災者の多い区では地元の罹災者が多くを占めたことが東京市の調査からは窺われる．表４で明らかなように，入居資格について「制限ナシ」とするものが大半だが，no.３の待乳山公園聖天町バラックが当初は象潟警察署管内，no.５外手小学校が本所区民と制限を設けるのみである．しかしながら，その実態をみると，no.１越中島では地元の深川区罹災者が 131 人を占め，近隣区の本所区４名，日本橋区３名が入居しており，「制限ナシ」としても実際の入居者は地元が圧倒的多数を占めていた．no.３の待乳山公園聖天町バラックの場合は当初の制限は後に緩和され，169 世帯中 18 世帯が神田，下谷，本所，府下からの入居者であった．また，no.５外手小学校は区や区長の管理に委ねられたものとは異なり，外手小学校長に委ねられ学校が再開するまでのバラック設置で期限が明記されていた．このためか，教員による入居者の指導・管理が徹底されていた様子が自治組織の調査などから窺われるケースである．したがって，実際の入居者も本所区民に限定されていた．

以上の検討から，東京府や内務省などの場合とは異なり，東京市が建設主体となったものは，遠地からの避難者の入居があったとしても，実態としては設置区の罹災者の収容を主眼として設置され，東京府と市で罹災者救済の役割上の分担を敷いていたと推定される．

立退きの時期

本調査の目的として述べられているように，共同長屋としてのバラックの設置については予測される問題発生を未然に防ぐためにまずは入居者の実態を把握しておくことというのが第一義であり，当然，入居者がいつ退去するのかということは，いつまでバラックを設置しておくのかということでもあったから，行政にとってはこの点は最大の関心事のひとつであった．そこで当然立退きの時期につ

いても聞取り調査がなされている．表３では，近日中，10 月中あるいは 11 月中と回答するもの，本年中とするものを含めると，少なくとも 200 名近くを数えることができる．しかし，圧倒的多数は「未定」とする．ただし，来年２月，３月，４月と時期を区切った聞き手への対応が感じられるから，吏員とは異なる商科大学学生の聞き方との対応で引き出された回答とみなすこともできる．実際の退去時期がどのような展開となったのかはこの調査から知ることはできない．

表４では「未調査」のものも含まれるが，10 月中のものは極めて少なく，12 月中の予測を立てるものが若干名，その他は「未定」が殆どを占めている．

要するに罹災して漸く仮の落ち着き先を見出したばかりの罹災者にいつ出て行くのかと聞いても確かな答えなど出るはずもない状況であったことは 85 年後のわたしたちにも想像が着くような類の，罹災者にとっては残酷で応えがたい質問であったのであろう．いずれにしても立退きに至る過程で発生した諸問題については別稿を予定している．

1.3　協調会調査が聞き取る入居者の「生の声」

米騒動の後に設けられた労使協調を旨とする協調会は，1923 年 10 月「罹災当事者より見た処の諸般の希望，批判，観察等彼らの心理状態の一斑を窺ふ事」を目的にバラック入居者の聞取り調査を行った[(6)]．その目的とするところは「精神的慰問」とし，結論は自治的団体の必要とその精神的指導を説くところに落ち着く．ここでは，その結論の方向は暫く措くとしても，この時期に公設バラック入居者の「生の声」を拾い，その結果掬い取られた当時の現状については注目すべき内容があると考えら

れるので，調査内容をここで検討しておきたい．

調査書の最初に調査地についての印象的概要が述べられている．前掲『都史資料集成』別冊には載せられていない公設バラック地区についても調査報告がなされているので（下線部箇所），以下にその要約を記し，数値表現とは異なる震災後1〜2ヶ月経過の印象記が伝えるところに触れておこう．

芝公園：調査時期が震災後間もなくであったため，掘立小屋がいたるところに充満，バラックも建てられたばかりで整っていない．

宮城前：芝公園よりやや整頓されていた．

上野公園：罹災者が自治的に活動，物資の配給，職業の紹介などすべて自治団の活動で行われていた．収容人員6,659人，1,822戸．労働希望者多く1日千人の申し込みに対して，150人ぐらいの割り当てで就労．

本所深川辺：深川猿江裏，本村，錦糸町，本所柳島，横川町，柳島元町から電車線路沿いに吾妻橋までの掘立小屋を調査．救済が十分でなく，焼跡も放置されたままで，一望焼野原と見紛うほどである．住み人も少なく，調査すべき住宅の選択が困難な状態．

芝離宮：秩序も整い，救世軍施設の国民学校もある．

新宿御苑：御苑の一部にバラックを設け秩序は整っているが，開放された部分は極一部分で、子供の遊び場所もない．

靖国神社：大鳥居を挟んでバラックを建設，目下2,500人，700戸を収容．市役所から係員が出張して事務所を設置．どこよりも設備完備の様子．

本所被服廠跡：被服廠跡の見物人と両国橋から本所深川への通行人が多い．被服廠周辺は焼跡の整理が付かず，周辺も住む人は稀であったから調査を見合わせた．

青山外苑：6,840人，1,000世帯収容．このうち，600人は朝鮮人で，一般内地人とは離れて板囲いの中に収容され，朝鮮総督府から係員が出張し，帰国就職の斡旋をしていた．

以上の印象記を踏まえて，次に個別の聞取りの調査結果が述べられる．個別の聞取り調査の対象は，公設バラックの設けられた芝公園，宮城前，日比谷公園，上野公園，本所深川，芝離宮，新宿御苑，靖国神社，明治神宮外苑の9ヶ所である．調査項目は，食料，衣服，住居，光熱水道，衛生，通信，復興に対する方針，救済所感，困難事の9項目に亘る．主として婦人事務員に慰問を兼ねて調査を行わせたとされている．調査報告ではそれぞれの場所においても担当調査員ごとに結果がまとめられた模様で，たとえば芝公園では8ヶ所，上野公園は7ヶ所，芝離宮では6ヶ所など，同一の公設バラック地であっても複数の調査結果にまとめられている．表6はそのなかから，それぞれ際立った特徴のあるものや同じ場所であっても対称的な回答をしている事例などを摘記したものである．

個別の聞取りから，協調会調査がそれぞれの項目について結果をまとめた内容では，食料は一般に行きわたっているが，配給方法の不公平が問題と指摘する．炊出しの場合は1人1食宛なので，家族全員が並ばなければ不都合が大きいこと，罹災者でない者も列に加わっているなど問題多しとする．衣服は一様に不足，特に罹災時が残暑厳しい時期であったため，浴衣一枚で飛び出した者が多く，冬へ向かって，衣服，寝具を心配する人が多い．住居は掘立小屋は焼トタンで囲い，雨露を凌ぐに過ぎ

表6　協調会調査（1923年10月）

	場所	分類	調査戸	食料	衣類	住居・光熱	衛生	通信	復興	救済所感	困難事
1	芝公園	掘立小屋	12	ほぼ満足	間に合う	電灯なし	非衛生	間に合う	方針立つ	感謝/不遇感	貯金ナシ
2		公設バラック	8	1人1日1.5合、不公平	不足	焼跡の木を熱源	便所屋根ナシ	必要ナシ	金策ナシ	食糧公平分配望む	夜具不足
3		公設バラック	4	配給長時間要すは困却	冬物ナシ	蝋燭/焼跡の木を熱源	入浴不可	必要ナシ	困惑のみ	配給迅速望む	失職、便所
4		掘立小屋	5	玄米1人2合、炊出配給は長時間並ぶも貰えず	重要品持ち出しあり	蝋燭、街灯利用、遠方の水道利用	入浴1回	通信す、来信ナシ	回復絶望視、洋服屋客の預かり物無事が満足	世人へ感謝	現金ナシ，買いたくも米ナシ
5	宮城前	テント村	19	ほぼ満足/1戸不足を告ぐ	冬物ナシ	電灯ナシ、木炭少量配給、焼跡木材利用	入浴不可、便所ナシ（トタンの仮囲いのみ）、不潔	事務所にて扱う	旧職業再興見込み/見込みなく人夫職	配給に感謝；旧住所へバラックを建て帰る者7戸、未定13戸	防寒用具不足
6	日比谷公園	公設バラック	3	米1日2合、野菜梅干配給	冬物ナシ	共同水道、枯木を薪とす、電灯2戸1灯	浴場ナシ、共同便所、宮内省診察所	国許へ通信	旧職は工場労働者	ナシ	住居防寒設備ナシ
7		公設バラック	4	南京米5合宛、味噌醤油配給、不自由ナシ	冬物ナシ	日当たり良、2室1灯、炭購入、薪は枯木など	水道、1棟1便所、医者巡回	通信ナシ	失職、商売再開の金策立たず	感謝	衣服不足、盗難憂い甚し
8	上野公園	公設バラック	16	ほぼ満足・（自治会館収容者大半）、寛永寺・救世軍・基督教青年会の子供野外学校などあり、子供におやつなど支給す	衣類不足	1人半畳、旧住所へバラック建予定3戸、共同水道、枯木を薪とす、電灯2戸1灯	浴場ナシ、通路狭く不衛生	自治会館にて扱う	上野山内でテンプラ屋開店予定、煙草屋・車力・印刷業者・西洋家具商などは見込み立たず	感謝/不公平に不満	冬物、夜具の不足
9		掘立小屋	1	米配給、留守中に盗難の怖れ多し、小屋を明けられず	夜具・衣類ナシ	焼トタンにて囲あるのみ、蝋燭/焼跡の木を熱源	風呂は根津方面にて利用、便所不足	通信ナシ	テント商人にして資金ナシ	野菜類不足	蒲物・夜具・副食物望む
10		掘立小屋	3	米・味噌・醤油・野菜配給不満ナシ	夜具・衣類あり	蝋燭/焼跡の木を熱源、道具類は焼跡から掘り出して使用	水道便利、赤十字出張、便所設備不完全		求職中；バラックへ移転の予定	不平ナシ	衣服・寝具類
11	本所・深川	掘立小屋	2	食物は間に合う	借着にて間に合わせる	一時砂村の知己に避難、旧住所へ焼トタン囲い掘立小屋	木炭類拾集め，バケツ1杯の配給を待つ、電灯ナシ	配達あり	セルロイド商，復興見込み，駄菓子屋は入いなく商売見込み立たず	感謝	衣服・寝具類

12	本所・深川	掘立小屋	5	1日1合、他馬鈴薯などにて食物不足	夜具・衣類	蝋燭/焼跡の木を熱源、猿江裏湿気多く、降雨時は床浸水	衣服・寝具類不足、湿気多し、水不足
13	芝離宮	公設バラック	4	配給品不十分だが、間に合う	親類から貰う、不足なし	境ナシと畳ナシには困惑、電灯あり	格別ナシ
14	芝離宮	公設バラック	3	不自由ナシ	単物配給あり	雨漏り、床上浸水す、仕切りナシ、炭配給、2室1灯	住居
15	新宿御苑	公設バラック	3	不自由ナシ	間に合う	当分住居予定、1人1畳宛、電灯あり、木炭配給	冬物衣類
16	新宿御苑	公設バラック	3	1人2合、梅干、馬鈴薯などあり、不十分	単物下駄配給、	床低し、仕切りナシ、電灯あり、炭支給	冬物、夜具の不足
17	靖国神社	公設バラック	3	不自由ナシ	配給品にて間に合わす	バラックは防寒設備あり、旧住所へ帰る予定者1あり、2室1灯、木炭配給	子供の衣類不足
18	靖国神社	公設バラック	3	米配給、副食物ナシ	夏物衣類配給、布団ナシ	各戸仕切り、四畳半＋1畳土間＋半畳板の間あり、2室1灯	失職、衣服
19	明治神宮外苑	公設バラック	6	米･味噌10月15日まで配給、米は不足気味、野菜は購入する	衣服不足	雨漏りす､冬季不向きにつき、田舎へ帰郷を予定す、炭半俵配給、電灯	夜具類不足
20	明治神宮外苑	公設バラック	6	米・味噌・醤油・野菜配給不満ナシ	衣服不足	境ナシ、雨風吹き込み、降雨時は住みがたし、2室1灯、湿気多し	子供の衣類不足、寝具不足

ないもので豪雨時には雨漏りが激しく夜も眠れない．公設バラックでは1畳1人の割合で収容するので，小家族の者は2，3家族雑居の状態である．光熱・水道は場所により異なり，宮城前テントや掘立小屋は電灯がないので，蠟燭使用．バラックにおいても高い所に僅かな燭光の電灯があるのみで，新聞を見ることも手紙を書くことも針仕事をすることも困難で蠟燭をともさねばならず，「電灯の効力が一向実用的でない」．水は水道が開通した箇所でも1ヶ所を数十人で使用するので，混雑名状しがたしとする．衛生状態については病人は殆ど見当たらない，医療設備は充実していたと評価している．入浴については，殆どが震災以来一回も入浴しない状態．便所は甚だ不潔で，糞尿が流出しているところがあり，至るところ勝手に用を足しているのは遺憾とする．入居者の復興方針は材料さえあれば自ら家屋を建築しようとする者が殆どだが，バラック居住者は資力を持つ者は稀で，バラックを半永久的住居としている様子，到底復興の気分は認められないとしている．救済には感謝の念を抱いている．困難な事項は冬着，布団類，防寒具の欠乏が一致した意見だと指摘している．

以上の個別調査の結果から，協調会は今後の対応としていくつかの提言に言及する．バラック入居者は精神的に孤立無援の状態であり，精神的指導救済が必要だとする．「罹災者は未だ自暴自棄には陥っては居ないが前途の暗黒は一様で」あり，「赤化」思想への傾斜の危険を説く．資金の融通，職業紹介所の必要であるが，これらの救済施策を行うには罹災者の精神的側面を重視する必要があり，このためには特殊団体（宗教的精神的）を利用することが良策とする．バラック生活は都会の住民に団体的訓練と自治的訓練の必要を了解させる絶好の機会であり，自治的組織の指導が急務であると結論付けている．

市役所のバラック調査と協調会調査の相補性

さて，以上震災から1，2ヶ月後の公設バラックを中心とする東京市の罹災民の情況の一端が多少とも具体性を帯びて明らかになったと思う．

二つの調査を比較すると，それぞれの調査は目的を異にしているので得られた成果にもそれぞれの特性が反映された結果になっている．東京市役所の調査が行政的必要からバラック事業の全体の客観的把握を目指したものとすれば，協調会の調査はその結論部分を措くとして入居者に密着した聞取り結果には客観性が保たれ，傾聴すべき内容があると評価できる．しかし，協調会が憂うるような精神的指導が要求される切迫した事態は個別の聞取り調査からは看取できないのではないかとの印象を持つ．バラック入居者も資金が得られれば自ら家屋を建築したいとする気力は強いという結果や，冬に向かう衣服や防寒具の不安は多いものの就業意欲は高く，ここには自然体でこの震災禍を受け止め，生活回復への努力を惜しんではいない人々が多いことも事実と認められるからである．また，その序言で，「同一区民で同一場所にのみ避難した者は殆どなく，麹町，京橋，神田，本所，深川の者は少くも五ヶ所から七ヶ所へ離散避難して居る．」として，罹災者が少しでも安全な場所を捜し求めてあちこちと移動せざるを得なかった当時の状況を伝えており，協調会が調査目的とするところに関わりなく，当時の現実が如実に反映されている．今となっては協調会の調査の意義がここにこそあると思われる．

2　三井各社の罹災者収容バラック

すでに述べたように，関東大震災における三井各社の罹災者救済のバラックは一私的企業の救済事業とみなされるものではなく，公設バラックに位置づけられるものであった．したがって，相応の規模で展開され，東京市だけでなく，横浜市においても 5 ヶ所の罹災者用バラックを建設，寄付している．本稿では東京市の場合のみを対象としたので，横浜市については言及しない．

三井救済事業委員会が建設したバラックの規模，竣工時期，その他の情報を表 7 に示した（三井文庫　特 660）．7 表の三井が建設した 25 ヶ所のバラックのうち，no. 1〜no. 3 の日比谷公園バラックは当初三井集会所に応急的に罹災者を入居させたが，後に日比谷公園の 2 ヶ所にバラックを建設し移転させ，10 月段階では日比谷公園内では 2 ヶ所となった．no. 4〜no. 8 の 5 ヶ所，no. 13，no. 15，no. 16 の 3 ヶ所のバラックは建物の建設資金を三井が担い，竣工したバラックを三井各社の同族会議長三井八朗右衛門から臨時震災救護事務局総裁山本権兵衛（首相）に寄付願いの手続きがなされ，それぞれ該当する管轄機関の許に措かれた．特に no. 5〜no. 7 の三井邸内のバラックについては，該当住宅の敷地は一時応急的に個人の宅地内にバラック建設をしたものであり，バラックの存続期間は「大正 13 年末日」までとし，その後は使用したバラックを無償で該当区への無償払下げることが当初より寄付願書に明記された．no. 9〜no. 12 の増上寺境内，浅草本願寺，伝法院の託児所はそれぞれ寺院が主体となって管理し，建物については上述の例と同様無償払下げとされた．no. 18〜no. 22 は当該地の区役所への寄付を保留し，三井男爵家の直営とされたバラックであった．no. 23 四国町バラック，no. 24 石川島バラック，no. 25 築地バラックはそれぞれ三井関連会社の雇用者向けのバラックであるから，入居資格制限のない公設バラックとは異なる．また，表 1 のうち三井が建設する大島町のバラックについては，場所が適切ではないとして建設が中止されているので，表 7 の一覧には登場しない（特 660）．

以下では，三井家直営の no. 18〜no. 22 今井町バラックについて，その実態に迫ることにしたい．なお，三井文庫が所蔵する資料では，この一連の救済事業の主体は「三井家」と表記され，新聞記事などにおいても同様の表記が採られている．

今井町三井家直営バラック――東京市の調査から

今井町三井邸バラックと総称されるバラック群は，本館前，今井町，氷川町（神社），福吉町の 4 ヶ所であるが，1923 年 11 月 19 日東京市役所調査課の調査では，三井家が新設したバラックの他，既設の社宅も収容所に代用され，そこに収容された罹災者も調査対象としたと断りがある．今井町バラックの所在図中の「三河台バラック」がこれに当たるものと推定される．

東京市の調査による略図は全体略図と 4 ヶ所それぞれのバラック略図である（図 1〜5）．
家族数その他の概略は既出の表 5 に示しておいた．バラック入所前の原住所別の分類では，赤坂区と芝区がそれぞれ 21 世帯，ついで本所区 17，神田・日本橋の両区からそれぞれ 15 世帯，深川・麻布の両区から 14 世帯，浅草 13 世帯などであり，被害の少なかった四谷，牛込，小石川，本郷からは入居者はいない．入居状況からは，焼失のはげしかった区域からの入居者で占められている．

震災以前は不明 15 名を除き入所者のうちの有職者は 98% であったが，震災後は 73% に減少し，

表 7　三井家バラック

no	所在地	構造	棟数	戸数	建坪	竣工	備考
1	日比谷公園（麹町区）	木造トタン葺平屋・付属建物	18	228	538,94	9 月16日	（大正12年11月24日震災事務局へ寄付願書）
2	日比谷公園 2（麹町区）	木造トタン葺平屋・付属建物	4	12	77,50	11月23日	9 月16日建設分移転（大正12年11月24日震災事務局へ寄付願書）
3	日比谷公園 3（麹町区）	木造トタン葺平屋・付属建物	2	11	30,00	11月30日	9 月16日建設分移転
4	牛が淵（麹町区）	木造トタン葺平屋・付属建物	3	20	61,70	11月16日	存置大正13年末とし、その後区役所へ無償下渡（大正12年11月24日震災事務局へ寄付願書）
5	一番町三井邸内（麹町区）	木造トタン葺平屋・付属建物	6	42	130,65	10月28日	存置大正13年末とし、その後区役所へ無償下渡,（大正12年11月17日震災事務局へ物件引渡）
6	上二番町三井邸内（麹町区）	木造トタン葺平屋・付属建物	6	40	123,60	10月28日	存置大正13年末とし、その後区役所へ無償下渡,（大正12年11月17日震災事務局へ物件引渡）
7	北神保町三井邸内（神田区）	木造トタン葺平屋・付属建物	7	64	196,80	10月30日	存置大正13年末とし、その後区役所へ無償下渡,（大正12年11月17日震災事務局へ物件引渡）
8	右京が原（本郷区）	木造トタン葺平屋・付属建物	6	42	129,30	10月11日	建物使用後、区役所へ無償下渡（大正12年11月24日震災事務局へ寄付願書）
9	増上寺境内（芝区）	木造トタン葺平屋・付属建物	9	66	181,26	9 月16日	（大正12年11月24日震災事務局へ寄付願書）
10	上野公園内（下谷区）	木造トタン葺平屋・付属建物	29	187	445,50	9 月30日	（大正12年11月24日震災事務局へ寄付願書）
11	本願寺境内（浅草区）	木造トタン葺平屋・付属建物	29	203	569,65	10月 8 日	（大正12年11月24日震災事務局へ寄付願書）
12	伝法院境内（浅草区）	木造トタン葺平屋託児所	2	2	48,75	10月30日	無条件引渡し
13	築地警察署内（京橋区）	木造トタン葺平屋・付属建物	4	32	99,00	10月20日	寄付願に建物敷地賃借契約承継条件
14	佃島町（京橋区）	木造トタン葺平屋・付属建物	16	70	150,42	9 月28日	
15	柳元小学校内（本所区）	木造トタン葺平屋・付属建物	8	70	217,65	11月 5 日	建物使用後、区役所へ無償下渡大正12年11月17日震災事務局へ物件引渡し）
16	茅場小学校内（本所区）	木造トタン葺平屋・付属建物	4	40	134,00	11月 4 日	建物使用後、区役所へ無償下渡大正12年11月17日震災事務局へ物件引渡し）
17	府下砂町	木造トタン葺平屋・付属建物	18	176	464,26	10月 8 日	（大正12年11月24日震災事務局へ寄付願書提出）
18	今井町（麻布区）	木造トタン葺平屋・付属建物	26	58	239,50	9 月16日	
19	三河台（麻布区）	木造トタン葺平屋・付属建物	3	5	52,50	9 月16日	
20	氷川町（麻布区）	木造トタン葺平屋・付属建物	6	20	71,50	9 月16日	
21	氷坂町（麻布区）	木造トタン葺平屋・付属建物	2	10	29,50	9 月27日	
22	福吉町（赤坂区）	木造トタン葺平屋・付属建物	10	33	107,00	9 月16日	
23	四国町（芝区）	木造トタン葺平屋・付属建物	8	40	124,00	11月 8 日	四国町借家罹災者収容用
24	石川島（京橋区）	木造トタン葺平屋・付属建物	3	12	54,00	10月中旬	物産石炭人夫収容用（大正12年11月24日震災事務局へ寄付願書提出）
25	築地（京橋区）	木造トタン葺平屋・付属建物	3	19	102,00	10月下旬	物産石炭人夫収容用

出典「震災罹災者救護用仮住宅並託児所寄付願提出済報告書」三井文庫特660

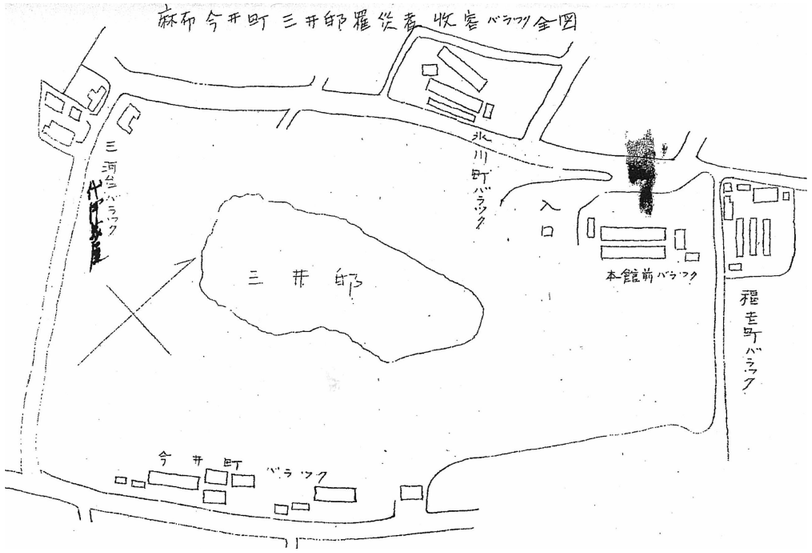


図1　今井町バラック配置

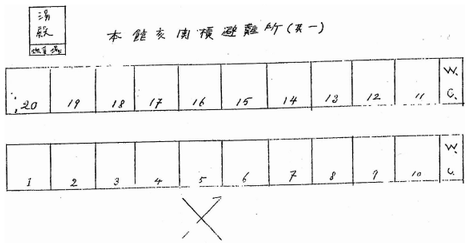


図2　本邸門内

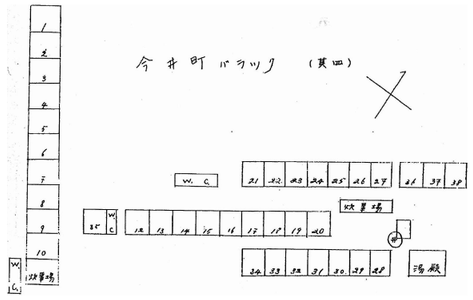


図3　今井その1

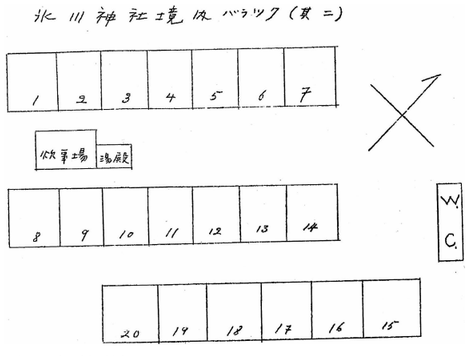


図4　氷川神社境内

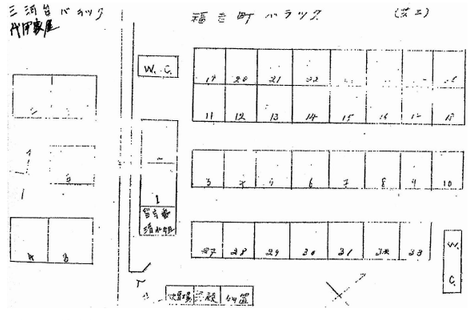


図5　福吉町

（図1〜5『非常災害情報・バラックニ関スル調査』
都史資料集成第6巻別冊付録から引用）

表8　今井町三井邸バラック収容者の職業

no	分類	前職	現職
1	農業	5	5
2	工業	58	32
3	商業	53	32
4	運輸	11	10
5	公務・自由業	17	15
6	有職者	4	18
7	家事手伝	8	5
8	無職	3	42
9	不明	15	15
	計	174	174

出典：都史資料集成第6巻別冊
『非常災害情報・バラックに関する調査』

無職の世帯主が42人となっている．就業内容では工業，商業が圧倒的多数を占めるが，いずれの場合も震災前後を比較すると震災後は失職してはいる者が増加する（表8）．

震災前後を通じて有職者のうちの内訳をみると，以下のような傾向となる．

まず，工業従事者では，震災前の58人のうち，鍛冶職，建具指物製造，大工，それにペンキ・漆塗職などいずれも自らが職人として働く層が各業種とも5人以上を占め，雇人としての職工が7名を数える．商業のうち，会社員，店員が20名を占めるが，その他は，飲食・貸席業，小間物・履物・雑貨販売，古物商などの自営業がそれぞれ4〜7名程度みられる．no.4の運輸業では11名のうち5名が人力車業である．no.5の公務・自由業のうちには官公吏が13名のほか，芸術家3名も含まれている．no.6の有職者の実態は日雇業であり，震災前4名であったものが，震災後には一挙に18名に膨れ上がるのも震災後の市場経済の混乱を象徴する数値であろう．こうした職業分類からみても，特に三井邸内バラック特有の傾向が窺えるというものではなく，東京市全域から避難してくる人々の当時の職業構成が反映されているとみてよいのではないだろうか．

調査者は彼ら入所者に日収の金額を聞いている．収入のない世帯が174中51を占める．収入のあるもののうち，日収額は1日1円〜2円の間にある世帯が多いが，収入のない世帯を除いた平均日収額は約1円である．日銭を稼ぐことが当面の生活維持につながるものの，それすらもままならない状況が読み取れよう．財産状態については，貯金，保険の2項について調査している．貯金は30円〜4万円までが8世帯あり，1000円の生命保険が1世帯，1000円〜7000円の火災保険3世帯，動産所持2世帯などとなっている．ただし，調査者は「備考」として，「収容者中真態ヲ語ラザルモノ又主人留守ニテ要領ヲ得ザルモノ多シ」と注記を付けている．つまり，正直には答えてくれないから信用できない数値だと言いたいのである．また，衣類が不足する訴えは協調会の調査で多く見られたが，三井邸バラックでは，衣類夜具に不足していないとする世帯が174世帯中76あり，比較的衣類の欠乏感は薄い様子である．

また，自治会組織の有無については「別ニ組織トシテ特筆スベキモノ之ナキモ只世話人ト称セラルルモノ2名，指名ニテ選出専ラ公用ニ当レリ」と回答している．

三井家への「感謝状」の分析から

三井邸内バラック入居者が三井家宛に書いた「感謝状」がまとめて残されている．折本仕立て，布地で表装された4冊が桐の箱に収められている（写真2）．感謝状は145件あるが，それぞれ最初の2葉に三井邸内バラックが描かれ，次いで，今井町町会の役員12名の名が記されている（写真3）．145件の感謝状には，東京市の調査とは異なる情報も含まれている．この資料からは，入所者がどのようにしてここに収容されることになったのかを探ってみたい．

まず，この感謝状が書かれた経緯については，入居開始から約半年後にあたる1924年2月27日の『読売新聞』紙面に，「バラック住民が三井男へ感謝状」という記事が掲載された．これによれば，



写真２　感謝状と外箱（三井文庫，北 1544）

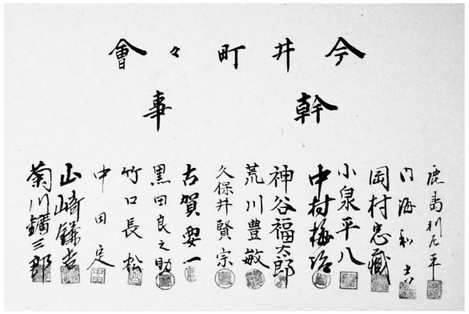


写真３　今井町町会役員の署名（三井文庫，北 1544）

麻布今井町三井男爵邸にある百五十五戸のバラック住民は追々旧住所へかへり残る住民も日比谷その他のバラック住民とともに碑文谷に移転する事になったが，震災後受けた三井の厚遇に感謝の意を表すべく協議の結果感謝状を贈る事となり今井町々会の斡旋で村上委山画伯に揮毫を依頼し美麗に表装して六日午前十時バラック住民代表能勢，中島，中澤の三名が町会関係者とともに三井男に面接し深く厚意を謝してその感謝状を贈った

とのことである．このほか，『中央新聞』（1924 年 10 月 1 日），『中外商業新報』（1924 年 10 月 2 日），には，感謝状の文面の一部を引用，紹介している．

なお，その実態は不明ながら，今井町町会がバラック住民を束ねていると推測される(7)．

以上の記事からはバラック撤去の期日も間近いことが推測される内容だが，とりあえず，ここでは，バラック住民について「感謝状」から得られた内容を検討しておくことにする．

感謝状に期日が書かれているものは 145 件中 92 件あるが，その大部分は 1923 年 12 月であるから，認められた感謝状をまとめ，表装し，贈呈するまでには 2〜3 ヶ月経過したことになる．この間に，画家による邸内のバラックも描かれたものであろう（写真 4）．



写真４　村上委山描く今井町邸内バラック（三井文庫，北 1544）

さて，1，2 その文面を紹介しておこう．

感謝状事例 1（写真 5）

三井邸内バラック 15 号　宮崎乾治，記した期日は 12 月 20 日

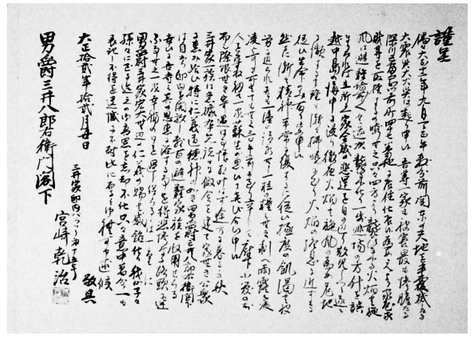


写真５　宮崎乾治の感謝状（三井文庫，北 1544）

謹呈　偶々大正 12 年 9 月 1 日正午数分前関東の天地を半覆滅したる大震災大火災は起り申候，吾等一家は被害最も惨愴たる深川区富岡門前町 47 番地に居住仕居候為めにてより家屋家財等を取拾すること暇無之，只只四方より襲い来る火焔と旋風は避難場所へと追付き襲来仕り一歩逃場の方針を誤りたれば立所に一家全滅の悲運を目の当たり散見しつつ，遂に越中島の海中に浸り徹夜火焔と旋風の為め危地に瀕すると雖も漸々払暁に至り火焔の終息に近ずくに従い生命のみ取り止め申候，然るに漸々精神平常に復するに従い極度の飢渇と疲労に迫られ候も一滴の清水無之，一粒の糧も無之剰へ雨露を凌凌すべき所とても無之，3 日午前に至り辛うじて府下小菅の知人をたずね初て一家蘇生の思いを喜び合い申候，而し際限無き寄遇は事情相叶はず途方に暮るの秋，三井家一族は急遽率先諸所に仮舎を建て家無き公衆に恵を給ひ，特に仁義道徳神の如き男爵三井八郎右衛門閣下は自ら邸内を開放し数百の避難家族を収用せられる，幸いに吾等も真の恩恵に浴する事を得，悲惨なる街頭に迷う事無之一家幸福の日を過ごし得らるるは一重に男爵三井家広大無辺の仁義の賜と感銘仕り，我が子々孫々に至る迄之の御高恩を忘却不仕，只々意中万分の一も表記不得を遺憾に不耐此に厚く御礼可申述候

謹白

（下線，は引用者による）

三井邸今井町バラックに至る経緯が多少ともわかる事例であるが，深川富岡町に住んでいたこと，1 日地震発生後から火焔と旋風に追われ越中島の海水に浸って難を逃れ，3 日目には小菅の知人宅に落ち着いたが，長く留まることはできなかった．幸いに今井町三井男爵邸が解放されたと聞き，ここに入所させてもらった．感謝の念は子々孫々まで伝えたい．ただし，三井邸バラックへの入所日は不明である．

感謝状事例 2（写真 6）

福吉町三井家避難所福 5 号　西洋家具職　細村徳太郎

我等家族四人ハ芝区浜松町二千に住居致シテ居リマシタ．九月一日俄ノ地震ニ壁ハ落瓦ハ窓ヨリ捻込ミ其ノ恐シサハ何共申様無ク漸ニシテ電車通へ避難シテ居リマシタ．其ノ内各所カラ火事起リ雷鳴轟夕景ニハ電気ハ消，空ハ紅ヲ流しシタ様ニオイオイ広ガリ大小ノ地震ハタヘズ有之実ニ生タル心無ナク，……着類ト布団四，五枚車ニ積ミボウゼントシテオル母六十ヲツレ，二才ノ女児ヲ背ヲイテ十一時頃安全地ト見マシタ芝公園広場ニ避難致シ居リマシタ．明三日頃金杉橋際ヨリノ出火テ家ハ全焼致シマシタ．此処二夜野宿シテ居リマシタ．昼ハ難儀共思ヒマセンデシタ

ガ子供ハ常ニ（ミルク）ヲ飲料ニシテ居リマシタ為夜分電気ハナク水モ少ナクワカシ湯ヲ沸カス事ハ出来ズ水ヲ濡テ飲マシマシタガ之ニハ一番困リマシタ……三日ニ芝西応寺町山本工場ニ避難致シ此処ニ十二日迄御世話ニナッテ居シマシタガ，十三日ヨリ当三井家様ニ更ニ御世話ニ相成……種々ノ御品ヲ戴キ又子供ニモ絵本等下サレ遠ク外国カラ寄送サレシ（モウフ）並ニ着類食物等迄御心配ラレ……後ノ語草ニナル様詳細ニ書キノコシ置孫子ノ代ニナッテモ三井家様デ御世話ニナッテ居ル事ヲ忘レヌ様イタシタイト存ジマス

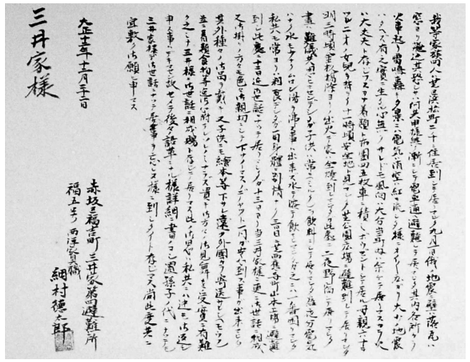

三井家様
大正十二年十二月十三日
赤坂区福吉町三井家別邸避難所
福吉町の住宅街
細村徳太郎

写真６　細村徳太郎の感謝状（三井文庫，北 1544）

（下線，は引用者による）

家族４人芝区浜松町に住んでいたが，地震で家が壊れたので，電車通りへ避難，火事が起こり，夕方には燃え広がり，生きた心地がしなかった．布団４，５枚を持って茫然自失の母親と２才の子供を抱えて芝公園に避難，翌日３日には芝金杉橋際からの出火で家は全焼，焼跡に野宿をしていたが，子供のミルクの欠乏には困った．３日に西応寺町山本工場に避難してここに 12 日までいた．13 日から三井家避難所に入所した．いろいろなものを下され，子供には絵本も下さり，外国からの毛布なども与えられた．孫子の代まで忘れないように書き残しますというものであった．

この２例は入所までの経緯を比較的詳細に語る部類に属する．単なる感謝の言葉を連ねる感謝状が多いなかではこのバラックに入るまでの経緯が比較的詳しく語られ，珍しい部類に属するといえる．以上の例から指摘しておきたいことはここへの入所にいたるまで，あちこちと安全な場所，食物，水の与えられるところを求めて彷徨していることである．こうしたことが稀でなかったことは多くの美談集や震災体験談を紐解けば納得する．

バラック開設情報は入手

では，彼等三井家バラックの入所者に限らず，バラック開設情報はどのようにして一般避難者に得られたのだろうか．

因みに確たる情報がないなかで配布された「震災彙報」の記事を追うと，何件かのバラック開設情報が掲載されている．それらを拾うと以下の表９のようである．「震災彙報」は青年団，在郷軍人会，病院などに対して，内務大臣官邸内の臨時震災救援事務局へ名刺を以て申し出れば，受け取れることになっていた．ただし，配布はしないと断りが附けられている．

まず，９月４日の「震災彙報」には早くも三井組からのバラック建設寄付の申し出があったと報じられている．これは，三井家の救済事業委員会が内務省に申し出たと記録される９月５日よりも１日早い．恐らく，日比谷三井集会所への避難民収容準備に着手されることが報じられた結果と推定される．その他，行政が管轄する避難所の具体的な設置場所に関する情報が掲載されるのは９月７日である．これ以降，日を追って避難所バラックの規模，請負業者，戸数，収容予定避難者数などの情報が盛り込まれていくが，それも９月 13 日までであり，それ以降はバラック，あるいは仮小屋などの衛生問題に関することになる．これは９月 11 日コレラ発生という事態が生じたためである．９月半ば以降はバラック建設に関する新規の情報は「震災彙報」には登場していない．恐らく，この頃までに避難民収容問題は一定の見込みが付いたのであろうと推定される．罹災者バラックの詳細生活情報を調査した協調会も４ヶ所に避難者相談所を開設しているが，そうした相談所や各県の救援所においても避難所の情報がもたらされたと思われる．

ラジオ開設は震災２年後，東京では新聞社 13 社のうち 10 社倒壊し，新聞報道が開始され始めるのは「東京朝日新聞」の場合９月 13 日からであったから，確かな情報として人々が信用をおいたのは臨時震災救護事務局発行の「震災彙報」ではなかったかと推定される．しかしながら，罹災者として避難所に入所すればこの段階ではいまだ食糧，水が無料で供給された段階であるから，人々は口コミ情報を頼りにより整備された避難所を求めて移動したのではないかと推定される．その一端は，三井邸今井町避難所に入所した人々の「感謝状」が今井町町会役員によって教諭されて作成されたものであったにせよ，そこに安堵感が漂うことに見出される．

表９「震災彙報」

日付	時間	号数	見出し	内容摘記
９月４日	午後11時	5	富豪ノ美挙	三井合名会社理事福井菊三郎及有賀長文両氏より震災避難民収容のため、日比谷、上野公園、馬場先通り牛が淵、亀井戸、その他に「バラック建設」を申出あり、材料その他不明、本４日より日比谷公園より着手の筈
９月７日	午後３時	10	罹災者ノ主ナル避難場及其ノ概数	９月５日、宮城外苑16,000人、公園屋外･不忍池畔51,300人、浅草公園7,000人、芝日ノ出町先10,000人、板橋三郷ノ原7,800人、芝公園6,700人、月島３号地10,000人
９月８日	午後６時	14	収容設備情報（９月７日）	青山外苑、芝離宮、日比谷公園などのバラック坪数、三井組寄贈分（工兵隊）、新宿御苑（清水組）、青山外苑（日本土木組合）、洲崎･小石川公園（戸田組）、上野公園（大林組）、浅草公園（安藤組及び銭高組）、猿江御料地（竹中工務店）など、坪数未定ながら、請負業者名告知情報
９月９日	午前10時	16	東京市内避難民収容ノ余地大ナリ	芝浦横川工場、清水組倉庫、高等工芸学校には10,000人、明治神宮外苑に10,000人、帝国大学、官公立学校、寺院の公共建築物に100,000人、政府バラック80,000戸建築予定、篤志家バラック建築寄付申し出多し
９月10日	午前10時	20	協調会ノ活動	９月２日より協調会館開放、1,000人の罹災者収容、災害情報案内所設置（品川停車場、芝赤羽橋際、飯田橋際、上野公園山下
９月12日	午後１時	27	明治神宮外苑バラック完成	明治神宮外苑に10,000人収容の設備10日完成、屋外避難者の入所を目下宣伝中
９月13日	午後３時	31	東京市内バラック建築予定地	東京府、東京市、警視庁、三菱、四谷区役所、麹町三菱地所部、麹町ビルデング、麻布区三井家、深川区戸田組の坪数、戸数告知す
９月13日	午後３時	31	仮設浴場設置計画	バラック建設予定地18万人余の罹災者収容につき浴場急務につき、罹災浴場営業者に仮設浴場設置を認可
９月14日	午後７時	35	宮城平河門内避難民	平河門内避難者一時18,000人、現在1000人は三の丸馬場に収容、17日以降は学習院に移転予定。８日擬似コレラ患者発生、駒込病院に収容、伝播の虞なし
９月16日	午後１時	38	避難民集団地ノ清潔保持	14日、上野公園、芝公園など集団避難地に61人の人夫をして糞尿、塵芥の取片付
10月３日	午後３時	57	バラック居住者心得	心得３か条：自治の精神、一身一家の発展を期すること、火の元、衛生を重んじ清潔にすること、風俗を乱さぬこと
10月４日	午後３時	58	バラック居住者ノ自治組織	バラック居住者の自治組織編制は着々実行中、日比谷公園、芝離宮、明治神宮外苑などはヤヤ完成、これらは町会組織と成して、代表者を互選し内害の交渉に当たる

まとめに換えて

では，以上みてきた入居者はいつ頃避難所を退去し，バラック生活を脱したのだろうか．個別の事例はいまだフォローする余裕はなかったが，退去の時期について一応の見当を付けておきたい．その前に，東京市における避難民の震災発生後の９月中旬から翌年３月末までの移動状況の大まかな傾向をみておこう．警視庁『震火災統計書』に基づいて整理した真野洋介の前掲論文の表からグラフを作成した（図６）．10月末に屋内避難者が減少し，その分屋外避難者が一時的に増加するものの，全体としては震災後２ヶ月を経過したこの時期頃から焼跡への復帰が増加し，震災後半年の1924年の３月末には，ほぼ80万に近い人々が焼跡復帰を果たし，屋内・屋外避難所生活者を含めると罹災者の約３分２にあたる90万人近い人々が東京市内の焼跡に復帰した様子が窺える．

一方，避難所の撤収はどのようであったのだろうか．前述の公設バラックすべてにわたる調査はできていないが，少なくとも1924年３月頃の状態は以下のようであったことが東京都公文書館蔵の震災関係行政資料から判明する(8)．

1924年３月段階には，小石川植物園のバラックについて大学における研究が停滞するという理由を以て帝国大学から撤去要請が出された．ただし，この時点で直ちに撤去が実現したわけではない，同年12月25日現在のバラック入所者のうち，小学校再建のためなどによる第１期バラック退去予定の世帯数は2,934であった．このうち，植物園バラックの世帯数は438あり，退去要請から９ヶ月後も依然として少なからざる人々が入所している．

この間，東京市はバラック入所者中の老齢者，貧困者などの調査を重ね，立退き困難者への対応策を考慮した模様である．しかし，1925年に入り，第２期バラック撤去の実施が図られる．ここにおいて，バラック撤去の方針が本格的に固められ，1925年３月31日を以て立ち退きすべきとの協議事項が内務省社会局から東京市長宛に通牒された．協議事項はつぎの５項にわたる．

1. 第２期バラック撤去の範囲の確定（立退き予定6602世帯）
2. 1925年３月25日までに立退きすべき旨の告知を１月中に行い，市長公印の文書を各戸に配布，受領印を徴する
3. 強制執行の時期を1925年４月１日から10日間とする
4. 同潤会による小住宅（３月31日までに建設予定）へ転住希望者を調査，申請させる
5. 撤退理由書を作成し，敷地権利者に送付．居住者の立退き延期などの陳情に対して同一歩調を採らしめる．

なお，この第２期バラック撤去時期に至っても，小石川植物園入所世帯数は482であったから，ほとんどの入居者は立退きしていない状態であったと推定される．

図６にみたように，震災後半年を経過する時点に至るまでの焼跡復帰者の増加カーブの一端は，バラック立退き者による焼跡復帰が担ったであろうが，その数は全体の極く一部に過ぎない．焼跡復帰者のどの程度の人々が区画整理に直接関わっていくのかについては，田中傑氏の別稿を参照していただきたい．

なお，本稿は三井各社が義捐したバラックを中心に見てきた．東京市の公設バラックに収容された罹災者は全体の極く一部を占めるに過ぎない．圧倒的多数の人々は罹災したにもかかわらず元の居住地に自ら掘立小屋を建て仮住まいとするか，または，東京郡部への避難に限らず，一時的に故郷の実家あるいは親戚に身を寄せ，状況が落ち着くのを待って再び上京した人々も少なくない．こうした動きを含め避難民の動向を把握するためには更なる資料の渉猟が必要である．後日を期すことにしたい．（2009年１月19日）

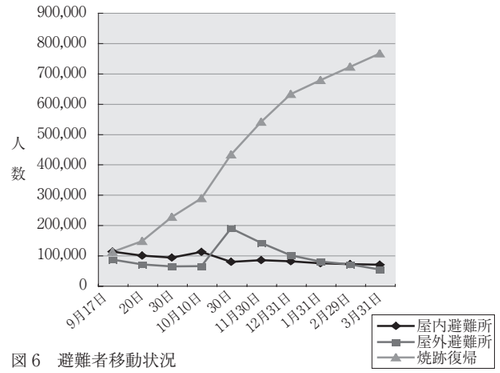


図６　避難者移動状況
出典：真野洋介前掲書表2・8・3から作成

注

（１）　真野洋介「関東大震災復興期における財団法人同潤会を中心とした住環境整備プロセスに関する研究」（学位論文，2000年）において，近代都市計画のなかにおける住環境整備の一環として同潤会アパートの設立過程とその実態追及の目的で，前提となる関東大震災時の避難民の動向を量的に追う作業が，警視庁『震火災統計書』（大正14年），『東京府震災誌』（大正14年），その他東京都公文書館蔵関東大震災関係資料などを駆使して克明に把握されている．しかし，真野氏の論文の主要な関心は近代都市環境の整備を細民層住宅の改善という側面から建築学史的に追及するものであって，緊急，あるいは応急対策時に人々がどのような判断に基づいて移動し，食と住を求めたのかの実相を解明しようという視点に貫かれているわけではない．なぜ，こうした視点が必要なのかは人々の既往の社会関係が災害時どのように活性化するのか，あるいは消滅するのか，あるいは従来の価値観はこうした社会的イベントによってどのような影響を受けるのかなどを追求することが災害社会史上重要な課題となると考えるからである．

（２）　田中傑『帝都復興と生活空間』序章における「バラック」の定義によれば，1923年勅令414号に定められた階級，構造，便所に関する決まり以外には法律的制限を受けずに建築できる建物で，区画整理着手に至る一定の期間までの存続が許可された建物とされるが，その建物（バラック）の実態は本建築と見紛うばかりの本格的なものもあり，極めて多様な実態であることに注意を促している（東京大学出版会，2006年，pp.10〜13）．

（３）　三井文庫特660「三井家の救済事業」

（４）　都史資料集成第６巻別冊付録『非常災害情報・バラックニ関スル調査』p11, 2005年，以下表1〜5の出典も同書による．

（５）　一番ヶ瀬康子「『東京市社会局調査報告書』の歴史的背景とその意義」（聞き手成田龍一・岩永真治）｛日本近代都市社会調査資料集成１『東京市社会局調査報告書』〔別冊〕SBB出版会，1995年，所収｝では，この時期の社会調査の盛行について，昭和恐慌，大恐慌下では大学卒業者などの高学歴者への失業対策としても，彼らを社会調査の担い手として職を与えるという意味もあったと指摘されている．

（６）　協調会『罹災者　バラック　生活実情調査』1923年10月

（７）　今井町町会はそもそもは日清戦争戦没者有志会として発足，その後1900年東京市の条例に基づき今井町衛生組合を結成，これが母体となって震災に際して町会が結成されたものであった（『麻布区史』昭和16年，575〜576頁）．なお，こうした動きはひとり今井町に限らず，震災後東京市全体に及ぶことになった．その魁として震災１年後の1924年10月１日東京市自治記念日を期して東京市が行った既存町会組織の実態

調査報告『町内規約要領』（日本近代都市社会調査資料集成1『東京市社会局調査報告書11』大正十三年，SBB出版会，1995年，所収）には，既存町会として町会数1073（町総代を含む），会員数253,217人の数値が挙げられている．これがさらに3年後の1927年10月1日の調査報告書『東京市町会事業概要』（東京市役所，1927年）においては町会数総計1343，会員数350,000人に増加している．個々の町会の設立主旨，沿革，組織，事業，会計などの各項にわたり詳細な調査結果がまとめられている．新規の町会結成では，関東大震災に遭遇して町内の連携の必要性を感じ結成に至ったことが一様に指摘されている．震災1周年記念に際しての大臣の発言では復興に示された国民の復興への邁進を賞揚し，「精神作興」のフレーズの許に，その精神の持続の必要性が唱えられている．復興行政上の必要性と住民の感じる必要度にずれがあるものの，震災体験が創出したこうした気運は広く社会に共有されていた．

（8）「雑書」（請求記号35-B5-13）

論文

関東大震災後の罹災者収容バラックと三井諸会社による活動の位置づけ

田　中　　傑
TANAKA Masaru

0　はじめに

本稿の目的

本稿は関東大震災（1923年）における罹災者に対する各種の救護活動において，「三井諸会社[(1)]」がとった行動がどのような位置づけにあったのかを，それらの提供した「罹災者収容バラック」に着目して明らかにすることを目的としている．

本稿で用いた資料

本稿では財団法人三井文庫（以下，三井文庫と略す）によって保管されてきた三井諸会社による罹災者収容バラック建設事業に関する記録のほか，三井諸会社を含めた罹災者収容活動の全体像を伝える公刊資料（『東京震災録』や三井諸会社がバラックを建設した各区の区史など）を用いた．

用語「バラック」の定義

バラックという言葉には現在，「簡易かつ安価な構造の建築物」という意味が込められている．本稿で取りあげた公的主体が建設した罹災者収容シェルターや，それと同時期に罹災者が自ら焼け跡の廃材や配給の材料を用いて建設した掘っ建て小屋は，まさにそうしたバラックの典型例（図2，後掲）である．ところが，1923年9月のバラック令（後述）を読んで，そこに記された「仮設建築物（バラックの意）」という言葉を解釈してみると，それは「簡易かつ安価な構造の建築物」というような具体的（積極的）な意味ではなく，「法律にしたがわなくてよい建築物」という抽象的（消極的）な意味であることに気づく．「法律にしたがわなくてよい」ということは，結果として「法律の水準を下回る場合」と「法律の水準を達成している場合」の両方を含むことになるのである．本稿では「バラック」という言葉を「簡易かつ安価な構造の建築物」という意味で用いるが，当時の言葉としてはもっと広い意味で用いられるのが一般的であったことを断っておく[(2)]．

1　公設バラックの建設・撤去の経緯

罹災者の避難行動

東京市内において1923年9月1日午前11時58分に発生した関東大震災における振動（震害）と



図１　大阪毎日新聞社編（1923），関東大震災画報，第１輯所載，『宮城前に避難した東京日日新聞編輯局（東京）』

それに続く火災（火害）によって失われた家屋は 31 万余戸で，これは震災時点の 44 万余戸の７割強に相当した．

それらの家屋に居住していたひとびとは家屋を震害で失い，あるいは家屋を飲み込まんとする火炎に追われながら，東京市内の大規模な空地，すなわち宮城（皇居）外苑や各公園，広幅員の道路敷や広場，学校や官公衙の敷地，社寺境内地，さらには本稿後半で取りあげる三井家のような華族・富豪の邸宅地へと逃げ込んだ（図 1）．

靖国神社の境内に逃げ込んだ避難民の状況を記した次のような記録が残されている．

「此処は神田方面の避難者や其の家財，家具やらで，荷物の車と人の押し合ふ波で，流石に広い彼の境内も充満であつた．親子相亡うて互に探し合つてる者，何町の何某と大声で呼び歩く者，或は失うたる人々の姓名を大旗に記して担ぎ歩く者，騒然，雑然，盛りくり返すやうな大混雑である．」(3)

罹災者の一次収容（公共建築・天幕など）

こうした状況の中，政府は「罹災者救護と安寧秩序保持」を目的とし，「一面中央救護機関を設け，一面中央警備機関を置」いた(4)．前者が臨時震災救護事務局(5)，後者が戒厳司令部(6)である．

臨時震災救護事務局は総裁に内閣総理大臣，副総裁に内務大臣，参与に関係各省次官，内務省社会局長官，警視総監，東京府知事，神奈川県知事，東京市長，横浜市長，また委員事務官に関係各省府県の高等官などが任じられた(7)ことに見られるように，各省と戒厳司令部との間の連絡を行う「対災施設の総司令部(8)」であった．

救護の第一に着手されたのは「罹災者を雨露から守る」ことであった．この目的のため，まず学校，官公衙，社寺などの公共建物，あるいは家族富豪などの大邸宅を開放させて罹災者を収容させる一方，９月の半ばにかけて天幕（テント）避難所を臨時震災救護事務局や東京市などが宮城前広場，明治神宮外苑，月島などに設営した．この天幕避難所について，

「これらの避難所に於ける彼れら（引用，ママ）の生活（註，９月８日の東京市調査課による人口・避難民調査に基づく）は各自やけ残りのブリキや，寄せ集めの木材で小屋を立てて居る……（中略）……要するに罹災者の大部分は落ちつく所に落ちついて居る模様である．日比谷公園を始めその他の空地にバラツク，テントを張つてもはいる（傍点，筆者）者がなく，皆ガラ空である．また一時はいつた者でも出て行きつつある状態である．テントやバラツクにはいらないのは各自が建てた自分の小屋が家族的で，かつ呑気でよいといふのである(9)．」

という記録が残されている．同記録は奥付によれば震災と同じ年の 12 月に刊行された文献に掲載されているから，引用箇所にある「皆ガラ空」という部分は誇張表現であるにしても，罹災者が「各自が建てた」空間を確保したがった点は真実の一端であろう（図 2）．

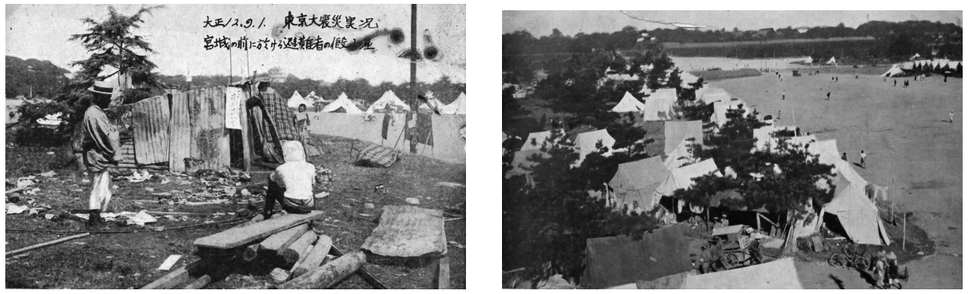


図２　東京大震災実況；宮城の前に於ける避難者の仮小屋（左），帝都大震災後に於ける罹災民宮城前のテント村（右）

公助と自助の分化

罹災者たちは「丸ノ内，日比谷，芝上野，浅草，牛ヶ淵各公園，靖国神社境内，帝国大学，第一高等学校」などの避難者密集地から「縁辺を尋ねて郷里に帰るあり，他の避難所に赴くあり，他の避難所に赴くあり，仮小屋を造りて（引用補，罹災前の住所に，以下同）復帰」と次第に移動していったが，中には「更にバラツクを急造し，若くは公設バラツクに入りて，固定的態度（引用註，避難者密集地から移動しない意）に出るもの（が）尚数千人」あったという(10)．

この時点で，東京に残留した罹災者たちの避難生活の場所は 1）自ら建設したバラック（建設場所が罹災前の住所か避難者密集地かの別は問わない）と，2）公設バラック（次節で詳述）とに大別されることとなった．公助による生活再建のスキームと，自助による生活再建のスキームとがここで一旦，分化したのである（最終的には大多数の罹災者は自助によるスキームへと収斂されていく）．バラックの建設は行政当局による建築のコントロール（市街地建築物法の施行）が停止された９月 17 日以降，『東京府及神奈川県ノ市街地建築物法適用区域内ニ於ケル仮設建築物等ニ関スル件』，いわゆるバラック令（1923 年９月 16 日勅令第 414 号）によって市街地建築物法の適用を猶予されるというお墨付きのもとで進められていく．

罹災者が自らバラックを建設するに際しては，各種の資材が当局から配給されたものの，多くのバラックは焼け跡の様々な「材料」，例えば木材やトタン板などを組み合わせたもので建てられ，それら「……（公設）バラツクよりも粗悪なる仮小屋」での生活は「野宿同様」とも傍目にはみえたが，「……此等（引用註，粗悪なる仮小屋に住む人々）は皆附近の住民にして学校等に多数雑居するよりも寧ろ此の生活を希望するものにして固より不良性を帯ぶるものに非ず(11)……」と肯定的に捉えている区議会議員からの報告も記録されている（本郷区会協議会，住宅に関する委員会）．

以後，避難者密集地や私有地を不法占拠してバラックを建てた場合は別として，この「自ら建設したバラック（あるいは「民間が建設したバラックを賃借」）」と「公設バラック」とにそれぞれ住み着いた人々は，それぞれに自らの居所で生活を再建させていった．本稿は以下，後者，すなわち公助として供給された住宅建築を中心に記述を進める．

罹災者の二次収容（公設バラック）

「罹災者収容上第二次計画」として罹災者収容バラック，いわゆる公設バラックが各所に建設された．これらには1）公費で建設したもの，2）社会事業団体および個人が建設・経営したもの，3）社会事業団体および個人が建設し，公署に寄附したものがあった(12)．「公設バラック」と呼ばれながら，実際には社会事業団体および個人が建設かつ経営していたものが含まれる点に留意が必要である（経営＝管理も公は関与しない）．建設地は国公有地の外，民有地も含まれていた．

『東京震災録（前）』によれば，このうち「公費で建設されたバラック」としては9月4日に臨時震災救護事務局（同局の直営）と東京府が，7日に警視庁が，9日に東京市がそれぞれ着手し，竣工とともに罹災者の収容(13)を開始したものが存在した(14)（図3）．それらの建設に際しては，内務省の管轄下にある警視庁と東京府に対しては臨時震災救護事務局からの委任，自治団体たる東京市との間には同局との協定という形で，それぞれの建設場所や供給規模に関する調整がなされていた(15)．

また，同書は「社会事業団体および個人が建設・経営したバラック」としては日本橋区や四谷区，三井家，岩崎家によるものが，また「社会事業団体および個人が建設し，公署に寄附したバラック」としては三井合名会社や関西府郡連合会，兵庫県および神戸市によるものがあったと記録している(16)．もっとも，同書の記述は公私団体や個人が建設したバラックを充分に把握したものではない．それは，例えば実業家・渡辺治右衛門（渡辺銀行）が「……（小石川区）関口町にバラツクを建設し，（同）音羽町新坂下の家屋をバラツク収容所として，是等罹災者の収容を行つた(17)」事実を，東京市役所（1926b）が「渡辺バラツク(18)」として言及したにも関わらず，これを先述の「社会事業団体および個人が建設・経営したバラック」あるいは「社会事業団体および個人が建設し，公署に寄附したバラック」のなかにカウントしなかったことから明らかである．渡辺の罹災者収容行為については，東京市役所（1927），前掲書，第3章東京市民の活動，p. 812. にも紹介がある．なお，この「渡辺バラツク」は「市営バラツク」のうち「各区バラツク」と呼ばれていたもの(19)で，東京市が管理をしていた(20)．



図3　大阪毎日新聞社編（1923），関東大震災画報，第2輯所載，『日比谷公園内の避難小屋（東京）』

公設バラックの撤去

これら公設バラックは国公有地，社寺境内地（当時は社寺有と国有の各境内が併存），さらには本稿で後に詳述する三井家のバラックにみられるような私有地に建設されていた．罹災者をバラックに収容する際，「……罹災者の貧富若くは職業状態に依りて区別するの余裕」がなかったため，当然，収容者の生活レベルは様々(21)で，その多数はやがて公設バラックを退居し，上述した「自助」のスキーム（自ら家屋を建てるか，借家を見つけて転居する）へと移行したのだが，一部は公設バラックから退居できず，長期にわたって居座らざるを得ない状況に至った．公設バラックの撤去の遅延は区画整理事業の施行を阻害する．このため，公設バラックに残留していた人々の受け皿を東京府，東京市が「小住宅」，同潤会が「仮住宅」として建設・供給した．もっとも，思惑は外れ，小住宅あるいは仮住宅の立地が悪かったり，その竣工が公設バラックの撤去開始に間に合わなかったため，当初の目論見通りの収容は叶わなかったという(22)．

2　富豪たちと震災

富豪たちの救護活動

ここで，富豪と呼ばれる人々が関東大震災に際してどのような行動を取ったのか，いくつかの事例を通じて見てみたい．

はじめは本稿後半で取りあげる三井家と並び称される岩崎家（三菱）に関する記録である．

> 「男爵岩崎久弥（本郷区龍岡町）大震当日邸内非常門裏門等を悉く開放し，避難者をして，自在に出入りせしめ，一時其数万を以て算したりしも，二日夕刻より三日早暁にかけ，上野広小路より池之端仲町通，湯島天神町一帯に亘れる猛火は邸内避難者に危懼の念を懐かしめ，陸続根津駒込方面に退散し，三日朝には一千三百余名に減じ，其後次第に各方面に退却し，最後まで残留したるは二百九十九名なりき，此等の人々は湯島霊雲寺焼跡及大根畑に建設(23)したる，「バラツク」に十月八日を以て一斉に移転す，其際各人に慰問袋，菓子，蠟燭，畳表等を贈り，又移転に関し諸事便宜を計れり．」

同家ではこのような罹災者の収容のほか，糧食，寝具，衣類などの提供も行った(24)．

次に取りあげるのは貿易商の田中平八に関する新聞報道である．

> 「避難民が謝意の記念碑
> 芝区葺手町の実業家田中平八氏邸内のバラツク田中村に居住する巴町，葺手町等の居住者であつた村民約三百五十名は震災当時田中氏が其の邸内を開放し且つ出費して六棟三十一戸の完全なるバラツクを建築し病室，湯殿，事務室等の設備までして罹災者に提供された義俠心を感謝する為に田中邸内の一隅に過半大木遠吉伯(25)執筆の震災遭難記念碑の文字を現した御影石製の震災記念碑を建立したが尚今一日の思出深い震災一周年当日には田中邸内で盛大に園遊会を開催し田中氏を主賓に恐ろしかりし日の記憶に心の帯をひきしめながら一日を心ゆく迄楽しみ感謝の意を表する筈だとあるが近頃の美談である(26)．」

こうした富豪の行動は，程度の差はあれど一般的にみられたものであったことが『東京震災録　別輯第三章東京市民の活動第六節個人の活動』の記述から判る．もっとも，その情報は各家からの回答に基づくものであり(27)，次に掲げる村井吉兵衛（民営時代のタバコ王，銀行家）に関する記録では別の

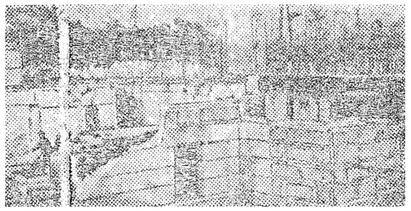


図4　番町の焼け跡

記録との矛盾が見られるなど，そのまま受け入れるべきではないかも知れない．

「村井吉兵衛（麹町区永田町）邸内西洋館及其他の建物に避難民二百余名を収容し，衣食を給し，附近の罹災者並に避難者へ炊出を為し，或は飯米を与へ，又日本橋畔に給水設備を為し，日々無数の通行者に飲用水を給す（以下略）」[28]

富豪たちとメディアの視線

村井は上述の救済事業のほか，各地，各団体への金銭の寄付，さらに1925年に至るまで自邸西洋館全体を帝都復興院，同院を継承した復興局に「奉仕的に提供」[29]したとされているが，毒舌で知られるジャーナリスト宮武外骨が編輯していた『震災画報』の第1冊目には次のような記述が見られる．

「▲村井ケチベイの馬鹿野郎　麹町区永田町に火が移つた時附近の居住者は我れ先きにと庭園の広い近傍の大家に避難し，其中の一団は同町の高台にある村井吉兵衛方の門前へ押寄せたが，村井方では早くもそれと知つて門を閉め，断じて邸内へ入れない事としたので，避難者の群集は異口同音に村井を罵り，「ヤーイ村井のケチベイの馬鹿野郎」などと言囃す者もあつて，今では其附近の子供までが之を真似て呼んで居る．」[30]

『東京震災録（既述のように，その内容は各主体からの自己申告に基づく）』と『震災画報』，いずれの記述が真なりと断じることはできないが，ここからは罹災者たちが自らの惨めな境遇と，家屋敷がそのまま残った富豪の強運との対比を恨めしく思っていたことが少なくとも判る．

村井は強運だったが，富豪たちの邸にも庶民の住まいと同様の運命をたどったものが少なくない．次に掲げる新聞記事では富豪たちの不幸を『気味が好い』と感じる視線と，焼け出されてなお「お高くとまっている」と妬く視線とが交錯している．

「……上二番町は五味坂上の三井男の堂々たる白亜館も今はなく元園町，上下一番町に番町，五番町，六番町一帯マバラに建つたバラツクの店も『お得意のお屋敷が一軒残らず焼けたものですから……』と淋しさうだ，それは富豪とか貴族と羨ましがられた身は，このゴタゴタの際急いで焼け跡に立戻る必要なく『一家無事立退き先大崎別邸』『……当方東中野の別邸』などの標示を立てて何れも焼け跡の周囲に厳重な囲を繞らせただけで納まり返つて居るのだ，それでも当時の門は近寄つてさへ請願巡査に叱られ，某伯爵邸の焼け跡は子供達の凧揚げ場となり某男爵邸の庭園には焼けた亜鉛板の掘立小屋を建てて行く処のない避難民が我が物顔に住んで居やうと云ふ……」[31]（図4）

番町界隈に居住していた伯爵家には井伊直忠（一番町），金子堅太郎（同），加藤高明（下二番町）

の各家が，男爵家には記事中で言及された三井高精（上二番町，室町家）家のほか，肝付兼英（下二番町，海軍中将 肝付兼行＝小松帯刀の甥＝の子）家などがあった．

3　三井諸会社による救護活動

三井救済事業委員会

三井文庫には『大震災ト三井家ノ救済事業』（整理番号一特659）と題される資料が残されている．同資料が「……三井家ニテハ瞬時モ措クヘキニアラスト直ニ合名，銀行，物産，鉱山，東神倉庫ノ各社ヨリ選任シテ」組織したと伝えるのが「三井救済事業委員会」である．

同資料に記された同委員会の機構とメンバーは下記の通りである．各委員の所属は略歴を判明した範囲で註記した[32]．

委員長　団琢磨（註，三井合名理事長）　副委員長　小林正直（註，三井物産取締役）
委　員　南条金雄（註，三井物産）　奥村久郎（註，東神倉庫）　七海兵吉（註，三井鉱山）
門野錬八郎（註，東神倉庫）　阪井徳太郎（註，三井合名，外務省と強い結びつき，キリスト教徒）大島雅太郎（註，三井合名，古書収集家）　玉木懿夫（註，三井合名）　広島外蔵（註，三井銀行）　長谷川数衛（不明）　森　忠雄（註，三井銀行）　＊最吉（一文字，判読不能）　矢野亮一（註，三井合名，不動産課長）
補助員　松樹武一郎（三井鉱山）　山口宗治（三井鉱山）　坂本正道（三井鉱山）　松原誠吾（東神倉庫）　石田六郎（東神倉庫）　阪本英太郎（三井銀行）　鈴木幹（三井銀行）　田伏喜三郎（三井銀行）　手島矗行（三井銀行）　岡田武治郎（三井合名）　鹿島直房（三井合名）　奥住愛三（三井合名）　高瀬源一郎（三井合名）　大西儀八（三井合名）　駒田民造（三井合名）　小笹辰之助（東神倉庫）
長岡秀国（東神倉庫）　田北隆美（東神倉庫）　浜野文治郎（三井合名）　漆山雅喜（三井合名，今井町出張）　浜龍彦（三井合名，今井町出張）　吉良円平（三井合名，今井町出張）　金万喜人（三井合名）　須藤政夫（三井合名）　西村清介（三井合名）　原盛栄（三井物産）　湯村富次郎（三井合名）
救護部　〈委員〉七海兵吉　門野錬八郎　〈補助員〉松樹武一郎　山口宗治　坂本正道　松原誠吾　石田六郎
会計部　〈委員〉長谷川数衛　森　忠雄　広島外蔵　〈補助員〉阪本英太郎　鈴木幹　田伏喜三郎　手島矗行　岡田武治郎
建築部　〈委員〉矢野亮一　奥村久郎　〈補助員〉鹿島直房　奥住愛三　高瀬源一郎　大西儀八　駒田民造　小笹辰之助　長岡秀国　田北隆美　浜野文治郎
庶務部　〈委員〉大島雅太郎　＊最吉　〈補助員〉金万喜人　須藤政夫　西村清介
食料部　〈委員〉南条金雄　〈補助員〉原盛栄
情報部　〈委員〉阪井徳太郎　玉木懿夫　〈補助員〉湯村富次郎

この名簿をみると，救護部には三井鉱山と東神倉庫（のちの三井倉庫），会計部には三井合名と三井銀行，建築部には三井合名，東神倉庫，庶務部には三井合名，食料部には三井物産，情報部には三井合名からと，各部署の職務内容や取扱品目の点で関係の深い三井諸会社から委員および補助員の人選がなされていたことが判る．また，今井町三井邸に出張とされた漆山雅喜，浜龍彦，吉良円平の３名の補助員が三井救済事業委員会において特定の「部」に配属されていなかったこと，政府関係者に強いパイプを有する阪井徳太郎が情報部に配されている点も注目される．

なお，この「三井救済事業委員会」という名称は一般にはあまり用いられなかった模様で，前掲『大地震ト三井家ノ救済事業』や自己申告に基づいて記述された『東京震災録　別輯』[33]，そして三井文庫所蔵の資料に依拠した『三井集会所――有楽町から札幌まで[34]――』といういわば身内からの記述を除けば，同委員会を意味するとみられる組織に関して不正確な名称で言及する文献[35]や新聞記事[36]が若干存在するのみで，「三井諸会社」からの自己申告に基づく『東京震災録 別輯』においても「……三井合名，三井銀行，三井物産，三井鉱山，東神倉庫等の職員を督励し，部署を定めて応急救済に全力を傾注し（傍点，筆者[37]）」たという表現がなされており，いずれにも「三井救済事業委員会」という名称はみられない．このため，同委員会は実体としては存在しない連絡組織にすぎなかった可能性が指摘できる．

三井救済事業委員会の活動

同資料には三井救済事業委員会が組織されたのがいつであったのか，明記はない．しかし，以下の記述をみる限りでは，９月２日以降，同５日以前であったことが判る．

「物資ノ配給　是レヨリ先三井物産本店ハ帝都ノ火炎尚ホ余威ヲ逞ウセル九月二日無線電信ヲ以テ大阪神戸ノ支店ニ対シ直ニ糧食其他ヲ蒐集廻送スヘキコトヲ命シタレハ……（以下略，傍点，筆者）」

「（三井物産所有の榛名山丸が）「……前記物資ヲ満載ノ上……（中略）五日品川沖ニ入港シ……（中略）……三井救済本部ヨリ東京府ニ寄付……（後略，傍点，筆者[38]）」

三井諸会社（三井救済事業委員会の組織以前）は上述したように関西や名古屋で食料や衣類，燃料，その他生活関連用具を調達し，それらを臨時震災救護事務局（国）や諸官庁，各区役所，各病院，救世軍などに寄贈したが，これとは別にやはり９月２日から罹災者の仮住居を供給するために建築用材の買収に着手している．

「……九月二日『バラツク』建築用材ノ買収ニ着手シ内務陸軍両大臣ノ諒解ヲ得タル上地所ノ選定ニ従ヒ左ノ各所ニ順次『バラツク』ノ建築ヲ為セリ（後略[39]）」

この引用における「内務陸軍両大臣ノ諒解」については，『東京震災録別輯』[40]にも記されており，三井諸会社によって建設されたバラック，すなわち「社会事業団体および個人が建設・経営したバラック」あるいは「社会事業団体および個人が建設し，公署に寄附したバラック」（第１章，罹災者の二次収容（公設バラック）の項を参照）に関しても，「公費で建設されたバラック」と同様に，臨時震災救護事務局あるいはその構成機関との協議を経た上で建設されていたことが判る．

さて，この三井救済事業委員会がその内部で如何なる行動を取っていたかを記録する資料が三井文庫に残されている．それによれば，先述のように臨時震災救護事務局との行動調整（原文によれば「内務陸軍両大臣の諒解」）をした上で，同委員会の建築部（後掲の『竣工引渡書』においては「救済部建築班」）が実際にバラックの建築を行う．そして工事中は建築部（同，「救済部建築班」）の所管であったバラックを，その竣工とともに同委員会（同，「三井救済部」）へと引き渡す．以下は麹町区一番町三井邸内バラックの「竣工引渡書」である．

「　　竣工引渡書
一，建築敷地　麹町区一番町三井邸
一，建築名称　木造トタン葺平屋建仮建物
　内容左ノ如シ
　一，住宅　三棟四拾弐戸　坪数百弐拾六坪
　一，便所　四拾六合五勺
一，総坪数　百参拾坪六合五勺
右十月二十八日竣工致候間此段及引渡候也
　大正十二年十一月二日
　　三井救済部　建築班　（矢野サイン）
三井救済部
　御中」[41]

文中，「矢野」というサインは建築部委員の矢野亮一のものであろう．

その上で，「三井合名会社社長」の名前で臨時震災救護事務局に対してバラックの寄附を願い出るのである．以下の「仮住宅寄附願」は先述の竣工引渡書と同じく，麹町区一番町三井邸内バラックのものである．

「　　仮住宅寄附願
一，所在地　東京市麹町区壱番町四拾番地三井高光宅地内
　構造　木造トタン葺平屋建仮住宅
　総建坪　壱百参拾坪六合五勺
　棟数並戸数　参棟外厠参棟　四拾弐戸
右震災罹災者救護用トシテ寄附仕度候間御採納相成度此段
奉願上候也
　追而左記二件特ニ御聴許相成度願上候
一，寄附物件ニ付キテハ麹町区役所ノ希望モ有之候ニ付使用後無償ニテ同区役所へ御下渡相成候

様御取計被下度候

二，該仮住宅敷地ニ付テハ他ニ適当ノ土地無之為メ一時応急ノ罹災者収容ノ目的ヲ以テ個人ノ宅地内ニ建設仕候モノニ有之候従而建物存置期間長期要シ罹災者立退ニ付紛議ヲ生スルカ如キコト有之候ハバ誠ニ遺憾ニ候間右事情御裁量被下該建物ニ付キテハ大正拾参年末日迄ニ除去相叶ヒ候様特別ノ御取計相煩シ度候

以上

大正拾貳年拾壱月拾七日

三井合名会社

社長　男爵　三井八郎右衛門

臨時震災救護事務局

総裁　伯爵　山本権兵衛殿」(42)

寄附の出願者が三井合名会社社長であるということは，「三井救済事業委員会」が既に紹介したように「……三井家ニテハ瞬時モ措クヘキニアラスト直ニ合名，銀行，物産，鉱山，東神倉庫ノ各社ヨリ選任シテ（傍点，筆者）」(43)組織された，同家の私的機関であり，対外的に名乗るのがはばかられたためかも知れない．この推察は，『東京震災録 別輯』においても同委員会が「三井諸会社」と表現されたことの説明にもなろう．

4　三井諸会社によるバラックの実態

本章では前出，『大震災ト三井家ノ救済事業』に示された，三井諸会社が「内務陸軍両大臣ノ諒解ヲ得タル上（,）地所ノ選定ニ従ヒ左ノ各所ニ順次」建築したバラックを取りあげ，三井関係者以外によって編まれた文献のデータとの照合をおこなうことにより，三井諸会社によるバラックの供給事業が，官公衙に一部の公私団体，個人を加えた，広義の「公設バラック」の供給のなかでどのような位置を占めていたのかを明らかにしたい．

以下，各バラックの紹介順序とバラック名称は前出，『大震災ト三井家ノ救済事業』に拠る．また，三井文庫所蔵のアルバムから各バラックの写真を示す．これらは建築物の物理的な特徴（木造平屋建てトタン葺）の点からみれば大差ない写真であるが，バラックの背景や住民の姿などに着目した各種考察の手掛かりとなった．

麻布区今井町三井邸内

本バラックは麻布区今井町所在の三井八郎右衛門邸（以下，今井町邸，震災では無事）とその周辺部に建設された．町丁目別には今井町（住棟及び附属建物，26棟，239.50坪，58戸），三河台町（同，3棟，52.50坪，5戸），氷川町（同，6棟，71.50坪，20戸，赤坂区所在），福吉町（同，10棟，107.00坪，33戸，赤坂区所在）の4町にわかれて所在していた(44)．合計，45棟，470.5坪，116戸である．『大震災ト三井家ノ救済事業』によれば，「麻布区今井町三井邸内（のバラック）」は15棟，399.00坪，96戸(45)とされており，これは先述の4町丁目に分散立地したバラックのうち，次項で述べる「赤坂区氷川神社境内（のバラック）」の分を除いた坪数，戸数と一致している．

「麻布今井町三井邸罹災者収容バラック全図」(46)（図5）と1912年の地籍地図および地籍台帳(47)とを照らし合わせると，今井町の敷地は同町39番地（1912年現在の所有者は藤田財閥の藤田伝三郎），40番地（同，藤田伝三郎），41番地（同，三井八郎右衛門）および42番地（同，三井八郎右衛門），三河台町の敷地は同町33番地および34番地（同，陸軍大将西寛二郎），そして氷川町の敷地は同町52-7番地（同，氷川神社），福吉町の敷地は同町1-1番地（同，黒田長成）および3-2番地（同，三井八郎右衛門）に比定される（地籍台帳は大正元年現在，震災は大正12年であるから，この間に所有権が移転した土地も含まれる．石田繁之介（1993），三井の集会所 ── 有楽町から札幌まで ──，p.117. によれば，39番地，40番地は大正中期に三井家によって購入されている．）．

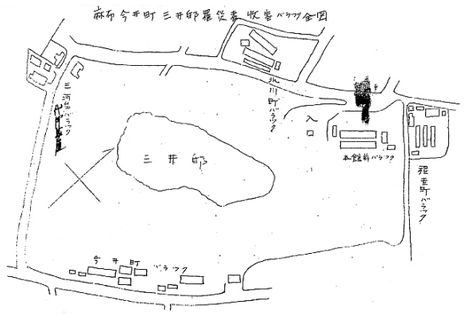


図5『麻布今井町三井邸罹災者収容バラック全図』

同邸は火災と震動，いずれからの被害も殆ど受けなかったため，『東京震災録中輯』によれば9月12日現在，236人(48)の避難者が屋内避難をしていた．三井の内部資料は本バラックの竣工を1923年9月16日と記録(49)するが，『麻布区史』によれば「……十二日三井八郎右衛門は邸内に自費を以てバラックを建て即日二百二名を収容した（傍点，引用者）」(50)という．竣工の日付および収容者の数に関して若干の相違があるが，発災から10数日目に邸内に屋内避難していた人数とほぼ一致する人員がバラックに収容されたことは判る(51)．

収容された罹災者の数はその後，「……十三年三月末……（中略）……（麻布区内の）三井バラック百六十二名(52)」となった．同邸に隣接した敷地に建設されたとはいえ，行政区としては隣の赤坂区に位置する氷川町・福吉町の各バラックについては，『赤坂区史』に「（九月）十八日三井家より，氷川町のバラックに於て百二十七人，福吉町のバラックに於て二百人を収容救助中」という届け出(53)があったとする記録があり，別々にカウントされていた．


図6『今井町殿邸内バラック（399坪）』

本バラックは『震災罹災者救護用仮住宅並託児所寄附調』によれば「木造トタン葺平屋建住宅(54)」であったが，残されている写真（図6，三井文庫所蔵，以下，同）をみると，向かって左手の棟の外壁に波形の金属板（トタン板か）が用いられていたことが判る．

なお，今井町，三河台町，氷川町，福吉町の4町にあったバラックはいずれも，三井諸会社が建設したバラックのうち「……（臨時震災救護事務局への）寄附手続差控置(55)」いたもので，三井が独自に管理したため，前章で言及した「仮住宅寄附願」は存在しない(56)．また，「竣工引渡書」も存在しない．

赤坂区氷川神社境内

本バラックについては「今井町三井邸内」バラックの一部として上述した．ここで付記したいのは

その建設の経緯である．

「（避難者が氷川町にやってきて）……一部は府社氷川神社の拝殿，社務所に充満せり．町内有志は神社の営造物に永く神人同居は（神社の）尊厳を傷くる恐れあらうとなし，隣町麻布区今井町男爵三井八郎右衛門家に懇願して其寄附により神社境内の一隅にバラツク二十余戸を建て避難者約二百名を収容し，大正十三年八月末日バラツク全部の撤回に至る迄避難者に対し充分の親切を尽せり……（以下略）」[57]

本バラックは『大震災ト三井家ノ救済事業』によれば3棟，71.50坪，20戸[58]，一方，『震災罹災者救護用仮住宅並託児所寄附調』によれば6棟，71.50坪，20戸[59]であった．本バラックと同日に竣工した先述の今井町三井邸内バラックと同様に，両資料の記録は「棟数」について不一致であるが，これは以下の各事例でみるように，附属屋（便所，炊事場など）を含めてカウントするか否かに起因すると考えられる[60]．

本バラックの写真は発見できなかった．

三井集会所構内（其後取払日比谷公園ニ移転）

三井集会所は石田（1993）によれば三井財閥各社が重役会議を開いたり，三井家の同族会が年始に集結し，あるいは内外賓客の饗応したり，従業員がクラブ活動をおこなう場として機能しており[61]，その敷地は三井合名会社所有の麹町区有楽町3丁目2番地と7番地であった．同集会所は震災による火害は免れ，西洋館部分は無事残ったが，日本館部分が倒壊した[62]．

前出石田（1993）は「（1923年11月1日付の『三井仮事務所設計図』において）その（仮事務所の）建設予定地には，関東大震災時に健在であった西洋館に接して，四棟ほどの小さな木造建物が建てられていたように見える．しかしそれがなんであったのかについては，どこにも記録がない」とするが，この日本館跡地に建てられていた4棟こそが本項で取りあげる三井集会所構内バラックである．

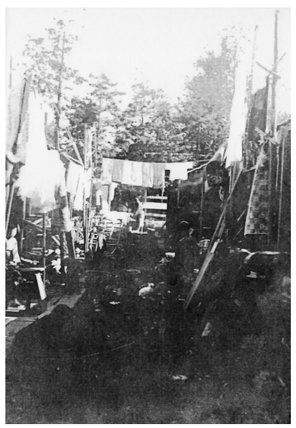


図7『有楽町三井集会所内（138坪）』

写真（図7）は被写体に接近して撮影されたものであるため，建物の周囲に洗濯物などの生活臭漂う物品が存在している様子を除けば，得られる情報はあまりないが，背景に黒く，同集会所を日比谷周辺で震災後に発生した火災（この炎で警視庁が焼失している）から守った樹叢が覗いている．

記録によれば，同バラックは4棟，建坪が138.54坪で54戸を構えていた[63]．竣工は今井町三井邸内バラックおよび氷川神社境内バラックと同じ1923年9月16日であった．

再び石田（1993）に拠ると，三井合名会社は1923年10月10日付の議案で「……倒壊した日本館を取り片づけ，その跡地に，焼け出された三井系各事業会社を収容するための，仮設事務所を建設」することの是非を審議した．本バラックの竣工から1か月を経ないうちに，バラックが建った場所に三井諸会社の仮事務所を建設する方針が浮上したのである[64]．

その後の経緯を，三井文庫所蔵の新聞スクラップブックを用いて辿ってみよう．「三井合名会社仮事務所」関連の記事のうち，もっとも古いものは10月24日付である．

「震災以来三井合名会社は三田綱町別邸（註，現，綱町三井倶楽部）で執務中であつたが日比谷有楽町のバラツク竣成と共に来月初め移転する筈[65]」

その「来月初め」も過ぎた11月6日には次のような記事が載った．

「三井合名会社，三井同族会にては来る十二日頃三田綱町の仮事務所を引払い日比谷有楽町のバラツクに移転する筈[66]」

この時点で移転計画には当初の予定に比べて一週間程度の遅延が生じていたが，これは誤差の範囲とみなせる．

しかし，その後も計画はなかなか進捗せず，「来る十二日頃」を過ぎた11月16日，さらに一週間，遅延するという内容の記事が載った．

「三田綱町の三井合名会社仮事務所は修築工事の都合[67]で来廿三日頃日比谷有楽町三井集会所内に移転する筈」（傍点，筆者）

結局，仮事務所が竣工し，移転計画が完了したのは三たび，一週間の遅延をした12月に入ってからのことであった．

「三田綱町の仮事務所三井合名会社は日比谷有楽町の修築工事落成につき来十二月一日移転する筈[68]」

スクラップブックに収められた関連記事は以上である．この移転計画は当初の予定（11月12日）に比べて3週間以上遅れて実現した．この遅延の理由は，引用記事中では「修築工事の都合」とされている．この「都合」という言葉には，震災当時の建設資材や労働力の払底，仮事務所の設計や建設工事に関する技術的な問題など，様々な要因が込められているのだろうが，そこにバラック住民の立退き問題も絡んでいた可能性を示唆する次のような資料が存在する．

「嘆願書

一　今回の災害に罹りたる有楽町住民の一部たる吾々は当初より貴下の厚き御同情に依り全避難民中尤も（ママ）幸福なる生活を送らるるを得たるハ一同の深く感謝致す処に有之候然るに昨今御貴家御事業御経営の御都合に依り当バラツクも近日中に御取壊しの御予定にて至急一同退居する様との御通知に接し候は誠に御事情万止を得ざる儀と存申候勿論之に対し些かの拒むべき理由

毛頭無之一同も速かに之れを明け渡し早速退居可致を正道と信じ申候されど吾人が目前の困難とする処はここに建つべき場所を有すれども作るべき材料入手の見当相付かず今に寸前暗黒の状態に有之候就てハここに重ねて御同情を仰ぎ度甚だ厚顔なる申出とは存候へ共万一バラツク用材料御持合せ御座候はば一戸に対して幾坪かづつか（人数にでも比例し）現時相当の値段にて御払ひ下げ義相叶ひ申間敷候や此際何卒特別の御詮議をもつて右願ひ御聞入れ下され度さ候へ退居の期日も速かなるべく又吾人一同此上なき仕合と存申候甚だ申上様もなき勝手の義とは存じ候へ共ここに実情を吐して一同嘆願に及び申候也

三井集会所庭内
バラツク居住者一同
総代　光田幸次郎

三井家救済係
御中」(69)

この嘆願書は全33戸，201人（本バラックを構成する54戸の6割に相当）から出されている．嘆願書には日付がないため，いつ時点の話かは不明であるが，6割の住人が転出を渋っていたことが先述の仮事務所の建設計画に影響しないはずはないだろう．

この嘆願への対応の如何については記録がないが，同バラックは撤去され，三井集会所から目と鼻の先にある日比谷公園内に移設されることとなった．この移設は1923年11月23日（4棟，77.50坪，12戸(70)，内訳は独身者収容所（16坪）と罹災者避難所（24坪），バラック事務所（16.5坪），罹災者避難所（21坪(71)）（11月23日付，竣工引渡書））と同11月30日（2棟，30.00坪，11戸，住棟のみ）に竣工した(72)．三井集会所内バラックはもともと4棟，138.54坪，54戸であったから，戸数にして半分弱，坪数にして8割弱に規模を縮小された．移設というより，部材を使っただけとみるべきだろう．

日比谷公園内

本バラックは麹町区日比谷公園内に建設された．同公園には内務省直営バラックが1,186坪（住棟）と64坪（附属屋）の合計1,250坪分，警視庁委任バラックが2,304坪（住棟）と160坪（附属屋）の合計2,464坪分，それに東京市直営バラックが2,970坪（住棟および附属屋）分，以上の3主体合計で6,684坪分の公設バラックが建設されていたが(73)，本バラックは「東京市直営バラック」として集計されていたはずで，それは日比谷公園内バラックの9%弱（面積ベース）を占めていた．竣工は1923年9月16日である．

『大震災ト三井家ノ救済事業』によれば，本バラックは12棟，583.94坪，228戸(74)であったが，『震災罹災者救護用仮住宅並託児所寄附調』は18棟，583.94坪(75)，228戸と伝えている．後者によれば，18棟の内訳は住棟12棟，便所6棟(76)であったため，前者が附属建物を集計から除いていたことが判る．

残された写真（図8）をみると，切妻屋根で建てられていた本バラックの妻壁部分に「罹災者（避

難所）」「三井寄（贈）」と書かれていることが判る．建物が臨時震災救護事務局へと寄附され，その管理が東京市に委ねられたとはいえ，バラックの建設行為が三井諸会社によってなされたことが明示されていたのである．バラックの背後，遠景には愛国生命保険（のちに日本生命と合併）の社屋（現在，日比谷にある日生劇場の敷地）のドーム屋根が覗いている．愛国生命保険社屋との位置関係や日差しの角度を考えると，本バラックが現在の日比谷通りに近いあたりに建設されていたことが判る．



図8『日比谷公園内バラツクの一部』

この写真を見る限り，「……三井集会所及日比谷公園ノ分ヲ内務省義捐部ニ寄贈シタル際立会ノ内務省吏員ハ『バラツク』ノ寄贈ハ三井家ヲ以テ嚆矢トシ而カモ立派過キタル程(77)（傍点，筆者）ノモノニテ今日ノ場合尤モ（ママ）重宝ナル寄贈ナリト感謝ノ意ヲ表シタ」という文言をそのまま受け取ることは難しい．この文言を収めた『大震災ト三井家ノ救済事業』の表現には，『東京震災録別輯』における「三井諸会社」の項目(78)における表現と一致する箇所が多数あるため，前者は後者の草稿であった可能性を指摘できるのだが，後者にはこの「立会ノ内務省吏員」に関する記述が見当らない．「嚆矢」，「立派過キ」という賛辞を掲載することが読者に恩着せがましい印象を与えるのを避けたのであろうか．

なお，前項で述べたように，日比谷公園にはのちに日比谷集会所内から移設されたバラックが1923年11月23日と同30日に竣工したが，これらがどの位置に建設されたかは記録が見つからなかった．

増上寺境内

本バラックは芝区芝公園増上寺境内に建設された．『大震災ト三井家ノ救済事業』によれば，7棟，181.26坪，66戸(79)であるが，『震災罹災者救護用仮住宅並託児所寄附調』によれば9棟，181.26坪，66戸（住棟7棟，便所2棟(80)）であった．ここでも便所を含めたか否かで棟数が異なっただけで，他の数値は一致した．以降で取り上げるバラックに関しては，両資料における棟数の相違を解説しないこととする．竣工は1923年9月16日であった．

当時，国有地であった旧増上寺境内地（増上寺および芝公園）は，同じ芝区にあった芝離宮とともに公設バラックの大規模な建設場所とされた．そして内務省直営分が芝公園に729坪（住棟）と21坪（附属屋）の合計750坪分（ほかに500+50坪を用意中），東京府委任分が芝公園および芝離


図9『芝増上寺内バラツク（181坪）』

宮に 5,264 坪（住棟）と 165 坪（附属屋）の合計 5,429 坪分，そして東京市直営バラックが 6,453 坪分建設された．芝公園，増上寺および芝離宮に建設されたバラックの坪数の合計は 12,632 坪[81]と日比谷公園内に建設された坪数の倍に及んだ．このうち，三井によって建設され，臨時震災救護事務局へ寄附された分は日比谷公園内バラックの場合と同様，東京市直営バラックとして集計されており，面積ベースで 12,632 坪の 1% 強を占めた．

増上寺境内バラックの写真（図 9）をみると，左手に現在も残る増上寺の三門（三解脱門，重要文化財）が写っており，これらのバラックが本堂正面から三門にかけての一帯（本堂の東側）に建設されたことが判る．妻壁部分に「三井寄贈」の文字がうっすらみえるのは日比谷公園内バラックと同様である．

上野公園内

本バラックは下谷区上野公園に建設された．上野公園およびその附属地である池の端一帯には，警視庁委任分の 4,800 坪（住棟）と 200 坪（附属屋）の合計 5,000 坪と，東京市直営分の合計 5,232 坪（名称は「上野池の端」，「上野竹の台」とされる）の合計 10,232 坪が公設バラックとして建設された．上野公園内一帯には，増上寺境内一帯には及ばなかったが，日比谷公園を超える規模の公設バラック群が建設されたのである．三井諸会社によって建設された分は日比谷公園，増上寺境内と同様に東京市直営分に含まれ，全体の 4% 強（面積ベース）を占めた．

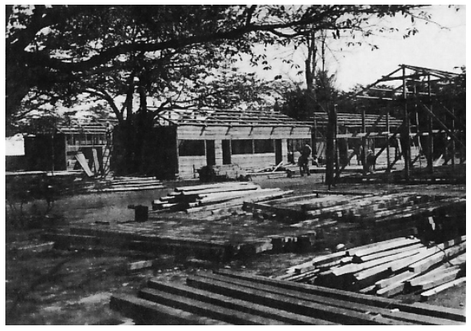


図 10 『建築を急きつつある上野公園バラック（445 坪）』

本バラックは『大震災ト三井家ノ救済事業』によれば 17 棟，445.50 坪，187 戸[82]，『震災罹災者救護用仮住宅並託児所寄附調』によれば 29 棟，445.50 坪，187 戸（内訳は住棟 17 棟，便所 12 棟，うち 4 戸分を託児所として利用し，一戸と扱った（竣工引渡書[83]））である．竣工は 1923 年 9 月 30 日であった．

上野公園内バラックの写真（図 10）には大樹が何本も写り込んでいる．『下谷区史附録大正震災誌』では三井諸会社によるバラックは「上野公園」に建設されたこと[84]になっており，平坦な地形や大樹の繁茂の様子から，竹の台附近（現在，噴水のある一帯）に建設されたものと比定される．

浅草本願寺境内

本バラックは浅草区松清町浅草本願寺（東本願寺）の境内[85]に建設された．『大震災ト三井家ノ救済事業』によれば 17 棟，569.65 坪，203 戸[86]，『震災罹災者救護用仮住宅並託児所寄附調』によれば 29 棟，569.65 坪，203 戸（内訳は住棟 14 棟，便所が 12 棟，ほかに託児所（1 棟），医療所（1 棟），無料宿泊所（1 棟[87]））で，竣工は 1923 年 10 月 8 日であった．附属屋のうち，無料宿泊所については，同寺作興館（宿泊救護所）の前身として『浅草本願寺史』において紹介されているが[88]，同書にはバラックやその他の附属屋への言及はみられない．

本バラックは臨時震災救護事務局へ寄附され，東京市が現場の各区に管理を委ねたが，『東京震災録中輯[89]』によれば，「本願寺バラツク」は 553 坪とされている．三井側の坪数とは若干のズレが存在するが，同寺境内には三井諸会社のみによってバラックが建設され，それが東京市による公設バラックとして経営されていたことが判る．

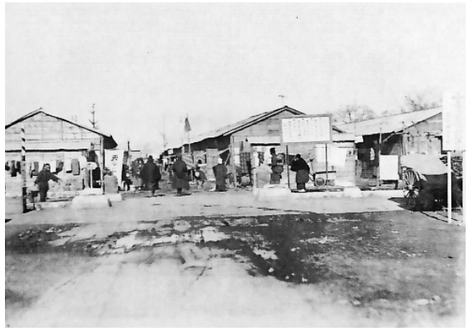


図 11 『浅草本願寺内バラツク（569 坪）』

写真（図 11）では，他のバラックと同様の切妻屋根で平屋の建物が写っているが，掲示札や看板（中央左，「天ぷ」ら？）が周囲にみられ，商業活動が活発であった様子を伝えている．

『大震災ト三井家ノ救済事業』は本バラックの住民から三井男爵に対して感謝状の贈呈があったことを伝えている．

> 「浅草本願寺境内三井『バラツク』居住ノ罹災者ハ震災後三井家カ住ムニ家ナキ人々ノ為メ逸早ク同『バラツク』ヲ建設シタルヲ感謝シ加藤安造，増田熊吉，立花鼎一，酒井芳一ノ四氏代表者トナリ十一月廿日今井町三井男爵邸ヲ訪問厚ク其好意ヲ謝シ同『バラツク』居住世帯百七拾二名連署ノ感謝状ヲ贈呈セリ[90]」

本バラックは本願寺の所有地において三井諸会社によって建設され，建設後は臨時震災救護事務局へと寄贈された公設バラックである．三井側は土地と建物を所有しておらず，また建物の管理にも関与していない．つまり，この感謝状は住民に対して直接の利害関係にない三井側に対して住民から贈呈された点において，他のバラックの住民から贈呈された感謝状（後述）とは本質的に異なり，例えば感謝状を贈呈することで立退き期限を猶予させようとたくらんだという穿った見方は成立しない（彼ら住民が三井の立場を誤解していた場合は別であるが）．本バラックの住民から贈呈された感謝状は彼らの純粋な感謝の気持ちの発露であったと信じることができよう．

府下砂町

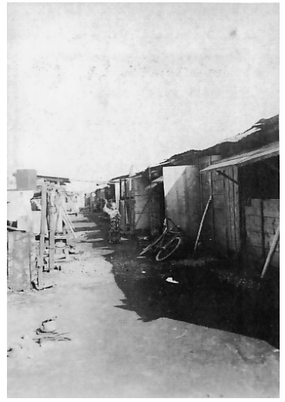
本バラックは南葛飾郡砂町の鉄道用地内に建設された．ここでいう「鉄道用地」とは鉄道省による国有鉄道の用地（所有は国（鉄道省用地））と考えられるが，『東京震災録中輯[91]』，『大正震災志（上）[92]』，『国有鉄道震災誌[93]』，『城東区史稿[94]』にはいずれも関連した記載がみられなかった．

本バラックは『大震災ト三井家ノ救済事業』によれば 14 棟，464.26 坪，176 戸[95]，『震災罹災者救護用仮住宅並託児所寄附調』によれば 18 棟，464.26 坪，176 戸（内訳は住棟 13 棟，便所が 4 棟，浴場が 1 棟（寄附願[96]））で，竣工後に臨時震災救護事務局へと寄附された．本バラックの特徴として，浴場が付設されていたことを指摘できる．これは他のバラックが既成市街地内部に立地し，周辺にある公設や私設の浴場施設を利用することが可能な状況にあったのに対し，砂町という郊外部に立地した本バラックには，浴場設備を設けることで自己完結性を備える必要があったためと考えられる．竣工

は1923年10月8日である．

石川島三井合名会社敷地内

本バラックは三井銀行所有の京橋区佃島町50，52，53，55，56番地に建設されたと見られ[97]，『大震災ト三井家ノ救済事業』によれば8棟，204.42坪，82戸[98]，また『震災罹災者救護用仮住宅並託児所寄附調』によれば「佃島町」と名付けられたバラックが16棟，150.42坪，70戸（内訳は住棟7棟，共同炊事場4棟，便所が5棟[99]）で1923年9月28日に竣工し，「石川嶋」と名付けられたバラックが3棟，54.00坪，12戸[100]で1923年10月中旬に竣工した．本バラックには三井諸会社によって建設された他のバラックにはみられない共同炊事場が存在する．


図12 『石川島バラツク一（54坪）』

坪数に着目すると，『大震災ト三井家ノ救済事業』における「石川島三井合名会社敷地内」バラックが『震災罹災者救護用仮住宅並託児所寄附調』における「佃島町」バラックと「石川嶋」バラックとを合わせたものであったことが判るが，竣工後に臨時震災救護事務局へと寄附されたのは「佃島町」の分のみで，「石川嶋」の分は今井町三井邸内バラックなどと同様，「……（臨時震災救護事務局への）寄附手続差控置候分[101]」であり，三井が保持し，管理を行っていた．つまり，石川島三井合名会社敷地内には三井側から臨時震災救護事務局に寄附され，同事務局から東京市に委ねられて京橋区が管理していたはずのバラックと，三井側が直接管理していたバラックとが併存していたのである（ただし，寄附された「佃島町」の分に相当する東京市営バラック（京橋区管理）は東京震災録中輯に記載されていない[102]）．

本バラックが竣工した10月中旬，次のような依頼が三井物産石炭部から三井合名会社不動産課長（矢野亮一，「三井救済事業委員会」の建築部委員）になされた．

「大正十二年十月廿日
三井合名会社　　石炭部長　（註，小林正直，矢野，渡辺，田中茂の各サインあり）
　不動産課長殿
拝啓
　築地，石川島貯炭場バラツクノコト
曩ニ御分譲願上候バラツク六〇軒分並ニ
十月五日付弊状ヲ以テ御願申上候石川島人夫用　五四坪（註，図12）
　　築地大工用　六〇坪
右ハ何レモ当方貯炭場ニ建設致シ弊方人夫及大工ノ罹災者専用トシテ御願申上候モノニシテ東京市ヘ御寄贈ヨリ除外ナシ置キ被下度願上候　　早々」[103]

この文面にある「石川島人夫用」と「築地大工用」とがいずれも寄附されず，三井の手許に残されたこと，そしてそれらが内部の人間専用として使用する目的で寄附を差し控えたことが判る．

残された写真（図12）の中央付近にうつる人物（子供）の身長と比較すると，本バラックの軒高が他のバラックに比べて低く，また屋根のトタンが不規則に波打っている様子が窺える．この写真には『石川島バラツク一（54坪）』というキャプションがあるので，この粗悪さは「石川嶋（石川島）」バラックが身内の，それも貯炭場の人夫を収容する目的で建てられたためと考えられる．

京橋区築地（二箇所）

本バラックの建設場所は2箇所に分かれていた．一方の建設地は京橋区明石町63番地国有地内（築地水上警察署の被災跡地）とはっきりしているが，もう一方の建設地は明記がなく，1912年当時，三井銀行が所有していた京橋区築地2丁目5-1番地と推定される．前者の建設に関しては，「……震災ニ因ル一般罹災者臨時救恤ノ為メバラツク式建物用地」として「東京税務監督局長加藤守一」が「東京市京橋区明石町所在国有雑種財産貸付ニ関シ三井救済本部建築委員矢野亮一ト左ノ約款ヲ締結（以下略）」し，当該地所を1923年10月4日から一年間を使用させる旨の契約書の控えが残されている．

『大震災ト三井家ノ救済事業』によれば本バラックは3棟，201.00坪，51戸[104]であったが，『震災罹災者救護用仮住宅並託児所寄附調』によれば「築地」バラックが3棟，102坪，19戸，「築地水上警察署内」バラックが4棟，99坪，32戸（内訳は住棟が2棟に便所が2棟[105]）とされている．「築地」バラックは1923年10月下旬竣工[106]で，上述の石炭部長による合名不動産課長宛の依頼状にあるように，今井町邸などと同様「……（臨時震災救護事務局への）寄附手続差控置候分[107]」であったが，「築地水上警察署内」バラックは1923年10月20日竣工[108]で，こちらは寄附された[109]．

このうち，三井文庫には「水上警察署内」に建設された分の写真（図13）が残されており，切妻の平屋建てが並ぶ棟と棟とのあいだに海に向かって排水溝が掘られている様子が判る．こうした排水溝はほかのバラックの写真では目にしなかった．それが撮影アングルの関係で写り込まなかったためなのか，それとも「水上警察署内」バラックのみに特別に整備されたためであったのかは不明である．


図13 『築地水上警察署内（99坪）』

本バラックは石川島三井合名会社敷地内バラックと異なり，明石町（水上警察署内バラック）と築地2丁目（築地）とに分れて立地していたから，臨時震災救護事務局へ寄附したバラック（水上警察署内，一般市民向け）と，三井が自ら管理にあたったバラック（築地，身内向け）とが一つの敷地に併存することにはならなかった．

麻布区永坂町三井邸内

本バラックは麻布区永坂町1番地の三井守之助（永坂町家[110]）の邸宅の敷地内に建設された．永坂町家は1917年に同区鳥居坂から移転してきた．同邸はその際に新築されたと考えられ，震災でうけた被害の程度は不明である．

本バラックは『大震災ト三井家ノ救済事業』によれば1棟，29.5坪，10戸[111]，『震災罹災者救護用仮

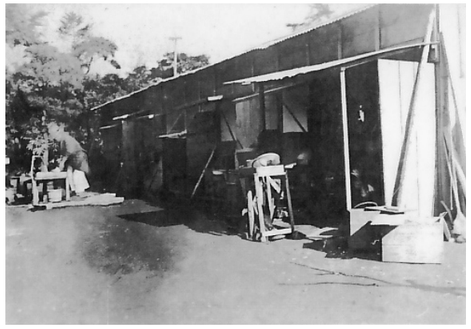


図 14 『麻布永坂町殿邸内（29 坪）』

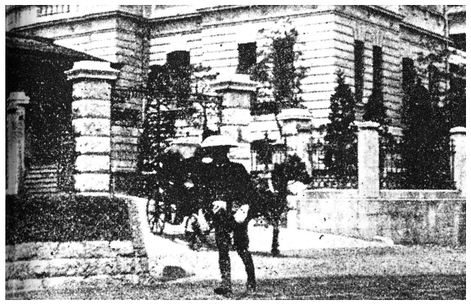


図 15　三井高保邸

住宅並託児所寄附調』によれば 2 棟，29.5 坪，10 戸で，供給規模がもっとも小さなバラックである．また，「……（臨時震災救護事務局への）寄附手続差控置候分[112]」であり，建設後も三井が独自に管理した．

残された写真（図 14）からは，切妻屋根の木造平屋の建物で，画面向かって左手に露天の水場が設けられている様子が窺えるのみである．

麹町区上二番町三井邸内

本バラックは麹町区上二番町 47 番地男爵三井高精（室町家[113]）の邸跡に建てられた．同邸は本稿「第 2 章　富豪たちとメディアの視線」で取りあげたもので，その震災前の様子は写真（図 15）とともに次のように伝えられている．

「上二番町　三井高保邸　47～49 番地……（中略）……高閣中空に聳え修飾の美を尽す[114]……（中略）……其の高さ七丈余……（中略）……金光燦として人目を眩ましむ」

この扱いは，当時，今井町に移転前で土手三番町に所在していた三井八郎右衛門（三井総領家）邸が「……三井家の本家なれば邸内の結構いはん方なく修飾の美を尽くせり[115]」という簡潔に記述されていたことや，一番町邸が番地と電話の紹介だけで済まされているのと大きく異なる．男爵，三井高保は明治中～大正半ばにかけて三井銀行のトップを勤めた人物であった．

その「金光燦として人目を眩まし」めた邸が震災で失われ，その跡地に『大震災ト三井家ノ救済事業』によれば 4 棟，123.60 坪，40 戸[116]，『震災罹災者救護用仮住宅並託児所寄附調』によれば 6 棟，123.60 坪，40 戸（内訳は住棟が 4 棟に便所が 2 棟[117]）のバラックが建設された．それらは 1923 年 10 月 28 日に竣工すると，臨時震災救護事務局へと寄贈され，東京市営バラックのうち麹町区が管理するバラックとして運営されたが，『東京震災録中輯』は上二番町所在の麹町区管理バラックを 400 坪としている[118]．同町内には公立小学校がなかったため，本バラックと同様に一般の邸宅跡地にバラックを建て，東京市が管理していたケースがほかにもあったと考えられる．

本バラックの建設に際しては，まず 1923 年 10 月 3 日に三井救済事業委員会の会計部委員の長谷川数衛から，建築部委員の矢野亮一宛に次のような依頼状が出されている．

「三井救済会建築部　矢野亮一様　三井銀行　長谷川数衛

拝啓　上二番町三井家御邸内ニ新設中ノバラツク一戸出来ノ上ハ銀行集会所片山理髪店へ御貸与被成下候様過般貴下並ニ鉱山ノ七海氏へ御依頼申上置候処其後同所ノ建築ハ何日頃竣成ニ到リ候ヤ伺上候

出来ノ上ハ一日モ迅ニ住込度旨嘆願申出候間特ニ御高配相煩度重而御願申上候　十月三日[119]」

この文章によれば，10 月 3 日以前，すなわち竣工より約 1 か月前の時点（10/3 時点での「過般」）で会計部委員（長谷川）から救護部委員（七海）および建築部委員（矢野）に対して「銀行集会所」専属の業者の収容を依頼していたこと，そして臨時震災救護事務局へと寄附する（予定の）バラックに関係者を入居させるべく直接の管理を担当する区役所と交渉にあたったのが建築部であったことが判る．

このほかに同バラックに対して同様の依頼があったのか否かは不明であるが，麹町区役所から「三井枠」による入居者数の上限が示されていたことが次の資料から判る．

「大正十二年十月六日　上二番町三井家内　上野様[120]

三井別邸内　七海兵吉　代　松樹武一郎

拝啓　御邸内ニ罹災民収容ノ為メバラツク四十戸分建設方御承認ヲ得居候処出来ノ上ハ麹町区役所ニ引渡ノ事ニ相成居候ニ就テハ右バラツクニ御邸御干係ノモノニテ収容ノ御予定ノモノ有之候ハバ其戸数御手数ナガラ御一報被下度尤モ総戸数四十戸ノ事トテ区ノ希望トシテハ三井家御干係ノモノハ右ノ内五戸位ニ止メラレ度旨申出有之候ニ付右御含置被下度，尚右ハ明日正午迄ニ当方収容予定戸数通知ノ事ニ相成居候ニ付此者へ御返事願上候[121]」

三井救済事業委員会の救護部委員と救護部補助員が，罹災収容者のバラックを建設する用地を提供した室町家に対して，麹町区役所から打診があった「五戸位」までの“三井枠”による収容者の推挙を求めていたのである．

残された写真（図 16）をみると，地面のあちこちに震災で失われた建物の基礎とみられるものが白く見えている．後述のように，本バラックの建設時点では震災に遭った西洋館の焼け跡（図 4）が残っていたから，これらの基礎はその附属屋の類に供されていたものかも知れない．

10 月の下旬，いよいよバラックが竣工に近づくと，次のような文書が建築部委員（矢野）のもとに届いた（日付なし）．

「（欄外）七海様

不動産課　　物産

矢野様[122]　　鎌田生[123]

前略

麹町三井男爵邸内の「バラツク」出来上り申候跡片付に明日を費せば明後日より万事整頓住居に差支無之候処本朝麹町区役所の罹災民掛の吏員検分に参候際

一，三井干係罹災者収容に付部屋番号決定の必要と一般民より先きに決定し置かれるなれば場所指定あり度し

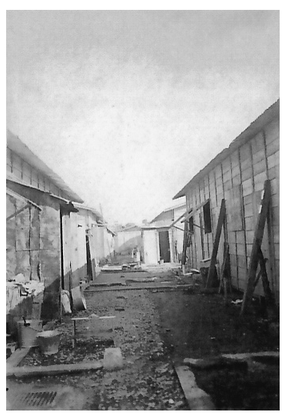


図 16 『麹町上二番町殿邸内（123 坪）』

し，臨時震災救護事務局へと寄附され，東京市営バラックのうち麹町区が管理するバラックとして運営された．これも上二番町の場合と同様に，『東京震災録中輯』は一番町所在の麹町区管理バラックを400坪[131]としており，同様のバラックがこのほかにも民有地に建てられていたと考えられる．

本バラックに関して残された文書としては，次のものが挙げられる．

「（欄外）写　鉱山，　山口主任

大正十二年十一月三日

合名不動産課　七海兵吉

矢野課長殿

拝啓救護事業中バラツクの件につき左記御了承被下可然御配意相願度

（前略）

五，一番町バラツク入口に扉を附たるや否やに付区役所より問合せ有之に付排水設備の点と共に併せ御考慮被下度候

（後略）[132]」

この文書は救護部委員が建築部委員に対して「一番町バラツク入口に扉を附たるや否や」検討して欲しいと依頼したものである．ここでいう「入口」とは住宅一戸一戸の入口（住戸の扉）ではなく，住棟3棟と便所3棟のバラックが立ち並んだ旧一番町家の敷地入口のことを指していると考えられる（いかに粗末な造作とはいえ，バラックにはちゃんと扉が備わっていた）．竣工して数日が経過してみると，救護部委員には屋敷地が収容者以外の人間にとっても自由に出入りできる状態であることが将来的な問題のタネになると思えたのかも知れない．

本バラックも上二番町三井邸内バラックと同様，寄附した建物の存置期間を1924年末日までとし，使用後は区役所に無償下げ渡しして欲しいと条件を付けて寄附されたが，一本松町家も上二番町にいた室町家と同様，震災後に旧地に還り住むことはなかった．

神田区神保町三井邸内

本バラックは神田区北神保町5番地男爵三井寿太郎（南家）[133]の邸跡に建てられ，『大震災ト三井家ノ救済事業』によれば，5棟，196.80坪，64戸[134]，『震災罹災者救護用仮住宅並託児所寄附調』によれば7棟，196.80坪，64戸（内訳は住棟が5棟に便所が2棟[135]），竣工は1923年10月30日であった．本バラックは臨時震災救護事務局に寄附されたので，東京市営バラックのうち，神田区が管理するものとして使用された筈であるが，『東京震災録中輯』[136]には記述がなかった．



図18 『神田神保町殿邸内（196坪）』

三井文庫に残された写真（図18）では，手前に大きな池をもった庭園があり，その向こうにバラックが建設されている．実は，この写真とよく

此事につきては洋館に向った部屋が日当りよく適当と存じ居候

二，水道電気の料金負担は如何相成哉予め打合決定あり度し

三，爾後の管理方法は依然区役所吏員の取計に一任せらるべきや否や

右今明日中に是非承度故乍御手数申出有之度との事に御座候間可然御配慮奉希望候

匆々」[124]

この文書から，本バラックが男爵邸の焼け跡（前掲，図4）の脇に建てられたこと，麹町区役所の吏員の側から「三井枠」の収容者に対してよい部屋を優先してふり分ける旨の提案や，今後の管理を麹町区役所側がおこなって良いか，再度の確認があったことが判る．

本バラックは建物自体は臨時震災救護事務局へ寄附をされ，麹町区が管理する公設バラックとして機能したが，その敷地は三井家が所有するものであった．そこで，バラックを寄附する際にその存置期間を1924年末日までとし，将来の三井家側による敷地の利活用を阻害することがないようにした．なお，室町家の本邸所在地は『三井家同族会事務局職員録』によれば震災直後の1924年2月から1933年5月現在の分までは「麹町区平河町五一二一」，1934年12月現在の分からは「麹町区平河町二丁目七番地二」とされており，震災後，旧地である上二番町に帰還することはなかった．

本バラックは使用後は区役所に無償下げ渡しして欲しいと条件を付けて寄附されている[125]．

本バラックの住民も，浅草本願寺バラックの住民同様，感謝状を贈呈している．

「上二番町三井男爵邸内『バラツク』居住ノ罹災者モ同邸カ同シク罹災セルニ拘ラス市内罹災者ノ為ニ『バラツク』を建設シ急ヲ救ハレタルコトヲ感謝シ居住世帯主四十四名ノ連署ヲ以テ感謝状ヲ同邸ニ贈呈セリ」[126]

このケースが浅草本願寺のものと大きく異なるのは，本バラックが臨時震災救護事務局に寄附され，麹町区によって管理されていた公設バラックであったにせよ，その底地の所有権を三井家が持っていたという点である．浅草本願寺バラックからの感謝状に比較すると，本バラックからの感謝状に純粋さが欠けて感じられるのは穿った見方であろうか．



図17 『麹町一番町殿邸内（130坪）』

麹町区一番町三井邸内

本バラックは麹町区一番町40番地の三井高光（罹災当時は一番町家，のちの一本松町家[127]，）の宅地に建てられた[128]（図17）．

『大震災ト三井家ノ救済事業』によれば3棟，130.65坪，42戸[129]，『震災罹災者救護用仮住宅並託児所寄附調』によれば6棟，42戸，130.65坪（内訳は住棟が3棟に便所が3棟[130]）で，上二番町三井邸内バラックと同様，1923年10月28日に竣工



図 19　神保院

似た神保町の庭園写真（図 19）が『新撰東京名所図絵　神田区之部上巻』[137]にみえる．同書によれば，その庭園は三井邸の隣接地にあった「神保院」という伝染病専門病院のものであり，そもそもは貸席の神保園のものを引き継いでおり，大きな蓮池があった[138]．震災当時の神保町三井邸はかつて隣接していた病院の庭園を買い増して拡張されていたのかもしれない．

本バラックに関しては，以下のような文書が残されている．

「九月廿五日
七海様　下田生（サイン）
一昨日御詰ノ件今朝亀嶋常務（引用註，三井銀行常務，亀嶋広吉か[139]）ニ相談ノ結果左ノ通リ御返事申上候
　一，神田神保町三井様焼跡地所ニバラツク御建築ノ儀ハ当行ニ於テハ異議無之候
　一，工業倶楽部借室ノ件ハ当行ニハ入要無之候
右要件迄如此ニ御座候　　敬具[140]」

本状によれば，神保町三井邸内バラックを建設するに際して，三井救済事業委員会の救護委員が三井銀行の常務とみられる人物に建設の是非を問い合わせていたこと，逆にいえばその人物が異議を述べるべき立場にいたことが判る．なお，三井寿太郎は当時，東神倉庫の社長であり，三井銀行とは直接の関係になかったようである[141]．

また，次の文書は富士見町三井家が三井救済事業委員会の救護部委員に対し，1 名の罹災者を神保町三井邸内バラックに「三井枠」で収容することを依頼し，それが実現したことを伝えている．

「大正十二年十一月二日　　東京市芝区三田綱町七番地
富士見町[142]　　三井鉱山株式会社
三井家執事　御中　　仮事務所
拝啓陳者神保町『バラツク』出来上リ候ニ付テハ予而当方七海重役宛収容方御話有之候罹災者御一名ニ対シ何時ニテモ引移リ差支ナキ旨貴方ヨリ御通知下度願上候　　匆々

十一月六日奥田執事[143]ニ面談セシトコロ既ニ本状ノ罹災者ハ神保町ニ引移済ノ趣ナリ[144]」

この手紙にある「麹町区富士見町」に居住した三井家としては新町家や五丁目家が知られるが，1924 年 2 月現在の「三井同族会事務局職員録」によれば，この当時，南家（震災までは本バラックが建設された北神保町邸に居住）が「麹町区富士見一ノ三六」に住んでいたことが判る．つまり，上二番町三井邸内バラックと同じく，バラックの建設用地を提供した南家に対して，収容者の「三井枠」を決定する一定の権利が認められていたのである．

本バラックも上二番町三井邸内バラックや一番町三井邸内バラックと同様，寄附した建物の存置期間を 1924 年末日までとの条件を附して寄附され，使用後は区役所に無償下げ渡されることとなっていた．南家も，室町家（上二番町三井邸）や一本松町家（一番町家，一番町三井邸）と同様，旧地に還ることはなく，1934 年 3 月現在の三井家同族会事務局職員録によれば，同家は「麹町区三番町四番地三」に移転している．

浅草区伝法院境内（託児所）

本託児所は浅草区浅草公園第 3 区伝法院境内に建設された．その伝法院の地所は 1911 年 5 月に行政訴訟で国からの返還が決定され，震災の当時は同院の所有となっていた．



図 20 『浅草伝法院托児所（48 坪）』

託児所は『大震災ト三井家ノ救済事業』によれば 2 棟，48.75 坪[145]，『震災罹災者救護用仮住宅並託児所寄附調』によれば 2 棟，2 箇所，48.75 坪[146]と両者で一致しており，1923 年 10 月 30 日に竣工すると，臨時震災救護事務局へと寄附された．

同託児所の写真（図 20）には切妻の平屋の建物が写っており，その妻部分に「三井寄贈」の文字が縦に書かれた札が貼付けられている．

本所区柳元小学校構内

本バラックは本所区柳島元町公立柳元小学校敷地内に建てられた．『大震災ト三井家ノ救済事業』によれば 7 棟，217.65 坪，70 戸[147]，『震災罹災者救護用仮住宅並託児所寄附調』によれば 8 棟，217.65 坪，70 戸（内訳は住棟が 7 棟に便所が 1 棟[148]）で，1924 年 11 月 5 日に竣工すると，臨時震災救護事務局へ寄附され，東京市営バラックとして本所区が管理するところとなった．



図 21 『本所柳元小学校内（217 坪）』

柳元小学校は 1922 年 9 月 1 日，すなわち震災のちょうど 1 年前に創立されたばかりの学校であったから[149]，校舎は新築から間もなく罹災したと判る．本バラックを撮影した写真（図 21）では，バラックの基礎部分や敷地の所々に煉瓦の構造物が見える．これらはその新築間もなく焼失した校舎の基礎であろう．

『東京震災録中輯[150]』には同小学校（橋元小学校と誤植）校地において，東京市営バラックのうち本所区の管理する分が 589 坪，存在していたと記されている（この数字は本所区史[151]とも一致）．同所に 589 坪のバラックが存在したということは，三井諸会社によって供給されたバラックの坪数を上回る 372 坪分のバラックが他の主体（東京市を含む）によって供給されていたことを意味している．

本バラックも，建物使用後は区役所に無償下げ渡しして欲しいという条件で寄附されている．

本所区茅場小学校構内

本バラックは本所区公立茅場小学校敷地内（本所区茅場町3丁目10-1，10-2，10-5，10-6，10-7，10-11[152]）に建設された．『大震災ト三井家ノ救済事業』によれば2棟，134.00坪，40戸[153]，『震災罹災者救護用仮住宅並託児所寄附調』によれば4棟，134坪，40戸（内訳は住棟が2棟に便所が1棟，倉庫が1棟[154]）で，1923年11月4日に竣工すると臨時震災救護事務局へと寄附され，柳元小学校と同様に，東京市営バラックのうち本所区が管理する分とされた．

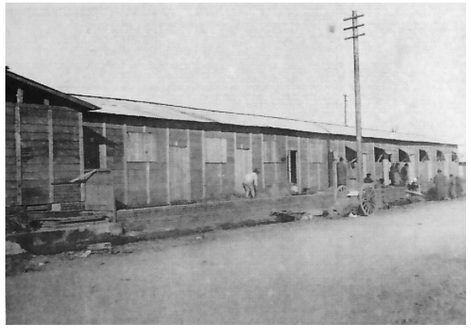


図22 『本所茅場小学校内（134坪）』

震災で失われた同小学校の校舎は1907年10月に竣工し，その後1917年3月に増築したものであった[155]．写真（図22）でもバラックの基礎部分に煉瓦が覗いていて，柳元小学校と同様に焼失した茅場小学校校舎の基礎を流用したものとみられる．

『東京震災録中輯[156]』では茅場小学校校地において，東京市営バラックのうち本所区が管理する分として157坪が建設されていたとされる（この数字も本所区史[157]と一致）．このため，同所には三井諸会社によって建設されたバラックのほかに23坪のバラックが他の主体によって供給されていたことが判る．

本バラックも，建物使用後は区役所に無償下げ渡しして欲しいという条件で寄附されている．

芝区三田四国町三井合名会社敷地内

本バラックは「……（臨時震災救護事務局への）寄附手続差控置候[158]分」であり，臨時震災救護事務局への寄附願が存在しないため，建設地が明らかではないが，それは1912年当時，三井銀行が所有していた三田四国町2-7，2-8，2-14 17，2-21，2-32番地と推定される．本バラックは三井文庫所蔵の資料では「四国町借家罹災者収容用[159]」として位置づけられている．前述の「築地」バラックや「石川嶋」バラックと同様，収容対象者の全てを三井側が事前に決めていたことから，寄附がなされなかったと考えられる．

『大震災ト三井家ノ救済事業』によれば4棟，124.00坪，40戸[160]，『震災罹災者救護用仮住宅並託児所寄附調』によれば8棟，124坪，40戸[161]で，1923年11月8日に竣工している．

同バラックの写真は残されていない．

本郷区右京ヶ原

バラックの名称にもある「右京ヶ原」とは，東京市が社会事業用地として「……大正十一年一月には本郷区真砂町三十六番地帝国大学用地六千四百十余坪を買収し，大正十一年九月より大正十四年三月迄四十六棟七十五戸の普通住宅を建設[162]」した土地で，そのいわゆる東京市営真砂町住宅地の一郭に

本バラックが建てられたと推定される．

震災の当時，同住宅地では1921年9月および1923年2月に着工し，1923年1月および1923年7月に竣工した木造瓦葺2階建て28棟48戸が存在したほか，1923年6月に着工，震災の混乱がある程度おさまった1925年3月に竣工することとなる木造瓦葺2階建て18棟27戸が工事中[163]であったが，竣工していた住宅48戸の住宅は「大過なきを得た[164]」という．

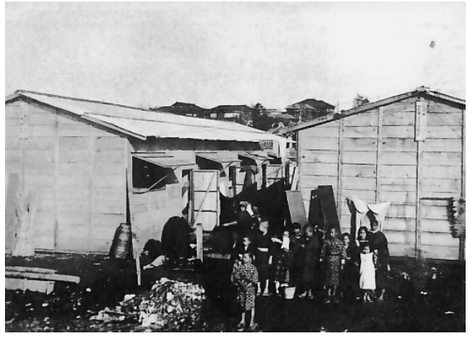


図23 『本郷区右京ヶ原（129坪）』

右京ヶ原を撮影した写真（図23）では，手前にたつ子供たちの顔の向かって左側が影になっている．子供たちの向こうにバラック，そしてその遠景には高台の家並みが見える．右京ヶ原という場所は本郷台地（東側）と小石川台地（西側）によって挟まれているが，子供たちの影の向きを考えると，遠景の高台が本郷台地であると判る．

『大震災ト三井家ノ救済事業』によれば3棟，129.30坪，42戸[165]，『震災罹災者救護用仮住宅並託児所寄附調』によれば6棟，129.30坪，42戸（内訳は住棟3棟，便所3棟[166]）で，1923年10月11日に竣工し，臨時震災救護事務局へと寄附されたが，『東京震災録中輯[167]』には記述がなかった．『本郷区史』によれば，「……三井男爵家寄贈建設右京ヶ原バラツクは十月十六日収容開始（で）収容人員（は）百六十九[168]名」であったという．

本バラックも建物使用後は区役所に無償下げ渡しして欲しいとの条件で寄附されている．

右京ヶ原バラックが竣工し，罹災者の収容を開始してから半月ほどが経過した1923年11月3日，次のような提案が救護部委員の七海から建築部委員の矢野に宛ててなされた．

「（欄外）写　鉱山，　山口主任

大正十二年十一月三日

合名不動産課　七海兵吉

矢野課長殿

拝啓救護事業中バラツクの件につき左記御了承被下可然御配意相願度

一，右京ヶ原には向（き）替へバラツク壱棟拾戸位の空地あり

御建築願上候

右に要する材料も大体現場に残り居候

（中略）

三，右京ヶ原バラツクは貳拾四戸建ノ片側拾弐戸丈ヶ区により収容見合せ置かれ度申入れ置き候

四，右京ヶ原のバラツクは三菱霊雲寺内バラツクの例により本郷区に寄附され多く（ママ）区主事桑原氏より内諾あり関係方面交渉の上取極め可申候

（中略）」[169]

これによれば，右京ヶ原には，すでに竣工したバラック3棟と方向を違えれば，やや小さめのバラ

ック１棟10戸程度を建てる余地があったこと，そのための材料は右京ヶ原の現地に野積みされていたこと，また余地にバラックをもう１棟を建設しようと企図されていながらも，なぜか竣工したバラックうち１棟の半分の住戸が三井側（救護部委員）の意向で空家のまま残されようとしていたことなどが判る．実際に余地にバラックが増築されたという記録はみつけられなかった．また，三井側が一部住戸を空家のまま残すように本郷区に働きかけた理由は不明である．

九段牛ヶ淵

本バラックは同区飯田町１丁目所在の靖国神社附属地である牛ヶ淵の国有地に建てられた．

この場所は「……火災ノ際避難地トシテ使用シ，又ハ同地ヲ利用シテ収益ヲ計ル等ノ目的ヲ以テ，神社ノ為メ特ニ設ケタル地域」であったと『靖国神社百年史　資料篇　上』は記す[170]．

同神社の社務日誌によれば，９月１日の震災発生とともに「一　境内・外苑・牛ヶ淵等開放シテ被害民ニ避難セシメタリ．官舎ノ庭ニ至ル迄，詰掛タ」という[171]．避難地としての開設目的通りに機能したのである．

避難者の数は『東京震災録中輯』によれば９月５日現在で「牛ヶ淵公園及靖国神社」に6,455人[172]，また，『靖国神社百年史　資料編　上』によれば，９月６日現在で

「一　境内避難者　戸数百拾参戸　人員九百四十三人（ママ）
一　第二鳥居前内苑避難者　戸数五拾戸　人員三百三拾七名
一　旧馬場避難者　戸数百六拾弐戸　人員九百参拾四名
一　牛ヶ淵避難者　戸数百五拾弐戸　人員七百九拾弐名
（後略）[173]」

であったとされる．

これらの罹災民を収容するため，麹町区九段の靖国神社一帯には警視庁委任分1,680坪（住棟）と70坪（附属屋）の合計1,750坪，東京市直営分の1,680坪，両者あわせて3,430坪分の公設バラックが建設されたが，三井諸会社は『大震災ト三井家ノ救済事業』によれば２棟，61.70坪，20戸[174]，『震災罹災者救護用仮住宅並託児所寄附調』によれば３棟，61.70坪，20戸（内訳は住棟２棟，便所１棟）[175]分を建設した．竣工は1923年11月16日で，建物使用後は区役所に無償下げ渡しして欲しいと条件をつけて臨時震災救護事務局へと寄附された．

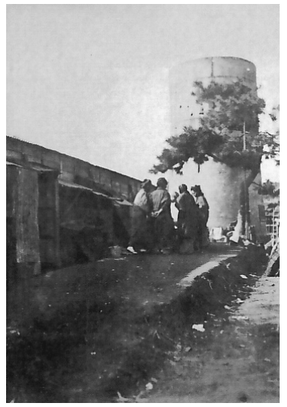
牛ヶ淵には警視庁や東京市，そして三井諸会社以外の主体によるバラックも建設されたようだ．例えば，次のような記録が残っている．

「（９月16日）一　田中（陸軍省）副官，東京通信社長辻嘉六代立石駒吉・夏秋十郎帯同，宮司ニ会見，其要領．
牛ヶ淵附属地ニ急速避難民収容バラク（ママ）建設ノ承認ヲ大臣ニハ得タルモ，当該者タル宮司ノ承認ヲ得タシト．因テ，田中副官ヨリ両人ニ対シ，救済事務局ノ認可ヲ受ケ，更ラニ申出テヨ．宮司ニ於テ意存（ママ）ナシ．当局同断ナリ．但シ，願書ニハ坪数等詳記シ，樹木等ハ妨ケサル範囲ニ建設ノコト両人之ヲ了承シ，辞去[176]．」

引用箇所にある「東京通信社長辻嘉六」とは戦前戦後の政治フィクサーである．

様々な主体によってバラックが建設されようとしていたためか，本バラックの竣工する２週間前の時点でさえ，三井側ではどの場所にどのくらいの規模のバラックを建設したら良いのかが明らかではなかった．逆にいえば，他のバラックと同様２週間で整地から着工，竣工までが可能な程度の簡易なものであったということになる．

「（欄外）写
鉱山，　山口主任
大正十二年十一月三日
合名不動産課　七海兵吉
矢野課長殿
拝啓救護事業中バラツクの件につき左記御了承被下可然御配意相願度
（前略）
二，牛ヶ淵の地割は麹町区役所佐藤氏に申入れ置候間分り次第御報可申上候に付百坪参拾戸見当御建築御手配置願上候[177]
（後略）」


図24『麹町区九段牛ヶ淵（61坪）』

本バラックを撮影した写真（図24）では，画面中央奥に煉瓦製の旧沙河給水塔[178]が見えている．この給水塔がこの当時は現在の九段会館（旧軍人会館，1934年竣工）の建っている位置にあり[179]，その後，同会館を建設する際に北へ移設されたこと（昭和館建設時に撤去）を考慮すると，本バラックが現在の九段会館の敷地のうち，旧千代田区役所庁舎側に寄ったあたり（南側）に建てられていたことが判る．また，地盤面が給水塔の周囲を除いて削り取られている様子が判る．これは，バラックの建設に際して整地をおこない，水平を確保したためと推察される．

震災から１年７ヶ月が経過した1925年４月１日，牛ヶ淵にあったバラックはその殆どが撤去された．その際，建設者の異なるバラックの間で撤去の時期に相違があったようだ．

「一　外苑及牛ヶ淵バラツク居住者（東亜通信社辻嘉六建造バラツクヲ除ク）は悉皆撤退シ，同バラツクハ取崩シニ着手セリ[180]．」

5　今井町三井邸内バラックでの生活風景

最後に，今井町三井邸内バラックでの生活風景を当時の新聞記事によって描写してみたい．使用したテキストは都新聞1923年10月19日付（三井文庫所蔵の新聞スクラップブック）である．

記事の見出し

新聞記事の見出しは誇張された表現によって人々の関心を惹き付けるものである．

『三井王国に抱擁された麻布の一部落』という見出しは三井側と罹災者とのあいだの経済力の差を誇張しているし，『令嬢達の慰問招待会や　男爵夫妻が自身で配給』，あるいは『罹災者中第一番目の果報村』という見出しは，三井側からの過剰ともいえる温情の示し方が取りあげられている．

今井町三井邸内バラックの管理

前章で触れたように，今井町三井邸内バラック（今井町，三河台町，氷川町，福吉町に分散所在）は臨時震災救護事務局へは寄附されず，三井側が管理し続けた．寄附されなかったバラックはほかにも「四国町（三田四国町）」，「石川嶋」，「築地」の各バラック（但し，内部向け）が存在したから，本記事が「三井家の手で建つたバラツク村は諸方にあるが，直接同家の管理の下にあるのは麻布今井町の三井八郎右衛門男爵邸内の一画に出来た三井村である．」と伝える情報は厳密には誤りである．

バラック村の建築の状況

「秋晴れの午後此処に訪れると，広い邸宅を取り巻き四ヶ所に亘つてバラツク村が建てられて三井王国城下の部落の観がある，門前の空地や氷川神社境内にも大分あるが本館の表門を入つて右の高台には十数棟が並び細かい砂利は一面に敷きつめられ立並んだ樹木の間からは麻布赤坂一帯の町が隠見して居る部屋の中にも吾座や畳が敷かれて何となく落ついた空気が漂つて居るのは追とうなづかせる，裏門をくぐつて後庭の崖の下には又磨かれたやうな庭石の道に沿ふて見渡す限り仮小屋が続いて居る，是等全部で三十三棟のバラツクの外，裏門外の同家の普通の家屋や自動車々庫等にまで入つた罹災者は，現在二百五世帯八百四十三名で，此所に豊かな保護の下に静かな生活を続けて居る」（前出，図 5）

住民の旧住所

「此所には麻布赤坂の避難民を始め各区から集まつて居るが，中には横浜辺りから来た者も大分あるといふ」

この文から，収容者が近隣を中心に構成されていたのではないことがはっきり判る．

住民への配給

「何といつても此の村民は罹災者中の幸福者で，区役所の配給以外に三井家からの特別の給与があるので此頃何所でも不自由して居る衣類や夜具等も余り不足は感じないで寒さに慄へて居る者等は見当らない，男爵夫妻も度々此部落を各戸毎に訪問して慰問品を配布したり又十七日は令嬢達が此処の子供二百数十人を招いて慰問品を与へ夕方まであの広い邸内を開放して遊ばせたりして居る，震災救護事務局では余り優遇されては困る ── 惰民を養成するやうなものだからと苦情を云つて来た位で彼等はもう此処へ入つたが最後テコでも動かうともしない」

住民への配給に関しては，ほかに「三井合名会社斜里農場産の干饂飩 50 箱を今井町邸内バラック居住者に寄贈した」という記述もあり，かなりな厚遇であったことが窺える．(181)

住民の就労状況

「……然し大抵の者がもう仕事に就いて日中は年寄りか子供の外は男は余り見当らない位で中には家庭内出払つて戸閉りのした家が可なりある」

住民の福祉システムとそれに対する住民の態度

「本邸には診療所があつて医師や看護婦が詰きつて居るがバラツク村に病人があれば一々出かけて行くといふ調子で三井家では是等の村民を腫物にでも触るやうに大事にして苦情の出ないやうに努めて居るが，尚気の附いた事や不平があつたら無記名で投書してくれと申出であるが皆割合に温しく強制的な要求などは曾てないとの事である」

この「……腫物」扱いという記者の表現に，先述の震災救護事務局からの苦情とあわせ，外部の人間が三井家の救護活動をどのように見ていたのかが窺える．

バラック村の運営

「唯自治的な観念は薄いのか，三井家では各部落に風呂場を設けてあるが，それを各自で沸かして入らうともしないで作られた儘に未だ一度も使つて居ない，追に邸内だけに火の用心は厳重で，夜は一時間交替で夜警に出て居る」

竣工から１ヶ月，罹災者は他所で風呂に入っていたのか，それとも身体をぬらした手拭いで拭う程度しかしていなかったのか．火災を危惧したにせよ，不便に暮らしていた様子が伝わってくる．

6　まとめ

以上，関東大震災後の公設バラックの供給と，そこにおける三井諸会社による活動について，三井文庫所蔵の資料と公刊された各種文献とを照合させながら情報の整理をしてきた．

以下，三井諸会社によるバラック建設事業についてまとめてみる．

バラックを寄附する場合，寄附しない場合

まず，1）公共用地（公園や国有地）にバラックを建設する場合は全ての事例で寄附をし，2）三井諸会社の所有地に三井諸会社が建設する場合でも，一般罹災者の収容を目的とする場合は基本的には寄附をしたこと，3）三井に関係した罹災者のみを収容する場合はそれを理由に寄附をせず，三井が管理を続けていたことが明らかになった．ただし，2）には今井町三井邸内バラックという大きな例外がある．

三井救済事業委員会と内務省との間でなされた「寄附方法」に関する協定事項のメモが残されている．

「　　寄附方法

一，金銭，物品共寄附ハ総テ内務省（大臣官舎内）義捐部ニ申出ノコト

一，建物ノ如キハ落成後義捐部ニ引渡ノコト
一，義捐部ハ更ニ収容設備部ニ引渡ヲ為シ収容部ハ又市，府ト協議ノ上罹災民ノ収容ヲ為ス由
（食料其他ハ市，府ニテ供給）
備考
内務省トシテハ収容所ハ可成多人数収容所ヲ設クル方針ニテ目下青山外苑ノ外芝浜離宮ニバラツク建設方画策中共同浴場，食堂等ヲ完備スルニ便ナレバナリ
従而少人数収容所ハ将来一ヶ所ニ集合スル予定ナレバ後日適当ノ場所ニ移転スル要アリト（右ニ付三井ノ寄附建物ニ付移転スルモ異儀（引用，ママ）ナキヤトノ質問アリタルニ付異儀（同）ナキ旨回答セリ）
右ニ基キ
一，集会所バラツク　四棟　五十六戸（一戸ニ付弐坪半）
此坪数　百四十坪
一，日比谷公園バラツク　拾貳棟　貳百拾八戸（一戸ニ付弐坪半）
此坪数　五百七十坪
以上二件ハ本日寄附手続ヲ了シ落成次第義捐部ニ引渡ノ事ニ打合置タリ
尚集会所内現在避難民 貳拾六戸 百五拾八人 ハ同所内新築バラツク内ニ収容セシムルコトヲ条件トシテ寄附ノ事ニ了解ヲ得置タリ
右及御報告候也
十二年九月十一日　三井鉱山会社員
松樹武一郎
追而集会所内バラツクハ十二日或ハ十三日中，日比谷分（引用註，日比谷公園）ハ十四五日頃ニ非ザレバ落成セサル見込ナリ，大工手間ハ充分ナルモ材料不足ノ為ナリ，材料充実ヲ急務トス
尚
浅草　本願寺内　壱千坪　場所選定済
亀戸　壱千坪　未定
芝浦　未定　未定
右ニ付テモ予メ寄附申込置タリ」(182)

この協定書から，罹災者収容のためのバラックを建てる場合，内務省から建物を同省義捐部に引き渡すように指示されていたこと，共同浴場，食堂などの生活関連施設を効率的に設けるために大規模な罹災者収容バラックを建設する方針であったことが判る．これは三井集会所内に震災の年の 11 月になって仮事務所を建設した際，「渡りに船」となったことであろう．

広義の公設と狭義の私設

本稿の第 1 章において，罹災者収容バラックにおける「公設」という言葉が広義で用いられており，私的団体や個人によって建設され，公に寄附されたり，あるいは寄附せずに建設主体が管理して

いたバラックをも含んでいたことを述べた．これらの事例，すなわち裏を返せば「広義の私設バラック」は一般の罹災者を収容することが目的で，三井諸会社によって建設されたほとんどのバラックも同様であった．

しかし，三井諸会社によって建設されたバラックを細かく観察すると，バラックの建設に際して三井内部から関係者による利用が提案された場合，一定の手続きをふんだ上で寄附を取りやめ，私設バラックとして利用されるケースも存在した．これは「狭義の私設バラック」と定義できる．三井諸会社によって建設されたバラックのなかには，この「広義の私設バラック」と「狭義の私設バラック」とがひとつの敷地に併存するケースも 1 つあった（石川島）．

関東大震災後の罹災者収容バラックと三井諸会社による活動の位置づけ

先述のように，三井諸会社は内務省とのあいだで「罹災者収容バラックは寄附する」という協定を結んでいた．だが，三井以外の所有する土地に建設されたバラックが例外なく臨時震災救護事務局へ寄附されていたのに対し，三井の所有する土地に建設されたバラックではこの協定は必ずしも守られておらず，同事務局に寄附されたものと，寄附されずに三井が運営を続けたものとがあった．

以下，三井の所有地に建設されたバラックに限定して議論をすすめる．

それらのバラックが同事務局に寄附された場合と寄附されなかった場合とでは，バラックに関する権利の状態と，それに起因する将来的な建て替えの難易とに差異が生じたと論理的には考えられる．すなわち，寄附された場合には土地の所有者（三井），バラックの所有者（臨時震災救護事務局），そして占有者（収容者）がすべて異なる主体であるため，寄附されなかった場合（土地とバラックを三井が所有）と比較して権利関係が複雑になり，三井ひとりの都合で収容者に退居を求めることが困難になるなど，撤去や建て替えの際にトラブルが発生する可能性が高まるのである．

三井側はこうした点を危惧したためか，上二番町，一番町，神保町の三井各家邸跡にバラックを建てて臨時震災救護事務局へ寄附した際に，次のような条件を附していた．

「…他ニ適当ノ土地無之為メ一時応急ノ罹災者収容ノ目的ヲ以テ個人ノ宅地内ニ建設仕候モノニ有之候従而建物存置期間長期ヲ要シ罹災者立退ニ付紛議ヲ生スルカ如キコト有之候ハバ誠ニ遺憾ニ候間右事情御裁量被下該建物ニ付テハ大正拾参年末日迄ニ除去相叶ヒ候様特別ノ御取計相煩シ度候（傍点，引用）(183)」

他方，内務省との協定を守らずに三井諸会社側がバラックの運営を続けた場合，メリットとして三井側の都合で収容者に退居を求めることが容易であった（実現の可否は別）こと，デメリットとしてバラックを直接に管理するため，収容者とのあいだにトラブルを抱える可能性があったことが挙げられる．今井町邸内バラック（三河台町，氷川町，福吉町の各バラックを含む）がこれに該当する．

このようにメリット・デメリットの両方が想定されるとはいえ，なぜ，寄附したり，しなかったりと一貫性を欠いた対応がなされたのか．この疑問を明らかにするヒントは，今井町邸内バラックとそれ以外のバラックを取り巻く「建設敷地の状況の違い」に見いだせるかもしれない．

まず，今井町邸バラックは今井町邸，つまり「三井本家の本邸」敷地内に建設されたバラックとい

うことで，三井側がその運営に強い責任感をもっていた可能性が指摘できる．また，上二番町，一番町，神保町の各邸が焼失していたのと異なり，同一敷地内に八郎右衛門家（北家）のひとびとが居住し，三井救済事業委員会からの３名の補助員が出張する邸宅建物が現存していたこと，罹災者が「裏門外の同家の普通の家屋や自動車々庫等」にまで収容されていたことから，仮に建設されたバラックを臨時震災救護事務局へ寄附しても，全ての罹災者の管理を同事務局あるいは東京市に委ねることができず，結果として当局と八郎右衛門家とのあいだで責任分掌に齟齬が生じると三井側が危惧した可能性も考えられる．

他方，上二番町，一番町，神保町の各邸跡に建てられたバラックを寄附した場合については，住民とのあいだにトラブルが生じる可能性は低いと予見されていたかも知れない．というのも，これは結果論でもあるが，これらのバラックがいずれも区画整理地区内に立地していたため，区画整理を施行する際に権利関係をリセットできる可能性があったのである(184)．区画整理事業の施行エリアは1924年3月20日に公式決定されたが(185)，被災地に基盤整備を実施することは被災後のかなり早い時期に決定されており，一般的に「基盤整備がなされるとき，仮建築は撤去される」とイメージされていたことは想像に難くない．まして，三井諸会社ともなれば，政府関係者から基盤整備事業（区画整理事業）のスキームを具体的に知りうることも可能であったろう．

三井は罹災者収容バラックの 8% を負担

『東京震災録中輯』によれば，東京市内に建設された罹災者収容バラックは建坪の合計で50,092坪であった(186)．一方，三井諸会社によって東京市および東京府に建設されたバラックは建坪の合計で3,643.98坪(187)で，これは東京市内の罹災者収容バラック（広義の公設バラック）の8.8%を占めていた計算になる．

本文中でも触れたように，『東京震災録中輯』の数字には収録漏れの可能性があるため(188)，このパーセンテージは現実の数値よりも若干高めと考えられる（実際の建設総数＝分母が大きくなるため．それでも8%程度は負担したと推定.）が，それでも一財閥がこれだけの規模の援助を発災直後から組織的に行ったことは，都市史研究あるいは災害史研究の分野から高く再評価すべきであろう．

残された課題

本稿では三井諸会社の建設したバラックによる罹災者収容活動の整理・把握を試み，その供給規模が他の主体を含めたバラックの8%に相当していたと推計するに至った．

残された課題として，1）当時の三井諸会社の経済活動が日本経済全体に占めていた割合を算出したり，あるいは同様の財閥各家（たとえば，三菱の岩崎家）の救済活動と比較することにより今回把握した各種史実を相対化し，評価し直すこと，また2）罹災者収容バラックがいかに撤去され，その跡地がいかに変遷したかを把握すること，3）バラックに収容された罹災者が地域社会にとってどのような存在であったのか定量的に解明すること，4）バラックに収容された罹災者の避難と生活再建の様子（ライフヒストリー）を掘り起こすことが挙げられる．

注

（1）「三井諸会社」とは三井合名，三井銀行，三井物産，三井鉱山，東神倉庫などの企業に加え，個人としての三井各家も含めた表現で，東京市役所（1927），東京震災録 別輯，第三章東京市民の活動，p. 790. における表現を踏襲している．

（2） このような幅の広さを，当時の文献はバラックにはピンからキリまでさまざまなものが存在すると表現した．小倉庫次（1926），仮設建築物撤去延期問題，都市問題第３巻第６号，1926年12月，（財）東京市政調査会，p. 23.

（3） 東京市役所・万朝報社共編（1924），十一時五十八分，p. 25.

（4） 東京市役所（1926a），東京震災録 前輯，第１篇応急措置第２章各紀，政府の活動（機関），p. 1.

（5） 1923年９月２日勅令第397号『臨時震災救護事務局官制』，東京市役所（1926），前掲書，p. 2. なお，同事務局は同年11月29日に内務省社会局中心の組織に改組され，さらに翌年３月31日に内務省社会局に統合，廃止となった．同書，pp. 3–5.

（6） 1923年９月３日勅令第400号『関東戒厳司令部条例』，東京市役所（1926），前掲書，p. 9.

（7） 東京市役所庶務課編（1925），東京大正震災誌，p. 82.

（8） 東京市役所（1926a），東京震災録 前輯，第１篇応急措置第２章各紀，政府の活動（内務省），p. 1.

（9） 大日本震災調査会編（1923），大震災史，pp. 334–335.

（10） 東京市役所（1926a），東京震災録 前輯，第１篇応急措置第２章各紀，政府の活動（内務省），p. 12.

（11） 本郷区役所（1937），本郷区史，pp. 1318–1320. なお，この引用箇所にある「不良性」とは「粗悪な仮小屋」の不衛生さが疫病をもたらしたり，「付近の住民」ではない人間が住み着いて土地に関する法的関係を混乱させる懸念を示していると推察される．

（12） 東京市役所（1926b），東京震災録 中輯，第１篇応急措置第５章東京市の活動，p. 494.

（13） 警視庁は警視庁が建築していたバラックに罹災者を収容する方針として，「（イ）先づ主として露店仮小屋に居住する者にして整理の必要のあるものに立退きを命じ之を収容し右露店仮小屋は直ちに之を除却すること．（ロ）次に官公衙に収容の者にして事務執行上至急整理の要ありと認むるものに立退きを命じ之を収容すること．（ハ）一般申込に依る収容は之を為さざること．（ニ）収容の具体的方法は市，区役所にて之を定め所轄署長と協議し協同して実行に当ること．」と定めた（東京市役所（1926b），東京震災録 中輯，第一篇応急措置第四章警視庁の活動，p. 217.）．また，東京市は「……路傍に在るものを第一とし次に（当該）区の罹災者を収容し，尚余裕のあるときは其他に及ぶ」とした（1923年10月21日当時，本郷区役所編（1937），前掲書，p. 1322.）．

（14） 東京市役所庶務課編（1925）前掲書，p. 130.

（15）「……九月四日に至り収容バラツクの建設の必要を認め臨時震災救護事務局と交渉の結果同局は日比谷，上野，九段の各罹災者収容バラツク及帝大構内伝染病院其他傷病者収容所二ヶ所診療所三ヶ所寄附組立バラツク四十五棟の建設を委任せられしを以て直ちに工事に着手……（後略）」した点（東京市役所（1926b），東京震災録 中輯，第１篇応急措置第４章警視庁の活動，p. 214.）および「……九月七日救護事務局会報（引用，ママ）バラツク建設地を芝離宮 芝公園 明治神宮外苑 日比谷公園 新宿御苑 植物園（引用註，いわゆる小石川植物園） 上野公園 浅草公園 緑町公園（引用註，当時は用地のみ取得済み，開園前） 深川猿江 深川公園 安田邸（引用註，震災の２か月半前に安田家から東京市に寄贈済み，震災で倒壊焼失．安田邸の寄附年月日は東京市役所（1932），東京市公園概況，p. 13. より） に協定して建設する事……（後略）」とした点（東京市役所（1926b），東京震災録 中輯，第１篇応急措置第４章警視庁の活動，p. 485.）を参照．

（16） 東京市役所（1926a），東京震災録 前輯，第１篇応急措置第２章各紀，政府の活動（内務省），pp. 33–34.

（17） 小石川区役所編（1935），小石川区史，小石川区役所，p. 970.

（18） 東京市役所（1926b），東京震災録 中輯，第１篇応急措置第５章東京市の活動，p. 487.

（19） 東京市役所（1926b），東京震災録 中輯，第１篇応急措置第５章東京市の活動，p. 486.

(20)「社会事業団体および個人が建設・経営したバラック」，すなわち「社会事業団体および個人が建設し，公署に寄附していない」バラックが，東京市営バラックに含まれるのか否かという点は本稿執筆時点で不明確である．この点は，後述する三井家によって建設されたバラックのうち，どれが公設バラックで，どれが私設バラックなのかという定義区分に関わるが，今後の課題として指摘するに止める．

(21) 東京市役所（1926a），東京震災録 前輯，第1篇応急措置第2章各紀，政府の活動（内務省），p. 34.

(22) 真野洋介（2000），関東大震災復興期における財団法人同潤会を中心とした住環境整備プロセスに関する研究，早稲田大学学位論文，p. 83.

(23) 大根畑とは霊雲寺も立地している湯島新花町内の小字のひとつである（本郷区役所（1937），前掲書，p. 1159.）．岩崎家によるバラックが霊雲寺のほか「御霊社」にも建設されたとする記述（同書，p. 1303. 東京震災録別輯からの転載）もあるが，この「御霊社」こそが「字大根畑」の指す場所と推察される．なお，これらのバラックは本郷区役所に寄付されたもの（同書，p. 1355.）であったため，その収容は岩崎家に最後まで残留していた299名に限定されておらず，10月8日には532名（霊雲寺境内のバラックが184名，御霊社境内のバラックが348名）が，11月1日には132名（霊雲寺境内のバラック）がそれぞれ収容（同書，p. 1302.）された．

(24) 東京市役所（1927），前掲書，第3章東京市民の活動，pp. 807-808.

(25) 大木伯爵は葺手町24番地に居住．大橋新太郎編（1894），訂正増補 華族名鑑，博文館，p. 32.

(26) 都新聞，1924年9月1日．

(27) 東京市役所（1927），前掲書，侯爵浅野長勲（p. 820.），伯爵阿部正直（p. 822.），男爵阪谷芳郎（p. 824.），公爵島津忠重（p. 826.）に関する記述．

(28) 同上，p. 814.

(29) 同上．

(30) 宮武外骨編（1923），震災画報 第1冊，半狂堂，p. 8.

(31) 東京朝日新聞1923年12月4日，『芸妓の手前も恥かしい 醜い焼跡を投げツ放しの富豪連 栄華の街も夢に 荒涼たる番町辺 ◇市内めぐり（九）』 なお，本記事は三井文庫所蔵の新聞スクラップブックに貼付けられていたものである．富豪も，庶民の視線を強く意識していたのであろう．

(32) 委員の所属については独自に調査を行ったが，補助員については同資料に記載されている．

(33) 東京市役所（1927），前掲書，第三章東京市民の活動，p. 819.

(34) 石田繁之介（1993），三井の集会所 ── 有楽町から札幌まで ──，日刊建設通信新聞社，p. 120.

(35) 大日本震災調査会編（1923），振天動地 大震災史，帝国講学会，p. 336. ただし，『三井救済団』という表現である．

(36) 中央新聞1924年10月1日，『震災救護の魁け 三井の美学，九月の末にはバラツクに八千人の罹災者収容 ── 恐しき日の回顧 ──』．ただし，『臨時救済事務所』という表現である．

(37) 東京市役所（1927），前掲書，第三章東京市民の活動，p. 790. 同書の記述は『大震災ト三井家ノ救済事業』の記述と表現が全く一致する箇所が多数みられ，『大震災ト三井家ノ救済事業』が下書きとなったことが窺える．

(38)『大震災ト三井家ノ救済事業』，財団法人三井文庫所蔵，整理番号一特659

(39) 同上．

(40) 東京市役所（1927），前掲書，第三章東京市民の活動，p. 792.

(41)『震災罹災者救護用仮住宅並託児所寄附願提出済報告書』，財団法人三井文庫所蔵，整理番号一特660

(42)『震災罹災者救護用仮住宅並託児所寄附願提出済報告書』，財団法人三井文庫所蔵，整理番号一特660

(43) 委員の所属については独自に調査を行ったが，補助員については同資料に記載されている．

(44)『震災罹災者救護用仮住宅並託児所寄附願提出済報告書』，財団法人三井文庫所蔵，整理番号一特660. なお，東京都公文書館編（2005），都史資料集成第6巻，関東大震災と救護活動，東京都政策報道室都民の声部情報公開課，別冊附録，非常災害情報・乙号 バラツクニ関スル調査（第43号），其の19,『麻布今井町三井邸罹災者収容バラツク全図』，p. 164 をみると，東京市当局が今井町，三河台町，氷川町，福吉町の各バラックを「今井町邸バラック」として一括して扱っていたことが判るし，久邇宮良子女王殿下が4箇所をひとまとめに慰問されたこと（中外商業新報1923年11月3日付『常のお召しでバラツク御慰問 御案内の三井男に有難い御尋の良子殿下』）からも4バラックの一体性があるため，本稿でも一体的に取り扱うこととした．

(45)『大震災ト三井家ノ救済事業』，財団法人三井文庫所蔵，整理番号一特659

(46) 東京都公文書館編（2005），都史資料集成第6巻，関東大震災と救護活動，東京都政策報道室都民の声部情報公開課，別冊附録，非常災害情報・乙号 バラツクニ関スル調査（第43号），其の19,『麻布今井町三井邸罹災者収容バラツク全図』，p. 164.

(47) 地図資料編纂会編（1989），地籍台帳・地籍地図［東京］，第2巻（台帳篇2）および第5巻（地図篇1）．

(48) 東京市役所（1926b），東京震災録 中輯，第1篇応急措置第5章東京市の活動，p. 489.

(49) 震災罹災者救護用仮住宅並託児所寄附調，『震災罹災者救護用仮住宅並託児所寄附願提出済報告書』，財団法人三井文庫所蔵，整理番号一特660

(50) 東京市麻布区役所編（1941），麻布区史，p. 434. なお，これら今井町邸バラックの竣工日は『震災罹災者救護用仮住宅並託児所寄附願提出済報告書』，財団法人三井文庫所蔵，整理番号一特660によれば9月16日である．

(51) 人数は大体一致するが，邸内の屋内避難者がそのままバラックに収容されたのか否かは不明である．

(52) 東京市麻布区役所編（1941），麻布区史，p. 434.

(53) 東京市赤坂区役所編（1941），赤坂区史，p. 1235.

(54) 震災罹災者救護用仮住宅並託児所寄附調，『震災罹災者救護用仮住宅並託児所寄附願提出済報告書』，財団法人三井文庫所蔵，整理番号一特660

(55)『震災罹災者救護用仮住宅並託児所寄附願提出済報告書』，財団法人三井文庫所蔵，整理番号一特660

(56)『震災罹災者救護用仮住宅並託児所寄附願提出済報告書』，財団法人三井文庫所蔵，整理番号一特660という綴りには，三井諸会社から臨時震災救護事務局へと寄附されたバラックについては「三井集会所構内バラック」を除き，いずれも，「竣工引渡書」と「仮住宅（あるいは託児所）寄附願」とが揃いで残されている．

(57) 東京市役所（1927），前掲書，第三章東京市民の活動，p. 187.

(58)『大震災ト三井家ノ救済事業』，財団法人三井文庫所蔵，整理番号一特659

(59) 震災罹災者救護用仮住宅並託児所寄附調，『震災罹災者救護用仮住宅並託児所寄附願提出済報告書』，財団法人三井文庫所蔵，整理番号一特660

(60) 震災罹災者救護用仮住宅並託児所寄附調，『震災罹災者救護用仮住宅並託児所寄附願提出済報告書』，財団法人三井文庫所蔵，整理番号一特660

(61) 石田繁之介（1993），三井の集会所 ── 有楽町から札幌まで ──，日刊建設通信新聞社，pp. 1-2.

(62) 石田繁之介（1993），三井の集会所 ── 有楽町から札幌まで ──，日刊建設通信新聞社，p. 76.

(63)『大震災ト三井家ノ救済事業』，財団法人三井文庫所蔵，整理番号一特659. 本バラックは臨時震災救護事務局へと寄附されたが，『震災罹災者救護用仮住宅並託児所寄附願提出済報告書』，財団法人三井文庫所蔵，整理番号一特660に「竣工引渡書」および「仮住宅寄附願」が残されていない．

(64) 石田繁之介（1993），三井の集会所 ── 有楽町から札幌まで ──，日刊建設通信新聞社，p. 77. なお，同書p. 80によれば，倒壊した日本館の建築面積は123坪7合4勺であり，三井集会所内バラック4棟の合計138.54坪に大体一致する．

(65)『三井合名移転』国民新聞 1923年10月24日

(66) 読売新聞 1923年11月6日，『三井合名移転』

(67) 国民新聞 1923年11月16日，『三井事務所移転』

(68) 東京朝日新聞 1923年11月17日，『三井合名移転』

(69)　嘆願書，『震災罹災者救護用仮住宅並託児所寄附願提出済報告書』，財団法人三井文庫所蔵，整理番号―特 660

(70)　震災罹災者救護用仮住宅外寄附願提出ノ件（1923 年 11 月 22 日付），『震災罹災者救護用仮住宅並託児所寄附願提出済報告書』，財団法人三井文庫所蔵，整理番号―特 660

(71)　竣工引渡書（1923 年 11 月 23 日付），『震災罹災者救護用仮住宅並託児所寄附願提出済報告書』，財団法人三井文庫所蔵，整理番号―特 660

(72)『震災罹災者救護用仮住宅並託児所寄附願提出済報告書』，財団法人三井文庫所蔵，整理番号―特 660

(73)　日比谷公園に建設されたバラックの坪数は，内務省直営分および警視庁委任分については東京市役所（1926a），東京震災録前輯，第 1 篇応急措置第 2 章各紀，政府の活動，p. 31. 東京市直営バラックについては東京市役所（1926b），東京震災録中輯，第 1 篇応急措置第 5 章東京市の活動，p. 486.

(74)『大震災ト三井家ノ救済事業』，財団法人三井文庫所蔵，整理番号―特 659

(75)『震災罹災者救護用借住宅並託児所寄附願提出済報告書』，財団法人三井文庫所蔵，整理番号―特 660

(76)　震災罹災者救護用仮住宅外寄附願提出ノ件（1923 年 11 月 22 日付），『震災罹災者救護用仮住宅並託児所寄附願提出済報告書』，財団法人三井文庫所蔵，整理番号―特 660

(77)『大震災ト三井家ノ救済事業』，財団法人三井文庫所蔵，整理番号―特 659

(78)　東京市役所（1927），東京震災録 別輯，第三章東京市民の活動，pp. 790–794.

(79)『大震災ト三井家ノ救済事業』，財団法人三井文庫所蔵，整理番号―特 659

(80)　震災罹災者救護用仮住宅外寄附願提出ノ件（1923 年 11 月 22 日付），『震災罹災者救護用仮住宅並託児所寄附願提出済報告書』，財団法人三井文庫所蔵，整理番号―特 660

(81)　芝公園，増上寺および芝離宮に建設されたバラックの坪数は，内務省直営分および東京府委任分については東京市役所（1926a），東京震災録前輯，第 1 篇応急措置第 2 章各紀，政府の活動，p. 31. 東京市直営バラックについては東京市役所（1926b），東京震災録中輯，第 1 篇応急措置第 5 章東京市の活動，p. 486.

(82)『大震災ト三井家ノ救済事業』，財団法人三井文庫所蔵，整理番号―特 659

(83)　震災罹災者救護用仮住宅外寄附願提出ノ件（1923 年 11 月 22 日付），『震災罹災者救護用仮住宅並託児所寄附願提出済報告書』，財団法人三井文庫所蔵，整理番号―特 660

(84)　東京市下谷区役所編（1937），下谷区史附録大正震災誌，p. 60.

(85)　土地は本願寺，本願寺子院の土地は子院または本願寺の所有．地図資料編纂会編（1989），地籍台帳・地籍地図［東京］，第 3 巻（台帳篇 3）および第 6 巻（地図篇 2）．

(86)『大震災ト三井家ノ救済事業』，財団法人三井文庫所蔵，整理番号―特 659

(87)　震災罹災者救護用仮住宅外寄附願提出ノ件（1923 年 11 月 22 日付）および仮住宅寄附願，『震災罹災者救護用仮住宅並託児所寄附願提出済報告書』，財団法人三井文庫所蔵，整理番号―特 660 なお，竣工引渡書の時点では住棟が 13 棟，202 戸．

(88)　小笠原義雄（1939），浅草本願寺史，浅草本願寺 p. 280.

(89)　東京市役所（1926b），東京震災録中輯，第 1 篇応急措置第 5 章東京市の活動，p. 487. では 553 坪とされている．

(90)『大震災ト三井家ノ救済事業』，財団法人三井文庫所蔵，整理番号―特 659

(91)　東京市役所（1926b），東京震災録中輯，第 1 篇応急措置，第 2 章各紀，政府の活動（鉄道省）

(92)　内務省社会局編纂（1926），大正震災志（上），岩波書店

(93)　鉄道省（1927），『国有鉄道震災誌』

(94)　東京市城東区役所編（1942），城東区史稿，東京市城東区役所，

(95)『大震災ト三井家ノ救済事業』，財団法人三井文庫所蔵，整理番号―特 659

(96)　震災罹災者救護用仮住宅外寄附願提出ノ件（1923 年 11 月 22 日付），『震災罹災者救護用仮住宅並託児所寄附願提出済報告書』，財団法人三井文庫所蔵，整理番号―特 660

(97)　建設場所が寄附願に明記されていない．

(98)『大震災ト三井家ノ救済事業』，財団法人三井文庫所蔵，整理番号―特 659

(99)　寄附願および竣工引渡書，『震災罹災者救護用仮住宅並託児所寄附願提出済報告書』，財団法人三井文庫所蔵，整理番号―特 660

(100)　震災罹災者救護用仮住宅外寄附願提出ノ件（1923 年 11 月 22 日付），『震災罹災者救護用仮住宅並託児所寄附願提出済報告書』，財団法人三井文庫所蔵，整理番号―特 660

(101)『震災罹災者救護用仮住宅並託児所寄附願提出済報告書』，財団法人三井文庫所蔵，整理番号―特 660

(102)　東京市役所（1926b），東京震災録中輯，第 1 篇応急措置第 5 章東京市の活動，p. 486.

(103)『震災罹災者救護用仮住宅並託児所寄附願提出済報告書』，財団法人三井文庫所蔵，整理番号―特 660

(104)『大震災ト三井家ノ救済事業』，財団法人三井文庫所蔵，整理番号―特 659

(105)　震災罹災者救護用仮住宅並託児所寄附願提出ノ件（1923 年 11 月 13 日付），『震災罹災者救護用仮住宅並託児所寄附願提出済報告書』，財団法人三井文庫所蔵，整理番号―特 660

(106)『震災罹災者救護用仮住宅並託児所寄附願提出済報告書』，財団法人三井文庫所蔵，整理番号―特 660

(107)『震災罹災者救護用仮住宅並託児所寄附願提出済報告書』，財団法人三井文庫所蔵，整理番号―特 660

(108)『震災罹災者救護用仮住宅並託児所寄附願提出済報告書』，財団法人三井文庫所蔵，整理番号―特 660

(109)　東京市役所（1926b），東京震災録中輯，第 1 篇応急措置第 5 章東京市の活動，p. 486. には記載がない．

(110)　当時の室町（上二番町）家の家扶は上野平一郎（1924 年 10 月調，『三井家同族会事務局職員録』，三井文庫所蔵，整理番号― Ao12-2-4.）．

(111)『大震災ト三井家ノ救済事業』，財団法人三井文庫所蔵，整理番号―特 659

(112)『震災罹災者救護用仮住宅並託児所寄附願提出済報告書』，財団法人三井文庫所蔵，整理番号―特 660

(113)　当時の室町（上二番町）家の家扶は上野平一郎（1924 年 10 月調，『三井家同族会事務局職員録』，三井文庫所蔵，整理番号― Ao12-2-4.）．

(114)　風俗画報増刊第 191 号 新撰東京名所図絵 麹町区第十九編下巻の二 1899 年 6 月 25 日 東陽堂 p. 6.

(115)　風俗画報増刊第 191 号 新撰東京名所図絵 麹町区第十九編下巻の二 1899 年 6 月 25 日 東陽堂 p. 7.

(116)『大震災ト三井家ノ救済事業』，財団法人三井文庫所蔵，整理番号―特 659

(117)　震災罹災者救護用仮住宅並託児所寄附願提出ノ件（1923 年 11 月 13 日付），『震災罹災者救護用仮住宅並託児所寄附願提出済報告書』，財団法人三井文庫所蔵，整理番号―特 660

(118)　東京市役所（1926b），東京震災録中輯，第 1 篇応急措置第 5 章東京市の活動，p. 486.

(119)『震災罹災者救護用仮住宅並託児所寄附願提出済報告書』，財団法人三井文庫所蔵，整理番号―特 660

(120)　当時の室町（上二番町）家の家扶は上野平一郎（1924 年 10 月調，『三井家同族会事務局職員録』，三井文庫所蔵，整理番号― Ao12-2-4.）．

(121)『震災罹災者救護用仮住宅並託児所寄附願提出済報告書』，財団法人三井文庫所蔵，整理番号―特 660

(122)　1914 年当時，合名会社不動産課長であったのは「新任早々」の三井救済事業委員会建築部委員の矢野亮一である．石田繁之介（1993），三井の集会所 ―― 有楽町から札幌まで ――，日刊建設通信新聞，p. 66.

(123)　三井救済事業委員会には「鎌田」姓の人物はいない．

(124)『震災罹災者救護用仮住宅並託児所寄附願提出済報告書』，財団法人三井文庫所蔵，整理番号―特 660

(125)『震災罹災者救護用仮住宅並託児所寄附願提出済報告書』，財団法人三井文庫所蔵，整理番号―特 660

(126)『大震災ト三井家ノ救済事業』，財団法人三井文庫所蔵，整理番号―特 659. なお，上二番町の三井家（男爵，三井高精）は 1924 年 2 月現在で麹町区平川町 5 丁目に転居済みである（1924 年 10 月調，『三井家同族会事務局職員録』，三井文庫所蔵，整理番号― Ao12-2-4.）．

(127)　1924 年 10 月調，『三井家同族会事務局職員録』，三井文庫所蔵，整理番号― Ao12-2-4.

(128)　仮住宅寄付願，『震災罹災者救護用仮住宅並託児所寄附願提出済報告書』，財団法人三井文庫所蔵，整理番号―特 660

(129)『大震災ト三井家ノ救済事業』，財団法人三井文庫所蔵，整理番号―特 659

（130） 震災罹災者救護用仮住宅並託児所寄附願提出ノ件（1923 年 11 月 13 日付），『震災罹災者救護用仮住宅並託児所寄附願提出済報告書』，財団法人三井文庫所蔵，整理番号―特 660
（131） 東京市役所（1926b），東京震災録中輯，第 1 篇応急措置第 5 章東京市の活動，p. 486.
（132）『震災罹災者救護用仮住宅並託児所寄附願提出済報告書』，財団法人三井文庫所蔵，整理番号―特 660
（133） 1924 年 10 月調，『三井家同族会事務局職員録』，三井文庫所蔵，整理番号― Ao12-2-4.
（134）『大震災ト三井家ノ救済事業』，財団法人三井文庫所蔵，整理番号―特 659
（135） 震災罹災者救護用仮住宅並託児所寄附願提出ノ件（1923 年 11 月 13 日付），『震災罹災者救護用仮住宅並託児所寄附願提出済報告書』，財団法人三井文庫所蔵，整理番号―特 660
（136） 東京市役所（1926b），東京震災録中輯，第 1 篇応急措置第 5 章東京市の活動，p. 486.
（137） 風俗画報増刊第 193 号 新撰東京名所図絵神田区之部上巻 1899 年 7 月 25 日 東陽堂，挿絵
（138） 風俗画報増刊第 193 号 新撰東京名所図絵神田区之部上巻 1899 年 7 月 25 日 東陽堂，pp. 18-19.
（139） 小林忠太郎編（1926），三井銀行五十年史，株式会社三井銀行，p. 75.
（140）『震災罹災者救護用仮住宅並託児所寄附願提出済報告書』，財団法人三井文庫所蔵，整理番号―特 660
（141） 増尾信之編（1943），三井読本，亜細亜書房，p. 497.
（142） 当時，麹町区富士見町在住の三井家としては，南家（当主，男爵，三井寿太郎）のほか，五丁目家（当主，三井高昶）があったが，ここでは震災時点で来た神保町に居を構えていた南家を指す.
（143） 記録では，当時の南家の家扶は「和田悦太郎」とされている（1924 年 10 月調，『三井家同族会事務局職員録』，三井文庫所蔵，整理番号― Ao12-2-4.）.
（144）『震災罹災者救護用仮住宅並託児所寄附願提出済報告書』，財団法人三井文庫所蔵，整理番号―特 660
（145）『大震災ト三井家ノ救済事業』，財団法人三井文庫所蔵，整理番号―特 659
（146）『震災罹災者救護用仮住宅並託児所寄附願提出済報告書』，財団法人三井文庫所蔵，整理番号―特 660
（147）『大震災ト三井家ノ救済事業』，財団法人三井文庫所蔵，整理番号―特 659
（148） 震災罹災者救護用仮住宅並託児所寄附願提出ノ件（1923 年 11 月 13 日付），『震災罹災者救護用仮住宅並託児所寄附願提出済報告書』，財団法人三井文庫所蔵，整理番号―特 660
（149） 東京市本所区（1931），本所区史，東京市本所区，p. 169.
（150） 東京市役所（1926b），東京震災録 中輯，第 1 篇応急措置第 5 章東京市の活動，p. 487.
（151） 東京市本所区（1931），本所区史，東京市本所区，p. 606.
（152） 地図資料編纂会編（1989），地籍台帳・地籍地図［東京］第 6 巻，p. 382.
（153）『大震災ト三井家ノ救済事業』，財団法人三井文庫所蔵，整理番号―特 659
（154） 震災罹災者救護用仮住宅並託児所寄附願提出ノ件（1923 年 11 月 13 日付），『震災罹災者救護用仮住宅並託児所寄附願提出済報告書』，財団法人三井文庫所蔵，整理番号―特 660
（155） 東京市本所区（1931），本所区史，東京市本所区，p. 177.
（156） 東京市役所（1926b），東京震災録 中輯，第 1 篇応急措置第 5 章東京市の活動，p. 487.
（157） 東京市本所区（1931），本所区史，東京市本所区，p. 606.
（158）『震災罹災者救護用仮住宅並託児所寄附願提出済報告書』，財団法人三井文庫所蔵，整理番号―特 660
（159）『震災罹災者救護用仮住宅並託児所寄附願提出済報告書』，財団法人三井文庫所蔵，整理番号―特 660
（160）『大震災ト三井家ノ救済事業』，財団法人三井文庫所蔵，整理番号―特 659
（161）『震災罹災者救護用仮住宅並託児所寄附願提出済報告書』，財団法人三井文庫所蔵，整理番号―特 660
（162） 東京市役所（1930），東京市営住宅要覧，p. 6.
（163） 東京市役所（1930），東京市営住宅要覧，p. 10，「市営住宅建設一覧表（第二表）」.
（164） 東京市役所（1930），東京市営住宅要覧，p. 7.
（165）『大震災ト三井家ノ救済事業』，財団法人三井文庫所蔵，整理番号―特 659
（166） 震災罹災者救護用仮住宅外寄附願提出ノ件（1923 年 11 月 22 日付），『震災罹災者救護用仮住宅並託児所寄附願提出済報告書』，財団法人三井文庫所蔵，整理番号―特 660

（167） 東京市役所（1926b），東京震災録 中輯，第 1 篇応急措置第 5 章東京市の活動，p. 487.
（168） 本郷区役所編（1937），本郷区史，本郷区役所，pp. 1302-1303.
（169）『震災罹災者救護用仮住宅並託児所寄附願提出済報告書』，財団法人三井文庫所蔵，整理番号―特 660
（170）「陸軍大臣・海軍大臣覚書 明治三十六年二月二十一日」，靖国神社編（1983），靖国神社百年史 資料篇上，p. 609.
（171） 靖国神社編（1983），靖国神社百年史 資料篇 上，p. 133.
（172） 東京市役所（1926b），東京震災録 中輯，第 1 篇応急措置第 5 章東京市の活動，p. 482.
（173） 靖国神社編（1983），靖国神社百年史 資料篇 上，pp. 133-134.
（174）『大震災ト三井家ノ救済事業』，財団法人三井文庫所蔵，整理番号―特 659
（175） 震災罹災者救護用仮住宅外寄附願提出ノ件（1923 年 11 月 22 日付），『震災罹災者救護用仮住宅並託児所寄附願提出済報告書』，財団法人三井文庫所蔵，整理番号―特 660
（176） 靖国神社編（1983），靖国神社百年史 資料篇 上，p. 134.
（177）『震災罹災者救護用仮住宅並託児所寄附願提出済報告書』，財団法人三井文庫所蔵，整理番号―特 660
（178） 日露戦役記念給水塔．日露戦争当時の東清鉄道沙河駅の構内にあった給水塔で，高さが 65 尺あり，戦闘中に砲兵その他の観測所として機能したことを記念して 1906 年に移築されたものである．靖国神社編（1983），靖国神社百年史 資料篇 中，p. 469.
（179） 靖国神社編（1983），靖国神社百年史 資料篇 上，p. 637.
（180） 靖国神社編（1983），靖国神社百年史 資料篇 上，p. 137.
（181） 東京市役所（1927），前掲書，第三章東京市民の活動，p. 792.
（182）『震災罹災者救護用仮住宅並託児所寄附願提出済報告書』，財団法人三井文庫所蔵，整理番号―特 660
（183） 同上
（184） 区画整理事業では土地の所有権者，借地権者が権利関係者として関与することが認められていたが，借家人についてはその先借権，すなわち借家が存在していた土地（換地）の上に区画整理後に新築される借家に優先的に居住する権利が認められたに過ぎず，借家が建設されない場合にはその土地に居住する権利を喪失することとなった.
（185） 内務省告示第 131 号.
（186） 東京市役所（1926b），東京震災録中輯，p. 494.
（187）『震災罹災者救護用仮住宅並託児所寄附願提出済報告書』のうち，「震災罹災者救護用仮住宅並託児所寄附調」分の「東京府市内合計」および「追而上記ノ外寄附手続差控置候分下記ノ通リニ有之候」分の「計」を合算．財団法人三井文庫所蔵，整理番号―特 660.
（188）「1 公設バラックの建設・撤去の経緯，罹災者の二次収容（公設バラック）」の項参照.

図版出典

図 1 大阪毎日新聞社編（1923），関東大震災画報第一輯.
図 2 刊年，発行者など不明，絵葉書（田中所蔵）.
図 3 大阪毎日新聞社編（1923），関東大震災画報第二輯.
図 4 東京朝日新聞，1923 年 12 月 4 日.
図 5 東京都公文書館編（2005），都史資料集成第 6 巻，関東大震災と救護活動.
図 6〜14 三井文庫所蔵，三井本館震災被害状況並三井家寄付大震災罹災収容所写真帖.
図 15 風俗画報増刊第 191 号 新撰東京名所図絵 麹町区第 19 編下巻の二.
図 16〜18 三井文庫所蔵，前掲資料.
図 19 風俗画報増刊第 193 号 新撰東京名所図絵 神田区之部上巻.
図 20〜24 三井文庫所蔵，前掲資料.

調査報告

東京都慰霊堂保管・関東大震災関係資料について

高　野　宏　康
TAKANO Hiroyasu

はじめに

関東大震災および東京大空襲をはじめとする戦災の死者の供養施設である東京都慰霊堂の収蔵庫には，隣接する展示施設である復興記念館に展示されていない震災・戦災関連資料が大量に保管されている．これらの資料は，現在，展示されている資料とともに，広く市民からの一般公募によって蒐集された震災記念物が元になっており，特定の蒐集者の意図だけではなく，自然に集まった資料であるという特徴をもつ大変貴重な資料群であるといえる．しかし，これまで整理・調査が不十分な状態であり，個別の資料目録は作製されておらず，近年の東京都慰霊堂や復興記念館についての研究論文でも言及されていない．

長い間，未整理状態にあったそれらの資料群は，1992-93 年に管理者である東京都東部公園緑地事務所の依頼を受けた（株）トリガーグループ・ブレインファーム社（以下，BF 社と略記）によって整理・分類された後，それぞれ大型のポリケースに番号を付けて保管された．その際，資料リストと報告書が作成されたが，個別資料の分析は行なわれておらず，資料名や数量はおおまかに把握されたのみであった．その後，写真資料については，2006 年に，神奈川大学 21 世紀 COE プログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」第 3 班「環境と景観の資料化と体系化」課題 3「環境に刻印された人間の諸活動」（災害グループ）で調査が実施された．その成果として，「関東大震災・地図と写真のデータベース」が作成されており，写真以外の資料のデータベース化が今後の課題となっていた（北原，2007）．

そこで今回，COE プログラムの成果を継承・発展させるべく発足した非文字資料研究センターの個別共同研究「関東大震災後の都市復興過程とそのデータベース化，並びに資料収集」の調査として，新たに資料調査を実施することになった．研究班の構成は，災害史を専門とする北原糸子（研究班代表），都市工学の観点から関東大震災の民間における復興過程の研究を行なっている田中傑（客員研究員），1920-30 年代の政治文化史研究を専門とする高野宏康（研究協力者）の 3 名である．この研究班の目的は，震災後の復興過程を総合的に把握する方法論を新たに開拓し，データベースを拡充することであり，東京都慰霊堂保管資料調査はその第一歩である．今回の調査は，2006 年の COE 調査の続きであるため，以後，第 2 次慰霊堂保管資料調査と呼ぶことにする．

以下，今回の調査の概要および，東京慰霊堂保管資料の成り立ちと由来，資料の内容について説明し，まとめとして調査の成果と今後の課題について述べたい．



写真１　東京都慰霊堂

1　今回の調査概要

今回の調査を始めるにあたり，まず，慰霊堂保管資料の管轄を行なっている東京都東部公園緑地事務所に調査目的を伝えて了承を得た上で，2008年10月7日，予備調査を行なうために現地に向かった．そこで，谷口講治氏（東京都東部公園緑地事務所管理課管理係係長），川上佶延氏（財団法人東京都慰霊協会，東京都立横網町公園事務所所長），北条研次氏（東京都東部公園緑地事務所管理課管理係）に，資料の現状についてご説明を受け，資料保管現場を案内していただいた．

その結果，1992-93年にBF社によって収蔵庫保管資料の調査が行なわれており，資料はおおまかに分類・整理され，大型のポリケースに番号を付して保管されていることが確認できた．この調査結果は，「慰霊堂収蔵物調査」と題された5巻のファイルに報告書および「収蔵物分類リスト」とともにまとめられており，資料目録はカード・リスト化されている．以上から，保管資料は当初予想していたような全くの未整理状態というわけではないことがわかり，今回の調査はBF社調査の成果を受けて行なうことになった．

しかし，前述のように，この調査では個別の資料目録は作成されておらず，資料名・数量などもおおまかにしか把握されていないため，今回はそれらの点について調査を行なうことにした．資料数が膨大であるため，まず，震災資料のうち，書籍，雑誌，各種帳簿類，ポスター，絵画，避難者カードなどを調査することにし，大型資料（展示パネル，物質資料など）は対象外とした．今回実施する調査内容は以下の通りである．

① 「慰霊堂収蔵物調査」ファイル中の，調査報告書および対象とする資料のカードおよびリストを複写．
② 保管資料のうち，対象とする資料をデジタルカメラで撮影．書籍や目録，各種帳簿などは表紙および奥付を撮影する（内容は必要に応じて撮影）．なお，新聞スクラップや文献資料など，デジタルカメラの写真では判読が困難なものの一部は複写する．
③ 資料リストの作成．資料を，項目（後述）にしたがって分類し，リスト化する．

資料収蔵庫は，慰霊堂の左奥の扉から入って通路を進み，階段を上ったところにある．ちょうど慰霊塔の下部に当たる空間であり，部屋の真ん中には塔に登るための螺旋階段がある．保管資料の入ったポリケースは，部屋の壁面沿いと中央部に設置された三段の木製棚の中にほぼ番号順に収納されていた．2006年のCOE写真調査の際には，写真が入った4箱のポリケースを室外に運び出して作業を行なったので，調査者はこの収蔵庫に入ることはなく，この収蔵庫の資料調査が実施されるのは，1992-93年のBF社調査以来ということになる．収蔵庫内およびポリケースは15年分の埃をかぶっており，撮影作業はその汚れを落としながら進められた．



写真２　収蔵庫内に保管されたポリケース



写真３　ポリケースの内部



写真４　多数の資料が入った封筒（36―6）

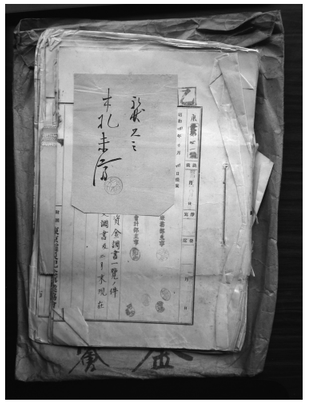


写真５　多数の資料がまとめられた綴帳（37―59）

今回の調査対象となる資料の入ったポリケースを番号順に撮影していくことにしたが，BF社調査時の「収蔵物分類リスト」と内容を対照させてみると，このリストに記載された資料名と数量は非常におおまかなもので，ポリケースの実際の内容とは大きく異なっていることがわかった．そのため，まず，一点一点資料を撮影し，資料名と数量をできるだけ正確に把握することにつとめた．ただし，多数の資料がまとめられている綴帳や大型の封筒に入っている多数の帳簿類については，表紙と主要な資料のみを撮影した．撮影作業は，11/4，11/14，11/18，11/21，11/24，12/10，1/13，の7回実施した．研究班の3名（日によっては2名）が各自デジタルカメラで分担して撮影を進め，今回対象とする資料の撮影をほぼすべて終了することができた．

2　東京都慰霊堂保管資料の由来・成り立ち

ここで，東京都慰霊堂保管資料の由来・成り立ちについて説明しておきたい．そのためには，まず東京都慰霊堂についての説明が必要となる．この施設の出発点は，関東大震災で多数の死者を出した被服廠の跡地に，1923年10月，四十九日の法要に際して供養のために仮納骨堂が建立されたことにはじまる．翌1924年6月，東京市で震災の「記念堂」を建設する計画が決定，東京震災記念事業協会の設立が東京市議会に提案され，同年10月に財団法人として発足し，建設事業が進められていった．その後，1929年10月に開催された帝都復興展覧会に出品された展示品を「震災記念堂」の陳列室に加える構想が提唱され，新たに展示施設として「復興記念館」が建設されることになり，1930

年９月に「震災記念堂」，1931 年４月に「復興記念館」が竣工した．「東京都慰霊堂」という名称は，戦後，戦災死者の供養施設を兼ねることになったことにより改称した 1951 年以降のものである．

次に，復興記念館の展示品と収蔵物の成り立ちについて説明しておく．復興記念館の展示品と収蔵物は，設立にあたって協会が陳列室の展示用に蒐集した資料 605 点，1924 年９月に上野の自治会館で開催された「震災復興展覧会」での蒐集品と，1929 年９月に日比谷の市政会館の開館を記念して開催された「帝都復興展覧会」から引き継いだ資料 610 点に，記念館の竣工後に新たに集まった資料を加えたものが基礎となっている．「震災復興展覧会」と「帝都復興展覧会」の展示品は，1930 年５月の「帝都復興祭」での天覧・記念展示を経て東京市本所公会堂（現・墨田区本所公会堂）に仮保管された後，復興記念館に収蔵された．その後も，震災記念品を一般から公募して蒐集する作業は継続され，多数の記念品が集まっていった．



写真６　東京都復興記念館

以上の経緯と陳列品および寄贈品の目録は，『被服廠跡 ── 東京震災記念事業協会事業報告』（221～303 頁，1932 年）に記載されている．また，『都市問題』の帝都復興特集号（第十巻第一号，1930 年）には，「帝都復興展覧会」出品目録が掲載されている．

「帝都復興展覧会」では，個人・団体を合わせて 85 の出品者から約７万点の資料の提供があり，会場である日比谷公会堂の一階から三階までを使用してほぼ出品者別に展示された．『被服廠跡』に掲載された復興記念館の「陳列品」リストは，「復興記念品」（直接震災の痕跡をとどめた資料）と「復興資料」（復興事業関連資料および震災・復興の状況を伝える資料）に分類され，それぞれ，933 点，1083 点，あわせて 2016 点が記載されている．「復興記念品」は，震災当時に起きた出来事順に整理され，①「震火災」，②「旋風」，③「避難」，④「悲しき形見・横死者遺留品」，⑤「復興途上」という構成となっている．「復興資料」は，展示品の種類別に，⑥「書籍其他印刷物」，⑦「絵画彫刻」，⑧「模型」，⑨「図表」，⑩ 「写真」，に分類され，⑪「東京震災記念事業協会事業資料」もこの中に含められている．このリストから復興記念館資料における出品者別の割合を把握することができ，個人＝ 43.3%，団体＝ 35.7%，協会＝ 21.0% であることがわかる（山本，2006）．

復興記念館の陳列品の特徴として，震災当時の出来事を追体験することができるような順序で分類されていることと，陳列品は多様な出品者から寄贈されたものであり，特に個人の寄贈が多数を占めている点が重要である．ちなみに，今回の調査資料中にあったパンフレット「震災復興記念館案内」（年代不明）にも，「記念品収集点数」が記載されているが，それによると，震災関係 2829 点（陳列品 1716 点，在庫品 1113 点），復興関係 280 点（陳列品 122 点，在庫品 158 点），合計 3109 点となっており，復興記念館の成立後に刊行された『被服廠跡』（1932 年）の数値よりかなり増加していることがわかる．「震災関係」と「復興関係」の割合が異なっているが，その理由は不明である．

その後，展示品と収蔵品が現在の状態になるまでの経緯について，BF 社調査報告書の記述をもとに説明しておく．震災復興記念館の設立以後，展示品・収蔵品は基本的に同館におさめられていた

が，1945 年３月 10 日の東京大空襲およびその後の度重なる空襲の被災者のため，同愛病院の一部として接収されることになった．同病院は戦火のためほとんど機能しなかったが，接収された際にほとんどの展示品・収蔵品が「記念堂」の１階・２階に移動された．この時点で，展示品・収蔵品と，戦前に作成されていた展示目録・展示品リスト・展示レイアウト等との整合性は皆無に近い状態となった．1948 年頃に接収が解除され，展示品が復興記念館に戻されたが，この時，震災だけでなく，戦災（特に東京大空襲）の要素を兼ねて展示することになった（１階＝震災，２階＝戦災）．この時，展示されなかったものが震災記念堂（のちの東京都慰霊堂）の収蔵庫に保管された．その後，何度かその時々の館長らによって展示換えが行われ，展示品のリスト等も作成されたようであるが，1956 年に展示物の照合作業が行われた（番号シールを貼付）こと以外詳細は不明である．1977 年に，復興記念館は老朽化により改装工事が実施され，屋外展示物については，1992 年２月末にリニューアル展示工事を経てあらためて公開されている．その間，東京都慰霊堂収蔵庫保管資料については，1960―61 年頃に整理した形跡が見受けられるという不確かな情報があるのみで，1992―93 年に BF 社によって調査が実施されるまで，ほぼ未整理の状態となっていたようである．

3　資料の内容

今回の調査は，BF 社調査時にポリケースに保管された状態から，その際に設定されたケース番号に従って撮影を行った．「収蔵物分類リスト」を参照しながら今回の調査対象となる資料の入ったポリケースをさがし，デジタルカメラで順次撮影していくことにした．ポリケースの収納 NO は，1～238 まで番号が付けられているが，このうち，NO. 15～19 までは写真であり，前回の COE 調査（2006 年度）で撮影・整理が終了しているため，今回は対象外とした．その他，震災関連資料の内，大型の物質資料（陶器や金属製品など），戦災資料，所在不明のケースを除くと，今回の調査対象となるのは 58 箱であった．ケース番号の順序と内容は，一部を除いてほぼ無関係であるため，以下では，資料リスト作成のために今回設定した分類項目について説明し，内容に即して資料の一部を紹介することにする．資料リストを本稿末尾に掲載したので，適宜参照していただきたい．

まず，資料番号については，BF 社の収納 NO（ポリケースの番号）をそのまま使用し，ケース内部の収納順に番号をつけた．関連資料には枝番号をつけ，資料リストでは資料名の前に※をつけて関連資料であることがわかるようにした．その他には，「年月日」「発行主体」「宛先」の項目を設置した．資料分類項目については，全体を「公刊資料」と「内部資料」に分類することにした．「公刊資料」は，印刷物として刊行されたもので，「書籍」「雑誌」「写真帖」「新聞」「パンフレット」「絵画類（印刷物）」の項目を設置した．「内部資料」は，「震災記念堂」および「復興記念館」，東京震災記念事業協会の関連文書・資料，蒐集物などで，「帳簿・各種証明書類」「ノート・メモ」「手紙・書簡」「写真帖」「絵画類（手描き）」「図面」の項目を設置した．それ以外の資料として「その他」の項目を設置した．「備考」欄には，「その他」に分類された資料の説明，同じものが複数ある場合は数量，その他の補足説明を記載した．

「書籍」に分類された資料は 201 点で，震災後に刊行された震災関連書籍が中心であり，海外で出版された書籍も含まれている．冊子状の各種報告書などもこの分類項目に含めた．「雑誌」は 58 点

で，震災後に刊行された震災特集号が中心である。一般誌から学術誌まで幅広く蒐集されていたことがわかる．「写真帖」は「公刊資料」と「内部資料」の２つ項目を設けた．「内部資料」の「写真帖」とは，東京震災記念事業協会が作成したもので，アルバムに直接写真を添付して作成したものが中心である．未刊行の写真が多数含まれているため，大変貴重である（写真７，８）．「公刊資料」の「写真帖」は 13 点，「内部資料」の「写真帖」は 10 点である．「新聞」は一日分の新聞がまとめて保管されている場合と，切り抜きの場合があるが，資料リストでは区別せず，備考欄にそのことを記載した．「パンフレット」は 89 点あり，復興記念館や都内の公園案内のように明確にパンフレットと言えるものが中心だが，「土地区画整理大講演会」の案内状なども含めた．「絵画（印刷物）」は３点で，刷り物の絵画を指している．

「内部資料」で問題なのは，「帳簿・各種証明書類」である．多数の帳簿がまとめられた綴帳や，多数の資料が入った大型の封筒については（写真４，５），内部の資料が非常に多いことと，どこまでが一つの資料なのかは内容を検討しなければ判断しがたいものが多かったため，今回の調査で全てを撮影・記録することは断念し，表紙（もしくは表題）と主要な資料（数点）を撮影するにとどめた．正確な数量の把握は今後の課題である．「ノート・メモ」は 15 点で，震災直後の消息を伝えるメモ，復興記念館の日誌などが含まれている．「手紙・書簡」は 22 点で，個人の葉書などと，東京震災記念事業協会関連のものがある．「絵画類（手描）」は，53 点で，児童が描いたもの，スケッチ，油絵，バラックの生活を描いた巻物（写真９，10）などがある．「図面」は，慰霊堂と復興記念館の設計図関連がほとんどである．封筒内にあるものや，冊子に綴じ込まれているものが多数存在するため，現時点では正確な数量は把握できなかった．「その他」の 117 点は，「ポスター」16 点と「文集」34 点が含まれている以外は，印鑑や展示品であった各種模型，地図などである．



写真７　写真帖の表紙（21 ― 1）

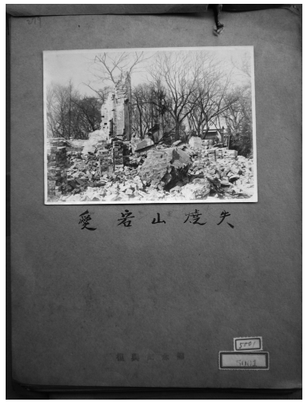

写真８　写真帖の内容（21 ― 1）


写真９　絵巻（23―36）

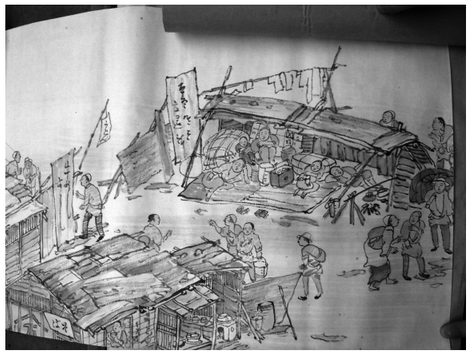

写真 10　絵巻に描かれたバラックの生活（23―36）



写真 11　震災地人口調査のポスター（23―24）

おわりに

今回の調査成果は，東京都慰霊堂収蔵庫保管資料について，個別資料の分類を行い，資料リストを作成したことである．前述のように「帳簿・各種証明書」のうち，多数の帳簿をまとめた綴帳や，大形の封筒内の資料など，全て撮影することができなかったものもあるが，基本的に保管資料の全体像がほぼ明らかになったと言って良いだろう．全て撮影できなかったものとともに，今回は調査対象外とした，物質資料および展示パネルなどの大型資料についても，いずれ機会を見て調査・撮影を実現したい．今後，調査資料を分析していくことで様々なことがわかってくると思われる．今回の調査資料と現在の復興記念館の展示品「震災復興展覧会」（1924 年），「帝都復興展覧会」（1929 年），「帝都復興祭」での天覧・記念展示（1930 年）の展示品目録を対照させていく作業により，それぞれの展示を比較検討したり，デジタル画像で再現してデータベース上に電子展示館としてアップする構想なども考えられるだろう．

山本唯人は，復興記念館の資料保存と展示活動を，震災像をつくりあげていく「公論」形成の過程としてとらえ，行政側が提示する「帝都復興」の物語に収斂しない，多様な個別の経験が含まれていたことを指摘しているが（山本，2006），長期間，収蔵庫で未公開のまま保管されていた今回の調査資料を分析することによって，東京都慰霊堂・復興記念館の意義をより具体的に検証していくことができると思われる．この点については，両施設に保管されている資料全体の調査を行なった上であらためて検討すべき問題であり，今後の課題である．

謝辞：今回の調査にあたって東京都東部公園緑地事務所の谷口講治氏，（財）東京都慰霊協会の川上佶延氏，横網町公園震災復興記念館の北条研次氏をはじめ，その他の職員の皆様にご協力をいただいた．この場を借りて感謝申し上げたい．

参考文献

阪谷芳郎
　1929 年，「帝都復興展覧会を終へて」『都市問題』第 10 巻第 1 号．
東京震災記念事業協会清算事務所
　1932 年，『被服廠跡 ── 東京震災記念事業協会事業報告』東京震災記念事業協会清算事務所．
「横網町公園 慰霊堂収蔵物調査報告書」
　1993 年，（株）トリガーグループ・ブレインファーム（東京都東部公園緑地事務所蔵）．
北原糸子
　2007 年，「関東大震災の写真（東京都慰霊堂保管）について」『立命館大学 21 世紀 COE プログラム・神奈川大学 21 世紀 COE プログラム研究推進会議　ジョイント・ワーショップ「歴史災害と都市 ── 京都・東京

を中心に ── 」報告書』.
山本唯人
2006 年,「関東大震災の記念物・資料保存活動と「復興記念館」 ── 震災後における「公論」の場の社会的構築と「災害展示」 ── 」『社会学雑誌』第 23 号.

東京都慰霊堂保管・関東大震災関係資料リスト

◎凡例

・この資料リストは，東京慰霊堂収蔵庫に保管されている資料を，1992-93 年にブレインファームが行った調査時に分類されたポリケースの番号順にリスト化したものである．欠番は今回の調査対象外の資料（下記参照），もしくは調査時に所在不明だったものである．
・戦災資料および，2006 年 COE 調査時に整理した写真資料（ケース番号 15〜19），大型資料（写真パネル，物質資料など）は，対象外とした．ただし，震災資料ケースに混入していた一部の戦災資料については記載した．
・復興記念館の 2 階に現在展示されている資料は元々同一の資料群に属するものであるため，参考として資料リストの末尾に記載した（大型資料，物質資料は除く）．ケース番号は 2 階右側通路の入口から順に，K1〜10 とした．
・資料種別として，公刊資料（書籍，雑誌，新聞，パンフレット，写真帖，絵画）と，内部資料（帳簿・各種証明書，ノート・メモ類，手紙・書簡，写真帖，絵画，図面），その他，の項目を設けた．
・資料名は，タイトルが書かれているものについてはそのまま記載し，書かれていないものについては，資料内容に応じて作成者が（　）内に記載した．
・大型の封筒もしくは綴帳にまとめられている資料・図面については，主要なもののみを記載した．
・資料の年代が特定できるものについては，西暦表記で年月日を記載し，不明確である場合には？をつけた．
・関連資料や付属資料は，資料番号を同一とし，枝番号を付け，資料名の前に※をつけた．
・個人情報が問題となると思われる部分は削除した．

東京都慰霊堂保管・関東大震災関係資料リスト

ケース番号	資料番号	枝番	資料名	年	月	日	発行主体	宛先	公刊資料 書籍	雑誌	写真帖	新聞	パンフレット	絵画類（印刷物）	内部資料 帳簿・各種証明書類	ノート・メモ	手紙・書簡	写真帖	絵画類（手描）	図面	その他	備考
1	1		会員名簿				東京震災記念事業協会								○							6冊あり
1	2		（名簿綴）				東京震災記念事業協会								○							多数あり
2	1		会員名簿				東京震災記念事業協会								○							5冊あり
3	1		会員名簿				東京震災記念事業協会								○							6冊あり
4	1		会員名簿				東京震災記念事業協会								○							6冊あり
5	1		会員名簿				東京震災記念事業協会								○							6冊あり
6	1		会員名簿				東京震災記念事業協会								○							6冊あり
7	1		会員名簿				東京震災記念事業協会								○							6冊あり
8	1		会員名簿				東京震災記念事業協会								○							4冊あり
9	1		（新聞）									○										多数あり
10	1		（新聞）									○										東京朝日新聞縮刷版（1923/9/1）など多数あり
11	1		（英字新聞）									○										
12	1		（新聞）									○										ビニールシートのみ
13	1		（新聞）									○										ビニールシートのみ
14	1		（新聞）									○										東京朝日新聞は多数
14	2		（ポスター）起てよ帝都　護れ帝都　連合防空演習				東京市														○	戦災資料
20	1		（新聞）																			ビニールシートのみ
21	1		写真鏡（破片）　百五〇〇〇至五〇六ル				復興記念館											○	○			
21	2		台湾　写真（版存）																			
21	3		写真台帳 救済 復興				復興記念館															
21	4		帝都復興完成大典 並復興帝都御巡幸写真帖	1930	3	31	復興局				○											
21	5		震災の思ひ出												○			○				
21	6		（写真帖）												○			○				
21	7		新旧対照 関東大震災記念	1924	3	1	木戸正衛　大成社															
21	8		東京震災記念写真集																			
21	9		（写真帖）																			
21	10		（アルバム）																			
21	11		（大判写真　避難民）																			
21	12		（大判写真　避難民）																			
21	13		（大判写真　避難民）																			
21	14		（大判写真　西郷像）																			
22	1		感謝状	1923	9	6	市内東組区警備隊司令部	義勇常備施設団													○	駐屯品　貼紙が多数添付
22	2		（付箋画）																			
22	3		（絵葉）　大正十二年九月一日　震災の記念品																			日付・名前・死亡場所・住所など記載
22	4		振替弁明書大災事業報告	1923	11		振替弁明団			○												
22	5		分骨名簿　本所区之部	1924	1	1					○				○							
22	6		参考品（図書類ケース）目録	1940			遞信博物館														○	
22	7		魂骨分配名簿 No.3																			
22	8		震災記念物寄贈申込書				東京震災記念事業協会															
22	9		御下賜金及内外各地方震災救護概況	1930	2		東京市役所文書課			○												
22	10		復興展図係書類				東京震災記念事業協会															
22	11		震災記念物品受付台帳	1927	4		東京震災記念事業協会															
22	12		復興展覧会出品物保管台帳	1929			東京震災記念事業協会															
22	13		遺骨分配名簿	1923	9		東京震災記念事業協会 遺骨係															
22	14		分骨名簿　本所区之部																			
22	15		大正十四年一月起之納骨場分骨控				本所被服廠跡公園派出出張所															
22	16		分骨名簿　時間外																			
22	17		市内各区死亡場所調及各区死亡者判明名簿				公園課															
22	18		式辞	1930	9	1	東京市長　永田秀次郎														○	
22	19		祝辞				内閣総理大臣　浜口雄幸															
22	20		祝辞				東京府知事　半澤玉汝															
22	21		祭文				内務大臣　鈴木喜三郎															
22	22		祝辞				内務大臣　望月圭介															
22	23		祝辞				東京震災記念事業協会会長　永田秀次郎															
22	24		祝辞				遺族代表　磯部商															
22	25		祝辞	1930	10	1	外務大臣　男爵　幣原喜重郎															

ケース番号	資料番号	枝番	資料名	年	月	日	発行主体	宛先	公刊資料						内部資料						その他	備考
									書籍	雑誌	写真帖	新聞	パンフレット	絵画類（印刷物）	帳簿・各種証明書類	ノート・メモ	手紙・書簡	写真帖	絵画類（手描）	図面		
22	26		祝辞				東京市会議長　伯爵　柳澤保恵														○	
22	27		恩賜																		○	金拾六円ほか　6袋在中
22	28		（掛軸）																		○	仏画の掛軸
22	29		感謝状	1926	3	1	東京市長　中村是公								○							事務上の援助
22	30		（感謝状）マツダ助成会	1925	10	11	マツダ助成会会長　立川龍	後藤仲七							○							
22	31		（震災記念堂 大東京百名所認定書）	1932	10	1	時事新報社	震災記念堂							○							審査委員は伊藤忠太ほか十名
22	32		祝辞				内務大臣　安達謙蔵														○	
22	33		祝辞				東京市長　西久保弘道														○	
22	34		恩賜	1925	10	29	宮内省	東京震災記念事業協会													○	天皇・皇后両陛下より金壱万円下賜
22	35		工事報告	1924	9	1		東京府知事　宇佐美勝夫							○							
22	36		祝辞				東京商工会議所会頭　藤田謙一														○	
22	37		祝辞	1924	9	1	東京府会議長　赤塚五郎														○	
22	38		（祝辞）	1924	9	1	内閣総理大臣　加藤高明														○	
22	39		目録	1930	9	1	東京震災記念事業協会会長代理理事　牛塚虎太郎	東京市長　永田秀次郎							○							記念堂引継ぎについて
22	40		祝辞	1931	8	18	東京震災記念事業協会会長代理理事　牛塚虎太郎														○	
22	41		（祝辞）震災記念堂				東京華商商会執監委員会														○	復興記念館開館式
22	42		（奉献状：震災記念堂置物）	1931	9	1	東京震災記念事業協会長　永田秀次郎								○							震災記念堂置物（中谷宏運製作）壱個
22	43		（帝都復興事業について）	1924	4	21	東京市政調査会会長　後藤新平	東京市区会議員									○					
22	44		（土地区画整理事業関連書贈呈）	1924	8		東京市政調査会　専務理事　松本幹一	土地区画整理委員会									○					
22	45		（寄附状）	1905	4	1	伊藤辰治	東京府知事　千家尊福							○							日露戦争後の寄付について？
22	46	1	（箱）																		○	内部は空　展示品番号シール3枚添付
22	46	2	※（箱）奉納御納経																		○	木箱
22	46	3	※奉納　四国　西国　秩父　坂東　各御霊場巡礼納経																		○	納経
22	47	1	（封筒）東京市　本所区　石原町				千葉県市川市真間町　小澤酉一								○							封筒内部に資料多数あり（恩賜・祝辞等）
22	47	2	※恩賜																		○	
22	47	3	※表彰状	1922	11	20	東京商工会議所　会頭　藤山雷太	泉伊勢三郎商店　大川寅蔵							○							
22	47	4	※（コイン）																		○	内部に収納　蓋裏に「大正十二年九月三日本所被服廠ニ於テ発見セルモノ」と記載
22	47	5	※（奉献状：震災記念堂置物）	1931	9	2	宮内大臣 一木喜徳郎	東京震災記念事業協会長 東京市長　永田秀次郎							○							中谷宏運製作の震災記念堂置物　天皇・皇后に献上
22	47	6	※（封筒）				中央大学臨時相談部										○					
22	47	7	※謹告				東京府知事　宇佐美勝夫														○	金拾弐円
22	48		（箱：巻物）																		○	巻物在中
23	1		東京震災記念事業協会設立趣意書				東京震災記念事業協会						○									寄附申込書付
23	2		（絵画：復興宝船）											○								
23	3		（絵画：芋類の絵）	1924	9	1								○								
23	4		（絵画：仏画）				島尻是空							○								
23	5		大震災満三年記念		9	1	東京市						○									追悼式・講演会・活動写真会・動倹週間
23	6		（ポスター）大震災惨死者追悼法会		10	12	曹洞宗大本山永平寺 総持寺														○	場所：被服廠跡
23	7		土地区画整理当選標語				復興局東京市						○									
23	8		（ポスター）土地区画整理	1924	2		帝都復興院　警視庁　東京市														○	
23	9		（ポスター）震災記念物蒐集				東京市														○	
23	10		（絵画）ニコライ堂																○			
23	11		（絵画）御茶ノ水崖																○			
23	12		（絵画）九段を望む																○			
23	13		（絵画）丸ノ内一望 於スルガ台																○			
23	14		（絵画）																○			

ケース番号	資料番号	枝番	資料名	年	月	日	発行主体	宛先	公刊資料						内部資料						その他	備考
									書籍	雑誌	写真帖	新聞	パンフレット	絵画類（印刷物）	帳簿・各種証明書類	ノート・メモ	手紙・書簡	写真帖	絵画類（手描）	図面		
23	15		東京震災記念堂建設事業に就て				東京市						○									
23	16		中華民国名士寄贈書画展覧記念品募集				東京市						○									
23	17		震災記念堂建設資金募集				供養塔建設協賛会　東京市						○									
23	18		東京震火災遭難死者氏名調査				東京震災記念事業協会　東京市						○									申出期間：昭和二年四月末日迄
23	19		震災記念堂建設資金募集				東京市						○									取扱所：各区役所・東京市内及府下各宗寺院
23	20		大正十二年大震火災記念物品・絵画資料募集				東京市						○									申出期間：六月末日迄
23	21		東京大震火災記念建造物設計図案懸賞募集				東京震災記念事業協会（東京市役所内）														○	締切：大正十四年二月末日　発表：大正十四年三月中旬
23	22		震災記念堂建設資金寄附募集				東京震災記念事業協会						○									
23	23		（ポスター）震災地人口調査	1923	11		東京市														○	
23	24		（ポスター）震災地人口調査 十一月十五日午前零時現在	1923	11	15	東京市役所														○	
23	25		（ポスター）地震に用心 火乃用心																		○	
23	26		聖堂ノ沿革 聖堂ノ復興										○									
23	27		（ポスター）大震災記念日				東京府　東京市　東京商業会議所　東京実業組合連合会														○	遭難死亡者弔祭式　大震災記念講演会
23	28		（ポスター）今日から一週間 第七回勤倹強調期間	1926	9	1	勤倹奨励婦人団体委員会														○	
23	29		（ポスター）焼跡に復興せる市立図書館				東京市														○	麹町図書館ほか12館記載
23	30		（ポスター）震災避難 非常心得				新山虎治														○	
23	31		（ポスター）帝都復興木曜講演会				協調会														○	11/15～12/20まで6回　講演者名14記載
23	32		（絵画：郵便局前で撮影する人）																○			
23	33		（絵画）関東最震災スケッチ（東京市）				磯村犀江												○			台紙に8枚添付
23	34		（ポスター）帝都大震災一覧	1923	10	26	広瀬正雄														○	
23	35		避難者諸子ニ告グ！！				静岡県														○	東海道線時刻表　収容所名など記載
23	36		（巻物）																○			震災の状況を描いたもの
23	37		（ポスター）震災地人口調査	1924	11		東京市役所														○	
23	38		市民各位の熱誠なる協力を待つ　震災地人口調査	1923	11		東京市						○									
23	39		（絵画）																○			
23	40		（絵画）士人飢民を憐れみて街頭に握り飯を施す																○			
23	41		（絵画）大正十二年関東大地震翌日九段坂上所見																○			
23	42		土地区画整理大講演会	1924	5	12							○									
24	1		（絵画：寺院）																○			
24	2		（絵画：寺院）																○			
24	3		（絵画：寺院）																○			
24	4		（絵画：寺院）																○			
24	5		（絵画：寺院）																○			
24	6		（絵画：焼跡）																○			
24	7		（絵画：寺院）																○			
24	8		（絵画：寺院）																○			
24	9		（絵画：寺院）																○			
24	10		（絵画：寺院）																○			
24	11		（絵画：バラック）																○			
24	12		（絵画：行進）																○			
24	13		（絵画：バラック）																○			
24	14		（絵画：バラック）																○			
24	15		（絵画：馬車）																○			
24	16		（絵画：火災）																○			
24	17		（絵画：避難者）																○			
24	18		（絵画：街路）																○			
24	19		（絵画：街路）																○			
24	20		（絵画：街路）																○			
24	21		（絵画：バラック）																○			
24	22		（絵画：三越）																○			
24	23		（絵画：学校）																○			
24	24		（絵画：焼跡）																○			
24	25		（絵画：避難民）大正十二年十月　遭難の記憶画				東京市本所尋常小学校														○	
24	26		（絵画：商店）大正十二年冬																○			
24	27		（絵画）第壱図　大正十三年仮校舎出来																○			

ケース番号	資料番号	枝番	資料名	年	月	日	発行主体	宛先	公刊資料						内部資料						その他	備考
									書籍	雑誌	写真帖	新聞	パンフレット	絵画類（印刷物）	帳簿・各種証明書類	ノート・メモ	手紙・書簡	写真帖	絵画類（手描）	図面		
24	28		（絵画：浅草十二階）				錦華小学校　佐宗美耶												○			
24	29		（絵画）残骸				牛島小学校　六学年　浅井麻太郎												○			学年は震災当時
24	30		（絵画）サッポロビール会社焼跡				牛島小学校五学年　林清												○			学年は震災当時
24	31		（絵画：馬車）				錦華小学校　四年　石井通義												○			学年は震災当時
24	32		（絵画：火災）				錦華小学校　三年　長継義人												○			学年は震災当時
24	33		（絵画：避難民）				小島小学校　五年生　重田力雄												○			学年は震災当時
24	34		（絵画：廃墟）				小島小学校　五年生　宇田川正弘												○			学年は震災当時
24	35		（絵画：火災）				錦華小学校　一年　原敏子												○			学年は震災当時
24	36		（文集）九月一日の思ひ出　六男																		○	
24	37		（文集）九月一日の思ひ出　一女																		○	
24	38		（文集）大震火災に関し児童の感想を総括したる意見　京橋高等小学校				京橋高等小学校														○	
24	39		（文集）大震災記念号一																		○	
24	40		（文集）第四周年ニ於ケル震災ノ思ヒ出　女子部	1927	9																○	
24	41		（文集）第四周年ニ於ケル震災ノ思ヒ出　男子部	1927	9																○	
24	42		（文集）九月一日の思ヒ出　ニ男一																		○	
24	43		（文集）大震火災感想記　男第一学年一組																		○	
24	44		（文集）大震災後の教育概話				東京市田原尋常小学校														○	
24	45		（文集）九月一日の思ヒ出																		○	
24	46		（文集）震災の日　六ノニ				泰明小学校														○	
24	47		（文集）大正十二年度　震災記念文集	1923			東京市緑小学校														○	
24	48		（文集）本町区尋常小学校	1924	3		本町区尋常小学校														○	
24	49		（文集）綴方成績	1924	3	1	錦華尋常小学校														○	
24	50		（文集）震災一周年記念　綴方成績	1924	9	1	錦華尋常小学校														○	
24	51		（文集）震災乃反映	1924			東京市西町尋常小学校														○	男59名・女41名
24	52		（文集）震災火災ニ関スル所感　六男																		○	
24	53		（文集）大震火災感想記　女　第一学年一組																		○	
24	54		（文集）震災印象記　本所尋常小学校				本所尋常小学校														○	
24	55		（文集）大震災ニ対スル児童ノ感想　第二学年第一組（女）				東京市京橋高等小学校														○	
24	56		（文集）地震の思いで																		○	
24	57		（絵画：湯島聖堂孔子像）																○			湯島聖堂孔子像
24	58		（絵画）聖堂創設者 林羅山																○			林羅山肖像
24	59		（絵画）火中の帝劇付近				牛島小学校　第三学年　新津きみじ												○			
24	60		（模型）				横川小学校														○	モールス信号の模型（3点）
24	61		東都震災双六																		○	双六
24	62		（絵画：慰霊堂）																○			
25	1		（文集）五年記念文集																		○	
25	2		（文集）九月一日の思い出 四男一																		○	
25	3		（文集）大震火災感想記 専攻科 第一学年				東京市京橋高等小学校														○	
25	4		（文集）震災前後に於ける下谷尋常小学校概況																		○	表紙に「要返戻」の貼紙あり
25	5		（文集）富士尋常小学校震災類焼顛末記	1923	9		調導 和光松衛														○	
25	6		（メモ）幸喜 向坂イチ 増上寺 御堂入口へ													○						書籍断片に書かれたメモ
25	7		（メモ）山茂商店 高橋茂三郎　避難所 此奥書院													○						書籍断片に書かれたメモ
25	8		（メモ）愛宕下町一ノ 中原平吉 伊藤金太郎　上増上寺？？？													○						書籍断片に書かれたメモ　一部判読不能
25	9		通信概便乗券 清水行	1923	9	18	海軍省副官	佐原民之助													○	乗船券
25	10		通信概便乗券 清水行	1923	9	18	海軍省副官	渡辺敏男													○	乗船券
25	11		（メモ）	1923	9	8		中山久三良								○						「五名分」と記載あり
25	12		（見舞状）				岐阜市白山尋常高等小学校　第五学年一部　永田聡司											○					
25	13		（切符：大仁～新橋　臨時回数券）	1923	9	1	東京市電気局														○	切符2枚・回数券2枚綴り
25	14		（切符：無賃乗車船証　路線図　メモ）	1923	9	19	鉄道省														○	台紙に切符・路線図・メモを添付
25	15		（土地区画整理講演会開催案内）	1923			帝都復興進合協議会					○										
25	16		（罹災証明書）証明書	1923	9	16	東京都下谷区長　鈴木紀二	下谷区 橋本健太郎他五名							○							
25	17		（罹災地証明書）	1923	9	11	大阪府	日本橋区 岡崎影重							○							

ケース番号	資料番号	枝番	資料名	年	月	日	発行主体	宛先	公刊資料						内部資料						その他	備考
									書籍	雑誌	写真帖	新聞	パンフレット	絵画類（印刷物）	帳簿・各種証明書類	ノート・メモ	手紙・書簡	写真帖	絵画類（手描）	図面		
25	18		（封筒断片）														○					「CHILIAN NITRATE COMMITTEE」と記載
25	19		（見舞状）				岐阜市白山尋常高等小学校第四学年　長谷川清										○					
25	20		頼母子講掛金 領収書	1923	4		池上大黒堂								○							
25	21		（見舞状）														○					
25	22		（封筒）恩賜金　内包																		○	16円・12円・4円
25	23	1	死亡埋葬認許証下附申請書	1923	12			鷲尾ハル							○							本籍・住所・死亡時刻・場所など詳細に記載
25	23	2	※死亡埋葬認許証下附申請書添付書類	1923	12		鷲尾芳三郎	本所区長							○							
25	23	3	※罹災申告書	1923	12	5	鷲尾芳三郎								○							
25	24		（立退先告知書）				福村慶蔵								○							
25	25		震災配布情報				協調会情報案内所								○							
25	26		（案内）土地区画整理大講演会	1924?	5	26	警視庁保安部長（笹井幸一郎）　東京市助役（吉田茂）　復興局建築部長（笠原敏郎）　東京市政調査会理事・法学博士（渡邊鉄蔵）　工政会常務理事（倉橋藤治郎）					○										
25	27		（メモ：木刀などの返却命令　返却なしは罰する）	1923	10	10	小田原中学校									○						
25	28		罹災申告書				大川勝太郎	大川柱朗							○							鉛筆でメモ書きあり
25	29		遭難所：麻布笄町〇〇寺へ				新井ハル								○							2字判読不可
25	30		（案内）土地区画整理大講演会	1924?	5		後藤新平　阪谷芳郎　吉田茂　笠原敏郎　倉橋富士二郎					○										場所：日本橋区十思小学校
25	31		（案内）土地区画整理大講演会	1924?	4		後藤新平　直木倫太郎　竹内六蔵　佐野利器　渡邊鉄蔵　倉橋藤治郎					○										場所：丸の内日本工業倶楽部
25	32		海軍船舶便乗許可券	1923	9	14	横須賀鎮守府	四谷右馬吉													○	乗船券
25	33		罹災者乗車船証	1923	9		鉄道省														○	乗船券
25	34	1	点呼令状	1923	9		津連隊区司令部	久世儀三							○							返信書類同封
25	34	2	※点呼不出来届	1923	9		久世儀三	津連隊区司令部							○							
25	35		罹災証明書	1923	9		深川区長	伊藤欣一他							○							
25	36		（罹災証明書）	1923	9	16	群馬県藤岡町警察署	青柳儀近							○							
25	37		（罹災証明書）	1923	9	19	芝区役所	興津安三							○							
25	38		（罹災証明書）	1923	9	19	浅草区　長江馬健	中山久三良							○							
29	1		正記念賞配達証明綴　第壱号				東京震災記念事業協会								○							
29	2		正記念賞配達証明綴　第弐号				東京震災記念事業協会								○							
29	3		正記念賞配達証明綴　第参号				東京震災記念事業協会								○							
29	4		正記念賞配達証明綴　第四号				東京震災記念事業協会								○							
29	5		下谷区　納付通知証　第二号　次号アリ				東京震災記念事業協会								○							
29	6		復興記念館入場券				東京震災記念事業協会														○	多数あり
29	7		復興記念館　軍人割引鑑賞券				東京震災記念事業協会														○	多数あり
29	8		名誉特別記念章配達証明綴　第壱号				東京震災記念事業協会								○							
29	9		振替貯金 払込通知票綴				東京震災記念事業協会								○							
29	10		振替順区分綴				東京震災記念事業協会								○							
29	11		（印鑑）				東京震災記念事業協会														○	割引印3点　円形印1点
30	1		寄付金台帳　被服厳跡　浅草公園　日比谷公園　第壱号	1924	9	4	東京震災記念事業協会								○							
30	2		寄付金台帳　被服厳跡　浅草公園　日比谷公園　第弐号	1924	9	4	東京震災記念事業協会								○							
30	3		寄付金台帳　被服厳跡　浅草公園　日比谷公園　第参号	1924	9	4	東京震災記念事業協会								○							
30	4		寄付金台帳　被服厳跡　浅草公園　日比谷公園　第四号	1924	9	4	東京震災記念事業協会								○							
30	5		寄付金台帳　被服厳跡　浅草公園　日比谷公園　第五号	1924	9	4	東京震災記念事業協会								○							
30	6		寄付金台帳　第六号	1924	9	4	東京震災記念事業協会								○							
30	7		寄付金台帳　被ニ	1924	10		東京震災記念事業協会								○							
30	8		寄付金台帳　第七号	1924			東京震災記念事業協会								○							
30	9		寄付金台帳　被壱	1923	9		東京震災記念事業協会								○							52名（表紙に朱筆で記載）
30	10		寄付台帳　被三	1925	1		東京震災記念事業協会								○							
30	11		寄付台帳　被四	1925	7		東京震災記念事業協会								○							
30	12		寄付台帳　被五	1925	9		東京震災記念事業協会								○							
30	13		寄付台帳　被六	1925	9		東京震災記念事業協会								○							
30	14		寄付台帳　被七	1925	9		東京震災記念事業協会								○							
30	15		寄付台帳　被八	1926	1		東京震災記念事業協会								○							

ケース番号	資料番号	枝番	資料名	年	月	日	発行主体	宛先	公刊資料						内部資料						その他	備考
									書籍	雑誌	写真帖	新聞	パンフレット	絵画類（印刷物）	帳簿・各種証明書類	ノート・メモ	手紙・書簡	写真帖	絵画類（手描）	図面		
30	16		寄付台帳　被服廠跡出張所用弐号	1926			東京震災記念事業協会								○							
30	17		寄付台帳　被第一八号	1928			東京震災記念事業協会								○							
30	18		寄付台帳　被服第拾九号				東京震災記念事業協会								○							
30	19		寄付台帳　被服第弐拾号				東京震災記念事業協会								○							
30	20		寄付台帳　被服廠跡出張所用壱号	1926			東京震災記念事業協会								○							
30	21		寄付金台帳　甲一　自大正十三年　至大正拾四年	1925			東京震災記念事業協会								○							
30	22		寄付台帳　本部用三号	1926			東京震災記念事業協会								○							
31	1		仏教連合会取扱　寄付金台帳　第七号				東京震災記念事業協会								○							
31	2		仏教連合会取扱　寄付金台帳　第八号				東京震災記念事業協会								○							
31	3		仏教連合会取扱　寄付金台帳　第弐拾参号				東京震災記念事業協会								○							
31	4		仏教連合会取扱　寄付金台帳　第弐拾弐号				東京震災記念事業協会								○							
31	5		仏教連合会取扱　寄付金台帳　第拾五号				東京震災記念事業協会								○							
31	6		仏教連合会取扱　寄付金台帳　第弐拾六号				東京震災記念事業協会								○							
31	7		仏教連合会取扱　寄付金台帳　第拾六号				東京震災記念事業協会								○							
31	8		仏教連合会取扱　寄付金台帳　第九号				東京震災記念事業協会								○							
31	9		仏教連合会取扱　寄付金台帳　第壱号　大正十三年自三月三一日至九月十五日	1924			東京震災記念事業協会								○							
31	10	1	寄付金計算調書　現協会　旧協会　協会本部　被服廠各区役所　隣接町村　仏教連合会	1931			東京震災記念事業協会								○							寄付金内訳
31	10	2	仏教連合会寄付金計算調書	1931			東京震災記念事業協会								○							
31	11		仏教連合会取扱　寄付金台帳　第拾三号				東京震災記念事業協会								○							
31	12		仏教連合会取扱　寄付金台帳　第弐号　大正十五年自九月十六日至九月末日	1926			東京震災記念事業協会								○							
31	13		仏教連合会取扱　寄付金台帳　第弐七号				東京震災記念事業協会								○							
31	14		仏教連合会取扱　寄付金台帳　第参拾号				東京震災記念事業協会								○							
31	15		仏教連合会取扱　寄付金台帳　第拾七号				東京震災記念事業協会								○							
31	16		仏教連合会取扱　寄付金台帳　第弐拾五号				東京震災記念事業協会								○							
31	17		仏教連合会取扱　寄付金台帳　第拾四号				東京震災記念事業協会								○							
31	18		仏教連合会取扱　寄付金台帳　第弐拾号				東京震災記念事業協会								○							
31	19		仏教連合会取扱　寄付金台帳　第弐拾四号				東京震災記念事業協会								○							
32	1		仏教連合会取扱　寄付金台帳　第拾壱号				東京震災記念事業協会								○							
32	2		仏教連合会取扱　寄付金台帳　第拾八号				東京震災記念事業協会								○							
32	3		仏教連合会取扱　寄付金台帳　第拾弐号				東京震災記念事業協会								○							
32	4		仏教連合会取扱　寄付金台帳　第四号　大正拾五年自拾月拾壱日　同年至拾月廿日	1926	10		東京震災記念事業協会								○							
32	5		仏教連合会取扱　寄付金台帳　第弐拾壱号				東京震災記念事業協会								○							
32	6		仏教連合会取扱　寄付金台帳　第弐拾九号				東京震災記念事業協会								○							
32	7		仏教連合会取扱　第拾九号				東京震災記念事業協会								○							
32	8		仏教連合会取扱　寄付金台帳　第拾号				東京震災記念事業協会								○							
32	9		仏教連合会取扱　寄付金台帳　第五号				東京震災記念事業協会								○							
32	10		仏教連合会取扱　寄付金台帳　第参号　大正十五年自十月一日　同年至十月中日	1926	10		東京震災記念事業協会								○							
32	11		仏教連合会取扱　寄付金台帳　第六号				東京震災記念事業協会								○							
33	1		震火災死亡者調書　第拾参号												○							
33	2		震火災死亡者調書　第弐号												○							
33	3		震火災死亡者調書　第参号												○							
33	4		震火災死亡者調書　第拾弐号												○							
33	5		震火災死亡者調書　第拾四号												○							
33	6		震火災死亡者調書　第九号												○							
33	7		震火災死亡者調書　第十号												○							
33	8		震火災死亡者調書　第五号												○							
33	9		震火災死亡者調書　第八号												○							
33	10		震火災死亡者調書　第七号												○							
33	11		（震火災死亡者調書）												○							表紙破損のため号数不明
33	12		震火災死亡者調書　第四号												○							
34	1		各種調査表　自大正十三年八月　至大正十四年八月	1925			東京震災記念事業協会								○							
34	2		霊名記載例案												○							
34	3		備品交付簿				東京震災記念事業協会								○							
34	4		遭難者確定仮霊名簿　第参号				東京震災記念事業協会								○							
34	5		遭難者確定仮霊名簿　第五号				東京震災記念事業協会								○							

ケース番号	資料番号	枝番	資料名	年	月	日	発行主体	宛先	公刊資料						内部資料						その他	備考
									書籍	雑誌	写真帖	新聞	パンフレット	絵画類（印刷物）	帳簿・各種証明書類	ノート・メモ	手紙・書簡	写真帖	絵画類（手描）	図面		
34	6		遭難者確定仮霊名簿　第壱号				東京震災記念事業協会								○							
34	7		遭難者仮霊名簿	1928	6		東京震災記念事業協会								○							
34	8		回議綴　大正十三年	1924			東京震災記念事業協会								○							
34	9		寄付名簿　台帳　吾妻町分				東京震災記念事業協会								○							
34	10		自動車青写真　代金請求書類　現場				東京震災記念事業協会								○							
34	11		戸田組交渉関係書類　現場				東京震災記念事業協会								○							
34	12		関東地方激震後ニ於ケル震災地一等水準線路ノ変動ニ就テ	1924	3		陸地測量部								○							
34	13		文書発送簿（戸田組関係）	1928	12		本所被服廠跡建築部出張所								○							
34	14		寄付金募集事業着手　貸付簿				東京震災記念事業協会	各支部長							○							
34	15		前渡金請求領収書綴	1925	9		東京震災記念事業協会								○							
34	16		雑綴 自大正十四年九月　至大正十五年九月	1926			東京震災記念事業協会								○							
34	17		二階中央陳列室												○							
34	18		（陳列室平面図）																	○		図面
34	19		図面賃借簿　戸田組				戸田組								○							
34	20		銀行当座振替納入通知				東京震災記念事業協会								○							
34	21		セメント試験表　建築部	1928											○							
34	22		雑件書類　現場												○							
34	23		現場日誌　建築部	1930	9										○							
34	24		発送文書類　現場												○							
34	25		新築工事既成部分検査願及内訳書類　現場												○							
34	26		消耗品整理簿　昭和二年度	1927			東京震災記念事業協会								○							
34	27		遅参早退簿　昭和三年一月起	1928			東京震災記念事業協会								○							
34	28		消耗品整理簿　自大正拾五年十月一日　至昭和二年参月末日	1927	3	31	東京震災記念事業協会								○							
34	29		備品関係書類　現場												○							
34	30		図書伺答簿	1924	11		東京震災記念事業協会								○							
34	31		遭難者確定仮霊名簿　第八号				東京震災記念事業協会								○							
34	32		遭難者確定仮霊名簿　第弐号				東京震災記念事業協会								○							
34	33		遭難者確定仮霊名簿　第九号				東京震災記念事業協会								○							
34	34		発信簿				東京震災記念事業協会								○							
34	35		日々入場者控　自昭和九年四月一日起	1934			復興記念館								○							
34	36		震災記念物品寄附申込書綴				東京震災記念事業協会								○							
34	37		復興記念館書類　昭和十二年四月起	1937			震災記念堂								○							
34	38		東京震災記念事業関スル書類	1924	8	19	東京震災記念事業協会								○							
34	39		復興記念館整理簿　昭和十三年起				東京震災記念事業協会								○							
34	40		記念品寄贈申込綴　昭和十一年度起				復興記念館								○							
34	41		写真（復興）第弐拾号 自参六五七号 至参七八六号				復興記念館											○				
34	42		日誌	1924	8		東京震災記念事業協会								○							
34	43		納骨容器番号簿	1930	9		東京震災記念事業協会								○							
34	44		類別氏名簿	1935	4										○							
34	45		団体申込綴　昭和十三年度　昭和十四年度	1940			復興記念館								○							
34	46		東京震災記念堂建設図案募集照会書類　自大正十三年十二月　至大正十四年四月	1925			東京震災記念事業協会								○							
34	47		辞令交付簿	1924	12		東京震災記念事業協会								○							
34	48		協議事項綴　大正十三年九月	1924	9		東京震災記念事業協会								○							
34	49		震災記念物品絵画資料関係書類　昭和二年四月起	1927			東京震災記念事業協会								○							
34	50		震災死亡者氏名調査書類綴　原議其他　昭和二年二月起	1927			東京震災記念事業協会								○							
34	51		設計変更其外書類　現場												○							図面入り
34	52		現場日誌　建築部	1930	9											○						
34	53		日誌　昭和六年起	1931			復興記念館									○						
34	54		日誌	1924	8		東京震災記念事業協会									○						
35	1		寄附申込書類綴	1926			東京震災記念事業協会								○							
35	2		陳列品目録　第ニ号　二階ケース其他				復興記念館								○							
35	3		写真（救護）　第弐拾号　自四弐六号　至六五六号				復興記念館											○				
35	4		陳列品目録 第一号　一階ケース其他				復興記念館								○							
35	5		金属製品類　第八号　自八八〇　至九六九号				復興記念館								○							
35	6		石材類　第九号　自九七〇号　至壱壱参弐号				復興記念館								○							
35	7		機械類　第四号 自参八八号 至五弐弐号				復興記念館								○							
35	8		雑（追加）第弐拾弐号 自四五〇〇号至四六三六号				復興記念館								○							

ケース番号	資料番号	枝番	資料名	年	月	日	発行主体	宛先	公刊資料						内部資料						その他	備考
									書籍	雑誌	写真帖	新聞	パンフレット	絵画類（印刷物）	帳簿・各種証明書類	ノート・メモ	手紙・書簡	写真帖	絵画類（手描）	図面		
35	9		陳列品目録　一階ケース其他　第一号				復興記念館								○							
35	10		月賦申込綴												○							
35	11		出品並寄贈品一覧												○							
35	12		在庫品一覧　昭和六年八月起	1931			復興記念館								○							
35	13		震災記念絵画資料寄贈書綴				東京震災記念事業協会								○							
35	14		絵画写真配置（控）	1931	8		復興記念館								○							
35	15		（記念館一階平面図）																	○		
35	16		回議録	1925			東京震災記念事業協会								○							
35	17		陳列品目録　二階ケース其他　第ニ号				復興記念館								○							
35	18		記念品寄附出品申込書綴　昭和七年度ヨリ	1932			復興記念館								○							
35	19		貨幣類　第壱号　自一号　至一三六号												○							
35	20		郵便文書発送簿　大正十五年十月起	1926											○							
35	21		装身類　第参号　自弐弐九号　至参八七号				復興記念館								○							
35	22		寄附申込即納書類綴												○							
35	23		寄付金経理報告簿	1924	12		東京震災記念事業協会								○							
35	24		記念品検査表	1934			復興記念館								○							
35	25		写真（震災）　第弐拾号　自参〇一五号　至参四弐五号				復興記念館											○				
35	26		絵画類　第拾九号　自弐八〇六　至参〇一四号				復興記念館								○							
35	27		陶磁器類　第拾号　自壱壱参参号　至壱参七参号				復興記念館								○							
35	28		搭納明細（保存箱ハ含マズ）				復興記念館								○							
35	29		写真（追加）															○				
35	30		書籍類　第拾七号　自弐〇参八号　至弐五〇九				復興記念館								○							
35	31		有価証券文書類　第拾四号　自壱五九〇号　至壱九六五号				復興記念館								○							
35	32		植物寄附申込書				東京震災記念事業協会								○							
35	33		図表類 第拾八号　自弐五壱〇号　至弐八〇五号				復興記念館								○							
35	34		其他　第拾五号　自壱九六六号　至弐〇壱参号				復興記念館								○							
35	35		織物類　第拾二号　自壱四四九号　至壱五壱〇号				復興記念館								○							
35	36		模型類　第拾六号　自弐〇壱四号　至弐〇参七号				復興記念館								○							
35	37		神仏装飾類　第弐号				復興記念館								○							
35	38		家事用品類　第七号 自七三〇号 至八七九号				復興記念館								○							
35	39		工作用品類　第五号　自五弐参号 至六四六号				復興記念館								○							
36	1		震度記録（関東震災震度）																		○	震度計表示
36	2		震災記念堂梵鐘始撞式記念	1930	10	1	東京震災記念事業協会						○									
36	3		請負工事費支出ノ件	1928	3	12	東京市役所								○							
36	4		（図面）記念品陳列場新築工事並休憩所移転工事配置図 1/300	1927	6	3														○		
36	5		地震に出会ったときの心得	1926	11		今村明恒						○									
36	6		（地形断面図）																	○		手書き
36	7		（地形断面図）																	○		手書き
36	8		請求書（写）				三菱商事　代理人　横田清	東京震災記念事業協会長							○							
36	9		乗用自動車代金請求ノ件	1928	8	15	建築部　技師　荻原孝一	庶務部							○							
36	10		箱番設置場借用願	1928	9	12	東京市電気局電力課電路掛本所出張所	震災記念堂建設監督事務所							○							
36	11		震災記念堂建設経過												○							
36	12	1	（封筒）				東京震災記念事業協会								○							封筒内に多数資料あり
36	12	2	※事業要旨				東京震災記念事業協会								○							
36	12	3	※東京震災記念堂附帯庭園植物寄附申込書				東京震災記念事業協会								○							
36	13		請求書　東京震災記念堂電燈照明器具中特殊器具製作工事	1930	8	13	株式会社弘電社	東京震災記念事業協会長							○							
36	14	1	震災記念堂附属石燈籠基礎混凝土木工事	1930	12	23									○							
36	14	2	※震災記念堂附属燈籠設計図 縮尺二十分の一																	○		
36	14	3	※工事竣工調書	1930	12	18									○							
36	15		理事会開催費支出ノ件	1927	8	8									○							
36	16		ジーチーサン商会支払ノ件　三件	1927	8	4	東京震災記念事業協会	ジーチーサン商会							○							
36	17		請求書　一 金四拾五円也　但　電車内広告費用支払ノ為　前渡金	1927	8	5	井下清	会計部主事 見山正賢							○							
36	18		請求書（伊東忠太ら旅費）	1927	8	29	井下清								○							
36	19		八月中払振												○							

ケース番号	資料番号	枝番	資料名	年	月	日	発行主体	宛先	公刊資料						内部資料						その他	備考
									書籍	雑誌	写真帖	新聞	パンフレット	絵画類（印刷物）	帳簿・各種証明書類	ノート・メモ	手紙・書簡	写真帖	絵画類（手描）	図面		
36	20	1	（封筒）庭口工事関係												○							封筒内に多数資料あり
36	20	2	※東京震災記念堂鐘楼設計図案 1/50																	○		
36	20	3	※納骨堂棚詳細図																	○		
36	20	4	※震災記念堂庭園計画平面図　縮尺六百分之一																	○		
36	21	1	震災記念品ニ関スル件	1929	12	5	済生会								○							
36	21	2	※目録												○							
36	22		震災記念堂特殊電燈器具製作工事	1930	4	25									○							
36	23	1	（封筒）記念堂電燈器具製作工事ノ件 予算書壱　設計要項壱　指名申請書壱　図面参												○							封筒内に多数資料あり
36	23	2	※支出科目　昭和四年度　臨時部	1929											○							
36	23	3	※（図面）納骨堂前　二個																	○		
36	24		東京震災記念堂 電燈照明器具設備工事仕様書												○							
36	25	1	（封筒）財団法人東京震災記念事業協会　書類	1924	12		東京震災記念事業協会								○							封筒内に多数資料あり
36	25	2	※委員通知受給	1924	12		東京震災記念事業協会								○							
36	25	3	※号外	1926	4	12	浅草区支部長	東京震災記念事業協会長 中村是公							○							
36	26		（絵図：慰霊堂鳥瞰図）																○			
36	27		東京震災記念事業協会寄付行為	1924											○							
36	28		（寄附願）	1924	8	31	東京震災記念事業協会会長 永田秀次郎	市局課区長									○					
36	29		喜捨箱設置スヘキ場所及個数													○						
36	30		新聞広告原案文	1924	12		東京震災記念事業協会会長 永田秀次郎									○						
36	31		九月一日寄付募集分担													○						
36	32		（寄付願）	1923	9	1	東京震災記念事業協会会長 永田秀次郎	市局課長宛								○						
36	33	1	中央乃木会趣意書並寄付行為												○							
36	33	2	※財団法人至道庵設立許可書　附至道庵縁起要略												○							
36	34		建塔会設立趣意書												○							
36	35	1	（封筒）会員名簿関係書類												○							封筒内に多数資料あり
36	35	2	※（会員名簿）												○							
36	35	3	※東京震災記念堂建設資金　第一回寄附金調書												○							
36	36	1	（封筒）震災記念堂附属鐘楼新築工事　一部設計変更書類	1930	8	8									○							封筒内に多数資料あり
36	36	2	※震災記念堂附属鐘楼新築工事　一部設計変更工事												○							
36	36	3	※震災記念堂附属鐘楼工事設計変更図																	○		
36	37		工事竣工（検査）調書	1930	6	7									○							
36	38	1	（封筒）震災記念堂新築工事中建具工事其他設計変更工事書類控												○							封筒内に多数資料あり
36	38	2	※震災記念堂祭場広間人除欄新築工事	1930	7	3	建築部主事 小野二郎	建築部　技師　荻原孝一							○							
36	39		東京震災記念堂電燈照明器具設備工事電燈照明器具図面案　縮尺二十分之一																	○		
36	40	1	復興記念館建設工事概要	1930			東京震災記念事業協会						○									
36	41	1	震災記念堂附属鐘楼新築工事一部設計内訳書	1930	10	7									○							
36	41	2	※震災記念堂附属鐘楼工事設計変更図																	○		図面7枚添付
36	42		請求書　震災記念堂前庭香炉建設工事完成検査長所供覧並工事支払ノ件	1932	3	3	鍋島石材工業株式会社　鍋島盛太郎	東京震災記念事業協会　清算事務所長　永田秀次郎							○							
36	43		（寄附願）	1929	8		東京震災記念事業協会										○					会長理事(堀切善次郎ほか理事七名)名記載
36	44		（ポスター）震災記念堂建設資金募集				東京市														○	
36	45		（記念展延期案内状）	1925	12		東京震災記念事業協会										○					別紙に追伸あり
36	46		（封筒）震災記念堂内部水性塗料其他工事仕様				東京震災記念事業協会								○							封筒内に資料あり
36	47		震災復興記念館案内				東京市役所						○									平面図記載
36	48		（封筒）回議				東京震災記念事業協会								○							封筒内に多数資料あり
36	49		（封筒）各種計算参考書類				東京震災記念事業協会								○							封筒内に多数資料あり
36	50	1	（封筒）収支調書 昭和四年拾月分在中	1929			東京震災記念事業協会								○							封筒内に多数資料あり
36	50	2	※帝都復興展覧会出品物寄贈勧誘先												○							
36	51		昭和二年　自四月至十二月　預金利子収入一覧ノ件	1928	1	31									○							

ケース番号	資料番号	枝番	資料名	年	月	日	発行主体	宛先	公刊資料						内部資料						その他	備考
									書籍	雑誌	写真帖	新聞	パンフレット	絵画類（印刷物）	帳簿・各種証明書類	ノート・メモ	手紙・書簡	写真帖	絵画類（手描）	図面		
36	52		震災記念堂附属事務所電燈設備工事竣工検査調書供覧並支払ノ件	1930	12	23									○							
36	53		書画展覧即売会開催ニ関スル答礼ノ件	1929	9	5									○							
36	54		中華民国名士寄贈書画展観　記念品募集										○									
36	55		震災記念品出品ニ付挨拶ノ件	1930	3	4	東京市								○							
36	56		復興記念館重要書類綴	1931	8	1									○							
37	1	1	（封筒）昭和三年二月中収支調書	1928	2										○							封筒内に多数資料あり
37	1	2	※収支調書及現在資金調書一覧之件	1928	3										○							
37	2	1	（封筒）控　記念堂仮設物移転模様替其他工事　内訳 一　図面 一 1												○							封筒内に多数資料あり
37	2	2	※震災記念堂試作物取扱及仮図並ニ下小屋移転工事図																	○		縮尺六百分の一
37	3	1	（封筒）昭和三年度十一月中収支調書												○							封筒内に多数資料あり
37	3	2	※収支調書及現在資金調書一覧之件	1928	12										○							
37	4		工事請負契約保護金返還ノ件	1927	8	8									○							
37	5	1	警視庁関係書類綴	1930			現場								○							
37	5	2	※建築申請												○							
37	6	1	（綴帳）												○							
37	6	2	※貸興 官報 計三幅	1924	10	7	印刷局								○							
37	7		慰問の挨拶と見舞品の寄贈に就て				日本橋区小伝馬町身延山別院内 身延救護団						○									
37	8		（葉書）				大阪 庭山耕園										○					
37	9		（封筒）御用心	1925	8	16	編集兼発行者 広瀬正雄 販売所 東京博物館	東京震災記念事業協会												○		封筒　中は空
37	10		（領収書）証　一　金三十六円也	1923	12	25	東京市馬喰町四丁目 栗田素一	伽屋達吉							○							金庫代
37	11		栗田鑒製第八号金庫開閉説明書				栗田金庫店	伽屋達吉					○									
37	12		（案内；帝都復興について）	1923	12		帝都復興進合評議会会長　阪谷芳郎						○									
37	13		（案内；震災記念堂竣工）				東京震災記念事業協会会長 永田秀次郎						○									
37	14		（陳列品リスト）	1923	12										○							
37	15		（寄附金者名簿）	1930	8		東京震災記念事業協会								○							
37	16		震災消失区域明細　東京市全図	1923	9	26	発行・印刷者　山口彌一　発行；東京情報社														○	地図
37	17		出勤簿在中　昭和三年十一月分迄	1923	9		東京震災記念事業協会								○							
37	18		整理簿　大正十二年度　何部隊	1928			東京震災記念事業協会								○							
37	19		（広報）体育振興	1923			東京市役所　社会教育課						○									
37	20		非災第2号				非常災害事務総務部						○									
37	21		（封筒）被服廠跡　震災記念　供養塔建設費寄捨袋	1923	9	7	震災記念供養塔建設協賛会														○	7枚あり
37	22		報告に併せ依頼				震災記念供養塔建設協賛会						○									托鉢、勧募帳並に喜捨袋について　2枚あり
37	23		（寄附金募集）	1926	3		仏教連合会						○									各宗派代表12名の名前記載
37	24		勧募に就て御承知仰ぎ置きたき事ども	1926	3	15	震災記念供養塔建設協賛会						○									
37	25		（ポスター）被服廠供養堂建立大勧進	1926	3		東京府内各宗寺院														○	
37	26		（封筒）震災記念館	1926	3	16	日本水道衛生工事株式会社東京支店	震災記念館													○	金属製プレート在中
37	27		指定寸法一覧表				製鉄所販売部						○									
37	28		震災記念堂置物並記念章　受領書綴												○							
37	29		（封筒）				大竹忠	東京都震災記念堂協会									○					中身なし
37	30		（封筒）				上野公園東京科学博物館	東京都震災記念堂協会									○					中身なし
37	31		（葉書）														○					16枚あり
37	32		（案内状）	1942	10												○					
37	33		（賞与通知）				東洋汽船株式会社美洋丸通信士　松澤義治	神奈川県知事　安河内麻吉									○					
37	34		（関東震災二十周年）	1943	8	4		東京市復興記念館									○					
37	35		（御札）南無日蓮大菩薩鎮座攸	1924	8	31	安房国　小湊山								○							
37	36		東京都復興記念館　戦災関係資料仮目録書												○							
37	37		（文集）大正十二年度　震災記念綴方　第一学年男組																		○	
37	38		領収証　金一萬也		1	25									○							

ケース番号	資料番号	枝番	資料名	年	月	日	発行主体	宛先	公刊資料						内部資料						その他	備考
									書籍	雑誌	写真帖	新聞	パンフレット	絵画類（印刷物）	帳簿・各種証明書類	ノート・メモ	手紙・書簡	写真帖	絵画類（手描）	図面		
37	39		（目録）関東大震災参考品目録												○							
37	40	1	震災復興記念館寄附出品申込書	1931	7	9	薄井藤蔵	東京震災記念事業協会							○							
37	40	2	※（図面）震災復興記念館	1930	9															○		玄関・事務室など　1/20
37	41	1	工事竣工報告書	1930	4	17	東京市土木局建築課	戸田利兵衛							○							
37	41	2	※設計書　震災復興記念館新築工事				東京市土木局建築課													○		
37	42		寄贈画整理表	1925	8	12	東京震災記念事業協会								○							ビニール袋入り
37	43		（往復葉書返信）					東京震災記念事業協会							○							多数の葉書を束ねて一括
37	44		（封筒）昭和二年度収支関係書　自昭和二年四月至昭和二年九月	1927			東京震災記念事業協会								○							多数の封筒を束ねて一括
37	45		（封筒）六月中収支関係書	1927			東京震災記念事業協会								○							封筒入り
37	46		（封筒）七月中収支関係書	1927			東京震災記念事業協会								○							封筒入り
37	47	1	（封筒）記念堂事務所　加藤様												○							封筒入り
37	47	2	※東京震災記念堂電燈照明器具設備工事電燈照明器具図案																	○		縮尺二十分の一
37	48		報知新聞号外	1931	11	19	報知新聞社					○										
37	49		震災記念写真集調製ノ件	1928	3		紙と印刷　土生井喜太郎	東京震災記念事業協会							○							
37	50		東京大震火災記念堂内陳列物募集	1927	5		東京震災記念事業協会						○									
37	51		震災復興記念館資料寄贈出品申込書	1931	7	9	薄井藤蔵	東京震災記念事業協会							○							衣服など
37	52	1	（封筒）												○							
37	52	2	※震災記念堂新築工事第三回検査調書	1931	4	6		東京震災記念事業協会								○							
37	52	3	※震災記念堂新築工事第二回検査調書	1931	3	14		東京震災記念事業協会								○							
37	52	4	※支出科目　昭和五年度臨時部　震災復興記念館費工事費建築費　金拾壱万五千円也				東京震災記念事業協会								○							
37	52		収支調書及現在資金調書一覧之件	1929	10	3	東京震災記念事業協会								○							
37	53		支部収入計算簿												○							
37	54		（封筒）昭和四年十二月分収支調書				東京震災記念事業協会								○							封筒内に多数資料あり
37	55		収支調書及現在資金調書一覧之件	1930	1	22									○							
37	56		帝都の復興を祝して　関屋敏子独唱会　日本歌謡とイタリアオペラ																		○	折り込み広告
37	57	1	（封筒）震災記念資料及帝都復興展覧会関係												○							封筒内に多数資料あり
37	57	2	※帝都復興展覧会出品報告書				帝都復興展覧会準備委員会								○							帝都復興展覧会出品物総括表　東京市陳列室（一階）見取図　帝都復興展覧会出品物事項別分類
37	58	1	（封筒）作成仕様書入												○							封筒内に多数資料あり
37	58	2	※震災記念館新築工事変更設計仕様書												○							
37	59	1	（封筒）昭和四年弐月中　収支調書及現在資金				東京震災記念事業協会								○							封筒内に多数資料あり
37	59	2	※東京震災記念堂一部第三図試作物営造直営工事竣功並ニ精算報告書	1928	4	5		建築部庶務部							○							
37	60		（封筒）褒賞条例関係書類												○							封筒内に多数資料あり
37	61	1	（封筒）青陽社伝票其他												○							封筒内に多数資料あり
37	61	2	※納品書		8	31	青陽社	記念堂監督事務所							○							
37	62	1	（封筒）震災死亡者調査関係書類				東京震災記念事業協会								○							封筒内に多数資料あり
37	62	2	※昭和二年六月三十日現在　組合員名簿	1927			東京紙商同業組合								○							
37	63	1	（封筒）昭和四年五月　理事会議案	1929	5		東京震災記念事業協会								○							封筒内に多数資料あり
37	63	2	※震災記念事業協会沿革	1929	5	29	東京震災記念事業協会								○							
37	64	1	（封筒）												○							
37	64	2	※動物掛												○							
37	65		児童生活　第二巻第四号	1929			財団法人日本児童遊園協会								○							
37	66		大鳥の旅	1930	5	24	緑の会								○							
37	67	1	（封筒）昭和五年一月中収支綴				東京震災記念事業協会								○							封筒内に多数資料あり
37	67	2	※収支調書及現在資金調書一覧之件	1930	2	2	東京震災記念事業協会								○							
37	68		（封筒）昭和二年四月中収支関係書				東京震災記念事業協会								○							封筒内に多数資料あり
37	69	1	（封筒；仏進寄付台帳目録ほか）												○							封筒内に多数資料あり
37	69	2	※昭和六年度寄付台帳目録綴												○							
37	70	1	（封筒）震災復興記念館陳列ケース仕様書類												○							封筒内に多数資料あり

ケース番号	資料番号	枝番	資料名	年	月	日	発行主体	宛先	公刊資料						内部資料						その他	備考
									書籍	雑誌	写真帖	新聞	パンフレット	絵画類（印刷物）	帳簿・各種証明書類	ノート・メモ	手紙・書簡	写真帖	絵画類（手描）	図面		
37	70	2	※震災復興記念館銅製陳列ケース工事												○							
37	71		（封筒）仕様書其他原稿書類入												○							封筒内に多数資料あり
37	72	1	（封筒）秘　往復文書　三月				東京震災記念事業協会								○							封筒内に多数資料あり
37	72	2	※秘　往復書類　現場				東京震災記念事業協会								○							
37	72	3	※東京震災記念堂建築工事費調書				東京震災記念事業協会								○							
37	72	4	※電気工事概算書類				東京震災記念事業協会								○							
37	72	5	※東京震災記念堂電燈工事ノ内残工事概算調書				東京震災記念事業協会								○							
37	73		仮図工事書類一件				東京震災記念事業協会								○							
37	74		震災記念堂事務所新築設計仕様書				東京震災記念事業協会								○							
37	75		（納骨堂建設勧募の件）														○					寄附者名一覧あり
37	76	1	（震災十八周年記念祭礼状）	1941	8	27	市民局長 前田賢次										○					
37	76	2	※震災記念祭当日事務分担				東京震災記念事業協会									○						
37	77	1	議事日程												○							
37	77	2	※震災災復興記念館建設ニ関スル件												○							
37	77	3	※震災復興記念館建設計画案												○							
37	78	1	（封筒）贈呈　始政四十周年記念　台湾博覧会				台湾博覧会協賛会								○							封筒内に資料あり
37	78	2	※始政四十周年記念台湾博覧会概要				台湾博覧会事務局						○									
37	78	3	※要覧				満州資源館						○									
37	78	4	※始政四十周年記念台湾博覧会会場案内				台湾博覧会事務局						○									
37	78	5	※満州と日本	1935									○									
37	79		（封筒）東京都江東区本所 震災記念館事務所御中	1927											○							封筒内に資料あり
37	80		関東大震災記	1923			東京朝日新聞社		○													
37	81		請求書綴	1926	10	1	東京震災記念事業協会								○							
37	82		寄付金送付簿（被）	1924	9										○							
37	83		（封筒）帝都復興祭関連準備書	1930											○							封筒内に資料あり
37	84		東京震災記念事業協会御中 御返事	1930	3	9	田代ニ見	東京震災記念事業協会									○					
38	1	1	（封筒）昭和三年一月　収支調書	1928											○							封筒内に多数資料あり
38	1	2	※大正十五年拾月起 郵便切手同はがき受払簿	1926			東京震災記念事業協会								○							
38	1	3	※復興記念館出品目録	1931	8										○							仮陳列目録
38	1	4	※収支帳簿及現在資金調書一覧件	1928	2		東京震災記念事業協会								○							
38	1	5	※寄付金収入ノ件	1928	1	10	東京震災記念事業協会								○							
38	2	1	（封筒）昭和四年度六月中 収支調書 現在資金調書 在中	1929	6		東京震災記念事業協会								○							封筒内に多数資料あり
38	2	2	※収支調書及現在資金調書一覧之件	1929	7	4	東京震災記念事業協会								○							
38	3	1	（封筒）重要書類入				東京震災記念事業協会								○							封筒内に多数資料あり
38	3	2	※（東京市方面委員嘱託状）				東京市								○							
38	3	3	※震災復興記念資料寄贈出品申込書				東京震災記念事業協会								○							
38	3	4	※東京市産業関係団体便覧	1930	1		東京市役所		○													
38	3	5	※仏連台帳索引				東京震災記念事業協会								○							
38	3	6	※東京市町村会事業概要	1928	3	27	東京市役所		○													
38	4	1	（封筒）昭和四年度七月中　収支調書　現在資金調書在中	1929	7		東京震災記念事業協会								○							
38	4	2	※収支調書及現在資金調書一覧之件	1929	8	5	東京震災記念事業協会								○							
38	4	3	※仏教連合会関係寄付金　自四月一日至十二月末日　収入	1928	1	16	東京震災記念事業協会								○							
38	4	4	※直接取扱寄付金収入一覧ノ件	1928	1	28	東京震災記念事業協会								○							
38	5	1	（封筒）霊名簿関係書類				東京震災記念事業協会								○							封筒内に多数資料あり
38	5	2	※中華民国名士寄贈書画展覧会に就て	1929	8										○							
38	5	3	※（書簡）中華民国名士書画展覧即売に就て	1929	8		東京震災記念事業協会										○					
38	5	4	※大震火災記念事業の為めに　中華民国名士寄贈書画展覧　記念品募集				東京市						○									
38	6	1	（封筒）震災復興記念館設備ニ関スル件												○							封筒内に多数資料あり
38	6	2	※東京震災記念事業協会設立趣意書及寄付行為												○							
38	7		（封筒）昭和四年三月中 収支調書	1929											○							封筒内に多数資料あり
38	8		東京大震火災遭難者氏名調査	1927			東京市								○							募集掲示（締切：1927年4月末日）
38	9		記念堂建設図案募集照会書類	1924	3		東京震災記念事業協会								○							
38	10		仏連振替ニ関スル未整理書類	1926	12		東京震災記念事業協会								○							
38	11		寄附申込書綴	1924	8		東京震災記念事業協会								○							
38	12		即納ニ関スル書類綴	1925	4		東京震災記念事業協会								○							
38	13		設計書　件名　震災記念堂附属事務室伝統設備工事				東京震災記念事業協会								○							

ケース番号	資料番号	枝番	資料名	年	月	日	発行主体	宛先	公刊資料						内部資料						その他	備考
									書籍	雑誌	写真帖	新聞	パンフレット	絵画類（印刷物）	帳簿・各種証明書類	ノート・メモ	手紙・書簡	写真帖	絵画類（手描）	図面		
38	14		震災記念堂庭園内公衆便所新築工事竣工検査調書便覧支払ノ件	1931	8	11	東京震災記念事業協会								○							
38	15		請求書	1930	6	28	増田英治	東京震災記念事業協会長							○							
39	1		東京復興事業一覧図																		○	地図
39	2		（封筒）（報告書作成材料）　被服廠ニ関スル記録												○							
39	3		バラック（阿久仁氏ヨリ聴ク）				東京震災記念事業協会									○						
39	4		（寄附感謝状）	1927			東京震災記念事業協会 会長 西久保弘道								○							
39	5		振替貯金受払通知表 第76号	1926	9	30									○							
39	6		（封筒）												○							震災遭難者霊名簿他多数在中
39	7		天覧震災記念物調書				東京震災記念事業協会								○							
39	8		震災記念堂御巡幸奉迎者調				東京震災記念事業協会								○							
40	1		（封筒：震災記念堂工事関連）												○							25冊　封筒内に多数資料あり
40	2		（図面：震災記念堂工事関連）																	○		多数あり
40	3		衛生陶器工事用図面				東洋陶器株式会社		○													
41	1		寄附募集植物表										○									
41	2		東京震災記念堂附帯庭園植物寄附申込書				東京震災記念事業協会								○							
41	3		東京市公報　Vo.1986	1931	7	7	東京市役所			○												震災復興記念館由来など掲載
41	4		東京市公報　特別号	1928	12	13	東京市役所			○												
41	5		教育研究紀要特別号(第二輯)　震災と教育	1925	3		横浜市教育研究会			○												
41	6		帝都復興ノ議　後藤内務大臣提案	1923	9	4	後藤新平		○													1923年9月6日午前閣議ニ供覧　3部あり
41	7		清浦首相ニ呈スルノ書（草案）	1924	1	8	後藤新平		○													
41	8		震災被害並救護施設の概況	1924	3	31	臨時震災救護事務局		○													
41	9		愛国婦人会震災救護施設概要	1923	11		愛国婦人会本部		○													
41	10		関東地方震災救護概要				北海道庁		○													
41	11		震災関係法令集追録（自大正十二年十二月一日 至大正十三年十一月三十日	1923			日本銀行調査局		○													
41	12		震災関連法令集（自大正十二年九月一日 至大正十二年十一月三十日）						○													
41	13		震災ノ影響（其ニ）　農業				復興局経理部		○													
41	14		震災ノ影響（其三）　労銀				復興局経理部		○													
41	15		震災ノ影響（其四）　運輸　交通				復興局経理部		○													
41	16		帝都復興院事務経過（秘）	1924	3		復興局		○													
41	17		復興事業ノ梗概（大正十三年十二月末日現在）	1925	1		復興局		○													
41	18		東京市震災復旧事業梗概	1925	3		東京市復興総務部		○													
41	19		大正三年度 復興局技術試験所報告　第ニ部（技術試験成績）　第三篇				復興局技術試験所		○													
41	20		震災軽減の方策を講ぜよ				日本建築協会々長　工学博士　片岡安		○													『建築と社会』第十輯第四号抜刷
41	21		帝都ノ制度ニ関スル意見				東京市政調査会		○													
41	22		都市教育改善ニ関スル意見（文部大臣ニ提出ノ分）				東京市政調査会		○													
41	23		都市庶民金融改善ニ関スル意見				東京市政調査会		○													
41	24		都市教育改善ニ関スル意見（六大市長ニ提出ノ分）				東京市政調査会		○													
41	25		東京中央卸売市場位置選定に関する意見				東京市政調査会		○													
41	26		公益質舗ニ関スル参考法律案				東京市政調査会		○													
41	27		六大都市計画区域面積、人口調				帝都復興院計画局		○													
41	28		東京横浜　地域制				帝都復興院計画局		○													
41	29		東京横浜　都市計画区域				帝都復興院計画局		○													
41	30		本邦経済統計	1924	5		日本銀行調査局		○													
41	31		横浜商工業の復興状況	1926	4	25	横浜商業会議所		○													
41	32		下部温泉配達広告				下部温泉配達所						○									4点あり
41	33		鉄道省線汽船発時刻表																		○	時刻表　4点あり
41	34		東京震災記念堂図集										○									6点あり
41	35		東京震災記念事業協会設立趣意書				東京震災記念事業協会						○									3点あり
41	36		東京震災記念事業協会 事業沿革及現状概要										○									5点あり
41	37		東京震災記念事業協会設立趣意書及寄附行為										○									6点あり
41	38		大正震災記念建造物競技設計図録				東京震災記念事業協会						○									8点あり
41	39		被服廠跡 震災記念堂概要	1930	9	1	東京市役所						○									3点あり
41	40		東京震災記念堂										○									

ケース番号	資料番号	枝番	資料名	年	月	日	発行主体	宛先	公刊資料						内部資料						その他	備考
									書籍	雑誌	写真帖	新聞	パンフレット	絵画類（印刷物）	帳簿・各種証明書類	ノート・メモ	手紙・書簡	写真帖	絵画類（手描）	図面		
41	41		震災記念堂										○									
41	42		震災記念堂附帯庭園設備に付　植物の御寄附を募ります	1929	3		東京震災記念事業協会						○									
41	43		An Outline of The Earthquake Memorial Temple				TOKYO MUNICIPALITY						○									
41	44		震災記念堂　弔霊鐘由来				東京震災記念事業協会						○									
41	45		正記念章配達証明綴　第四号				東京震災記念事業協会								○							
41	46		正記念章配達証明綴　第弐号				東京震災記念事業協会								○							
41	47		正記念章配達証明綴　第壱号				東京震災記念事業協会								○							
41	48		振替貯金　払込通知票綴				東京震災記念事業協会								○							
42	1		大正大震災記	1923	12	2	時事新報社		○													
42	2		大正大震火災の思ひ出	1941	9	1	東京市役所		○													
42	3		東京市職員録　昭和十五年九月一日現在	1940	12	12	東京市役所　人事課		○													
42	4		婦人公論　秋季特別号　自然の反逆号　第八巻第十一号	1923	10					○												
42	5		婦人世界　十一月増大号　災厄に処する女性　第十八巻第十一号	1923	11	7	実業之日本社			○												
42	6		風俗画報　臨時増刊　江戸乃花　上編　第百7拾九号	1898	12	25	東陽堂			○												
42	7		新青年　帝都復興号　第四巻第十三号	1923	11		博文館			○												
42	8		主婦之友　十月号　東京大震火災画報	1923	10		主婦之友社			○												
42	9		科学画報　大震災号　第一巻第七号	1923	10	1	新光社			○												
42	10		科学知識　震災記年号	1924	9	1	科学知識普及会			○												
42	11		婦人画報 大震火災画報 第二百十六号	1923	10	1	東京社			○												
42	12		婦人世界　第十八巻第十号　大震災写真画報	1923	10	8	実業之日本社			○												表紙に名刺添付（高橋音次郎）
42	13		婦人公論　女流懇話会号　第八巻第十二号	1923	11	1	中央公論社			○												
42	14		婦女界　関東大震災写真実記	1923	10	8	婦女界社			○												
42	15		婦人倶楽部　第四巻第十一号	1923	11	1	大日本雄弁会			○												
42	16		女性　第四巻第五号	1923	11	1	プラトン社			○												
42	17		女性　第四巻第四号	1923	10	1	プラトン社			○												
42	18		婦人世界　十月特別号　大震災写真画報　第八巻第十号	1923	10		実業之日本社			○												
42	19		主婦之友　震災後日物語号	1923	11		主婦之友社			○												
42	20		帝都復興叢書　大詔を拝して　第一輯	1923	12	25	東京市		○													東京市長　永田秀次郎述　法学博士　穂積重遠述
42	21		自警　第六巻第五十九号	1924	7	10	自警会			○												
42	22		社会政策時報　震災号　第三十八号	1923	11	1				○												
42	23		庭園と風景　テラコッタ号　第十一巻第四号				日本庭園協会			○												
42	24		地形交通網番地明細　史跡名勝紀念物　大東京図説明書	1936			東京文理科大学 田中啓爾 藤本治義 監修 地人社		○													エクスカーションマップ（其十九）
42	25		昭和十五年度　参考品中　図書類調書				逓信博物館		○													
42	26		一千九百二十三年九月東京に於ける大地震による大火災	1925	2	15	中村清二 東京帝国大学理学部会		○													東京帝国大学理学部会パンフレット第二輯
42	27		九月一日　この日を思へ	1933	4	23	東京市役所		○													
42	28		世の妻に	1927	12		小島八郎		○													
42	29		現代　第四巻第十一号	1923	11	5	大日本雄弁会			○												
42	30		自警　第五巻第五十号	1923	10	10	自警舎			○												
42	31		新青年　大震災記念号　第四巻十二号	1923	9	10	博文館			○												
42	32		（絵画：震災記念堂）																○			
42	33		青年　大震災号　第八巻第十号	1923	10		日本青年館			○												
42	34		震災の思ひ出	1927	6	13	宮音松		○													
42	35		震災哀話	1923	11	5	榎本松之助 榎本書房		○													
42	36		震災殃死者及び文化を追悼す　復興即供養	1924	9	1	自彊会		○													
42	37		大正十二年九月東京火災動態略図	1924	12		中村清二														○	地図
42	38		震災記念おとぎ歌舞伎　閻魔裁判舷哥抜	1924	9	1	厳谷小波 読売新聞社		○													
42	39		ポッチャン増刊　大正大震災号　第六巻第四号	1923	10	11	一星社			○												
42	40		大正十二年　東京大震災写真画帖	1923	9		文光堂				○											
42	41		婦女界　十月号特別附録　実用本位　編物三十種	1923	10	8	婦女界社			○												
42	42		実業之日本　大災突破号　第二十六巻第二十一号	1923	12	1	実業之日本社			○												
42	43		特許　田島式　スタンダードロッカー										○									
42	44		特許　不二サッシ　特許大野式シャッター	1930	6	9	大野製作所						○									
42	45		思想　第二十五号	1923	11		岩波書店			○												
42	46		東京の博物館　附　動・植物園	1935	12	2	東京市設案内所		○													
42	47		今後の地震　関東地震地帯の研究	1924	9	1	国民新聞自身予防調査隊主任 中村左衛門太郎 民友社		○													

ケース番号	資料番号	枝番	資料名	年	月	日	発行主体	宛先	公刊資料						内部資料						その他	備考
									書籍	雑誌	写真帖	新聞	パンフレット	絵画類（印刷物）	帳簿・各種証明書類	ノート・メモ	手紙・書簡	写真帖	絵画類（手描）	図面		
42	48		文章倶楽部　凶災の印象　東京の回想　改訂版第八年十号	1923	10	13	新潮社			○												
42	49		写真雑誌　CAMERA　大震災写真号（目次）	1923	10	1	アルス			○												
42	50		関東大震災記				東京朝日新聞社		○													
42	51		震災記念館陳列品説明書				横浜市震災記念館						○									
42	52		家庭雑誌 震災と火災　第九巻第十号	1923	10					○												
42	53		震災後に於ける　児童保護事業概況　其二　No.2	1924	3		東京市社会局		○													
42	54		大正大震災の思い出	1941	9	1	東京市役所		○													
42	55		昭和五年度版　土木建築　総合カタログ				建材之知識社						○									
42	56		但馬式ロールスクリーン　児童捲上式虫除網　カタログNo.2	1930			日本ハードウエアー株式会社						○									
42	57		ST式通風日除				田島工業株式会社						○									
42	58		模型型録　附　最近納入品一覧表	1933	11		斎藤模型製作所						○									
42	59		震災之思ひ出	1940	9	1	東京市役所		○													
42	60		博物館研究	1933－35			日本博物館協会			○												第六巻第7～10号、第七巻第1～5、7～8、10～12号、第八巻第1～5号
42	61		被服廠跡震災記念供養塔建設寄付名簿				震災記念供養塔建設協賛会								○							2点あり
42	62		関東大震災資料						○													
42	63		（ノート）大正拾五年拾二月													○						
42	64		女性改造　大震災記念号　第二巻第十号	1923	10	1	改造社			○												
42	65		賜天覧　写真通信　続大震災記念号	1923	10		大正通信社			○												
42	66		第一回土木建築資料総覧						○													
43	1		予算差引簿　昭和二年度	1928			東京震災記念事業協会								○							
43	2		予算差引簿　昭和三年度	1929			東京震災記念事業協会								○							
43	3		予算差引簿　昭和四年度	1930			東京震災記念事業協会								○							
43	4		予算差引簿　昭和五年度	1931			東京震災記念事業協会								○							
43	5		予算差引簿				東京震災記念事業協会								○							
43	6		予算差引簿				東京震災記念事業協会								○							
43	7		振替貯金計算簿				東京震災記念事業協会								○							
43	8		東京震災紀年納骨堂寄附金台帳No1				仏教連合会本部								○							
43	9		振替整理簿				東京震災記念事業協会								○							
43	11		陳列品整理簿				東京市市民局公園課								○							2冊あり
44	1		歳入内訳簿　昭和二年度	1928			東京震災記念事業協会								○							2冊あり
44	2		歳入内訳簿　昭和三年度	1929			東京震災記念事業協会								○							
44	3		歳入内訳簿　昭和四年度	1930			東京震災記念事業協会								○							
44	4		歳入内訳簿　昭和五年度	1931			東京震災記念事業協会								○							
44	5		歳入内訳簿				東京震災記念事業協会								○							
44	6		入場券整理簿　昭和十一年度	1937			復興記念館								○							
44	7		入場券整理簿　昭和十二年度	1938			復興記念館								○							
44	8		入場券整理簿　昭和十三年度	1939			復興記念館								○							
44	9		収入金整理簿　昭和十一年度	1937			復興記念館								○							2冊あり
44	10		収入金整理簿　昭和十一年度	1938			震災記念堂								○							
44	11		収入金整理簿　昭和十二年度	1938			復興記念館								○							
44	12		備品消耗品整理簿												○							
45	1		THE RECONSTRUCTION OF TOKYO	1933	3	31	TOKYO MUNICIPAL OFFICE（東京市役所）		○													3冊あり
45	2		東京震災録 前輯	1926	3	31	東京市役所		○													3冊あり
45	3		THE GREAT EARTHQUAKE OF 1923 IN JAPAN（日本震災史）	1927	4	20	内務省社会局　丸善株式会社発行		○													7冊あり　丸善謹呈
46	1		被服廠跡	1932	3	31	東京震災記念事業協会		○													38冊あり
47	1		被服廠跡	1932	3	31	東京震災記念事業協会		○													37冊あり
48	1		被服廠跡（小冊子）	1932	5	31	東京震災記念事業協会		○													198冊あり
48	2		被服廠震災記念堂概要				東京震災記念事業協会						○									黒の台紙に添付「和文一枚一銭」とメモ書きあり
49	1		被服廠跡（小冊子）	1932	5	31			○													223冊あり
50	1		被服廠跡（小冊子）	1932	3	31	東京震災記念事業協会		○													225冊あり
50	2		日蓮門下統合会会員名簿　趣旨及会則	1932					○													裏表紙にメモあり
51	1		地震	1932－44			東京帝国大学理学部地球物理学教室内　地震学会			○												第4巻第4～8、10～12、第5巻第1～5号、第12第1～12号、第13巻第1～2、4～12号、第14巻第1、3～12号、第15巻第2～6号

ケース番号	資料番号	枝番	資料名	年	月	日	発行主体	宛先	公刊資料						内部資料						その他	備考
									書籍	雑誌	写真帖	新聞	パンフレット	絵画類（印刷物）	帳簿・各種証明書類	ノート・メモ	手紙・書簡	写真帖	絵画類（手描）	図面		
51	2		東京市公園概況				東京市						○									184冊あり
51	3		公園六十年				東京市						○									216冊あり
51	4		被服廠跡（小冊子）	1932	5	31			○													
51	5		科学の台湾　金爪石鉱山特輯号	1936	12		台湾博物館協会			○												
52	1		帝都復興事業史　土木篇　上巻	1931	3	31	復興事務局編		○													
52	2		帝都復興事業史　土木篇　下巻	1931	3	31	復興事務局編		○													
52	3		帝都復興事業史　建築篇　公園篇	1931	3	31	復興事務局編		○													
52	4		帝都復興事業史　緒言・組織及法制篇	1931	3	31	復興事務局編		○													
52	5		帝都復興区画整理誌　第一編　帝都復興事業概観				東京市役所		○													
52	6		帝都復興区画整理誌　第二篇　総説				東京市役所		○													
52	7		帝都復興区画整理誌　第三篇　第一				東京市役所		○													
52	8		帝都復興区画整理誌　第三篇　第二				東京市役所		○													
52	9		帝都復興区画整理誌　第三篇　第三				東京市役所		○													
53	1		THE GREAT EARTHQUAKE OF 1923 IN JAPAN	1927	4	20	THE BUREAU OF SOCIAL AFFAIRS HOME OFFICE JAPAN		○													8冊あり
53	2		COMPANION MAPS AND DIAGRAMS TO THE GREAT EARTHQUAKE OF 1923 IN JAPAN				THE BUREAU OF SOCIAL AFFAIRS HOME OFFICE JAPAN		○													16冊あり
54	1		東京震災録　前輯	1926	3		東京市		○													
54	2		東京震災録　中輯	1926	3		東京市		○													2冊あり
54	3		東京震災録　後輯	1926	3		東京市		○													
54	4		東京震災録　別輯	1927	3		東京市		○													2冊あり
54	5		東京震災録　写真帖及附図	1926	3		東京市		○													2冊あり
54	6		帝都復興事業大観　上巻	1930	3		東京市政調査会監修　日本統計普及協会編		○													2冊あり
54	7		帝都復興事業大観　下巻	1930	3		東京市政調査会監修　日本統計普及協会編		○													2冊あり
55	1		地質調査所特別報告第一号　関東地震調査報告　第一				農商務省		○													
55	2		地質調査所特別報告第二号　関東地震調査報告　第二				商工省		○													
55	3		大正十二年　大正大地震　震害調査報告　第一巻				土木学会		○													
55	4		大正十二年　大正大地震　震害調査報告　第二巻				土木学会		○													
55	5		大正十二年　大正大地震　震害調査報告　第三巻				土木学会		○													
55	6		関東地方　震火災金品義捐者名簿（金員）				愛知県		○													
55	7		関東地方　震火災金品義捐者名簿（物品）				愛知県		○													
55	8		震災予防調査会報告　第百号（甲）				震災予防調査会		○													
55	9		震災予防調査会報告　第百号（乙）				震災予防調査会		○													
55	10		震災予防調査会報告　第百号（丙）上				震災予防評議会		○													
55	11		震災予防調査会報告　第百号（丙）下				震災予防評議会		○													
55	12		震災予防調査会報告　第百号（丁）				震災予防評議会		○													
55	13		震災予防調査会報告　第百号（戊）				震災予防調査会		○													
55	14		増訂　大日本地震史料　第一巻				文部省震災予防評議会		○													
55	15		増訂　大日本地震史料　第二巻				文部省震災予防評議会		○													
55	16		増訂　大日本地震史料　第三巻				文部省震災予防評議会		○													
56	1		大正震災志　上	1926	2	25	内務省社会局		○													
56	2		大正震災志　下	1926	2	25	内務省社会局		○													
56	3		関東地方震災救援誌	1924	12	20	大阪府		○													
56	4		東京府大正震災誌	1925	5	5	東京府		○													
56	5		改造社　大正大震火災誌	1924	5	31	改造社		○													
56	6		大正大震火災誌　警視庁	1925	7	31	警視庁		○													
56	7		静岡県大正震災誌	1924	9	30	静岡県		○													
56	8		大正震災美績	1924	9	1	東京府		○													
57	1		大正大震災の図面と其の復興　上巻	1933	8	1	千葉県罹災救護会		○													
57	2		大正大震災の図面と其の復興　下巻	1933	8	1	千葉県罹災救護会		○													
57	3		帝都復興事業概観	1928	3	31	復興局 東京市政調査会		○													
57	4		帝都復興秘録	1930	3	22	東京市政調査会編 寶文館発行		○													
57	5		Rebuilding Japan OUR WORLD JAPAN NUMBER	1924	4					○												
57	6		The American City Vol.XXXVⅡ No.3	1927	9					○												
57	7		THE CONDENSED REPORT OF THE SOCIETY FOR EMERGENCY WORK OF THE GREAT EARTHQUAKE	1927	11	5	TOKYO		○													

ケース番号	資料番号	枝番	資料名	年	月	日	発行主体	宛先	公刊資料						内部資料						その他	備考
									書籍	雑誌	写真帖	新聞	パンフレット	絵画類（印刷物）	帳簿・各種証明書類	ノート・メモ	手紙・書簡	写真帖	絵画類（手描）	図面		
57	8		経済復興に関する諸研究　経済資料　第拾巻第壱号	1924	1	1	南満州鉄道株式会社 東亜経済調査局			○												2冊あり
57	9		OUR WORLD JAPAN'S REBUILDERS	1923	10		ＴＨＥ　ＨＯＵＳＴＯＮ PUBLISHING COMPANY			○												
57	10		大震災臨時救療誌	1924	12	15	済生会		○													
57	11		大正震災志附図	1926	2	28	内務省社会局		○													
57	12		関東震災地復旧測量記事	1930	2		陸地測量部		○													
57	13		経済資料　第九巻　第拾・拾壱・拾弐号	1923	12	10	南満州鉄道株式会社 東亜経済調査局		○													
57	14		東京市復興事業概要	1926	12		東京市役所		○													
57	15		THE OUTLINE OF THE RECONSTRUCTION WORK IN TOKYO AND YOKOHAMA（AN OFFICIAL REPORT）	1929	10	28	Ｔｈｅ　Ｂｕｒｅａｕ　ｏｆ Reconstruction and the Tokyo Instiute for Municipal Reserch		○													
57	16		復興事業関係例規集	1927	6		復興局		○													
57	17		図録　大震から復興への実状	1924	9	1	中外商業新報社		○													
57	18		アメリカン アーキテクト（記事）千九百十二年（上下）	1912																	○	記事スクラップ
57	19		元町公園案内				東京市役所						○									
57	20		中和公園案内				東京市役所						○									
57	21		若宮公園案内				東京市役所						○									
57	22		練成公園案内				東京市役所						○									
57	23		十思公園案内				東京市役所						○									
57	24		久松公園案内				東京市役所						○									
57	25		月島第一公園案内				東京市役所						○									
58	1		日本赤十字社救護誌	1925	8	31	日本赤十字社		○													
58	2		東京市震災衛生救療誌	1925	8	5	東京市衛生課		○													
58	3		神奈川県震災衛生誌	1927	11	1	神奈川県衛生課		○													
58	4		東京震災記	1924	4	20	田山花袋　博文館		○													2冊あり
58	5		大正大震災　震害及火害之研究	1925	7	25	桑緒管財局編　洪洋社		○													
58	6		東京大地震記	1923			東京黒龍会編		○													
58	7		大正大震災大火災	1923	10	1	大日本雄弁会講談社		○													
58	8		震災美談	1924			中島司		○													
58	9		（文集）大震の日	1924	8	15	第一高等学校国漢文科編纂 六合館														○	
58	10		（文集）東京市立小学校児童　震災記念文集　尋常一年の巻	1924			東京市学務課編														○	序文：永田秀次郎
58	11		（文集）東京市立小学校児童　震災記念文集　高等科の巻	1924	9		東京市役所　培風館														○	
58	12		（文集）東京市立小学校児童　震災記念文集　尋常二年の巻	1924	9		東京市役所　培風館														○	
58	13		（文集）東京市立小学校児童　震災記念文集　尋常三年の巻	1924	9		東京市学務課編　培風館														○	
58	14		（文集）東京市立小学校児童　震災記念文集　尋常四年の巻	1924	9		東京市学務課編　培風館														○	
58	15		（文集）東京市立小学校児童　震災記念文集　尋常五年の巻	1924	9		東京市学務課編　培風館														○	
58	16		（文集）東京市立小学校児童　震災記念文集　尋常六年の巻	1924	9		東京市学務課編　培風館														○	
58	17		産婆　看護婦　関東震災殉難記	1930	10	30	大日本看護婦協会（代表者：栢植あい）　関東震災殉難記刊行所		○													
58	18		樽を机として	1923	12	21	増子菊善・酒井源蔵共著　誠文堂		○													
58	19		十一時五十八分　懸賞震災実話集	1930	3	10	刀禰館正雄　東京朝日新聞社		○													
58	20		東京大地震史	1923	9	30	朝倉義朗　日本書院		○													
58	21		大正震災後日物語	1924	1	10	春日靖軒　冨文館		○													
58	22		被服廠跡	1932	6	3	東京震災記念事業協会		○													
58	23		地震と震災　その原因と予防				朝日新聞社		○													
59	1		壁体及防火戸耐火試験報告書　第一輯　壁体之部 其一	1926	10		復興局建築部		○													
59	2		壁体及防火戸耐火試験報告書　第二輯　壁体之部 其二	1927	3		復興局建築部		○													
59	3		壁体及防火戸耐火試験報告書　第三輯　壁体之部 其三	1927	11		復興局建築部		○													
59	4		大正十二年　鉄道震害調査書	1923			鉄道省		○													

ケース番号	資料番号	枝番	資　料　名	年	月	日	発行主体	宛　先	書籍	雑誌	写真帖	新聞	公刊資料 パンフレット	絵画類（印刷物）	帳簿・各種証明書類	メモ・手紙・書簡	写真帖	絵画類（手描）	図面	その他	備　考
60	17		小袋　四東大震災大観　第五巻第十号	1923	10	1	博文館		○												
60	18		震災美術目録　大正十二年	1923			警視庁														ケース・図版多数掲載
60	19		大震災経済史	1933	8	13	国華商会新聞部		○												
60	20		大正十二年震災歌集　原稿集				ア ラ ラ ヤ築行所編　古今書院出版		○												
60	21		大震災と其教訓	1924	1	25	通俗教育書及会		○												題字：後藤新平
60	22		關東会　十月号　再版　四東大震災写真実記							○											
60	23		關東大震災　第十八巻第十号　十月特別号　大震災写真画報				關人世界社			○											
60	24		女学世界　十月号				博文館			○											
60	25		東京震災写真帖	1923	9	20	文山社				○										
60	26		青嵐随筆				永田彰文版著　散文創発行		○												
60	27		帝都　榊浜　川崎　復興記念号　下巻	1928	9	1	既仁誠信社（中外商日新聞社編）		○												
60	28		聖上陛下御巡幸記念　帝都復興美観						○												
60	29		特学知識　震災講荏号				特学知識普及会			○											
60	30		特学知識　震災復興号				特学知識普及会			○											
60	31		震災之日本　震災復興号	1923			実業之日本社			○											
60	32		関東大災害画報						○												
60	33		特学知識　震災記念号				特学知識普及会			○											
60	34		特学知識　震災号				特学知識普及会			○											
60	35		羽田町民の体験記集「関東大震災」				羽田地区町会連合会		○												
60	36		大震災印象記　大正ひとしおぶん						○												
60	37		大正十二年九月　帝都大正震火記録				警視庁消防部		○												
61	1		震災関係図書類																	○	焼失用キャプション（プラスチックケース入り）
61	2		大震災直後の惨禍を伝える国内各地の新聞																	○	焼失用キャプション
61	3		（御不幸ナル御方ヘ）													○					手紙断片
61	4		（消失新聞二十席）									○									新聞断片
61	5		（凄まじき地震　全焼した東京電燈）	1923	9		大阪朝日新聞					○									新聞断片
61	6		（松方公は卓子の下に）	1923	9	6	神戸又新日報社外					○									新聞断片
61	7		（災害地に赤ひげる 一切の債権債務及び貸借関係の無利息救済処置）	1923	9	7	帳簿新聞少刊					○									新聞断片
61	8		（全東京猛火に焼盡さる）	1923	9	3	神戸新聞					○									新聞断片
61	9		（木挽の疾行機は東京全市の大混乱を視察遊覧の為め出発した）	1923	9	3	大阪朝日新聞夕刊					○									新聞断片
61	10		（関東の大震災と救済の大評定）	1923	9	3	朝日新聞神戸版附録					○									新聞断片
61	11		地震地質図						○												封筒入り
61	12		東京市勢図表	1925	4		東京都		○												
61	13		写真　附録30枚並　1926－1955	1955	3		毎日新聞社			○											
61	14		大正震災慰安真帖	1926	2		内務省社会局				○										
61	15		震災記念堂及復興記念館								○										
61	16		復興公園写真									○									
61	17		錦糸公園				東京市役所						○								
61	18		東陽公園案内				東京市役所						○								
61	19		菊川公園案内				東京市役所						○								
61	20		横綱公園案内				東京市役所						○								
61	21		新井公園案内				東京市役所						○								
61	22		浄田公園案内				東京市役所						○								
61	23		隈田公園案内				東京市役所						○								
61	24		錦花公園案内				東京市役所						○								
61	25		船橋町公園案内				東京市役所						○								
61	26		小崎公園案内				東京市役所						○								
61	27		三河台公園案内				東京市役所						○								
61	28		中和公園案内				東京市役所						○								
61	29		富士公園案内				東京市役所						○								
61	30		千束公園案内				東京市役所						○								
61	31		浜町公園案内				東京市役所						○								
61	32		東京市復興公園概要				東京市役所						○								
61	33		錦糸公園案内				東京市役所						○								
60	1		復興局庇下東京罹災多角地区調査作業報告						○												
60	2		大正十二年大震災に於ける国有鉄道民営線路の業績				鉄道大臣官房保健課			○											
60	3		公園墓地関係条例	1926	5		東京市役所公園課			○											
60	4		赤坂区震災誌				東京市赤坂区役所			○											
60	5		東京市長永田秀次郎講演　復興に直面して				永田秀次郎			○											
60	6		大正大震災記念遺物銀装版計図録				東京震災記念事業協会			○											
60	7		横浜市復興概要	1931	6					○											
60	8		帝都復興事業誌　第一部　第一巻	1923			東京市役所			○											
60	9		震災と写真　第一回　復興予算記念出版寄入講義文				東京市政調査会			○											
60	10		震災記録写真帖（上巻）				東京都			○											
60	11		震災記録写真帖（下巻）				東京都			○											
60	12		第一回　復興予算記念出版寄入講義文				東京市政調査会			○											
60	13		震災のき徴を語る							○											
60	14		震災と木耳栽培工業　経済資料　第拾参第弐号	1924	2	20	青鵬月報震災会社　東亜経済調査局発行			○											
60	15		井泉水句集				荻原井泉水著　改造社出版			○											改造社文庫
60	16		大震災善後会報告書　全	1925	12	23	大震災善後会			○											

ケース番号	資料番号	枝番	資料名	年	月	日	発行主体	宛先	公刊資料						内部資料						その他	備考
									書籍	雑誌	写真帖	新聞	パンフレット	絵画類（印刷物）	帳簿・各種証明書類	ノート・メモ	手紙・書簡	写真帖	絵画類（手描）	図面		
61	34		玉姫公園案内				東京市役所						○									
61	35		御徒町公園案内				東京市役所						○									
61	36		臨海公園案内				東京市役所						○									
61	37		大正大震災誌				報知新聞		○													
61	38		関東震災写真記念帖								○											
61	39		業務研究資料　第十一巻第八号	1923	12		鉄道省　大臣官房研究所			○												
61	40		The Great Earthquake of S.E.Japan Akitsune Imamura	1923	9	25			○													
61	41		教育写真通信　資料　大震災記念号						○													
61	42		大震災写真画報　第三輯　週刊朝日臨時増刊号				大阪朝日新聞社			○												
61	43		（労作と役所）	1973	8	14	朝日新聞社				○											
61	44		柳田邦男「防災会議は何を防げるか」	1973	10		春秋社														○	雑誌論文コピー（『諸君！』所収）
61	45		500字提言　直下型地震と都市防災対策	1974	9																○	雑誌論文コピー（『近代消防』所収）
61	46		柳田邦男「"69年目"を予言した男」	1973	9		文芸春秋社														○	雑誌論文コピー（『文藝春秋』所収）
61	47		もし過密都市を襲ったら	1974	5	10	朝日新聞社				○											新聞切り抜き
61	48		安政江戸大地震の"予兆集"				毎日新聞社														○	雑誌記事コピー（『サンデー毎日』所収）
61	49		佐山守「江戸及びその付近に発生した古地震概説」	1973	11																○	雑誌論文コピー（『関東大震災60周年論文集』所収）
61	50		地震列島　第2部<8>　震災は人災　急げ！総合的防災体制	1973	9	1	朝日新聞社				○											新聞切り抜き（『朝日新聞』）
61	51		都"安政災害誌"発行	1973	5	19	読売新聞社				○											新聞切り抜き（『読売新聞』）
63	1		（避難者氏名カード）												○							4箱あり
63	2		（ケース）避難者氏名カード																		○	キャプションケース（プラスチック製）
64	1		（避難者氏名カード）												○							5箱あり
65	1		（避難者氏名カード）												○							6箱あり
66	1		（避難者氏名カード）												○							6箱あり
186	1		（展示品：金属片）	1931	9	1															○	溶解した金属片　木製ケース入り 解説文つき
186	2		（避難者カード）												○							
186	3		（展示品：金属片）																		○	溶解した金属の見本　木製ケース入り
186	4		（キャプション）																		○	避難者カードキャプション　プラスチック製のケース入り

復興記念館２階展示ケース内資料

ケース番号	資料番号	枝番	資料名	年	月	日	発行主体	宛先	公刊資料						内部資料						その他	備考
									書籍	雑誌	写真帖	新聞	パンフレット	絵画類（印刷物）	帳簿・各種証明書類	ノート・メモ	手紙・書簡	写真帖	絵画類（手描）	図面		
K1	1		案内所報　自大正十二年九月七日　至仝年仝月十七日				協調会情報案内所		○													
K1	2		震災日誌　大正十弐年九月起				東京市神田区役所		○													
K1	3		災害日誌				日本橋区役所		○													
K1	4		東京市震災後復旧状況（続）　第二一号	1925	1	15	東京市役所統計課		○													
K1	5		東京市ノ状況　東京市復興概要　第三十八号	1925	8	29	東京市役所統計課		○													
K1	6		東京市ノ状況　東京市ノ復旧概要　第五六号	1926	5	7	東京市役所統計課		○													
K1	7		東京市ノ状況　統計ヨリ見タル東京市ノ復興概況　第八二号	1928	1	18	東京市役所統計課		○													
K1	8		東京市震災後ノ復旧状況	1924	8	25	東京市役所統計課		○													
K1	9		増補　大震火災と水問題　附　帝都復興計画と鑿泉私見						○													
K1	10		震火災と法律問題　附　震火災関係諸法令	1923	12	5	清水書店		○													序文：法学博士　松本烝治　法学博士　末弘厳太郎
K1	11		震災に依る被害工場事情　第四報　秘	1923	1	28	協調会情報部		○													
K1	12		震災に依る被害工場事情　第三報	1923	10	8	協調会情報部		○													
K1	13		火災を起し易き薬品の格納法に関する注意書	1923	10	8			○													
K1	14		木造小学校建築耐震上ノ注意						○													
K1	15		家屋新築及び修理に関する耐震構造上の注意書				震災予防評議会		○													
K1	16		臨時震災救護事務局嘱託協議会報告書						○													
K1	17		災害情報　自乙第一号　至乙第四五				統計課		○													二冊之内一
K1	18		災害情報　自乙第一号　至甲第一〇〇号				統計課		○													
K1	19		災害情報　自甲第一〇一号　至甲一六七号				統計課		○													二冊之内二
K1	20		乙班　東京府情報綴	1923	10		東京博物館		○													
K1	21		乙班　外務省情報綴	1923	10		東京博物館		○													

ケース番号	資料番号	枝番	資料名	年	月	日	発行主体	宛先	公刊資料						内部資料						その他	備考
									書籍	雑誌	写真帖	新聞	パンフレット	絵画類（印刷物）	帳簿・各種証明書類	ノート・メモ	手紙・書簡	写真帖	絵画類（手描）	図面		
K1	22		乙班　統計綴				東京博物館		○													
K1	23		乙班参考資料蒐集綴	1923	10		東京博物館		○													
K1	24		東京市大震火災ノ火勢並消防概況	1923	9		警視庁消防部		○													
K2	1		日誌　大正十二年十二月十五日起	1923			緑尋常小学校									○						
K2	2		日誌　大正十三年二月二十六日起	1924			緑尋常小学校									○						
K2	3		日誌　自大正十二年九月五日 至仝年十月廿八日	1923			下谷区市立小学校長会									○						
K2	4		日誌　大正十二年度　九月以降	1923			柳島尋常小学校									○						
K2	5		日誌　大正十二年十一月一日起	1923			緑尋常小学校									○						
K2	6		当番日誌	1923			緑尋常小学校									○						
K2	7		（文集）三学年				東京市立横川尋常小学校														○	
K2	8		（文集）思ひ出　六女																		○	
K2	9		（文集）しんさいの思ひ出																		○	
K2	10		（文集）九月一日の思ひ出																		○	
K2	11		（文集）大震災遭難記　第一学年女一組				東京市立京橋尋常小学校														○	
K2	12		（文集）大震災遭難記　普通科第一学年				東京市立京橋尋常小学校														○	
K2	13		（文集）大震災遭難記　専攻科第二学年				東京市立京橋尋常小学校														○	
K2	14		（文集）大震災遭難記　第一学年男一組				東京市立京橋尋常小学校														○	
K2	15		（文集）大震災遭難記　専攻科第一学年				東京市立京橋尋常小学校														○	
K2	16		（文集）大震災遭難記　第二学年女一組				東京市立京橋尋常小学校														○	
K2	17		（文集）大震災遭難記　普通科第二学年				東京市立京橋尋常小学校														○	
K2	18		（文集）大震災遭難記　第二学年男一組				東京市立京橋尋常小学校														○	
K2	19		努力週間日記　男子第二学年	1927	9		東京市立京橋尋常小学校									○						
K2	20		努力週間日記　女子第二学年	1927	9		東京市立京橋尋常小学校									○						
K2	21		努力週間	1927	9		東京市京橋高等小学校									○						
K2	22		在学証明書	1924			東京市明治尋常小学校								○							
K2	23		震災直後児童学席簿	1923			東京市文海尋常小学校								○							
K3	1		1、国民科　教授資料　震災ニ関スルコト													○						
K3	2		2、国民科　教授資料　救護ニ関スル事													○						
K3	3		3、国民科　教授資料　復興事業													○						
K3	4		4、国民科　教授資料　復興ニ関スルコト													○						
K3	5		国民科教授資料？？分類													○						2字判読不能
K3	6		国民科教授資料　社会一般　評論之部													○						
K3	7		国民科教授資料　大震大火災ノ生ンダ美談哀話													○						
K3	8		国民科　教授資料　復興ニ関スルコト													○						
K3	9		国民科　教授資料　戒厳ニ関スルコト													○						
K3	10		国民科　教授資料　震災写真													○						
K3	11		国民科　教授資料　大震災諸相ニ対シテ　厳正ナル批判　政治的道徳的哲学的													○						
K3	12		帝都復興ニ伴フ　学校配置意見　校舎建築ニ関スル希望	1923			下谷区市立小学校長会		○													
K3	13		復活への犠牲　ふたばのかたみ	1924	3	23	東京市二葉尋常小学校		○													
K3	14		我が校教育の復興	1924	3	14	東京市月島第二尋常小学校		○													
K3	15		奉仕者出勤簿　大正十二年九月十二日起	1923			下谷区市立小学校長会								○							
K3	16		下谷区内（避難ノ本区児童　バラック居住児童　他区ヨリ避難児童　収容児童）調査				下谷区市立小学校長会								○							
K3	17		当時ノ教育情況	1923			錦華尋常小学校								○							
K3	18		児童調査簿	1923	9		京橋高等小学校								○							
K3	19		下谷区小学校職員罹災調　御真影奉遷調査				下谷区市立小学校長会								○							
K3	20		出席簿												○							衛生課試験済み
K4	1		（ポスター）帝都復興の歌募集	1923			東京市役所														○	
K4	2		（ポスター）募集				東京市役所														○	精神復興について　震災美談
K4	3		（ポスター）震災復興展覧会	1924			東京市														○	出品募集
K4	4		（ポスター）震災復興展覧会	1924			東京市														○	
K5	1		（ポスター）																		○	大正十二年九月一日午前十一時五十八分　天地鳴動　火炎天ニみなぎる　この恐ろしき関東大震災を忘れずニ　いつも緊張致しましょう
K5	2		（案内）避難者相談所				静岡県						○									
K5	3		（案内）謹告	1923	11		東京府知事　宇佐美勝夫						○									恩賜の内容説明
K5	4		（封筒）恩賜	1923	11																○	
K5	5		東京日日新聞　号外	1923	9	1	大阪毎日新聞社東京支店					○										

ケース番号	資料番号	枝番	資料名	年	月	日	発行主体	宛先	書籍	雑誌	写真帖	新聞	公刊資料 パンフレット	絵画類（印刷物）	帳簿・各種証明書類	内部資料 ノート・メモ	手紙・葉書	写真帖	絵画類（手描）	図面	その他	備考
K5	6		神戸新聞　号外	1923	9	2	神戸新聞社					○										
K5	7		鹿児島新聞　号外	1923	9	1	鹿児島新聞社					○										
K5	8		鹿児島新聞　第三号外	1923	9	3	鹿児島新聞社					○										
K5	9		福岡毎日新聞附録号外	1923	9	5	福岡日日新聞門司支局					○										
K6	1		大阪毎日新聞	1923	9	3	大阪毎日新聞社					○										東京大災害の詳報
K6	2		大阪毎日新聞	1923	9	4	大阪毎日新聞社					○										
K6	3		大阪毎日新聞	1923	9	7	大阪毎日新聞社					○										
K6	4		神戸新聞	1923	9	5	神戸新聞社					○										
K6	5		大阪朝日新聞	1923	9	3	大阪朝日新聞社					○										義を見て為さざるは勇なき也
K6	6		大阪朝日新聞	1923	9	5	大阪朝日新聞社					○										我能生る毎に大東京の大災害は趣旨を極む
K6	7		東京日日新聞	1923	9	12	大阪毎日新聞社東京支店					○										
K7	1		関東大震画報									○										新年特別増大号　十一月号　十月号
K7	2		国際画報	1923			大正通信社					○										
K7	3		江戸大地震出火場所附									○										
K7	4		大震災写真画報	1923			大阪朝日新聞社					○										
K7	5		サンデー毎日　帝都復興号　第二年　第四一号	1923	9	23	毎日新聞社					○										
K7	6		国際写真情報　関東大震災号	1923	10		国際情報社					○										
K8	1		（写真）下谷　車坂交差点付近									○										
K8	2		（写真：絹綿した家屋）									○										
K8	3		（写真：鳥瞰）									○										
K8	4		（写真）神田　神田川筋									○										
K8	5		（写真：焼燬した建物）									○										
K8	6		（鳥瞰）両国橋より本所国技館方面を望む	1923	9	23	天正堂　土屋傳　集画堂　宇田川安高												○			
K8	7		（鳥瞰）浅草公園十二階花屋敷付近の大小海象社の遊戯	1923	10	17	尚美堂　田中良三												○			
K8	8		（鳥瞰）本所石原方面大震凱之真景	1923	10	15	浦野報次郎　発行所　合所浦島堂画局												○			
K8	9		（鳥瞰）日本橋より魚河岸及三越呉服店付近延焼	1923	9	27	天正堂　土屋傳　集画堂　宇田川安高												○			
K9	1		（写真：パラック）																			
K9	2		（写真：帝宮内中の船）																			
K9	3		（写真）逃出救護班　食を求む人々																			
K9	4		（写真）麹町　凱旋道路																			
K9	5		（写真）神田　鰹河岸付近																			
K9	6		（写真：路上の人々）																			
K9	7		（写真）麹町　文部省																			
K9	8		（写真）麹町　市役所前																			
K9	9		（写真：路上の人々）																			
K10	1		大正大震災記	1923	11	25	国民新聞記者長井修吉編　大正震災記録編纂会		○													帝都復興叢書　永田青嵐・嶽谷小波はか
K10	2		詩集　市民の歌へる　第4号	1924	3	28	東京市編纂		○													
K10	3		寸鐵　震災後の美談　第五巻第十一号	1923	11	1	博文館															
K10	4		横浜市震災記念館　記念帖				震災記念館発行															
K10	5		（写真）大正14年型の歴霊堂中正面				絵本専岸															
K10	6		The GREAT EARTH QUAKE & FIRE in TOKYO & YOKOHAMA 5ptember 1.1923 関東震災画帖				Ida jujr-kan		○													
K10	7		（文集）九月一日の思ひ出　四女二																			
K10	8		大正十二年九月一日　大地震大火災　遭難百話　全	1923	11	25	定村國夫　多田屋書店		○													
K10	9		震災実談	1924	7	25	中島司		○													
K10	10		十一時五十六分　一都震災実況集一	1930	3	10	万輔館正雄　東京朝日新聞社		○													
K10	11		十一時五十六分	1924	8	28	東京市役所　萬朝報社　共編　萬朝報社出版部		○													

論文

検地絵図を読み解く

――加賀藩の検地を事例として――

田　上　　繁
TAGAMI Shigeru

はじめに

日本の近世社会を理解する上で，検地の問題が重要な意味を持っていることは周知の事実である．そのため，これまでも豊臣秀吉の太閤検地の評価をめぐって多くの論争が繰り広げられてきた[(1)]．古くは1950年代に始まった太閤検地論争において，近世社会の性格を中世社会とは異質のものであるとする見解が提示されるに及んで，近世史研究者の大方の認識が，検地に基づく石高制による支配原理が確立したとする，その理論体系を容認する方向へと向かった．

そこでは，検地は領主側の検地奉行人が村へ出向いて，村単位に田畑・屋敷を１筆ごと測量し，その１筆ごとの生産高を把握した上で石高に結びつけ，石高を基礎にして高請けした百姓の手元に余分な生産物が残らないよう年貢として収奪するために導入された施策であったとみなされる．その場合，一つの土地は一人の百姓が耕作する権利を有するとする「一地一作人」の原則，中世の支配関係を盾に自立した近世百姓から生産物の一部を中間搾取してはならないとする「作合い」否定の原則など，近世百姓は年貢負担者として中世の奴隷的身分から一定の自立は成し遂げるものの，近世領主によって直接支配され，余剰物を領主に納めなければならない存在として描かれるのである．そのため，領主権力による土地掌握の関心度や干渉度の高さが強調される．このような支配形態の理論的枠組みは，検地帳を分析することによって構築されてきた．全国には大量の検地帳が伝存しており，その検地の性格を追究したすぐれた研究も膨大に蓄積されている[(2)]．

しかしながら，従来の検地研究は，その大部分が検地帳や名寄帳などの文献史料を分析の対象としており，実際の検地の方法を把握して検地の性格を追究した研究はきわめて少ない[(3)]．とくに，石高制の理論的構築が先行して，検地そのものの性格規定がないがしろにされてきたことは否めない．検地の実施方法，施行基準の分析がほとんど行われていないのが実状である．今後の検地研究において，これまでのような検地帳や名寄帳などの文献史料だけを分析の対象としたのでは，その実態を解明することは困難であろう．そうした閉塞状況を克服できる方法の一つとしては，非文字資料としての検地絵図を有効に活用し分析することである．

幸い加賀藩（前田氏）の検地については，若干の検地絵図とともに，農書の『耕稼春秋[(4)]』や「検地方算法」「領絵図仕様」「御検地領絵図仕立様[(5)]」などの検地関係資料が残っており，その中に描かれた検地絵図を非文字資料として分析することによって，検地研究の通説に一石を投じることができるものと思われる．本稿では，検地絵図を中心に据えて検地の実態に迫るとともに，非文字資料としての

検地絵図の有効性と限界性について考察することにしたい．

1.『耕稼春秋』に描かれた検地絵図

全国的にみても，検地帳や名寄帳などの検地関係資料は膨大に現存するが，それに伴う検地絵図はほとんど残っていないのが現状である．それは，加賀藩においても決して例外ではない．しかし，村の行政を担った庄屋や十村[6]などの地方巧者の家には，わずかではあるが検地絵図は伝存する．例えば，北陸地方に伝わる農書としてきわめて資料的価値の高い『耕稼春秋』は，農業技術を中心とした著述であるが，十村としての立場から記述した検地に関する事項も含んでいる．周知のように，『耕稼春秋』は，宝永４年（1707）ごろに土屋又三郎によって書かれた．又三郎は，加賀国石川郡の御供田村（現金沢市神田）に住み，代々十村役を勤める家であったことから，寛文４年（1664）から十村職に就任して村々の行政にあたった．

又三郎の著した『耕稼春秋』には多くの写本が現存するが，本稿では，農山漁村文化協会刊『日本農書全集 4』（1980 年）に収録されている御園家写本を基本的に利用するとともに，神奈川大学日本常民文化研究所蔵の『耕稼春秋』の写本も一部活用することにする．とくに，『耕稼春秋』に限っていえば，原文中の文言や現代語訳については，農山漁村文化協会刊『日本農書全集 4』のものを参考にし，田の形や検地絵図など絵柄のあるものは常民研本を利用した．その『耕稼春秋』の中の検地に関する記述は，「巻之六」に収められている．その第６巻の原本目次は，「田名」，「田地割」（常民研本では「田地割算法」），「一ノ村定成検地法」（同「一村成検地法」），「三ヶ国斗代」（同「加越能三州斗代」），「知行町間図」，「石川郡稲惣名」（同「石川郡稲名」），「農人入用中勘」（同「農人費用」）の７項目から構成される．検地に関係する項目は，そのうち「田名」「田地割」「一ノ村定成検地法」「三ヶ国斗代」の４項目である．そこで，この４項目の内容とその関連性について考察していこう．なお，原文中の文言の引用に際しては，必要に応じて現代語訳をつけ読者の便宜を図った．

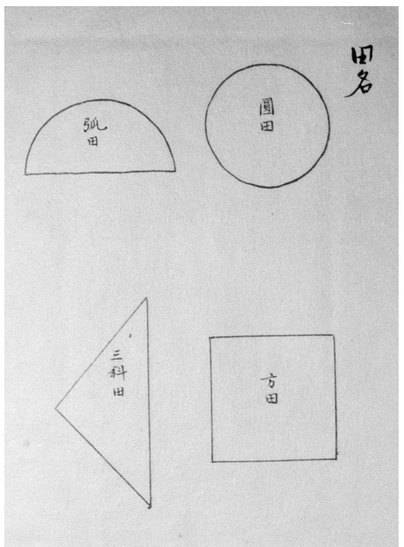


図１　田の形の名称
出典：神奈川大学日本常民文化研究所蔵『耕稼春秋』

まず「田名」では，図１に示すように，円田・方田・弧田・三斜田など 18 種類の田の形が書き上げられる．又三郎は「此十八品ハ田の形の形容の大概を記す．方円ハ天地の容也．故に方田を本となす．田形品々有」（ここに掲げた 18 種類の田の形は，およその分類である．方形と円形はそれぞれ天と地をかたどるから方形の田が基本であるが，実際にはさまざまな形がある．[7]）と述べる．続けて，田の形は方形の田が基本であるとし，作業面からみても畦に沿って田植えや中耕，除草するとき，碁盤の目や井の字のように植えたり作業したりできるから，畦が直交しているほうが便利であると説く．ここでは，田地では正方形の方田が基本であることを示すとともに，農業に携わる者として田の形を把握することの重要性を教えている．そのあと，さまざまな形をした田の面積の計算例が，18 種類の図とともに書き上げられる．その 18 種類のうち，２つについて示したものが図２である．こうした形の異なる田の測量方法と面積の計算方法が本書に収められていることから，いわゆる一筆検地が行われ，面積把握と石高把握が領主主導で行われたとする，従来の検地論の理論的根拠が妥当性を持つかのように思われる．しかしながら，それが一筆検地のための面積の測量方法を図解したものではないことは，行論の過程で明らかとなろう．

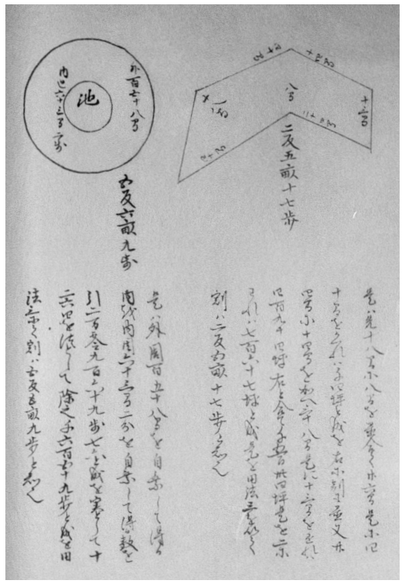


図２　さまざまな形の田の測量方法
出典：図１と同じ

次に「田地割」は，最初に「加能越三州ハ御改作の刻，村々惣百姓田地割有て，其以後無断田地割致さぬ御格也」（加賀，越中，能登の三か国では，改作仕法の際に各村ですべての百姓に田の再配分が行われ，その後無断で再配分することは行わない取り決めとなっている．）と記すように，加賀藩における田地割について述べたものである．多くの先行研究が指摘するように，加賀藩の村々では広く割地慣行が行われた．これは，村内において一定の期間を定めて百姓の土地を割り替えたり，洪水による被害や水利条件の変化など特別の理由により割り替えが必要な場合に臨時に割り替えたりするものである．その田地割には田の測量と面積の計算が必要であり，そのため，村人，とくに庄屋や十村などはその方法を会得しておかなければならなかった．

検地に直接関連する項目として注目されるのは，続いて「一ノ村定成検地法」という目次が設けられていることである．そこには，「一ヶ村定成大略」（一般的な村の地形）の事例として６つの村絵図が描かれている．紙幅の関係上，そのうち２つの村絵図を掲げると図３のようになる．絵図の中には，四角で囲まれたところに「大縄」「大縄之内」「小縄」，村の周囲のところに「縁端小角縄」や「縁端」＝「ゑんば」などといった名称が書き入れられ，さらには，道，川，用水なども描き込まれている．「縁端」は村境にある土地を指し，一般的には大きな角は取れないが，１枚の絵図にあるように「縁端小角縄」などの角縄が描かれる場合もあった．又三郎は，これらの絵図について，「凡此六品ハ村々定成大概を記す．」（以上の６つの図は一般的な村の例である．）と述べたあと，次のように解説している．

> 一ヶ村惣高廻御検地の刻は，御奉行一人に足軽二人宛召連其所へ出，検地村の絵図を取本村并定境村々百姓不残誓詞して，翌日定廻りして境目并縄目等見届，吟味の上竿打格也，改作始より，御検地所へ他郡の御扶持人十村，御奉行一人へ一人宛指添，畠折役する物也．
> （１つの村で惣高廻り検地を実施するときは，奉行１名が足軽２名をつれて出向き，検地村の絵図を取る．その村及び境を接している村々の百姓全員に誓約させて，翌日は「定廻り」のため境

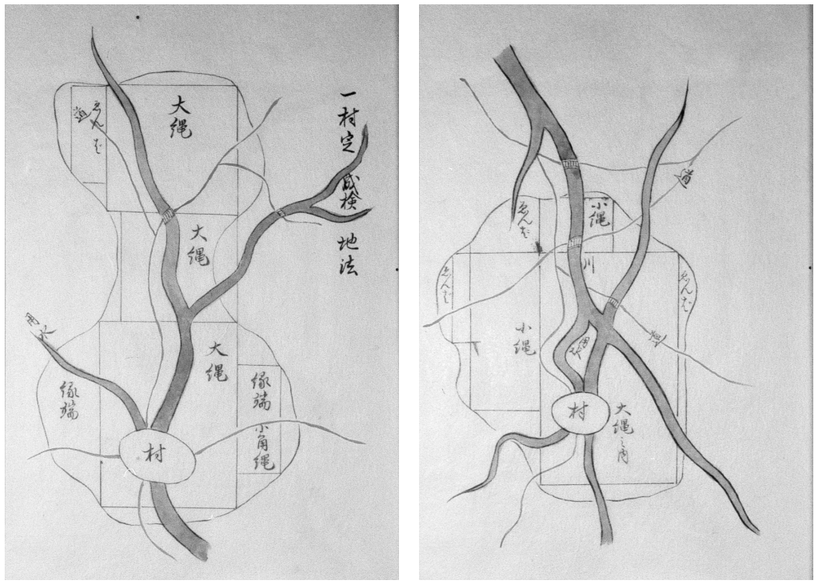


図３　地形別による村々の検地絵図（領絵図）
出典：図１と同じ

界や測量の縄を張る地点などを見届け，よく確認してから測量にかかることになっている．改作仕法以来，検地が行われる現地へは，奉行１名につき他郡の御扶持人十村が１名ずつ付き添って畠折役を勤める[8]．）

これは，「惣高廻り検地」と称される加賀藩で実施された検地の方法を簡潔に述べたものである．検地には領主側の検地奉行１名と足軽２名がやってきて，絵図を取り，隣接する村々の百姓から誓詞書を提出させることになる．翌日，「定廻り」（本検地）をして境界や縄を張る地点を確認して測量に取りかかる．その場合，検地村へ他郡の御扶持人十村などが，検地奉行１名につき１名ずつ付き添って「畠折役」を勤めることになっていた．つまり，後述するように，村絵図の作成や「畠折」の評価を行うのは他郡の御扶持人十村たちであり，本検地に取りかかる前に検地のための下準備は整えられていたのである．こうしたお膳立てができていたために，わずか検地奉行１名と足軽２名が来村するだけでこと足りる検地であったといえる．さらに，又三郎は，検地の過程で作成される帳面について，以下のように記している．

> 御検地引物，其外御定書両通有．大縄の内に有，江，道，用水，石塚，神社，廟所なと皆引物に成故に，惣打立の内抜物になる御格．則一ヶ村抜物帳別に有之物也．
> （検地の際の引物や，そのほかのことに関する定書が２通ある．大縄の中にある川，道路，用水，石塚，神社，祠などはすべて引物の対象となるので，総面積から除外される決まりである．その抜物帳は別仕立てで作成されるものである．）

上記は，検地の際の引物（抜物）規定に関するものである．大縄の中にある川，道路，用水などが総面積から控除されるというのは，どのようなことを意味するのであろうか．『耕稼春秋』で述べている「惣高廻り検地」の内容については，その説明文からだけでは全貌を把握することは困難である．加賀藩固有の「惣高廻り検地」の実態を追究するには，検地の実施方法の解明が不可欠となろう．その場合，検地絵図の存在が大きな手がかりとなる．

2．検地関係資料に描かれた検地絵図

ここに２枚の検地絵図がある．図４の天明６年（1786）３月「検地縄張之図」と図５の同年８月「検地縄張之図」がそれである[9]．両図とも菅原厚定なる人物の持ち物で，前者は「菅原厚定所持」，後者は「菅原厚定制作」とそれぞれ注記がなされている．菅原は，加賀藩の十村や庄屋などを勤める地方巧者であったと思われるが，詳しいことは不明である．２枚の検地絵図とも雛形とはいえ，写実的，かつ立体的に描かれている．これらの絵図は，一体どのような目的で作成されたのであろうか．その制作意図を知るために２枚の検地絵図を検討してみよう．

図４では，図中に長方形，台形，三角形などの図形が書き込まれ，各図形に「大角縄」「大小角縄」「三角縄」などの記載がある．さらに，各種の図形について，それぞれ長さ，幅，歩数（面積）などの数字が書き込まれている．一例を挙げると，中央に書かれた長方形の「大角縄」の場合，「左右長弐百三拾四間宛」，「左右幅　百五拾七間宛」とあって，「右歩数〆三万六千七百三拾八歩」と歩数

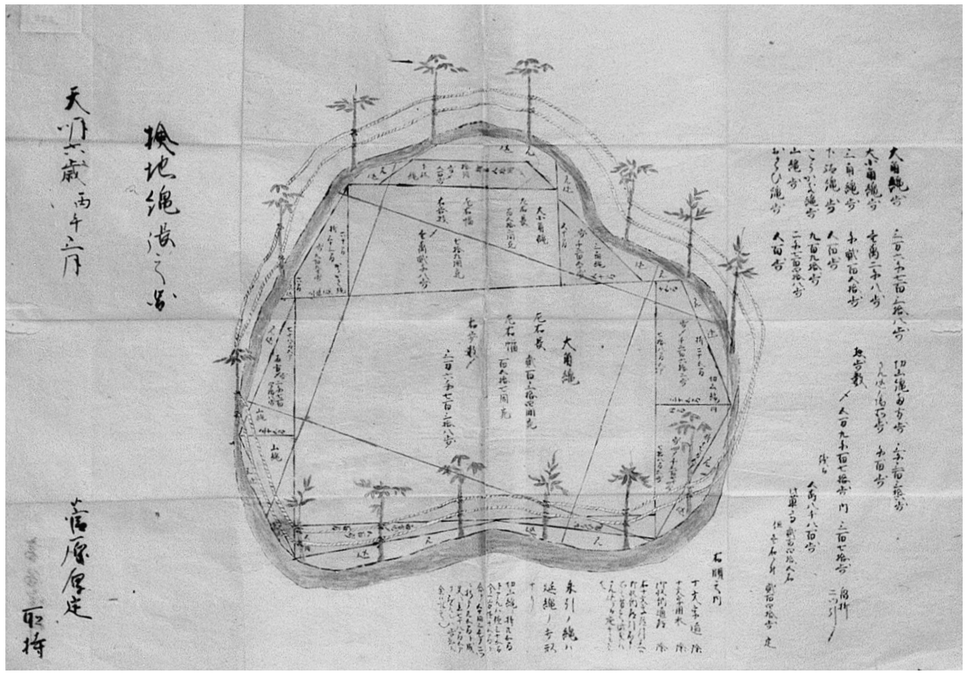


図４　天明６年３月　検地縄張の絵図
出典：金沢市立図書館蔵「加越能文庫」

合計が記される．つまり，左右の長さ 234 間×左右の幅 157 間＝ 3 万 6,738 歩の計算式が成り立つことから，これらの数字は，「大角縄」の横の長さと縦の長さ，及びその歩数を示したものであることが確認される．こうして求められた「大角縄」の歩数は，他の「縄」や「見込ノ場所」の歩数とともに，絵図の外側に掲出される．

例に挙げた「大角縄」3 万 6,738 歩のほかにも，「大小角縄」1 万 2,008 歩，「三角縄」1,250 歩，「下駄縄」500 歩，「こうかき縄」990 歩，「山縄」2,748 歩，「おケはひ縄」500 歩，「切山縄両方」3,336 歩，「見込ノ場所」1,100 歩などがあり，その「惣歩数」（総面積）は 5 万 9,170 歩となる．図形の名称は，最大の面積をしめる「大角縄」，三角形の「三角縄」，下駄のような形をした「下駄縄」，山の方にある「山縄」，山を切り開いた 2 か所を示す「切山縄両方」など，それぞれの形状に応じて付けられた．ただし，「見込ノ場所」というのは，土地が狭いため，絵図上に図形を書き込めない周囲の数か所の場所を，それぞれ「見込」として把握したものである．したがって，絵図の中には長さ，幅，歩数などは記入されず，その概算の歩数が集計して書き上げられている．こうして絵図中の全体の面積が把握されるのである．

ここで留意しなければならないのは，この「惣歩数」5 万 9,170 歩に対して，「内三百七拾歩　畠折二ツ引ニシテ」と注記があり，「残而五万八千八百歩」と計算されていることである．この「畠折」（「はたおれ」ないしは「はたおり」）については，後ほど説明を加えることにするが，残歩数 5 万 8,800 歩から「草高」245 石が算定されている点は重要である．ところで，「切山縄」の 1 か所に「折二十五間」と記載があるが，これについては絵図の外側の注記に「切山縄ニ折廿五間トアルハ，横三十五間，今一方横十五間ト合テ五十間也，是ヲ二ツニ折テ廿五間ト成」るとある．これは，横の 2 か所の長さ 35 間と 15 間を加えた 50 間を，その平均値を出すために 2 で割って 25 間を求めたことを説明したものである．つまり，この場合の「折二十五間」の「折」とは，「二ツニ折テ」の意味であり，長さの平均値を出すために半分にしたことをあらわす．「折」とは，基本的にはこのような意味で使われるが，「畠折」の「折」は，若干意味合いを異にする．この点についても後述する．

さて，「草高」の算定基礎となったのは，但書の「壱石ニ付弐百四拾歩　定」という数字である．つまり，1 石当たり 240 歩で計算すると，5 万 8,800 歩÷ 240 歩＝ 245 石となり，「草高」245 石が求められる．この絵図は越中国の村をモデルとしたものである．前田領のうち越中国では近世を通じて 1 反＝ 360 歩制が採用されたので，1 反当たりの「草高」は，1 石× 360 歩／240 歩＝ 1 石 5 斗という計算になる．一方，加賀国と能登国では，1 反＝ 300 歩制が導入されており，その場合の 1 石当たりの歩数は 200 石となる．したがって，1 反当たりの「草高」は，1 石× 300 歩／200 歩＝ 1 石 5 斗となり，越中国と反当たり同じ「草高」になる．こうして，1 反当たり 1 石 5 斗の加賀藩の標準石高が貫徹する．

ところで，「惣歩数」から控除されるのは，「畠折」の歩数だけではない．絵図の外側に記された「右領之内」のところに，「十文字道　除」「十文字用水　除」「御収納通道　除」などと注記があるように，道路，用水，年貢納入通路などの歩数は，総面積から差し引かれる．これらを控除した残りの歩数を石高換算したものが，その村の村高となる．前節で検討した『耕稼春秋』でも「引物」（抜物）の中に，道路，用水のほか，神社，墓所，塚なども控除の対象となったが，図 4 には描かれていない．同図から得られる情報は，上述した範囲のものである．

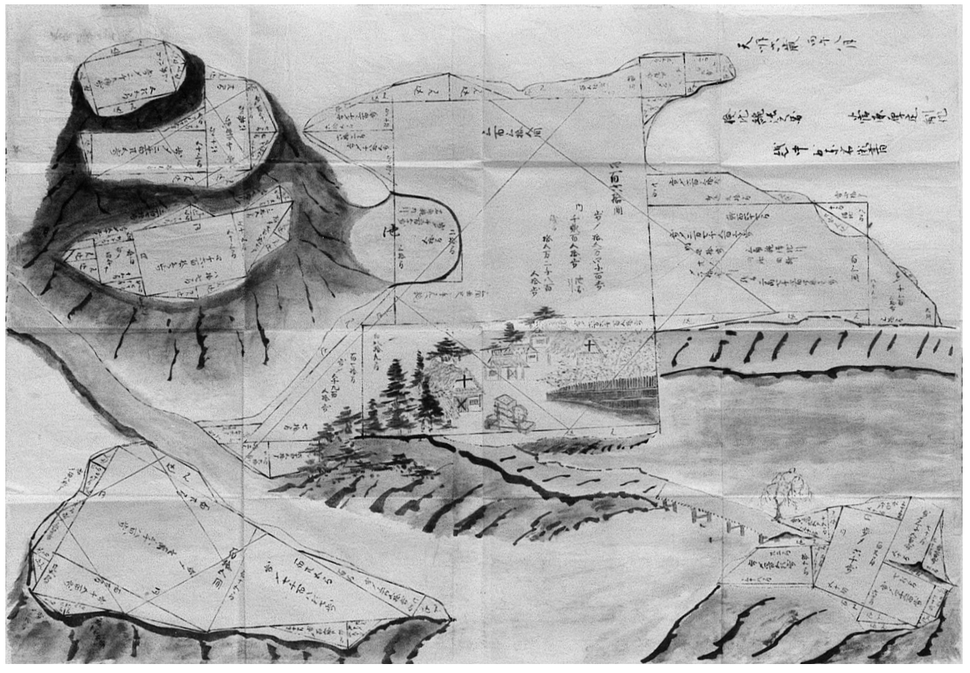


図 5　天明 6 年 8 月　検地縄張の絵図
出典：図 4 と同じ

次に図 5 を検討してみよう．図 5 も図 4 と同様，村の総面積と村高を求めるための絵図であることは容易に想像できる．図 5 では，台地上の田畑，屋敷，川，橋，池などが絵図中に克明に描かれており，図 4 より立体的で複雑な構図となっている．絵図中には各種の図形が多数書き込まれているが，貼付された「下紙」（図 5 では省略した）にある集計歩数の項目は 16 である．「角縄屋内共」「同添三角縄」「同枡角縄」「下駄縄」「大添三角縄」「大角縄」「狐柱縄」「同断」「大角縄添□縄」「縁端小角縄」「右同断」「同添三角縄」「借地角縄」「こうかき縄」「同断添三角縄」「所々縁端見込」の 16 の項目で，合計 25 万 8,868 歩となっている．

そのうち，最大の「大角縄」についてみていこう．絵図中央の上側にある「大角縄」は 460 間と 335 間の縦横の長さを持つ「大角縄」である．両者を乗じた歩数は 15 万 4,100 歩となる．その「大角縄」のうちに池が含まれているため，歩数から「大角縄」の線の内側にある池の部分の歩数 1,250 歩が「池図引」として差し引かれる．したがって，残りは 15 万 2,850 歩となる．この「大角縄」の歩数は，「下紙」に計上された歩数と合致する．こうして，それぞれの「角縄」や「縁端」の歩数が算出され，先の合計歩数 25 万 8,868 歩となる．

また，この合計歩数 25 万 8,868 歩を「村巻之場所」として計上するほかに，「柳ヶ下之飛地」「川向之飛地」「村添飛地」「谷之飛地」「同所飛地」の歩数を書き上げた「惣歩数」と標題のある別の「下紙」がある．「村巻之場所」の歩数 25 万 8,868 歩を含めた合計歩数は 31 万 0,990 歩となる．この事例は，飛地を含んだ村を想定して作成されたものであったことが知られる．そのあと，「惣歩数」から「御収納通道除ル」「所々草付野毛除ル」「用水一筋除ル」の「抜物」合計 1,390 歩が控除され，

その残歩数は30万9,600歩となる．この歩数を算定基礎として「草高」1,290石を割り出している．その場合の換算比率については，1石に付240歩との注記がある．これは，図4と同様，越中国の事例であるため，そのような比率となるのである．越中国では1反＝360歩制であったため，1反当たりの「草高」は，1石×360歩／240歩＝1石5斗という計算になる．いずれにしても，面積さえ把握できれば，1反当たり1石5斗の比率で，「草高」（村高）が算出できる仕組みであったのである．その村高を算定するために実施されたのが，「惣高廻り検地」であったといえよう．そして，ここで取り上げた2つの村絵図が，『耕稼春秋』に描かれた6つの村絵図と同質のものであることは疑いなかろう．

3. 検地絵図作成までのプロセス

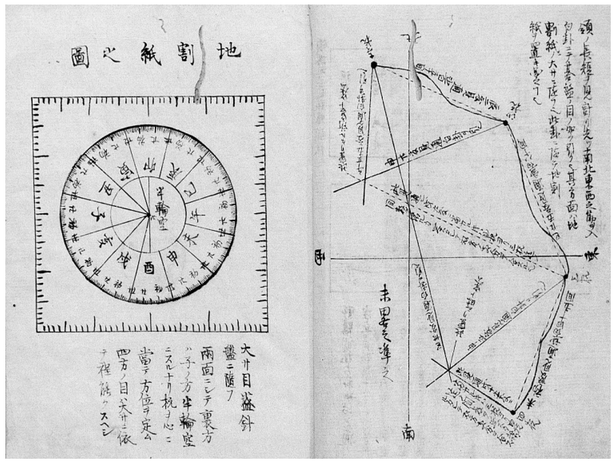


図6　文化12年　村境の測量方法
出典：図4と同じ

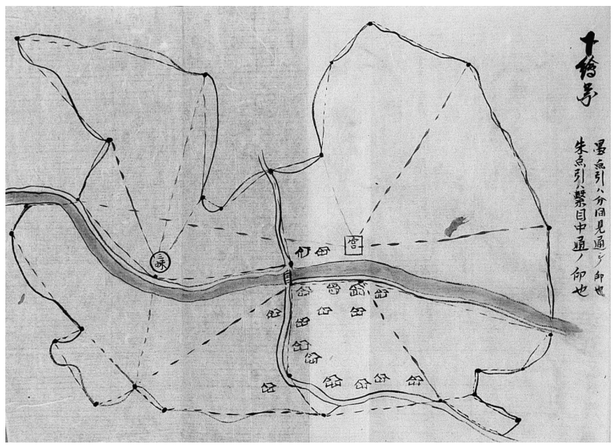


図7　文化12年　検地下絵図（検地仮絵図）
出典：図4と同じ

これまで検討を加えてきたように，加賀藩の検地では，絵図の中に各種の図形を書き込んで，その各図形に含まれる歩数を求め，それを基礎にして村高を算定するものであった．それでは，そうした絵図が完成に至るまでのプロセスはどのようなものであったのであろうか．前に紹介した文化12年「御検地領絵図仕立様」の「領境廻り分間野帳調様」のところに，図6のような絵が描かれている．他の検地関係資料である「検地方算法」に列記されるような「磁石」「配符竹」「領惣廻り境縄」「領廻境縄留杭縄」「地割紙」などの分間道具を使って，まず村の領域を確定する作業から取りかかる．次に，それを基礎にして村全体の縮尺図を作成する．そうして完成したのが図7のような「下絵図」である．「下絵図」は「仮絵図」[10]などとも呼ばれ，村の領域を縮尺図によって示したものである．村の領域を確定する測量方法には，この「廻り分間法」のほかに「平板法」がある．「平板法」は，現在でも広く応用されているので，その測量方法は比較的理解しやすい[11]．したがって，ここでは「廻り分限法」に限定して述べていく．

完成した「下絵図」をよくみると，絵図中に道，川，屋敷，宮，三昧などが書き加えられていることに気づく．絵図の外側には，「墨点引ハ分間見通ノ印也」「朱点引ハ繋目中通ノ印也」といった注記がある．「墨点引ハ分間見通ノ印」というのは，村の領域を線で示したものであり，「朱点引ハ繋目中通ノ印」は，目印になる神社や墓地など村の中にある建造物を目当てとして，村の領域を確定するとき，磁石だけでは方向がずれたりするので，「地割紙」を使って確認した方位を線で示したものである．村の領域が確定する「下絵図」が完成すると，その「下絵図」に長方形や三角形などの図形を書き込んでいく．その場合，「御検地方縄張之時分心得方之事」の項に「下絵図相調，其絵図面之上ニ而其村領可成丈角取り，又其次ニも可成丈大角ニ取り」（下絵図の作成方法は，絵図面上にできるだけ大きな角をとり，その次もなるべく大角をとるようにする．）と記すように，可能な限り「大角」を書き入れるのが基本であった．

その方針にしたがって作成されたのが，図8の「領絵図」である．そこには，「下絵図」の中に「一番角縄」から始まって「二十三番止」まで23の各種の図形が書き込まれている．番号の付されていない村境の場所は，「歩以下ニ相見候縁端之地面等ハ角縄を不及入申，但横十文字縄等不入縁屈曲之処は成替見込可仕」（歩以下と思われる狭い縁端の土地には角縄を書き入れる必要はない．また，縦横の長さを十文字で測ることができない周辺部の屈曲した土地は，見込みとして測量しないで歩数を出しても構わない．）とあるように，「縁端」（えんば）や「見込」などと称される土地は，「角縄」を張らなくてもよい場所とされた．「領絵図」には可能な限り「大角」を書き入れるのが基本ではあっても，村境や屈曲した狭い土地には「大角」「小角」とも書き込まなくてもよいと定めているのである．しかし，前出の常民研本『耕稼春秋』の検地絵図には，「縁端小角縄」と書かれた図形もあり，「縁端」でも「角縄」が張れれば，「小角縄」や「長角縄」などを書き込むこともあったようである．「見込」の土地については，測量することも不要とされる．この「領絵図」こそが，一村の歩数と，その歩数を基礎にして村高を算定するために作成された検地絵図に他ならなかった．1節の『耕稼春秋』に描かれていた6つの村絵図と，2節で引用した2つの絵図が，この「領絵図」とまったく性格を同じものとすることは，改めて説明するまでもなかろう．そして，ここで紹介した「検地方算法」や「領絵図仕様」には，『耕稼春秋』に描かれていたような各種の田の形とその面積を計算する方法が記されている．「検地方算法」や「領絵図仕様」は明らかに「惣高廻り検地」を行うための手引書であり，そうした田の形や面

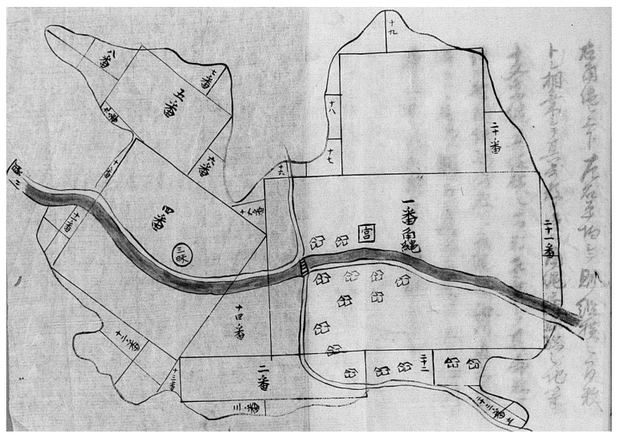


図8　文化12年　検地領絵図
出典：図4と同じ

積の求め方が両書に記載されているという事実は，『耕稼春秋』に描かれた田の形や面積の算出方法が一筆検地を行うためのものではなく，田地割や「惣高廻り検地」のために書き上げたものであったことを如実に物語っている．

ところで，この「惣高廻り検地で」で特徴的なことは，「畠折」や「抜物」に関する規定が盛り込まれていることである．「惣高廻り検地」の実態を究明するには，これら「畠折」や「抜物」の内容を理解しなければならないであろう．まず，「畠折」については，前出の「検地方算法」の「畑折之算法」の項で次のように記されている．

> 畑弐つ折より七つ折迄，是より以上は折ハ無御座候，右何枚も其畑打立歩数置，其折数ニ割而本歩を得，其畑打立歩数之内本歩引，残り折捨歩也，仮令ハ畑打立歩百歩，畑四つ折ならハ百歩と置，四つニ割て弐拾五歩本歩也，百歩之内本歩弐拾五歩を引，残七拾五歩折捨歩也
> （畑は２つ折より７つ折まであり，７つ折以上はない．畑何枚も一括して測って歩数を出しておく．その歩数を折数で割ると本歩数が求められる．その打立歩数から本歩数を引いた残りが折捨歩となる．例えば，畑の打立歩数が 100 歩で，畑４つ折ならば 100 歩を４で割って得られた 25 歩が本歩となる．残りの 75 歩は折捨歩となる．）

この説明文で分かるように，畑の歩数 100 歩で，「畠折」が４つ折の場合，歩数 100 歩を４で割ると 25 歩が求められ，その 25 歩が名目上の畑の本歩数となる．したがって，100 歩から 25 歩を除いた残りの 75 歩は「折捨歩」ということになる．これは田と同じ価値に調整するため，現実の歩数を「畠折」によって少なくし，名目の歩数を設定して石高に結びつけようとするものである．例えば，ある畑の価値が田の価値の半分と評価されれば，「二つ折」となり，三分の一の価値しかなければ，「三つ折」となる．「畠折」の数が大きくなればなるほど，畑の評価は田に比べて低くなるのである．とはいえ，すべての畑に「畠折」が適用されたわけではない．「本田成」として次のようなものが列記される．

> 居屋敷　同廻り堀　竹藪　苦竹藪　桑畠　楮　漆　茶　蓑毛　五辛之類　大根　菜蕪　藍　牛房　にんしん　茄子　繭菅　布晒場　麻　からむし

これらの「居屋敷」や「廻り堀」（どちらも畑の地目として把握される）を含む各種の作物は田と同等とみなされ，「畠折」の対象とはならなかった．「畠折」のほかにも惣歩数から控除されるものがあった．「抜物」あるいは「引物」などと呼ばれるもので，以下のようなものが書き上げられている．

> 宮　三昧　墓所　石塚　稲干場　架橋　往還道　御蔵所　往還北□六尺　高札場　御仕置場　御藪　御林　御旅屋　御舟小屋　御塩蔵　焔焔蔵　木蔵　役銀地　御助小屋　清水壇　不湖　涼　壱里塚　大留塚　火留塚　幅弐尺以上之道　通り川　幅三尺以上之畔　幅弐尺以上之用水

村に存在する上記のような施設や建造物のある土地は，「抜物」として惣歩数から除かれた．もちろん，領絵図を作成するときは，基本的な田畑，道，江，川，堤，潟，海，山，家，宮，三昧を始め，川除土居，領界打縄，穢多・藤内等屋敷，御蔵屋敷等御用地分など「一所々々名目可記事」となっていた．加えて，「野毛，沼，フケ，江，道等之分」についても「おもふ立候分迄書記シ可申事」と記されるように，「畠折」「抜物」に関わりなく，思い立つものはすべて書き加えることになる．この「惣高廻り検地」では，上記の「抜物」の対象となる施設や建造物を記入した「領絵図」を作成して，実際に村へ出向き検地を行うことになる．その場合，『耕稼春秋』には，検地奉行人１名に足軽２名が随行するだけで，「畠折」の評価や実際の検地を行うのは他郡の御扶持人十村たちであると記される．そこで，文化９年２月に加賀国能美郡日用村（現小松市日用町）で行われた実際の検地の内容を窺うことにしよう．

4．検地絵図に基づく実際の検地

加賀国能美郡では，文化９年（1812）２月に日用村を始め，西原村・本江村など近隣の村々の内検地が実施された[12]．いずれも田井村の次郎吉と馬場村の喜右衛門が「手合」となって内検地が行われた．村の内検地を行う場合，その村の者が畠折や抜物を評価するのではなく，他郡の村の者が評価する決まりになっていた．田井村と馬場村は，いずれも日用村・西原村・本江村が所在する加賀国能美郡とは異なり，隣郡である加賀国石川郡にある村である．田井村次郎吉の場合，次郎吉の数代前の五兵衛なる人物は，正保２年（1645）に十村となり，承応元年（1652）より前田利常の改作法施行に参加し，翌年扶持を受けた．延宝４年（1675）に没すると，その子次郎吉がその跡を継いで御扶持人十村になっている．本稿で取り上げる次郎吉は，さらにその次の代か２代あとの次郎吉であると推測される．いずれにせよ，次郎吉家は，代々改作方農政に力を注いだ家であった．ここでいう「手合」とは，そうした内検地で抜物や畑の評価を担当する者として深く関わることを意味する用語であろう．

本江村では，２月 25 日から 27 日までの３日間で内検地が実施されており，同村は打立歩数 19 万 1,102 歩余，畑折捨歩数と抜物歩数の合計４万 6,664 歩余で，差引残歩数が 14 万 4,437 歩余（村高約 1,000 石）もある大村であるが，内検地はわずか３日で完了している．また，日用村でも２月 29 日の１日で終えており，「惣高廻り検地」がいかに簡単な検地であったか窺い知ることができる．

日用村の検地については，文化９年２月「能美郡日用村内検地打立并抜物帳」のほかに，同年同月の「能美郡今江村源介組日用村内検地領絵図[13]」と標題のある検地絵図が伝わる．それが図９であり，絵図の中に図形が書き込まれ，その図形に「壱番」から「四十六」までの番付が付されている．46 の図形のうち，「角」は１番・３番・５番・20 番・26 番・35 番の６つのみで，残りの 40 はすべて「縁端」である．「角」は，図面上に大きな図形を書き込むことのできる場所であり，「縁端」は村の周辺部など狭い土地のため，小さな図形しか書けない場所である．その内容をさらに詳しくみていくために，全 46 の番付のうち，５つだけを抽出して表示したのが表１である．表１では，１番と３番が「角」であり，10 番・11 番・16 番が「縁端」である．同表から明らかなように，「角」の場合，絵図面に基づいて，東縄と西縄，南縄と北縄の４か所の長さ・幅が測量され，それぞれ東西縄・南北縄の平均値を出し，その平均値を乗じて面積（歩数）を算出した．これは，大角では長さと幅とも１か所ずつの測量では誤差を生じるおそれがあるからである．例えば，１番角の場合，東縄 49 間９分・西

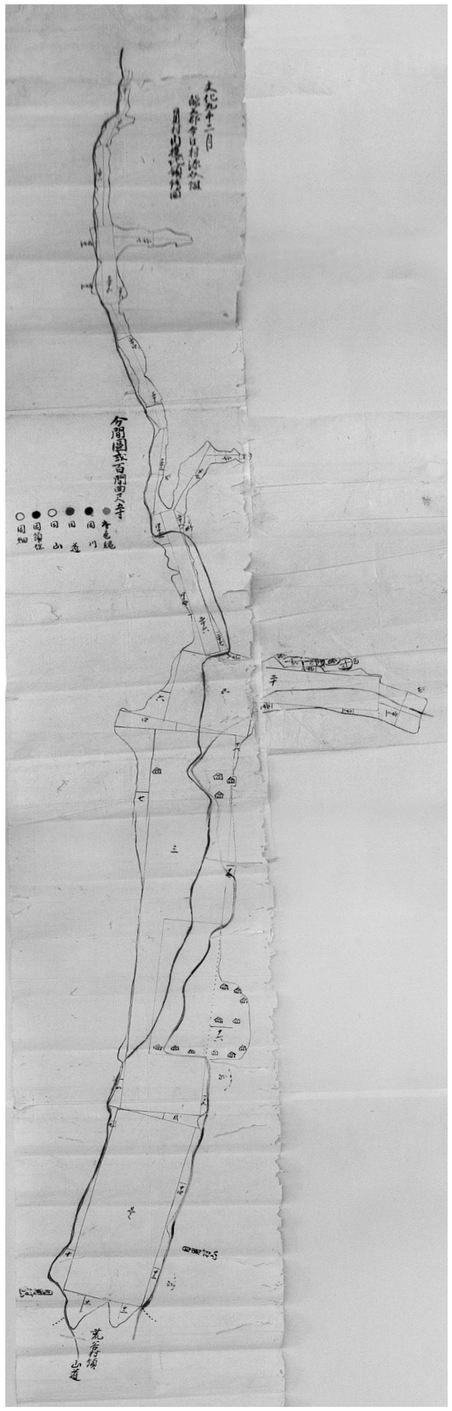


図９　文化９年２月　加賀国能美郡日用村の検地絵図（領絵図）
出典：図４と同じ

縄 48 間８分であり，その平均値は 49 間３分５厘となる．他方，南縄 122 間８分・北縄 123 間６分５厘であり，その平均値は 123 間２分２厘５毛となる．その東西の平均値と南北の平均値を乗じたものが打立歩数 6,081 歩１分５厘４毛である．

そのうち，１番角の内側には道・江筋・畔などが 11 か所ほどあり，これらの抜物歩数の合計は 835 歩２分７厘となる．抜物歩数は基本的には長さと幅を乗じて求めるが，江筋は幅を数か所測ってその平均値を出し，長さにその平均値を乗じて歩数を算出した．そして，打立歩数から抜物歩数を差し引いたものが有歩数であり，１番角の場合の有歩数は 5,245 歩８分８厘４毛となる．３番角についても同様の計算方法で有歩数が算定される．

次に縁端をみていくと，10 番縁端の場合，長さ 80 間，幅６間３分であるから，打立歩数は 504 歩となる．縁端は角とは異なり，長さと幅を乗じただけで打立歩数を計算する．この 10 番縁端の内側には，長さ 45 間，幅１間の江道が１か所存在し，その抜物歩数は 45 歩となる．打立歩数 504 歩からその 45 歩を控除すると，残りの歩数は 459 歩となる．その残りの歩数は，「皆畑」とあって耕作地は畑だけであり，「畠折」は「四つ折」と評価された．したがって，459 歩を４で割ると，あるいは，同じことであるが 1／4 を掛けると，459 歩×１／4＝114 歩７分５厘の本歩が求められる．打立歩数 504 歩からその本歩 114 歩７分５厘を差し引いた残りの歩数 389 歩２分５厘が，抜物歩数・折捨歩となって除外される．このように 10 番縁端では，最終的には本歩が表中の有歩数となる．「畠折」はこのように実際の歩数を計算上で操作して少なくするものである．日用村は，粟津谷の奥に位置し，ほとんど全域が山地の村である．日用川が山間を屈曲して流れ，下流に荒谷村・牧口村がある．正保郷帳の村高は 224 石余で，田方 11 町１反余，畑方２町１反余の田畑内訳となる．畑方２町１反余と少ないが，山間であるために地味は良質とはいえなかった模様で，

表１　文化９年２月　日用村内検地打立歩数・抜物歩数・畠折歩数内訳

番　付	打立歩数		抜物歩数	畠折歩数			有歩数
	長さ　・　幅	歩　数	（筆数）	畠折	打捨歩	本歩	
１番角	49.35（東縄 49.9・西縄 48.8）×123.225（南縄 122.8・北縄 123.65）	6,081.154	835.27（11）				5,245.884
３番角	47.8（東縄 47.9・西縄 47.7）×248.7（南縄 249.1・北縄 248.3）	11,887.86	5,340.　（33）				6,547.86
10 番縁端	80. × 6.3	504.	45.　（１）	４つ折	344.25	114.75	114.75
11 番縁端	24. × 9.	216.					216.
16 番縁端	106.7 × 13.5（皆無地）	1,440.45	1,271.45（３）				169.

注１）文化９年２月「能美郡日用村内検地打立并抜物帳」（金沢市立図書館蔵「加越能文庫」）より作成．
注２）単位は，長さ・幅が間（小数点）・分・厘・毛で，面積が歩（小数点）・分・厘・毛である．
注３）番付が 46 ある中で，５つだけ抽出して掲示した．

「畠折」の数字が４つ折が最小で，上は５つ折・６つ折・７つ折など総体的に高い．７つ折の畑では，実際の歩数の７分の１しか本歩として算入されない計算になる．

表１に戻って 11 番縁端の数値をみると，この番付は抜物歩数も畠折歩数も設定されない土地であることが分かる．そのため，打立歩数がそのまま有歩数となる．さらに，16 番縁端には，「皆無地」という注記がある．この 16 番縁端では，竹藪 30 歩のほか，源七・新左衛門・伊右衛門・清八の各屋敷と新左衛門の納屋があり，その有歩数は 169 歩である．抜物歩数 1,271 歩４分５厘は，「野毛」（３か所）ばかりである．この「皆無地」というのは，屋敷や納屋があっても，ほかには「野毛」，つまり原野ばかりで，耕作地がない場所を指すのであろう．したがって，16 番縁端の有歩数はわずかに 169 歩だけで，それらは「田成物」とみなされる竹藪と居屋敷・納屋の歩数である．たとえ，実際の土地を測って打ち出した打立歩数が多くても，そこから控除される抜物歩数が多ければ，有歩数はごくわずかとなる．この有歩数が村高の基礎となった．つまり，１反当たり１石５斗，ないしは１石７斗（加賀国能美郡・江沼郡２郡のみ）で計算すれば，村高が自動的に算定されるような方式を採用していたのである．

ところで，「惣高廻り検地」では，田であれ畑であれ，１筆ごとの田畑を測量するものではない．また，「畠折」が適用される畑では，一定のまとまりのある同一作物の畑を一括して「畠折」の対象としたのである．ただ，畑でも，「田成物」となる畑は田と同等とみなされるので，歩数がそのまま有歩数に組み入れられることになる．こうした「畠折」や「田成物」などの方法を用いて村の歩数を算出しようとしたのも，「大角」「縁端」のいずれの土地もまず打立歩数を求め，そこから「畠折」による「折捨歩」や「抜物」歩数を差し引いた残りの歩数を名目上の歩数とし，それを村高確定のための数値として機能させようとしたからであった．田についてはまったく歩数を操作する必要はなかった．結局，「畠折」や「田成物」などの規定により，畑に田と同等の評価を与えることで，加賀藩の１反＝１石５斗（加賀国能美郡・江沼郡の２郡のみ１石７斗）という統一斗代を機能させることができたのである．

日用村の検地は上述したような方法で行われたが，この文化９年検地の結果を集計した別の文書が伝存しており，その内容からこの検地が村高の算定基礎になったことが判明する．それによると，打

立歩数合計は，3万1,825歩3分2厘4毛で，抜物歩数合計は1万1,023歩8厘6毛となる．その残歩数2万0,802歩2分3厘8毛が，日用村の「有歩」ということになる．さらに，同文書には，この「有歩」を「高ニ直シ」て117石8斗7升9合3夕4才8味となるとしている．加賀藩の斗代は，基本的には1反＝1石5斗であるが，加賀国能美郡は，近世を通じて1反＝1石7斗であった．また，能美郡では1反＝300歩制が採用されたので，まず，同村の「有歩」2万0,802歩2分3厘8毛を300歩で割ると，69反3斗4升0合7夕9才3味余の反別が算出される．次にこの反別に能美郡の斗代1石7斗を掛けると，117石8斗7升9合3夕4才8味余の石高が求められる．日用村の村高はこうして決められたのである．2節で触れた「草高」（村高）が決定されるまでの方法と，まったく同じであることが確認できる．

検地を終えると，「野帳」「引物帳」「領絵図」が検地奉行から算用所へ提出される．「野帳」は「内検地打立帳」のことであり，「引物帳」は「内検地抜物帳」のことである．この2つの帳面が別々に作成される場合もあるが，同じ帳面に書き込まれることもある．日用村の場合は後者に属する．この3点セットが提出されたあと，領主側からは検地奉行名で「検地打渡状」が発給される．その様式も十村や御扶持人などの家に伝わる検地仕様書に記されている．その部分を引用すると，次のようになる[14]．

何郡之内何村検地之事
一何拾何町何反何百何拾何歩　田畠屋敷
但畠は折合テ
高何百何拾石
右江川溝堀道等引捨打渡処，如件
何ノ何年何月何日　検地奉行名
何村
百姓中

この形式を持つ検地打渡状は，天正13年（1585），慶長10年（1605），元和2年（1616）・6年のものを含め，加賀藩領の村々には大量に残っている．そのうち，越中国利波郡大滝村の慶長10年の検地打渡状を例にとると[15]，

利波郡之内大滝村御検地之事
一七拾八町四段大卅壱歩　田畠屋敷共ニ
畠ハ上中下折合テ
分米千百七拾七石壱斗弐升九合
右江川溝堀道引捨打渡所，如件
慶長拾年十二月四日　寺西若狭守（花押）
安原隼人佐長（花押）
芝山権兵衛（花押）

佐垣九兵衛常（花押）
靏見左門（花押）

大滝村
百姓中

といった内容になる．78町4段大31歩の歩数は，「畠ハ上中下折合テ」の但書から，畠折の折捨歩数と，「江川溝堀道引捨」て打ち渡すとある奥書から，道，川，用水などの抜物歩数とを控除した残りの名目的な面積であることが分かる．このように，田畠屋敷の歩数，畠折の但書，分米高，奥書の引物の記載内容など，検地仕様書に記された検地の形式と完全に一致するのである．この慶長10年に越中国3郡で実施された検地は，それまでの俵表示から初めて石高表示がなされた検地として注目される．大滝村の場合でも，78町4段大31歩の歩数に対し，越中国の1反＝360歩制と，1反当たりの斗代1石5斗を用いて計算すると，石高（分米）は，検地打渡状に記載されている1,177石1斗2升9合となる[16]．しかし，この石高が田畑・屋敷地の1筆ごとの分米高を集計して得た数字ではないことは，これまで指摘してきた通りである．算定基礎となる名目的な面積さえ把握すれば，その面積に斗代を乗じただけで求められる計算上の数字に過ぎなかった．これらの検地打渡状が「惣高廻り検地」の結果，領主側から村へ発給されたものであることは，先行研究ですでに指摘されている[17]．しかも，加賀藩では，天正13年以降，1筆ごとの検地帳は発見されていない．発見されていないというより，作成されなかったといった方が正確であろう．それは，加賀藩の検地が1筆ごとの耕宅地を測量する検地ではなかったことに起因するのであるが，いわゆる「太閤検地」の形式を踏まえた検地とは異質のものであったからである．もちろん，数点残る天正10年から天正12年までの検地帳にしても，いわゆる「太閤検地」とはほど遠い内容の検地であった．

まとめに代えて

上述したように，加賀藩の検地は，一紙ものの「検地打渡状」でこと足りる検地に過ぎなかった．本稿で分析の対象とした検地関係資料は，近世後期の資料である．したがって，近世初頭の検地については，この「惣高廻り検地」ではなかったのではないかという疑問がわいてくるかも知れない．しかし，前田氏が所領する加賀・能登・越中3国では，天正10年（1582）から同12年まで検地帳に類する土地台帳は現存するが，天正13年以降の検地帳は現在のところ発見されていない．それに代わって，天正13年からは「検地打渡状」が各地で大量にあらわれてくる．「検地打渡状」が作成されるまでの過程については，本稿で分析してきた通りである．

加賀藩固有の「惣高廻り検地」を実施したあとに，領主側から「検地打渡状」が村へ発給されて一切の検地が終了するが，その「検地打渡状」により村高が確定される．従来の研究では，この間の検地の実施方法や村高確定のプロセスが解明されていなかったため，検地そのものの性格づけが理論にあてはめた曖昧なものとなっていた．それは，検地帳や名寄帳などの文献史料だけを分析の対象としたことからもたらされる限界性であり，検地の実態が把握できる検地絵図を非文字資料として活用することにより，そうした問題点が克服できるものと考えられる．

検地絵図に描かれた検地方法からは，田畑・屋敷の１筆ごとの測量を実施して面積，等級，名請人などを掌握することや，その１筆ごとの生産高を把握して全余剰部分を収奪するといった領主側の政策意図を読み取ることは到底困難である．その意味では，領主は百姓の土地所持のあり方に対して無関心であり，不干渉であったといえる．このような定説とは異なる結論を導き出せるのも，非文字資料として検地絵図を分析の中心に置いたからに他ならない．ただ，検地絵図の分析だけでは，一定の限界があるのもまた事実である．検地絵図をいくら眺めていても検地の実態を捉えることはできない．そこでは描かれた絵の解釈論は展開できても，検地の実態や性格を規定することは難しいからである．その絵図に記された解説や数字の集計，さらには，実際の検地結果を記した土地関係資料を併せて利用することにより，検地の内容をより正確に把握できるものと思われる．

ここでは，加賀藩の検地に限定してその実態の解明を試みたに過ぎず，今後，他藩の検地についても検地絵図を利用した検地研究が必要となろう．本稿は，新たな研究方法を導入してまとめたものであるだけに，不備な点も多い．大方のご批判を仰ぎ，さらなる研究へと歩を進めたいと思う．

注

（１） 1953 年から 54 年ごろ，太閤検地の歴史的意義をめぐって活発な論争が展開された．論者によって革命的な土地政策，相対的革新策，役屋体制論などその評価が分かれたが，この論争により日本の中世と近世を，社会構成上どのように理論的に把握するかという大きな問題が投げかけられた．

（２） 代表的な論文として安良城盛昭「太閤検地の歴史的前提一，二」（『歴史学研究』163，164 号，1953 年）が挙げられる．同氏の論考は，その後『幕藩体制社会の成立と構造』（御茶の水書房，1959 年）を始め，いくつかの著作にまとめられている．また，宮川満『太閤検地論』全３巻（御茶の水書房，1957 年― 63 年）も相対的革新策の立場から太閤検地の意義について論述している．

（３） 実際の検地方法の分析を通して，検地の性格の解明を試みた数少ない論文に，田上繁「前田領における検地の性格について」（『史学雑誌』第 102 編第 10 号，1993 年）がある．

（４） 本稿では，農山漁村文化協会刊による『耕稼春秋』（『日本農書全集 4』所収，1980 年）の記述を引用し，あるいは参考とした．

（５） いずれも金沢市立図書館蔵「加越能文庫」.

（６） 加賀藩の農政を司る役職の名称で，農政実務の上で重要な役割を果たした．改作仕法のときに御扶持人十村ができた．

（７） 農山漁村文化協会刊による『耕稼春秋』の現代語訳を参考にした．その場合，筆者が現代語訳の内容を少し改めたところもある．以下同様である．

（８） この引用文の中で，「本村并定境村々百姓不残誓詞して」の部分は，常民研本では「本村并定境村々百姓不残誓詞いたさせ」となっている．意味としては，常民研本の方が適切のように思われる．また，「一ヶ村惣高廻御検地の割は」の部分の「割」は「刻」の，「畠打役する物也」の部分の「打」は「折」のそれぞれ誤植と考えられる．

（９） いずれも金沢市立図書館蔵「加越能文庫」.

(10) 注（５）のうち，「御検地領絵図仕立様」には「仮絵図」と題する絵図が収録されている．

(11) 「平板法」については，注（５）のうち「領絵図仕様」に詳しく図解されている．また，著作としては，川村博忠『近世絵図と測量術』（古今書院，1992 年）が各種の測量方法を詳述していて，近世の測量技術を理解する上では好個の文献である．

(12) 金沢市立図書館「加越能文庫」には，日用村のほか，西原村・本江村など近村の「内検地打立并抜物帳」や検地絵図なども所蔵されており，同時期に検地が実施されたことが確認される．

(13) 金沢市立図書館蔵「加越能文庫」.

(14) 金沢市立図書館蔵「加越能文庫」.

(15) 『富山県史』史料編Ⅲ近世上所収（1980 年）.

(16) 面積の単位に大半小制が採用されているが，越中国の１反当たりの歩数は 360 歩であったので，大は 240 歩，中は 180 歩，小は 120 歩となる．大滝村の場合，歩数は 78 町４段大 31 歩であるから，石高（分米高）を算出するには，784 段（反）×１石５斗＋（271 歩／360 歩×１石５斗）の計算式を解けばよい．

(17) 注（３）の田上繁前掲論文.

論文

神奈川県下の農村における民家の持続と変容

――神奈川縣農会の調査資料からみた大正 10-11 年の民家の様相――

津　田　良　樹
TSUDA Yoshiki

1　はじめに

『神奈川縣下に於ける自作及小作農家四十六カ所の農舎及農地に関する現状』という孔版刷りの帳簿がある．大正 10（1921）年から 11 年にかけて神奈川縣農会が県下の 46 軒の農家の主屋や収穫物の処理などを行なう小屋など付属屋および耕作地の状況を調べた調査報告書である[(1)]．この帳簿をもとに，大正 10-11 年の神奈川県下の農村における主屋をはじめ付属の建物などやその敷地の様相を明らかにしたい．さらに，それら大正期の農家の様相が 90 年後の現在，どのようなかたちで持続し，あるいは，どのように変容したかについて検討する予定である．

『神奈川縣下に於ける自作及小作農家四十六カ所の農舎及農地に関する現状』について

『神奈川縣下に於ける自作及小作農家四十六カ所の農舎及農地に関する現状』（以下，『農舎及農地に関する現状』略記する）は，B４版で，表紙・奥付・緒言・目次に相当する「四十六ヵ所の細別」がそれぞれ１頁，一調査対象箇所当たり２頁の記事の 92 頁（農舎に関する記事の１頁，農地に関する記事１頁）からなる．表紙には「大正十一年十月，神奈川縣下に於ける自作及小作農家四十六ヶ所の農舎及農地に関する現状，神奈川縣農会」とあり，奥付には「大正十一年十月廿三日発行（非売品），編輯兼発行人　横浜市本町一丁目三番地（縣庁三階西室）神奈川縣農会」とある．

以下に緒言から本書の目的・内容等についてみていこう．

緒言一項には目的が記されている．「本会は農舎と農地の現状を知悉し其の改善を図る資料として本調査を企て幸いに石黒農政課長の指導を得て之を実施す」とあり，農舎・農地の改善をはかるための基礎資料とするのが目的であることがわかる．また，時の農政官僚石黒忠篤[(2)]がこの調査を指導していたことも判明する．

二項には調査内容が記される．「農舎に関するもの」と「農地に関するもの」のふたつからなっており，農舎に関するものでは「家族の員数」・「建物の坪数」・「屋敷の地割」・「住宅の間割」・「其他農舎の現状を知るへき事項」，農地に関するものでは「耕地の位置面積」・「道路水路の配置」・「其他農地の現状を知るへき事項」が調べられている．

三項には調査対象およびその選び方が示される．各郡を農業状態により，数区に分け，その区を代表すべき農村をまずは決め，その村において農業を主業とし「相当の成績をあげつつある農家」で，「農業経営の程度はその地方の普通程度を選ぶ」とある．自作農と小作農とを各１戸選ぶのが原則で

表１『農舎及農地に関する現状』に収録された46軒の新旧住所および居住者名

	大正10－11（1921－2）年の住所表記と居住者名		2008年現在の住所表記と居住者名	
1	橘樹郡稲田村東管四、四一七番地	上原茂八	川崎市多摩区管馬場２丁目６－３５	上原宏也
2	橘樹郡稲田村登戸二、五七八番地	田中福太郎	川崎市多摩区登戸２５７８－１	登戸ハイデンス（区画整理で大変化）
3	橘樹郡中原村新城三九五番地	松原興四郎	川崎市高津区新作５丁目１７と１８	（区画整理で大変化）
4	橘樹郡中原村上小田五四七番地	鹿島甚右衛門	川崎市中原区上小田中	
5	橘樹郡鶴見町東寺尾八一三番地	熊澤萬吉	横浜市鶴見区東寺尾５丁目５－４３	シティクレスト東寺尾（大変化）
6	橘樹郡鶴見町二、三四五番地	池田亀五郎	横浜市鶴見区諏訪坂９－１３	（区画整理で大変化）
7	都筑郡柿生村萬福寺一二四番地	鈴木多一郎	川崎市麻生区万福寺１２４	鈴木カツ・鈴木庸
8	都筑郡柿生村萬福寺二八九番地	中島福太郎	川崎市麻生区万福寺４丁目１９ プライムアリーナ新百合ヶ丘（換地のため位置不明）	
9	都筑郡中川村茅ヶ崎九六三番地	金子信	横浜市都筑区茅ヶ崎東１丁目１５－３、１５－４	金子孝雄
10	都筑郡中川村牛久保一八五番地	深川嘉兵衛	横浜市都筑区牛久保東２丁目２１－２ 中川小学校体育館脇（換地により位置不明）	
11	都筑郡二俣川村二、〇一六番地	齊藤佐吉	横浜市旭区本村町５６－１	斎藤進
12	都筑郡二俣川村二俣川一、九七〇番地の一	入内島留五郎	横浜市旭区本村町７－２４と２５と２６	大久保、工藤、杉原
13	久良岐郡日下村笹下一四三番地	山室粂吉	横浜市港南区笹下２丁目３０－５	山室敏夫
14	久良岐郡日下村上中里三二四番地	友井庄次郎	横浜市磯子区上中里町３２４	友井伸太郎
15	鎌倉郡本郷村公田六七三番地	長沼柳蔵	横浜市栄区公田町６７３	長沼芳人
16	鎌倉郡本郷村小菅ヶ谷二三三六番地	牛尾由蔵	横浜市栄区小菅ヶ谷３丁目	（区画整理により位置不明）
17	鎌倉郡豊田村田谷一、六九一番地	矢島興市	横浜市栄区田谷町１６９１	矢島寛
18	鎌倉郡豊田村上倉田二二八番地	相澤金蔵	横浜市戸塚区上倉田町２３０	（交換分合により位置不明）
19	鎌倉郡中川村上矢部一、三四八番地	石渡乙次郎	横浜市戸塚区上矢部町１３４８	石渡肇
20	鎌倉郡中川村阿久和一六六五番地	相原喜一郎	横浜市瀬谷区阿久和南１丁目１０－７	相原勝
21	高座郡綾瀬村深谷四〇一〇番地	比留川忠蔵	綾瀬市深谷上６丁目２－１	ウェルパーク綾瀬深谷店
22	高座郡綾瀬村吉岡九一二番地	飯島徳太郎	綾瀬市吉岡９１２	飯島輝義
23	高座郡大野村中和田新開四九六七番地	鈴木仙太郎	相模原市南台５丁目１０－１７	鈴木ビル（区画整理）
24	高座郡大野村中和田新開四九六七ノ四	川島廣吉	相模原市南台５丁目１２－１２	コスモヒロ南台（区画整理）
25	高座郡相原村清兵衛新田一〇七一番地	小山藤次郎		
26	高座郡相原村清兵衛新田二三三番地	小山良平	相模原市中央１丁目５－１、５－４	すし屋・焼き肉屋（区画整理）
27	高座郡麻溝村下溝一一三四番地	政木吉利	相模原市下溝１１３４	政木晃、政木武
28	高座郡麻溝村當麻五四五番地	上原辰五郎	相模原市当麻５４５	上原考利
29	高座郡寒川村岡田一五七六番地	橋村豊八	高座郡寒川町岡田４丁目１３－３６	橋村征夫・そのほか複数
30	高座郡寒川村小谷五八七番地	阿諏訪豊次郎	高座郡寒川町小谷１丁目１－３３	阿諏訪竜男
31	中郡大野村真土四九一番地	平井角左衛門	平塚市東真土１丁目８－１８、８－２１	平井常雄
32	中郡大野村真土五五一番地	市川林之介	平塚市東真土３丁目３－３	市川正之・伊藤定雄
33	中郡相川村岡田一、三五九番地	山口廣吉	厚木市岡田５丁目７－７	山口治久
34	中郡相川村長沼六八番地	落合長治	厚木市長沼６８	落合俊夫
35	中郡大根村南矢名八九一番地	高橋初五郎	秦野市南矢名８９１	高橋
36	中郡大根村真田九四番地	相原由蔵	平塚市真田１７６	相原秀利
37	中郡吾妻村一色四二二番地	橘川伴蔵	中郡二宮町一色４２２	橘川史郎・謙司
38	中郡吾妻村中里八一二番地	西山熊次郎	中郡二宮町中里８１２	西山専三
39	中郡北秦野村菩提一七六四番地	杉崎喜作	秦野市菩提１７６４	杉崎禧一
40	中郡秦野村三屋七〇番地ロ号	北村仁三郎	秦野市三屋７０	北村楽治
41	愛甲郡南毛利村愛名一一五二番地	飯原重作	厚木市愛名１１５２	飯原一郎
42	愛甲郡南毛利村温水一〇五五番地	神崎喜作	厚木市温水１０５５	神崎秀之
43	愛甲郡荻野村上荻野五、六六三番地	岸竹治郎	厚木市上荻野５６６３	岸正義
44	愛甲郡荻野村中荻野五三番地	花上清太郎	厚木市中荻野５３	花上雅男
45	愛甲郡中津村坂本五、四三九番地	柏木新次郎	愛甲郡愛川町中津５４３８	柏木誠
46	愛甲郡中津村八管一四九番地	足立原沖助	愛甲郡愛川町八管山１４９	足立原澄男

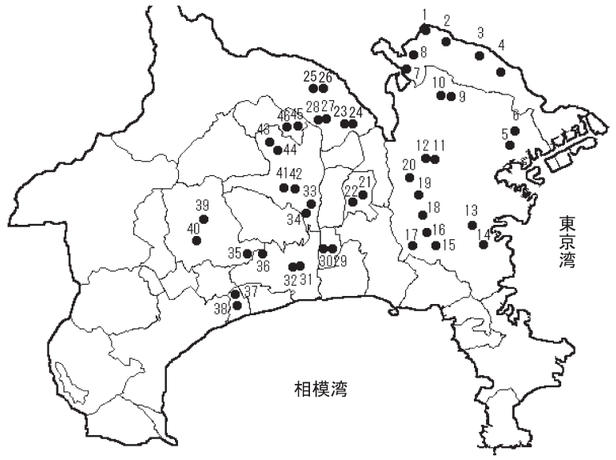


図１　46軒の分布地図　地図中の番号は表１の番号の所在地を示している．

あるが，小作農に適当な事例がない場合には自作兼小作農を選ぶとしている．

四項には調査結果を通観しての悲観的感想が述べられている．「農舎に於ても農地に於ても不便不利甚だ多く，無理無謀尠からさるを認む，如何に之に適応すへき乎，如何に之を補正すへき乎，如何に之を改造すへき乎，此の如き農舎に文化生活を実顕する端緒如何，此の如き農地に機械器具を実用する階梯如何，此の如き農業に共同計理を実施する方法如何，事例僅に五十，而かも疑問百出，各一案を要めて止まず」とする．調査担当者は，調査結果から農舎・農地の現状を極めて劣悪な状況にあると総括し，このような農舎に文化的生活を実現する糸口を見つけることができるか，このような農地に機械化が可能であろうかと，当惑し途方に暮れた様子が示されている．

五項では，いたしかたなく，調査した事例をまとめて一篇として，当初より指導を仰いでいる農商務省の石黒忠篤農政課長にその批評をいただくとともに，同憂の各位に提示し助力をいただきたいとしている．

以上のように，農舎や農地の改善を目的に調査を実施したが，その実態は極めて劣悪な状況にあると自虐的に総括している．当時の実情が担当者が総括するほど，悲観的であるかどうかはさておき，確かにこれらの調査事例から，将来にむけた方策を導きだすことは難しそうである．とはいえ，調査事例が示す当時の農村の詳細な実情は，今となっては極めて貴重な民家や農村環境を示す資料といわねばならない(3)．

調査が行われた46軒の農家は当時の神奈川県下の橘樹郡など７つの郡の23ヵ村に渡っている．46軒が所在する旧各郡各村および当時の居住者名は表１の左側の通りである．その90年ほど後の現在の住所・居住者名などは右側の通りである(4)．また，それぞれのおよその位置は図１の地図のようである．全県に渡って選ばれていることがわかる．

各村からは自作農・小作農がそれぞれ１軒選ばれているが，適当な小作農が見つからなかったのか，愛甲郡の３村では小作農の代わりに自作兼小作農がそれぞれ選ばれている．その結果県下で自作農23軒，小作農20軒，自作兼小作農３軒が選び出されている．

都筑郡中川村の事例をもとに記事内容を確認すれば以下のようである．「農舎に関するもの」の１

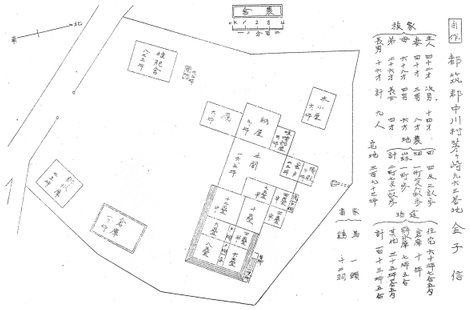


図2　都筑郡中川村茅ヶ崎　金子信家農舎

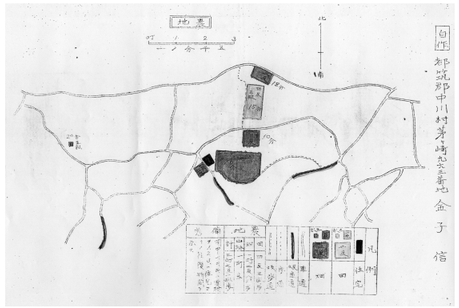


図3　都筑郡中川村茅ヶ崎　金子信家農地

頁（図2）はまず「自作，都筑郡中川村茅ヶ崎九六三番地　金子　信」所有者名などが記され，「家族　主人　四十二才，妻　四十才，……計九名」，「農地　田　四反三畝歩，畑　一町二反八畝歩，山林一町歩，計二町七反一畝歩」「宅地　三百九十三坪」「建物　住宅　六十坪七合五勺，倉庫　十坪，貯氷庫　七坪五合，其他三十五坪二合五勺，計　百十三坪五合」「家畜　馬一頭，鶏十二羽」と書き上げられる．さらに，農舎というタイトルと200分の1のスケールバーおよび方位を示した宅地および主屋をはじめとする建物の間取りが図示される(5)．「農地に関するもの」の1頁（図3）は，前頁同様に「自作，都筑郡中川村茅ヶ崎九六三番地　金子　信」とまず所有者名が書かれる．「農地」というタイトルに5,000分の1のスケールバーと方位が添えられ，道路・水路などが描かれた略地図に所有する自宅・耕地の配置を示す．自宅や耕地には一枚づつ手描きで彩色が施されおり，凡例によると自宅が紫色，田が黄色，畑が茶色，水路が水色である．さらに耕地までの往復時間をたとえば10分というように分単位で注記している．

民家の学術的調査のはじまり

日本において民家が学術的な研究対象となり，民家の調査が始められたのは大正年間の半ばからのことである．柳田國男や農政官僚の石黒忠篤，さらには建築家の佐藤功一・今和次郎らによる民家研究会である白茅会が発足したのが大正6年（1917）のこと．この白茅会のメンバーの一人である石黒忠篤が『農舎及農地に関する現状』の調査にも深くかかわっていたことが，先に示した緒言から明らかである．さらに，今和次郎が日本で最初の民家についての本（『日本の民家』）を出版するのが，『農舎及農地に関する現状』が発行された年と同じ大正11年であった．

また，『農舎及農地に関する現状』のための調査が行われた大正10-11年は関東大地震のおこる直前の時期（前年および前々年）でもあり，被害をうける直前の神奈川県下の農村の様相を示していることでも貴重であるといえよう．

農会

農会は，第二次世界大戦前にあった農業の改良・発達をはかることを目的とした農業団体である．町村・郡・道府県・全国と系統だった組織だてであった．明治27年（1894）大日本農会は全国農事大会を開催し，系統農会の結成を決議した．明治32年（1899）の農会法，明治33年の農会令により，それまで任意団体であった系統農会は公法人化された．さらに明治43年（1910）の農会法の改

正により，農会の中央組織である帝国農会の法制化が実現した．ここに帝国―道府県―郡―市町村農会とするヒエラルキーをもった組織が完成し，統制的農政が確立する．帝国農会は，農業者の意見を集約・代表して政府や官庁に農業政策に関する建議を行う．一方，官庁が行うべき各種の農業調査を市町村農会を通じて代行することも多かった．道府県・郡・市町村農会は，農事の改良発達を計るため研究・調査・指導・奨励などの事業を行なった．

その神奈川県農会が行なった調査報告書のひとつが『農舎及農地に関する現状』である．

2　『農舎及農地に関する現状』からみた大正10-11年の民家の様相

宅地規模

宅地の最大は，高座郡寒川村の橋村豊八家の663坪である．次いで556坪・522.8坪・502坪と続いている．一方，最小は都筑郡柿生村萬福寺の中島福太郎家の29.7坪で，次いで小さいのが67坪の1軒，88坪の2軒であり，100坪に満たない宅地はこの4軒だけである．規模分布をみると100坪台の宅地が14軒，200坪台が14軒と多く，300坪台が8軒と続いている．平均坪数は262.17坪であるが，大きい宅地，小さい宅地がそれぞれあり，比較的格差が大きいといえよう．当然のことながら自作農が大きく，小作農が小さい傾向にある．とはいえ，小作農でも499坪と大きく，自作農でも155坪と比較的小さい場合もある．いずれにせよ，現代人の目からみれば全般に大きな宅地を持っているように映る．

家屋構成

主屋がない家は当然1軒もない．付属屋の棟数についてみると，まったく付属屋を持たないものから9棟の付属屋をもつものまである．主屋と2棟の付属屋の3棟構成が16軒と最も多い．これに次ぐのは主屋と付属屋3棟，主屋と付属屋4棟の構成がいずれも7軒であり，主屋と付属屋1棟が6軒，主屋と付属屋6棟が5軒である．主屋だけの家は都筑郡二俣川村二俣川の入内島留五郎家1軒のみである．この家の主屋の場合土間と反対の妻側に庇を降ろし納屋を設けており，独立した付属屋の代わりにしているとも考えられる．主屋に付属屋1棟からなる2棟構成は6軒である．そのうち主屋に半坪の便所だけしかないものが2軒あり(6)，そのほかは主屋に「納屋」あるいは「堆肥舎」をもつ構成である．付属屋のうち(7)例数が多い建物は，「堆肥舎」の36軒，「納屋」の34軒である．納屋は独立の家屋にならず，主屋のうちに部屋として設けられる例も多い．これらの点からみて下便所を別にすれば(8)，家屋構成は主屋と「堆肥舎」と「納屋」とから構成される3棟構成が多いとみて間違いない．主屋と9棟の付属屋をもつ高座郡寒川村の橋村豊八家（表3の29）の場合は，「主屋」に「倉庫」「納屋・調製室」「堆肥舎・車小屋」「木小屋」「湯殿・味噌部屋」「便所」「豚舎」「牛舎」「離家」と多彩な構成である．

家屋配置

宅地ないにおける主屋と付属屋と乾燥場である空き地の配置には以下のようなタイプがある．Aタイプは，主屋を宅地の奥に宅地の入り口の正面に建て，主屋の前方で入口との間に乾燥場となる広

表２　農地・建物・家畜等記事整理一覧

	住所・氏名	家族数	下男・子守他	自・小作の別	農地				建物						家畜					建蔽率（%）
					田（反）	畑（反）	山林（反）	計（反）	宅地（坪）	住宅（坪）主屋	倉庫（坪）	貯水庫（坪）	その他（坪）	計（坪）	牛（頭）	馬（頭）	豚（頭）	鶏（羽）	養蚕（匁）	
1	橘樹郡稲田村東笹四、四一七番地、上原茂八	6	1	自作	1.2	5.8		7	332	43	6		6	55				5		17
2	橘樹郡稲田村登戸二、五七八番地、田中福太郎	9		小作	6.2	9.7		15.9	214.5	26.95			18.5	45.45				3		21
3	橘樹郡中原村新城三九五番地、松原興四郎	8		小作	14.4	3		17.4	236	23.25			4.5	27.75	1			4		12
4	橘樹郡中原村上小田五四七番地、鹿島蕎右衛門	10	1	自作	15.3	7.1		22.4	328	36.5			48.75					6		23
5	橘樹郡鶴見町東寺尾八一三番地、熊澤萬吉	6	1	小作	1	8		9	159	13			9	22						14
6	橘樹郡鶴見町二、三四五番地、池田亀五郎	8	3	自作	6.1	10.3		16.4	215	27			36	63	1			10		29
7	都筑郡柿生村萬福寺一二四番地、鈴木多一郎	5	半屋1	自作	3.2	6.6	66.425	76.225	556	59	9		25.75	93.75				20		17
8	都筑郡柿生村萬福寺二八九番地、中島福太郎	3		小作	5.516	2.725		8.315	29.7	11.25			2	13.25						45
9	都筑郡中川村茅ヶ崎九六三番地、金子信	5		自作	4.3	12.8	10	27.1	393	60.75	10	7.5	35.25	113.5		1		12		29
10	都筑郡中川村牛久保一八五番地、深川嘉兵衛	8		小作	4.5	6		10.5	195	22			10.5	32.5						17
11	都筑郡二俣川村二、〇一六番地、齊藤佐吉	10	2	自作	3.2	19.8		23	163.79	33.5			25.7	59.2	1			6	17	36
12	都筑郡二俣川村二俣川一、九七〇番地の一、　入内島留五郎	7		小作	4.726	6.18		10.94	67	17.75			3.5	21.25				3		32
13	久良岐郡日下村笹下一四三番地、山室粂吉	8		自作	5.5	5.4		10.9	155	34			14	48						31
14	久良岐郡日下村上中里三二四番地、友井庄次郎	6		小作	4	2.2		6.2	116	21			9	30						26
15	鎌倉郡本郷村公田六七三番地、長沼柳蔵	5	1	自作	5.4	4.023		9.426	―	42.33			31.25	73.58						
16	鎌倉郡本郷村小菅ヶ谷二三三六番地、牛尾由蔵	7		小作	5.8	5	1.9	12.8	127	27.25			6.5	33.75			1	7		27
17	鎌倉郡豊田村田谷一、六九一番地、矢島興市	7	1	自作	15.4	11.321		26.729	225	47.8	8.75		22.24	78.79	1			10		35
18	鎌倉郡豊田村上倉田二二八番地、相澤金蔵	7		小作	13.714	7.727		21.511	88	22.5			7.5	30						34
19	鎌倉郡中川村上矢部一、三四八番地、石渡乙次郎	5		小作	7615	7.9		15.515	167	28.75			15	43.75					8	26
20	鎌倉郡中川村阿久和一六六五番地、相原喜一郎	4		自作	3.026	14.904	3.624	21.624	369	63	10		44	117			1	10	8	32
21	高座郡綾瀬村深谷四〇一〇番地、比留川忠蔵	9		自作	4.915	29.8		34.715	294	58	5		29.25	92.25			1	9	32	31
22	高座郡綾瀬村吉岡九一二番地、飯島徳太郎	6	1	小作	5.4	20.8		26.2	347	35.08			37	72.08	1			45	35	21
23	高座郡大野村中和田新開四九六七番地、鈴木仙太郎	6		自作		22		22	180	33.5			12.25	45.75				7	12	25
24	高座郡大野村中和田新開四九六七ノ四、川島廣吉	4		小作		17		17	88	15			0.5	15.5					8	18
25	高座郡相原村清兵衛新田一〇七一番地、小山藤次郎	5		自作		35		35	522.8	34.5			28.5	63					26	12
26	高座郡相原村清兵衛新田二三三番地、小山良平	8		小作		30	7	37	390	43.75			14.5	58.25					40	15
27	高座郡麻溝村下溝一一三四番地、政木吉利	6	2	自作	1.415	18.311		19.726	480	33			27.5	60.5			1	3		13
28	高座郡麻溝村當麻五四五番地、上原辰五郎	7	1	小作	3.8	15.9		19.7	180	47.5			8	55.5	1			3	23	13
29	高座郡寒川村岡田一五七六番地、橋村豊八	9		自作	17.017	20.006	8.403	45.426	663	45.75	11.25		42	99	1		3	6	15	15
30	高座郡寒川村小谷五八七番地、阿諏訪豊次郎	4		小作	6.609	12.007		18.616	288	26.25			18.25	44.5						15
31	中郡大野村真土四九一番地、平井角左衛門	9		自作	4.709	15.72		20.504	502	41.5	8		28.5	78						16
32	中郡大野村真土五五一番地、市川林之介	7		小作	1.709	7.513		9.222	118	16.81			0.5	17.31				10		15
33	中郡相川村岡田一、三五九番地、山口廣吉	8	1	小作	18.415	1.7		20.115	150	19.25			13.5	32.75			3		5	22
34	中郡相川村長沼六八番地、落合長治	9	2	自作	20.508	5.808		26.316	245	33	12		21	66					27	27
35	中郡大根村南矢名八九一番地、高橋初五郎	10		自作	6.319	11.904		18.223	196	30.75	7.5		13.5	51.75			1			26
36	中郡大根村真田九四番地、相原由蔵	8		小作	7.326	5.323		12.719	219	30.95			19	49.95		1				23
37	中郡吾妻村一色四二二番地、橘川伴蔵	9		自作	3.425	11.901	14.429	29.825	257	32.5			20.3	52.8	1					21
38	中郡吾妻村中里八一二番地、西山熊次郎	6	半屋1	小作	5.702	17.906	4.202	27.81	300	35.5			22.41	57.91	2		2	3	3	19
39	中郡北秦野村菩提一七六四番地、杉崎喜作	11	1	自作	3.426	12.501	9.609	25.606	373	38.25			48.5	86.75		1				23
40	中郡秦野村三屋七〇番地ロ号、北村仁三郎	9		小作		13.3		13.3	499	32.75			28	60.75		1				12
41	愛甲郡南毛利村愛名一一五二番地、飯原重作	6		自作	3.1	8.315	6.51	17.925	224	37	4		27.75	68.75				17	11	31
42	愛甲郡南毛利村温水一〇五五番地、神崎喜作	9		自小作	8.8	12.7	1.1	22.6	227	40.5			18.75	59.25			1	6	27	26
43	愛甲郡萩野村上萩野五、六六三番地、岸竹治郎	8		自作	3.3	10.3	4.5	18.1	182	35.5			16.5	52					10	29
44	愛甲郡荻野村中荻野五三番地、花上清太郎	7		自小作	3.2	13.1		16.3	280	35			20.5	55.5				5	39	20
45	愛甲郡中津村坂本五、四三九番地、柏木新次郎	10	半屋1	自作	4.8	10.7	2.6	18.1	290	55.25			22.5	77.75		1		7	23	27
46	愛甲郡中津村八管一四九番地、足立原沖助	4		自小作	2.6	9.1		11.7	167	26.25			9.5	35.75					18	21

表３　付属屋一覧

	住所・居住者名	自,小作の別	倉庫	納屋	堆肥舎	カマド	木小屋	調製室	湯殿	便所	豚舎	牛舎・馬舎	鶏舎	貯桑場	養蚕室	味噌部屋	隠居所・離家	その他	付属屋数	井戸
1	橘樹郡稲田村東笹四、四一七番地、上原茂八	自	倉庫	納屋															2	井戸
2	橘樹郡稲田村登戸二、五七八番地、田中福太郎	小		納屋	堆肥舎	木小屋・カマド	（木小屋・カマド）												3	井戸
3	橘樹郡中原村新城三九五番地、松原興四郎	小			堆肥舎・牛舎							（堆肥舎・牛舎）							1	井戸
4	橘樹郡中原村上小田五四七番地、鹿島蕎右衛門	自		納屋・木小屋・便所	堆肥舎・溜		（納屋・木小屋・便所）				豚舎					味噌部屋・納屋			4	井戸
5	橘樹郡鶴見町東寺尾八一三番地、熊澤萬吉	小		納屋・調製室	堆肥舎			（納屋・調製室）											2	井戸
6	橘樹郡鶴見町二、三四五番地、池田亀五郎	自			堆肥舎・牛舎・木小屋	カマド	（堆肥舎・牛舎・木小屋）	調製室	湯殿	便所		（堆肥舎・牛舎・木小屋）	鶏舎						6	井戸
7	都筑郡柿生村萬福寺一二四番地、鈴木多一郎	自	倉庫								豚舎						隠居所	門・納屋	4	井戸
8	都筑郡柿生村萬福寺二八九番地、中島福太郎	小			堆肥舎					便所									2	井戸
9	都筑郡中川村茅ヶ崎九六三番地、金子信	自	倉庫		堆肥舎		木小屋			便所								貯氷庫	5	井戸
10	都筑郡中川村牛久保一八五番地、深川嘉兵衛	小			堆肥舎					便所									2	井戸
11	都筑郡二俣川村二、〇一六番地、齊藤佐吉	自		納屋（２）	堆肥舎・牛舎・便所		（堆肥舎・牛舎・便所）		湯殿	（堆肥舎・牛舎・便所）	豚舎			貯桑場					6	井戸
12	都筑郡二俣川村二俣川一、九七〇番地の一、　入内島留五郎	小																	0	井戸
13	久良岐郡日下村笹下一四三番地、山室粂吉	自		納屋	堆肥舎														2	なし
14	久良岐郡日下村上中里三二四番地、友井庄次郎	小		納屋															1	井戸
15	鎌倉郡本郷村公田六七三番地、長沼柳蔵	自		納屋・調製室	堆肥舎		木小屋	（納屋・調製室）	湯殿										4	井戸
16	鎌倉郡本郷村小菅ヶ谷二三三六番地、牛尾由蔵	小			堆肥舎						豚舎								2	井戸
17	鎌倉郡豊田村田谷一、六九一番地、矢島興市	自	倉庫	納屋	堆肥舎・納屋														3	井戸
18	鎌倉郡豊田村上倉田二二八番地、相澤金蔵	小			堆肥舎														1	井戸
19	鎌倉郡中川村上矢部一、三四八番地、石渡乙次郎	小		納屋	堆肥舎														2	井戸
20	鎌倉郡中川村阿久和一六六五番地、相原喜一郎	自	倉庫	納屋	堆肥舎		木小屋	納屋・調製室										門	6	井戸
21	高座郡綾瀬村深谷四〇一〇番地、比留川忠蔵	自	倉庫	納屋	堆肥舎				湯殿・味噌部屋	便所						（湯殿・味噌部屋）			5	井戸
22	高座郡綾瀬村吉岡九一二番地、飯島徳太郎	小		納屋	堆肥舎		木小屋		湯殿			牛舎	鶏舎	貯桑場					7	井戸
23	高座郡大野村中和田新開四九六七番地、鈴木仙太郎	自		納屋・堆肥舎	（納屋・堆肥舎）					（鶏舎・便所）			鶏舎・便所						2	井戸
24	高座郡大野村中和田新開四九六七ノ四、川島廣吉	小								便所									1	井戸
25	高座郡相原村清兵衛新田一〇七一番地、小山藤次郎	自							湯殿					貯桑場	養蚕室				3	井戸
26	高座郡相原村清兵衛新田二三三番地、小山良平	小		納屋					湯殿・便所	（湯殿・便所）									2	井戸
27	高座郡麻溝村下溝一一三四番地、政木吉利	自		納屋・調製室	堆肥舎・豚舎			（納屋・調製室）		便所	（堆肥舎・豚舎）								3	井戸
28	高座郡麻溝村當麻五四五番地、上原辰五郎	小			堆肥舎・牛舎・便所														1	井戸
29	高座郡寒川村岡田一五七六番地、橋村豊八	自	倉庫	納屋・調製室	堆肥舎・車小屋		木小屋	（納屋・調製室）	湯殿・味噌部屋・井戸	便所	豚舎	牛舎				（湯殿・味噌部屋・井戸）	離家	（堆肥舎・車小屋）	9	井戸※
30	高座郡寒川村小谷五八七番地、阿諏訪豊次郎	小		納屋	堆肥舎														2	井戸
31	中郡大野村真土四九一番地、平井角左衛門	自	倉庫	納屋	堆肥舎							堆肥舎・馬舎							4	井戸
32	中郡大野村真土五五一番地、市川林之介	小								便所									1	なし
33	中郡相川村岡田一、三五九番地、山口廣吉	小		納屋・豚舎・溜	堆肥舎					（納屋・豚舎・溜）									2	井戸
34	中郡相川村長沼六八番地、落合長治	自	倉庫	納屋	堆肥舎（２）	カマド				便所									6	井戸
35	中郡大根村南矢名八九一番地、高橋初五郎	自	倉庫	納屋	堆肥舎						豚舎								4	井戸
36	中郡大根村真田九四番地、相原由蔵	小		納屋・調製室	堆肥舎・馬舎			（納屋・調製室）				（堆肥舎・馬舎）							2	井戸
37	中郡吾妻村一色四二二番地、橘川伴蔵	自		納屋・堆肥舎	（納屋・堆肥舎）							牛舎・納屋							2	井戸
38	中郡吾妻村中里八一二番地、西山熊次郎	小		納屋・牛舎・堆肥舎	（納屋・牛舎・堆肥舎）					便所・溜	豚舎（２）	（納屋・牛舎・堆肥舎）							4	井戸
39	中郡北秦野村菩提一七六四番地、杉崎喜作	自		納屋	堆肥舎・馬舎・味噌部屋							（堆肥舎・馬舎・味噌部屋）				（堆肥舎・馬舎・味噌部屋）	隠居所		3	井戸
40	中郡秦野村三屋七〇番地ロ号、北村仁三郎	小		納屋								納屋・馬舎							2	井戸
41	愛甲郡南毛利村愛名一一五二番地、飯原重作	自	倉庫	納屋・豚舎	堆肥舎					便所	（納屋・豚舎）							揚枠室（２）	6	井戸
42	愛甲郡南毛利村温水一〇五五番地、神崎喜作	自小		納屋	堆肥舎・便所					（堆肥舎・便所）	豚舎								3	井戸
43	愛甲郡萩野村上萩野五、六六三番地、岸竹治郎	自		納屋	堆肥舎				湯殿										3	井戸
44	愛甲郡荻野村中荻野五三番地、花上清太郎	自小		納屋・調製室	堆肥舎			（納屋・調製室）	湯殿	便所									4	井戸
45	愛甲郡中津村坂本五、四三九番地、柏木新次郎	自		納屋・養蚕室	堆肥舎・木小屋		（堆肥舎・木小屋）								（納屋・養蚕室）				2	井戸
46	愛甲郡中津村八管一四九番地、足立原沖助	自小		納屋・堆肥舎	（納屋・堆肥舎）				湯殿・便所	（湯殿・便所）									2	井戸

括弧は重複記入を示す。
※建物内に井戸あり

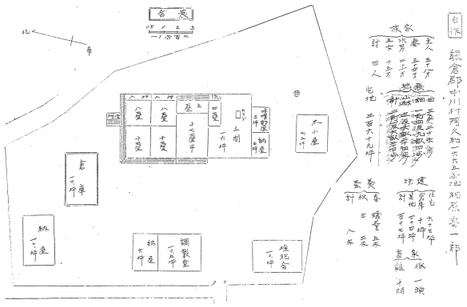


図4　Aタイプ家屋配置例：相原喜一郎家農舎

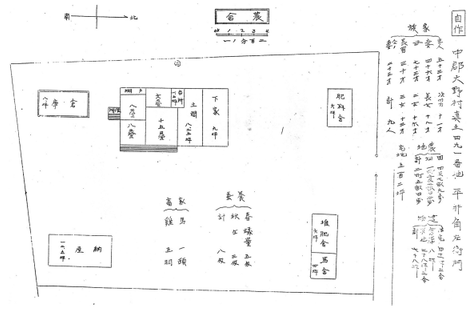


図5　Bタイプ家屋配置例：平井角左衛門家農舎

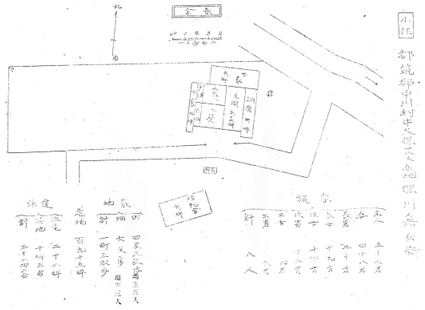


図6　Cタイプ家屋配置例：深川嘉兵衛家農舎

場を取り，広場を取り囲むように広場両側に付属屋を配するものである（図4）．このタイプの場合片側のみに付属屋が配されるものも含める．Bタイプは，主屋を宅地の左右いずれかの側に建て，主屋正面の方向は宅地入口の延長線に直角となるものである．すなはち，入口を直進して入ると左右いずれかに主屋があり，その主屋前の広場に出ることになり，付属屋は広場の周囲に配される．このタイプの場合も付属屋が片面だけに配される場合も含める（図5）．Cタイプは，主屋が宅地の最前面にあって前面道路に接するか，宅地入口の近くに建てられ，主屋の奥に乾燥場となる広場を配するタイプである（図6）．宅地の入口が明確でないもの，宅地を前面道路が分断する例など6軒を別にすると，Aタイプが21軒，Bタイプが14軒，Cタイプが5軒である．

Cタイプは宅地が比較的小さく，小作農の家ばかりである．Aタイプ，Bタイプはともに中央に乾燥場となる広場を置き，主屋と付属屋との連絡や管理にも都合がよいようである．経済力に余裕があれば，宅地のもつ条件によって，これら両タイプのいずれかになっているようだ．

主屋の向き（方位）

46軒の主屋の正面がどちらの方向に向いて建っているかについて分類してみると（表4），主屋が南に面するのが26棟，南東に面するのが5棟，南西に面するのが3棟，東に面するのが7棟，西に面するのが4棟，北に面するのが1棟である．南東・南西に面する8棟も広義に南面とすれば7.4割ほど（34/46）が南面していると見ることができる．予想にたがわず南面する場合が多い．東に面するものが1.5割ほど（7/46），西に面するものが1割に満たないほど（4/46）である．北に面する1軒は都筑郡柿生村の鈴木多一郎家である．当家は自作農で556坪の大きな宅地を持っているが，北側の前面道路に面して門（長屋門であろうか）を開いており，その正面奥に北面（道路に向かって）して主屋を建てた配置になっている．

建蔽率

建築面積の敷地面積に対する割合である建蔽率は現代の市街地では極めて重要な要素である．個々

の建築の環境や市街地の環境を確保すると共に，火災の拡大防止などにおいても空地を確保する目的で建蔽率の制限が行われている．その建蔽率が当時どれほどであったかも興味深いことである．建蔽率について整理してみると（表2），建蔽率の最も高いもので45%，最も低いもので12%である．40%台は最大の事例のみの1軒，二番目に高率の36%を含め30%台が8軒，20%台が20軒，10%台が16軒である．20%台・10%台が多いことがわかる．45%と最も建蔽率の高い都筑郡柿生村の中島福太郎家は，主屋・堆肥舎併せての建築面積が13.25坪と小さいものの，宅地面積が46軒中最小の29.7坪であるため高い比率となっている．旧公図によると当家宅地の周囲には近接する宅地がまったくないようだ．隣家から少し離れたこのような立地を考えれば，環境には問題はなかったと思われる．

主屋規模

主屋規模が最も大きい住宅は鎌倉郡中川村阿久和の相原喜一郎家の63坪である．次いで大きいのは都筑郡中川村茅ヶ崎の金子信家の60.75坪である．一方，最も小さいのは都筑郡柿生村萬福寺の中島福太郎家の11.25坪である．次いで小さいのは橘樹郡鶴見町東寺尾の熊澤萬吉家の13坪である．いずれにせよ，極端に大きい主屋，逆に極端に小さい主屋が少ないように見える．これは緒言三項にある「農業経営の程度はその地方の普通程度を選ぶ」との選択規準に起因するのであろう．江戸時代末期の例からみても[9]，一般的にはもっと極端に大きい主屋や小さい主屋があったはずである．分布を見れば30坪台が17軒と最も多く，20坪台が10軒，40坪台が8軒と続き，これらで35/46すなわち7.6割を占める．平均坪数は34.21坪である．

自作兼小作農の3軒を別にして，自作農と小作農に分けて規模についてみてみる．自作農の最大は全体の最大と同じであり63坪で，最小は27坪，次いで小さいのは30.75坪である．自作農の平均坪数は41.5坪である．一方，小作農の最大は47.5坪で，最小は11.25坪であり，平均坪数は25.8坪である．自作農の主屋平均坪数が小作農に比べ15坪ほど大きく，格差があることがわかる．

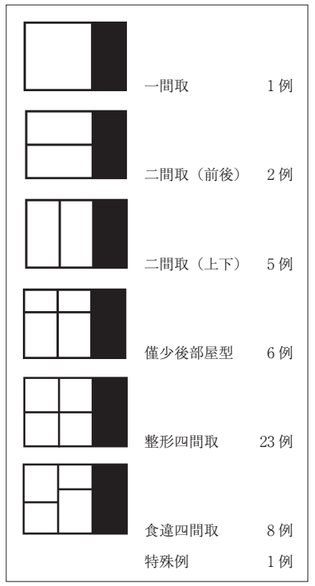


図7　平面形式の分類
（一間取・二間取は規模が小さく，四間取などは比較的規模が大きいが，模式的に示したため同一規模で表現されている．なお，黒塗は土間を示す．）

主屋平面

主屋平面から判断すれば一部の例外[10]を除き，ほとんどの主屋は，大きな土間と床上部分からなる江戸時代から続く伝統的農家の形式である．平面の形式を分類すれば以下のように大別できよう[11]（図7）．土間と床上1室からなる「一間取」（参考：図8），土間と2室からなる間取りで前後に2室を配する「二間取（前後）」（参考：図6）と上手・下手に2室を配す「二間取（上下）」（参考：図9），通常広間と呼ばれる土間沿いの大きな部屋の後方に奥行1間ほどで横に（桁行きに）細長い僅少な部屋をもつ「僅少後部屋型」（仮にこう呼ぶ．参考：図10），床上部分を田の字

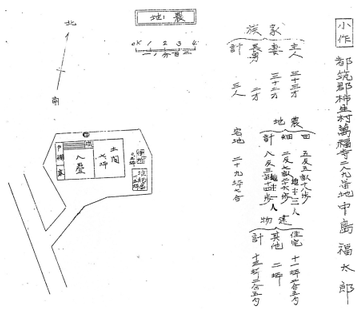


図 8　一間取の例

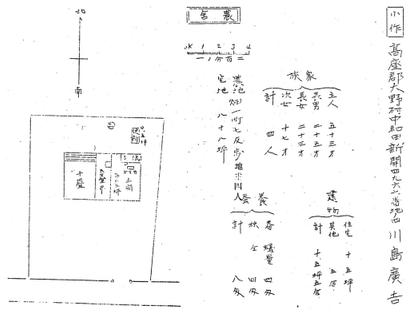


図 9　二間取（上下）の例

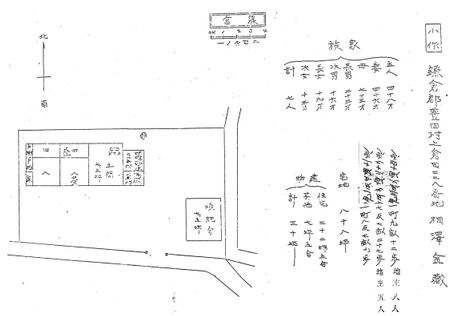


図 10　僅少裏部屋型の例

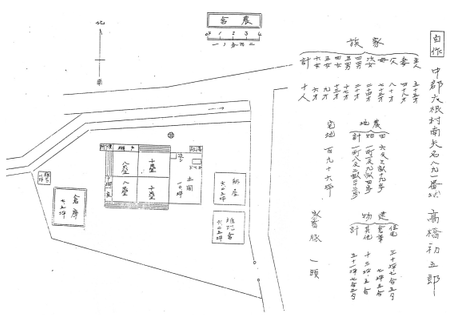


図 11　整形四間取の例

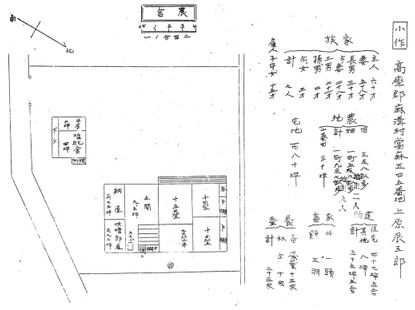


図 12　食違四間取の例

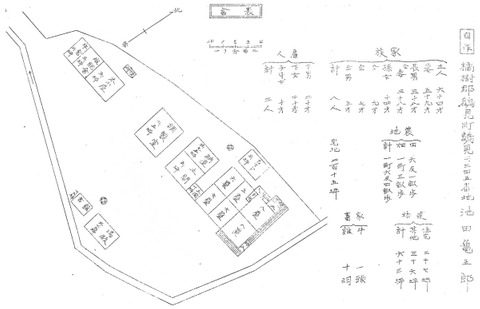


図 13　特殊例

に区切った「整形四間取」（参考：図 11），田の字のように間仕切り線が十字に通らないで食い違う「食違四間取」（参考：図 12）である．

「一間取」が 1 例，「二間取（前後）」が 2 例，「二間取（上下）」が 5 例[12]，「僅少後部屋型」が 6 例，「整形四間取」が 23 例，「食違四間取」8 例，特殊例が 1 例である．特殊例の 1 例は土間をもたないサの字に間仕切った床上部分の棟と土間棟とを 1 坪の土間で繋いだ平面である[13]（図 13）．床上の平面形は「整形四間取」の拡張型とみてよい．

「一間取」「二間取」はあわせて 8 例ある．大正 10–11 年の「農業経営の程度はその地方の普通程度を選ぶ」なかにおいても，1〜2 割ほどはこのような間取に住んでいたことが判明する．

8 例ある「僅少後部屋型」は，土間沿い前の通常広間と称される部屋の後ろに，奥行 1 間しかない横長の部屋を配しているのが特徴である．比較的奥行が広い「整形四間取」「食違四間取」の広間の

後ろに位置する部屋とは異質な部屋となっている．ただし，この部屋の用途が台所なのか寝間なのかは必ずしも明らかでない[14]．

「食違四間取」は 8 例ある．この型の中には通常広間と称される部屋を広くするため，後方よりで間仕切ったため，間仕切りが十字とならなかったと思しき例が 5 例ある．

「整形四間取」は 5 割以上を占め圧倒的に多い．このような実情をみると農家は古くから田の字型四間取であったと誤解されたのも無理からぬことであったと思われる[15]．「整形四間取」に分類したなかには，土間沿い後ろの部屋をさらに 2 分割したり，2 分割した後方部分を板敷にした例がそれぞれ 2 例づつある．これは「食違四間取」の広い広間を取るため間仕切りを後方にずらせた 5 例とも相通ずるものであると考えられる．これらは「整形四間取」に至る過渡期の形態を示していると考えるべきなのであろうか[16]．

いずれにせよ，江戸期に主流を占めていたと思われるいわゆる三室広間型がまったく存在しないことには驚かされる[17]．

以上は大正 10–11 年当時の現状である．これらの中には大正期に建てられた主屋もあるが，当然江戸期や明治期に建てられた主屋も多く含まれている．それらは改造されることなく建てられた当初の状態のままの場合もあるが，時代状況にあわせて改造された主屋も多いはずである．大正 10–11 年当時の実状から，神奈川県下には三室広間型がなかったと結論づけることは早計であろう．大正 10–11 年当時の実状のなかに，建てられた当初は三室広間型であったが，改造の結果食い違い四間取や整形四間取になった例も含まれている可能性が多分にあるからである．この点を十分に注意しておく必要があろう．

なお，本資料には部屋の名称についてはほとんど記入されてなく，床上部分の各部屋には畳の枚数を示すのであろう何畳と記入されるのみである．唯一土間沿いの奥に位置する部屋に「台所」と記入される例が 2 例あるだけである．ただし，土間内に設けられる「厩」・「味噌部屋」・「納屋」などは機能上の名称が付されている．

主屋の設備・造作

主屋平面の中に記入された設備・造作について整理したものが表 4 である．

家格を示すであろうと思われる床（とこ）についてみると，46 軒中 32 軒の主屋に床の記入がある．逆に 14 軒には床の記入がない．床の記入のない 14 軒に自作農の主屋 3 棟が含まれている．特に，規模最大の相原家も含まれている．相原家は江戸時代には組頭を務めた家柄である．床があったにもかかわらず，相原家主屋平面には記入もれのため床が記入されなかったと考えるべきなのか，あるいは古い民家で江戸時代まで遡るものであるために床がないと考えるべきなのであろうか[18]．いずれにせよ，大正期の民家には全体の 7 割ほどに床があったことが判明する．特に自作農には多くの場合，床があったといえよう．床の設置場所は，四間取の場合の表側上手に位置する通常座敷と呼ばれる部屋の上手妻側に置かれる場合が 25 例と圧倒的に多い．また，同じ部屋の裏寄りの部屋境に置かれる場合も 2 例ある．

縁・戸棚・上便所なども多くの主屋に設置されていたようである．縁は 8.7 割ほどの 40 軒に設置されている．縁をもたない 6 軒はいずれも小作農である．縁も家格を示していると思われ，特に L

表4　主屋の内に設けられた設備・造作一覧

	住所・居住者名	主屋向き	床	仏壇	押入	戸棚	流し	カマド	いろり	上便所	縁	台所	湯殿	厩・牛舎	納屋	味噌部屋	その他
1	橘樹郡稲田村東管四、四一七番地、上原茂八	南東	床		押入	戸棚（3）	流し			上便所	L字縁	台所					
2	橘樹郡稲田村登戸二、五七八番地、田中福太郎	南				戸棚				上便所	L字縁	台所					
3	橘樹郡中原村新城三九五番地、松原興四郎	南				戸棚					ー						
4	橘樹郡中原村上小田五四七番地、鹿島甚右衛門	南		仏壇	押入	戸棚（3）		「釜場」		上便所	L字縁				納屋		
5	橘樹郡鶴見町東寺尾八一三番地、熊澤萬吉	南	床		押入（2）	戸棚		「カマド」		上便所	縁	台所					
6	橘樹郡鶴見町二、三四五番地、池田亀五郎	南	床	仏壇	押入（2）	戸棚				上便所	縁				納屋		
7	都筑郡柿生村萬福寺一二四番地、鈴木多一郎	北	床			戸棚	流し			上便所	コ字縁	台所			納屋		玄関
8	都筑郡柿生村萬福寺二八九番地、中島福太郎	南	床			戸棚	流し				縁						
9	都筑郡中川村茅ヶ崎九六三番地、金子信	南	床			戸棚（3）	流し	「釜戸」		上便所（2）	コ字縁		湯殿	厩	納屋	味噌部屋	
10	都筑郡中川村牛久保一八五番地、深川嘉兵衛	南				戸棚（2）					ー				納屋		
11	都筑郡二俣川村二、〇一六番地、齊藤佐吉	南	床			戸棚（6）	流し			上便所	縁				納屋（2）		
12	都筑郡二俣川村二俣川一、九七〇番地の一、	入内島留五郎	南				戸棚（4）		「カマド」		上便所	ー				納屋		
13	九良岐郡日下村笹下一四三番地、山室粂吉	南	床			戸棚（3）	流し				縁						
14	九良岐郡日下村上中里三二四番地、友井庄次郎	東				戸棚	流し	カマド			ー						
15	鎌倉郡本郷村公田六七三番地、長沼柳蔵	南	床			戸棚（3）	流し			上便所（2）	縁					味噌部屋	
16	鎌倉郡本郷村小菅ヶ谷二三三六番地、牛尾由蔵	南西	床			戸棚（4）	流し	カマド			ー						
17	鎌倉郡豊田村田谷一、六九一番地、矢島興市	南東	床			戸棚（2）	流し	カマド		上便所（2）	縁			牛舎		味噌部屋	井戸
18	鎌倉郡豊田村上倉田二二八番地、相澤金蔵	南	床			戸棚（2）		カマド			ー		湯殿			味噌部屋	
19	鎌倉郡中川村上矢部一、三四八番地、石渡乙次郎	西				戸棚					L字縁	台所					
20	鎌倉郡中川村阿久和一六六五番地、相原喜一郎	西			押入（2）		流し	カマド		上便所	L字縁				納屋	味噌部屋	
21	高座郡綾瀬村深谷四〇一〇番地、比留川忠蔵	南	床			戸棚（2）				上便所（2）	縁	台所					養蚕室
22	高座郡綾瀬村吉岡九一二番地、飯島徳太郎	西	床			戸棚（2）			いろり	上便所	縁				納屋		
23	高座郡大野村中和田新開四九六七番地、鈴木仙太郎	南東	床			戸棚（2）				上便所	縁		湯殿				隠居所
24	高座郡大野村中和田新開四九六七ノ四、川島廣吉	南					流し	カマド			縁						
25	高座郡相原村清兵衛新田一〇七一番地、小山藤次郎	南	床			戸棚（2）	流し			上便所	L字縁				納屋		
26	高座郡相原村清兵衛新田二三三番地、小山良平	南				戸棚（2）	流し	カマド	いろり		縁						
27	高座郡麻溝村下溝一一三四番地、政木吉利	南	床			戸棚（3）	流し	カマド	いろり		縁				納屋		
28	高座郡麻溝村當麻五四五番地、上原辰五郎	南西	床			戸棚（3）	流し	カマド			縁				納屋	味噌部屋	
29	高座郡寒川村岡田一五七六番地、橋村豊八	西	床		押入	戸棚（4）				上便所	L字縁	台所					
30	高座郡寒川村小谷五八七番地、阿諏訪豊次郎	南東	床			戸棚（3）	流し	カマド		上便所（2）	縁					味噌部屋	
31	中郡大野村真土四九一番地、平井角左衛門	東				戸棚				上便所（2）	縁	台所					
32	中郡大野村真土五五一番地、市川林之介	南					流し	カマド			縁						
33	中郡相川村岡田一、三五九番地、山口廣吉	南				戸棚（2）	流し				縁	台所	湯殿				
34	中郡相川村長沼六八番地、落合長治	東	床			戸棚（2）	流し	カマド		上便所	縁						
35	中郡大根村南矢名八九一番地、高橋初五郎	南	床			戸棚（2）	流し	カマド		上便所	縁		湯殿				
36	中郡大根村真田九四番地、相原由蔵	南東	床		押入	戸棚（3）	流し	竈戸		上便所（2）	縁					味噌部屋	
37	中郡吾妻村一色四二二番地、橘川伴蔵	東				戸棚					L字縁						
38	中郡吾妻村中里八一二番地、西山熊次郎	南	床			戸棚（2）	流し			上便所（2）	縁					味噌部屋	
39	中郡北秦野村菩提一七六四番地、杉崎喜作		床			戸棚（2）	流し	カマド（2）		上便所	縁						
40	中郡秦野村三屋七〇番地口号、北村仁三郎	南西	床			戸棚（3）	流し	カマド		上便所（2）	縁				納屋	味噌部屋	
41	愛甲郡南毛利村愛名一一五二番地、飯原重作	南	床			戸棚（2）		カマド			縁						
42	愛甲郡南毛利温水一〇五五番地、神崎喜作	東	床			戸棚	流し	カマド		上便所	縁		湯殿			味噌部屋	
43	愛甲郡荻野村上萩野五、六六三番地、岸竹治郎	東	床		押入	戸棚（2）	流し	カマド		上便所	縁	台所				味噌部屋	
44	愛甲郡荻野村中荻野五三三番地、花上清太郎	南	床		押入	戸棚（2）	流し	カマド		上便所	縁					味噌部屋	
45	愛甲郡中津村坂本五、四三九番地、柏木新次郎	南	床			戸棚（5）	流し			上便所	L字縁			厩		味噌部屋	
46	愛甲郡中津村八管一四九番地、足立原沖助	東	床			戸棚（2）	流し				縁					味噌部屋	

カマドの欄のカギ括弧つきは部屋（スペース）を示す．括弧ないの数字は複数あることを示す．その他には事例の少ない施設をまとめている．

字・コの字の縁は家格を示しているようだ．

戸棚には台所に付属するものと座敷や寝室に設置されるものの2種類があるようだ．いずれにせよ，9割以上の43軒の主屋に設置され，複数の戸棚をもつ場合も多い[19]．

主屋床上から縁側・廊下を通じて直接行くことができる上便所は29軒に設けている．うち3軒は2箇所に設け，7軒はふたつに区切っている．ふたつに区切った7軒は大便・小便に分けたものと考えられる．2箇所に設けた3軒は客用と家族用とに分けたのか，大便・小便に分けたのかは定かでない．

囲炉裏は平面図に四角く囲んだ囲炉裏らしい図の記入がある例が3軒あるのみである．『農舎及農地に関する現状』に収録されたの図面には囲炉裏の記入がない矢島家主屋[20]には囲炉裏が残されており，多くの場合囲炉裏は存在していたも，図面上では省略されたようだ．かまどは24棟の主屋のなかで確認することができるが，うち4例はかまどという設備ではなく，かまどが置かれたであろう場所やスペースを示している．ほかに別棟にかまどを置く場合が3例ある．かまどがまったく記入されない例も多く，記入を省略された場合があるようだ．

主屋の土間に接して湯殿が設置される例が6軒ある．ほかに湯殿は付属屋として設けられる場合が11軒ある．あわせて17軒すなわち3.7割ほどに湯殿が設置されていたようだ．土間内や土間に接して「厩」が2例，「牛舎」が1例設けられている．ほかに付属屋として「牛舎」が7例，「馬舎」が2例あるが．いずれにせよ，近世期に比べ主屋に内厩を設ける例が極めて少ない．衛生面を考慮するようになり，外に独立の牛舎・馬舎を作り内厩を廃止したためではなかろうか．

付属屋

注目される付属屋として倉庫がある．倉庫は他の建物とは異なり，2重の線で壁が描かれており，単なる倉庫ではなく，土蔵だと思われる[21]．46軒中11軒に土蔵（倉庫）があり，11軒はいずれも自作農の家である．土蔵（倉庫）は家格を示す建物でもあったようだ．規模は4〜12坪の間に分布し，10坪の土蔵が2棟あるものの，他は大小さまざまに分散している．

納屋は農具の収納や作業場として使われる施設であり，必須に近い家屋であろう．納屋を付属屋としてもつ場合が34軒，付属屋の納屋を持たないが主屋の内に納屋を設ける場合が6軒，まったく納屋をもたない場合が6軒である．まったくない6軒は土間でその役割を果たすのであろうか．

38棟[22]と事例数の多い「堆肥舎」は肥料として重要な堆肥を収納する施設であろう．堆肥舎のみの単機能の施設が23例，堆肥舎に牛舎が含まれる場合が5例，納屋が含まれる場合が4例，便所および「馬舎」が含まれる場合がそれぞれ3例である．そのほか「木小屋」「車小屋」「味噌部屋」を併存させる例もある．堆肥舎が肥料収納の施設であることを考えれば，牛舎など家畜舎や便所が含まれて当然のことだと考えられるし，物置の納屋が併設されるのもまた許容の範囲だと思われる．しかし，1例だが「味噌部屋」を併設する場合がある．「味噌部屋」は厨房用の雑具や味噌・醤油・漬物など貯蔵食品を収納する場所であろう．いずれにせよ食料品を貯蔵する場と「堆肥舎」が併存することには多少の違和感をもたずにおれない．付属屋に「味噌部屋」を設ける例は先の例を含め4例である．残る3例は湯殿や納屋と併存している．「味噌部屋」は主屋のうちに設けることが多く15例を確認することができる．

そのほか「調製室」「木小屋」がそれぞれ８例ある．「調製室」は籾摺臼・籾剝機・脱穀機などを備えた建物ではないかと思われる[23]．「木小屋」は「もしき小屋」とも呼ばれたようで，薪などたきものを収納しておく家屋であったようだ[24]．

家畜舎も豚舎（８例）・牛舎（７例）・馬舎（３例）・鶏舎（３例）とそれぞれある．

養蚕に関係する施設は「養蚕室」（２例），「貯桑場」（３例）があるほか，一軒に「揚枠室」がある．「揚枠室」は，生糸を糸巻きから，糸揚げに巻き返す作業に使う「揚げ枠」を作る部屋ではないかと思われる．

特殊な付属屋としては「貯氷庫」（１例）がある．「貯氷庫」は冬のうちに氷を取り，夏まで貯蔵しておく建物であろうか．その氷をなにに使うのかは不明である．

そのほか門・隠居所・離家をもつ場合があるが，これらはいずれも自作農の家で余裕のある家に限られているようである．

付属屋ではないが，井戸は重要な施設であったと思われ，46 軒中 44 軒に記入されている．

3　現存する主屋（矢島家主屋）

現住所・現在地をまったく同定できなかった２軒を除く 44 軒について，2008 年現在の時点で敷地・家屋がどのようになっているかについて，現地調査を行なった．その結果，大正当時の主屋が残っているのは矢島家１軒だけであることが判明した[25]．ここでは，矢島家の大正 10-11 年の状況と 2008 年の現状を比較しつつ検討する．

表５　矢島家の新旧住所

大正 10・11 年	2008 年現在
鎌倉郡豊田村田谷一，六九一番地　　矢島與市	横浜市栄区田谷町 1691　　矢島寛

表５の左が矢島家の大正期，右が 2008 年現在の住所および当主名である．鎌倉郡豊田村から横浜市栄区へと変わっているが，それ以下はほぼ変わっていないので当家を同定するのは比較的容易である．聞き取り調査によると，矢島寛家は矢島太郎家からの分家で，屋号を「しんや（新家）」と称している．また，現当主寛氏から３代前の與市氏までは遡ることができるが[26]，それより以前の先祖については明らかでない．しかし，分家してから興市までの間に３・４代はあるだろうとのことである．



図 14　矢島寛家住宅

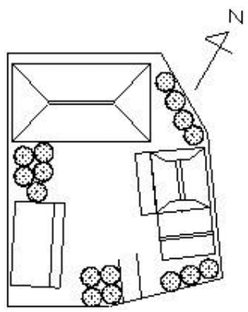


図 15　矢島寛家住宅配置図

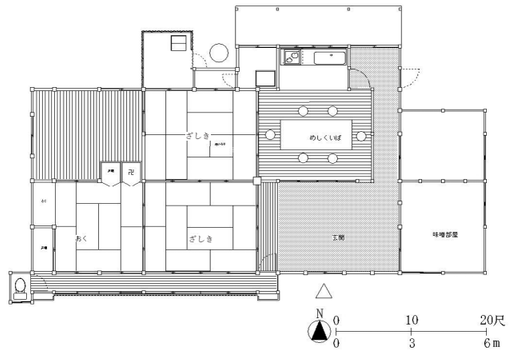


図 16　矢島寛家主屋現状平面図

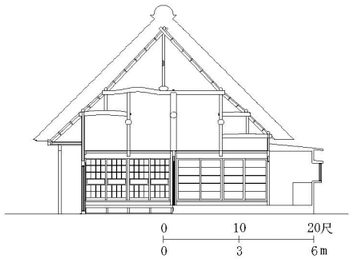


図 17　矢島寛家主屋現状断面図

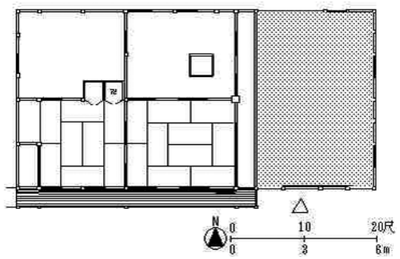


図 18　矢島寛家主屋復原平面図

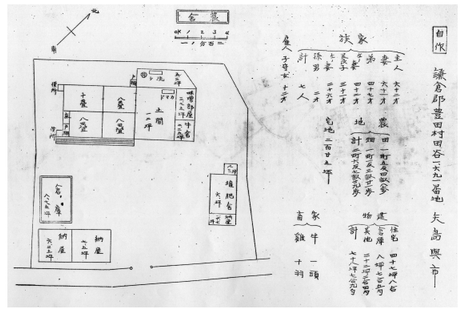


図 19　矢島與市家農舎

一方，矢島寛家の墓碑銘からは寛政 12（1800）年や文化４（1807）年の年紀が確認できる．これらの墓に分家以降に亡くなられた人たちが葬られているとすれば少なくともこれ以前に分家したことになり，分家の時期は江戸時代後期ではないかと思われる．

現地実測調査をもとに作成した図面が図 16～18 である．一方，図 19 が『農舎及農地に関する現状』に収録された矢島與市家である．現状平面においては前後の「ざしき」とされる２室が，それぞれ 10 畳になっている．一方，『農舎及農地に関する現状』ではそれぞれ８畳となっており差異がある．そのほか背面張り出し部分に変更箇所があるが，残る箇所はよく一致しているといえよう．現状調査からはふたつの「ざしき」部分からは増築された痕跡を確認することはまったくできない．この点より考えれば，この差異は大正期の調査時に誤って記録されたことによるものと判断される．

痕跡や聞き取りから平面の復原をする．土間に張り出した「めしくいば」や土間部分上部に張られた根太天井は先代清治氏が婿入りに際し実家が造作したものであり[27]，当初は広い土間で天井はなく吹き抜けていたようだ．前面に付けられた縁側の内側に雨戸の戸袋の痕跡が残っているところから判断すれば，当初縁側は外縁で，縁の内側に雨戸が立て込まれていたようだ．土間の妻側に張り出した「味噌部屋」などや背面の張り出しは大正期には既に付いているが，建築当初にはなかったものである．また，後ろ側の「ざしき」とその上手の部屋境には押板が残っている．

先に検討したように，矢島家が分家したのは江戸時代後期のことのようであり，その後建て替えられたとの伝承もない．さらに，復原結果や構法手法などから判断すれば，矢島家主屋は江戸時代後期まで遡るとみて無理はない．以上の点から矢島家主屋は江戸時代後期の建築とみてよいと判断され

る．

宅地について，『農舎及農地に関する現状』に収録された図，旧公図，現公図や土地台帳(28)を比較検討すれば，相続による所有権の移転はあるものの，まったく変わっていないことが判明する．

現存する付属屋は，いずれも近年の建築である．現在，作業舎と車庫が建つ位置には20年ほど前まで土蔵・納屋が建っていた．現在，離れが建つ位置にはかつて堆肥舎が建っていた(29)という．矢島家においては，20年ほど前まで主屋・堆肥舎・土蔵・納屋の4棟構成のほぼ大正期の様相を保っていたようである．

4　おわりに

『農舎及農地に関する現状』をもとに，大正10-11年の神奈川県下の農家の様相について検討してきた．主な点について箇条書きで示せば以下のようである．

①宅地は平均260坪ほどであるが，格差が大きいようである．

②家屋構成は主屋・納屋・堆肥舎の3棟構成が多い．

③主屋規模は30坪台が17軒と4割ほどを占めており，平均坪数も34.21坪である．

④平面形式は「整形四間取」が5割以上を占め圧倒的に多く，大正期当時は三室広間型がまったくなかった．

⑤大正期の民家には全体の7割ほどに床(とこ)があった．

そのほか，現存する矢島家主屋は江戸時代後期の建築で，明治・大正・昭和を通して現在地に建ち続けている．さらに，矢島家は20年ほど前までは大正期の様相をほぼ保っていたことなどを明らかにした．

しかし，時間の都合で大正10-11年から現在にかけての宅地と建物がどれほど持続し，どのように変容したかについては，矢島家主屋がよく残っている点について触れたのみで，詳細に検討することができなかった．神奈川県下の農家の持続と変容については次号で報告する予定である．

注

（1） 神奈川縣農会では，これを遡ること20年ほど前の明治34-35年に神奈川県下の4つの農村の農家の様相を統計的に調査報告した村是調査書がある．これら村是調査書については津田良樹「明治34-35年の神奈川県下の農村における住環境と家財道具―神奈川縣農会による村是調査書を中心に―」（日本建築学会計画系論文集　第621号，2007年11月）で既に報告した．また，『農舎及農地に関する現状』については，津田良樹「歴史史料となった民族調査資料」（『神奈川大学評論33』1999年）で一部紹介した．

（2） 戦前期の農政官僚のちに政治家．「農政の神様」といわれた．小作慣行調査，小作調停法の立案に尽力し，石黒農政とよばれる農業改革路線を推進した．大正8年7月～大正13年9月にかけて石黒忠篤が農務局農政課長を務めている．（日本農業研究所，『石黒忠篤伝』，岩波書店，昭和44年8月．）

（3） 宅地は区画整理など大幅な変動がないかぎり現在の公図とよく一致している．建物についても，後に触れるように，矢島寛家では一部誤記もあるようだがよく一致しているといえよう．一部に誤記がある場合もあるが，趨勢把握するためには問題ない程度だと考える．

（4） 90年前に住所･住居者名から、現在の住所を同定することは必ずしも容易なことではない．町村合併を経て住所が大きく変更していることが多く，区画整理や近年の市街化によって土地の統廃合が行なわれた場

合はさらにむつかしい．『日本地名大辞典〈14〉神奈川』･新旧公図（地籍図）･土地台帳・登記簿などから現在地を判断し，現地調査を行なった．それでも同定できない場合が2例ある．新旧公図などの資料および現地調査にもとづく検討については別稿を用意している．

（5） 宅地の面積や形は法務局所蔵の古い公図（地籍図）とほとんどの場合よく一致している．

（6） 独立した下便所をもつ場合が13軒ある．他の付属屋に便所を含む例が4例ある．また，主屋のなかに上便所がある場合が29軒ある．29軒のうち7軒は独立下便所も併せもち，3軒は付属屋に含まれば便所をもっている．一方，まったく便所が無いものが10軒あり，当時は人糞が肥料として重要であったことを考えれば，きわめて不審なことである．粗末な小規模の下便所は省略して記入されなかったのではないかと思われる．

（7） 付属屋には「納屋・木小屋・便所」のごとく複数の機能名が書かれた建物もあり，建物を機能により分類するのが難しい場合もあるが，二重に数えられることもかまわずに，その種の付属屋を所持しているかどうかについて検討する．

（8） 注6のように下便所は省略された場合がありそうなので，下便所を別にした場合である．

（9） 北関東の例ではあるが，江戸時代末期の農村の最大規模の民家は100坪ほどある場合が珍しくない（津田良樹『街道の民家史研究』1995年2月，芙蓉書房出版）．

(10) 平面形式で特殊例として扱う事例は土間をもたない床上部分の棟と土間棟とを1坪の土間で繋いだ平面である．平面上だけからは伝統的民家の分棟型なのか，近代的住宅を加味した民家なのか判断に苦しむ例である．

(11) 土間に床上を張り出した例が散見されるが，平面形式の分類では張り出し部分を考慮せずに分類する．

(12) 「二間取（上下）」には，「二間取（上下）」の型を骨格にして，前後に部屋を拡張した例が含まれる．

(13) 平面形だけから正確な判断は難しいが，床上部分と土間棟から構成されるいわゆる分棟型民家かもしれない．

(14) 相原勝氏のご教示によれば，旧主屋は壊されて現存しないが，かつてはこの土間沿い裏側の部屋で食事などしたという．相原氏のご教示や裏側の部屋やその周辺に流しが設置されている場合が多いことなどから判断すれば，台所・勝手に類する部屋の可能性が高い．

(15) 太田博太郎「近世の農家」（『建築学大系28独立住宅』昭和38年，彰国社，所収）によれば「以前はこの間取（田の字型平面）がごく古くからのものであると考え，出雲大社本殿の平面との類似性さえも論じられた．またそれほど古くもってゆかないにしても，書院造の平面はこの農家の田の字型間取から発達したものとするのが通説であった．」とされている．

(16) ひとつの仮説として，三室広間型から，広間の裏側部分を幅1間ほどに囲い「台所」とする型へと移行し，さらに間仕切を残したまま田の字に分割するか，もしくは間仕切位置を表側に寄せて田の字に分割して整形四間取に移行したとの発展過程を想定することも考えられよう．

(17) 江戸時代中後期の北関東の例ではあるが，一般的には三室広間型が主流をなしている（津田良樹『街道の民家史研究』1995年2月，芙蓉書房出版）．

(18) 注14に同じ．壊される前の相原家の主屋には床・棚が備わっていたという．大正期の農会による調査において記入漏れしたのか，その後の改造なのかは不明．大規模な六間取であるが，土間沿い表側に広い広間を設けているなど，整形四間取の拡張形であるサの字型平面となっていないなど，図から見る限り古式を示しているようである．その点から考えれば，単純に書き落としとするべきではなく建築当初は図の如く床はなかったが，大正期以降に増設されたと考えるべきではないかとも考える．

(19) 戸棚がない主屋は3棟しかないが，そのひとつが規模最大の相原家である．戸棚はないものの押入はある．注18同様に単純に書き落としなどと考えるより，戸棚がない点むしろ古式を示していると考えるべきなのかも知れない．

(20) 現存する唯一の主屋である．後に詳述する．

(21) 大正期当時の土蔵が現存する相原家の倉庫の例からも，二重線で囲まれた倉庫が土蔵であることが裏付

けられる．

(22)　1軒に2棟ある場合が2例あるため，家屋構成の項の数値より2棟多い．また，堆肥舎以外の納屋などの機能を含む場合もここでは「堆肥舎」としている．以降，他の付属屋でも同様な扱いであるから二重に数えられる場合もある．

(23)　注14に同じ．かつて相原家の門の隣にあった「調製室」には脱穀機が置かれていたが，天気のよくない日などにはその建物内で脱穀が行われ滓は建物外に飛ばしたという．

(24)　注14に同じ．木小屋を「もしき小屋」と称していたという．

(25)　主屋が残っているのは矢島寛家だけであるが，付属屋が残る事例として相原勝家（土蔵・門），飯島家（木小屋・湯殿），長沼芳人家（湯殿）がある．これら現存する付属屋および46軒の90年後の持続と変様については，本論文に続く別稿を用意している．

(26)　矢島家は，3代前の與市以前に何代かあるようだが明確ではない．與市以降は「與市―定吉―清治―寛（現当主）」と続く．

(27)　矢島寛氏のご教示による．

(28)　いずれも横浜地方法務局栄出張所所蔵．

(29)　注27に同じ．

論文

変装道具としての市女笠

佐々木弘美
SASAKI Hiromi

はじめに

中世の土民一揆[(1)]で，人びとは非人姿に変装し集団行動をとった．長禄三年（一四五九），東寺の代官定増の不当な処置に不満を抱いた若狭国太良荘の土民が一味神水をし，一同に乞食姿となっている[(2)]．また，明応五年（一四九六）近江守護六角氏が美濃守護土岐氏の家督争いに介入した船田合戦の余波で，美濃守護代斎藤妙純軍が近江に侵攻すると，近江の土民（馬借や郷民）は土一揆を起こして六角方の蒲生秀紀軍と合流し，斎藤軍を包囲して滅ぼしたが[(3)]，このとき土一揆の集団は柿色の衣を着ており，柿帷衆と呼ばれていた[(4)]．

若狭国太良荘の土民の乞食姿が，近世の百姓一揆のように蓑笠をつけていたかは不明だが，江戸期成立の『朝倉始末記』によれば，天正二年（一五七四）織田信長方に寝返った朝倉氏旧臣に対抗した一向一揆で，土民は「田蓑」を着ていたという[(5)]．また「隠れ蓑」というように，蓑笠は顔や身を隠すほか，変装用にも使われた．鎌倉御家人諏刑部入道が伊具四郎入道を暗殺する際，やはり蓑笠を着ていた．蓑笠姿になることで，厳しく定められていた社会的身分をあらわす姿・形を不明にし，身分から解放されたと考えられる．

柿色の衣を着る非人は『一遍聖絵』（以下，『聖絵』）に多く見られるが，そこで柿色の衣は癩者の記号でもあった．また近世の百姓一揆の覆面姿は，当時の癩者に強制的に定められていた白い覆面であった．柿色の衣服や白い覆面はまさに身を隠すものであったといえる（図1）．

蓑笠は一揆の集団統一の変装用だけに限らず，民間信仰の神事などで神に変身する用具にも使われており，近世では天狗を掲げた「世直し一揆」で，一揆集団が蓑笠を着ることで自ら「世直し神」になり，「打ちこわし」などの破壊を正当化することができた[(6)]．蓑笠は常識的には庶民の日常用具と考えられがちだが，実は変装姿であり，また人格を神格へと変える記号とも考えられた（図2）．

一揆の蓑笠姿は視覚的統一性と神の化身としての集団標識を与え，また自己を消し去ることで身分を不明にした．これは一揆だけに当てはまる概念ではなく，中世身分社会から解き放たれた神仏習合の概念が，神と非人を結びつける無縁の記号を創り上げたと推察できる．中世の「一味神水」「一味一同」が中世の土民一揆から近世の百姓一揆に受け継がれていたことを考えるならば，近世の百姓一揆で着ていた蓑笠姿は中世の土一揆でも着られていたと考えられよう．無縁化は一揆に限らず，中世社会の芸能や祭祀・信仰，山々でも求められた．異界と通じる姿であったと考えられる．

この論文では『聖絵』の絵解きを通して，無縁の場である熊野聖地や踊念仏の場面，花の下連歌に



図１　筆者模写『聖絵』巻十二第三段
白い覆面頭に柿色の衣服の非人たち



図２『聖絵』巻三第三段（清浄光寺蔵）　聖達上人禅室の付近

ついて考察した上で，神の化身になるための道具としての市女笠を論述する．これまで市女笠は身分の高い女性の旅姿とみられてきたが，市女笠の記号には多くの意味がこめられていたのである．

Ⅰ　踊念仏から見る阿弥陀浄土と熊野

(1)　熊野山中で律僧に追従する市女笠姿

熊野詣は平安中期以降に貴族の間で流行し，庶民の間にも広まった．中御門（藤原）宗忠が参詣したとき，「下向の女房」（『中右記』天仁二年十月一九日条）や「盲者」（同月二五条）と出会っており，さらに説教節『小栗判官』からも非人の熊野参詣が見られる．

一遍は超一（一遍の妻と推定），超二（一遍の娘と推定），念仏房（従者と推定）とともに四天王寺，高野山を経て，熊野に向かった．その途中の山中で，一遍は一人の僧と出会った（『聖絵』巻三第一段）（図３）．一遍はその僧に念仏札を渡すが，信心が起こらないからと拒否された．信心がなくても受け取るよう僧に無理やり念仏札を渡したが，一遍の心に迷いが生じた．すると一遍が熊野本宮証誠殿に参籠中，白装束に白髪の長頭巾を被った山伏姿の熊野権現が現れて一遍に告げた．「信不信を選ばず，浄不浄を嫌わず」札を配るよう諭した．目を開くと，十二〜三歳の童子が百人ほど集まって念仏札を受け取り，南無阿弥陀仏を唱え去った（図４）．童子は，成人前の少年のことで，賤民が童名・童子姿であったように，賤民をも表す記号とも考えられる．この出来事が，一遍の活動の保証となった．

熊野の場面で重要なのは，熊野山中で出会った律僧に同行する市女笠の人物に出会ったことが一遍にとって大きな契機になり，「信不信を選ばず，浄不浄を嫌わず」札を配ることを決意させたことである．

『聖絵』巻三第一段の場面では，画面右側先頭に一遍が描かれ，その後ろに三人の同行者，超一，超二，念仏房がいる．画面左側には山を降りる律僧の後ろに，異常に長い虫垂絹の市女笠を被る白装束の山伏姿とその後方に短い虫垂絹の市女笠を被る白装束の山伏姿の者が同行している．この同行者は，一般的には女性の熊野道者姿とされてきた．しかし，これは身を隠す市女笠姿なのではないだろ



図３『聖絵』巻三第一段（清浄光寺蔵）律僧と出会う



図４『聖絵』巻三第一段（清浄光寺蔵）熊野権現の神託を受ける

うか．

市女笠姿というと高貴な女性が想像されるが，この熊野山中の律僧一行には警護する武士がいない．熊野参詣場面に多く見られる長い虫垂絹に市女笠の人物には，必ず警護の武士が従っている（図5-abcde）．だが律僧一行には坊主頭の二人が後備するのみである．身分が高いという理由のほかに身を深く隠すものといえば，真言律僧との組み合わせから癩者を連想できる[7]．忍性のように当時の真言律僧が救癩活動をしていたことを考え合わせれば，強引な推論ではない．蓑笠や覆面と同様，一種の異形であった可能性がある．

癩者が仮の姿で熊野詣をする必要があったのは，顔を隠すためだけではない．熊野信仰では精進潔斎が重んじられ，往生するために不浄を取り除いて清浄になる必要があると考えられていたからである．そのため，男女ともに白浄衣の山伏姿が熊野詣の道者姿となった．

一遍・時衆の思想に重要な意味をもつ熊野参詣場面に律僧が登場する理由として，真言律僧と一遍が非人救済活動をしていたことから，互いに競合関係にあったのではないかと考えられる．『聖絵』に非人が多く描かれるのも，一遍が非人救済活動に積極的だったからである．『遊行上人縁起絵』にも粥施行する場面が描かれる（図６）．

真言律僧の非人救済活動の宗教・思想的背景には，非人を文殊菩薩の化身とする文殊菩薩信仰がある[8]．一遍にもまたそのような思想的背景があったのではないだろうか．熊野本宮証誠殿に参籠中，白装束に白髪の長頭巾を被った山伏姿の熊野権現が



図 5-a　『聖絵』巻三第一段
（清浄光寺蔵）



図 5-b　『聖絵』巻二第一段
（清浄光寺蔵）



図 5-c　『聖絵』巻三
第一段
（清浄光寺蔵）



図 5-d　『聖絵』巻三
第一段
（清浄光寺蔵）

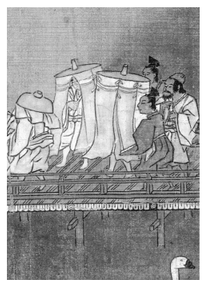


図 5-e　『聖絵』巻六
第二段
（清浄光寺蔵）



図６ 『一遍上人絵伝』藤沢道場本 模本（東京国立博物館所蔵
image: TNMImage Archives Source://TnmArchives.jp/）複製禁止

現れ，「信不信を選ばず，浄不浄を嫌わず」札を配るよう諭したとあるように，熊野山中の場面で，「信不信」だけではなく，「浄不浄」も説かれている．熊野山中の場面に「浄不浄」にかかわる人物がいたといえる．やはり市女笠姿の人物が，「浄不浄」にかかわる人物だったのだろう．

(2) 説教節『小栗判官』にみる熊野権現の金剛杖

説教節『小栗判官』の物語には，一遍の弟子「遊行上人」が登場し，あの世とこの世のあいだを取り持つ役割を担う．その『小栗判官』にも熊野権現が登場する．そこで，『小栗判官』を通して時衆の非人救済と熊野本宮の関係について考察を深める．まず『小栗判官』の内容を見てみよう．

大納言藤原兼家夫婦には長い間子供がなく，鞍馬の毘沙門天に参詣し，ようやく授かった子供が小栗判官（藤原正清）であった．彼は鞍馬の申し子と呼ばれ，教養，武術に優れたが，理想の女性に巡り会えず離縁を繰り返し，都では不調者と噂された．小栗は鞍馬に詣で，美しい姫に化けた深泥池の大蛇と出会い，夫婦になるが，姫が大蛇であると京の噂で知った父兼家は，都に住むことを許さず小栗を常陸国に流した．

数年時を経て，常陸国で小栗は十人の家来を組織する小栗党の頭になった．妻をめとらぬ小栗に周囲の者たちは，武蔵・相模を本拠地とした横山殿の娘，照手姫をすすめる．小栗は横山殿の屋敷に入り，照手姫の父横山殿の許しを得ずに照手姫と結ばれた．これを知った横山殿は不義密通であるとし，小栗と小栗党一派を毒殺してしまう．

一方，娘である照手姫も処分が決まり，牢輿に入れ川に沈めることにしたが，従者が牢輿の重石を切り離し川に流した．無事に漂着した牢輿を漁師が見つけ照手姫を助けたが，漁師の女房と折り合いがつかず，人買いに売られてしまう．

毒殺された小栗と小栗衆十一人は，あの世で閻魔大王の裁判にかけられ，小栗衆十人は火葬され娑婆に戻ることができず，土葬にされた小栗一人を餓鬼阿弥の姿で娑婆に送り返した．餓鬼阿弥姿の小栗は遊行上人と出会うが，餓鬼阿弥の胸札には閻魔大王から遊行上人に宛てた自筆の書状があった．それは，この者を熊野本宮湯峯に連れ，治癒させることを依頼したものであった．上人は胸札に次の言葉を書き添えた．「この者を，一引き引いたは，千僧供養，二引き引いたは，万僧供養」．さらに土車をつくり，餓鬼阿弥を乗せ，民衆とともに引きだした．

美濃国の青墓の宿万屋で，照手姫は小萩として水仕事をしていた．偶然，万屋の前に餓鬼阿弥を乗せた土車が放置され，小萩は餓鬼阿弥を小栗とは気付かず，餓鬼阿弥が哀れであるとともに，夫と小栗衆の供養のため，途中まで土車を引き別れた．その後も苦難の道は続き，代わる代わる人々が土車を引いた末，ようやく熊野本宮湯峰に到着した．

小栗は湯峰に入り続け，十七日間が過ぎると両目が見え，二十七日目で耳が聞こえ，三十七日目に

話せるようになり，七十七日目で元の小栗に戻った．小栗が熊野権現に参拝すると権現から金剛杖を授かり都へ下向した．そして美濃の国守となった小栗は，照手姫と再会し，めでたく夫婦となった(9)．

餓鬼阿弥の餓鬼とは餓鬼病みのことで，癩病を指す．癩病は温泉に入ったことで，不治の病から解放される．癩者や病人，弱者，身体障害者は非人身分に入る．遊行上人は餓鬼阿弥の胸札の閻魔大王のお告げを受け入れ，餓鬼阿弥を乗せる土車を熊野本宮まで引けば，極楽浄土に行けると書き添えた．土車を引くことは非人救済だったのである．

『小栗判官』は時宗の非人救済を分かりやすく物語にし，説教節に乗せて全国各地に広まった．熊野権現と癩者，遊行上人という記号から熊野本宮で温泉治癒などの非人救済活動があったと考えられる．時宗の弟子らはこの説教節を通し，南北朝から室町期にかけ熊野の勧進権を独占した．熊野本宮は一遍が安心を得る重要な場面であり，熊野権現の神託「信不信を選ばず，浄不浄を嫌わず」は熊野本宮がまさに非人救済の浄土の地であることを示す．

小栗は熊野権現から金剛杖を授かり，都へ下向するが，非人であった小栗が杖を持つことで熊野権現の化身として俗世に戻ったと考えられる．神の化身や神使いになる道具は蓑笠のほか，棒や杖，鹿杖（かせづえ）なども挙げられる(10)．

熊野三山では，市女笠と白装束の衣装も神の化身を意味したのではないだろうか．非人は道者姿になることで，熊野権現の化身になったと考えられる．『年中行事絵巻』にも神仏を象徴する市女笠の変装姿が多く描かれている．また，市女笠姿の非人が杖をもつ例は，『信貴山縁起』で市女笠姿の老女尼公が杖をつく描写，『西行物語絵巻』でも盲女が市女笠に杖を持つ姿がある．老尼（聖），盲人は非人を示す．また『紛河寺縁起』では，市女笠に蓑を着けた人物像が騎乗している姿が描かれている．蓑と市女笠が同時に身につけられていることで，市女笠が非人の変装姿であったことが分かる．

(3) 踊念仏という無縁共同体

一遍の踊念仏は，「南無阿弥陀仏」と合唱しながら鉦や鉢などを叩き，リズムに乗って足を踏み鳴らす．踊ることで身も心も煩悩から解き放たれ，精神的興奮状態（宗教的エクスタシー）となり(11)，神仏と心がひとつになる．これを「ものぐるい」というが，「もの」は霊魂を指し，「くるい」は霊魂が燃焼するという意味である(12)．「一味神水」のもとで結束した一揆集団が，戦闘に立ったときの興奮状態に通じるものである．

一遍以前の踊念仏は古代からあり，「魂鎮め」「たまふり」「やすらい祭」などのように死者の前で踊るもので，現在に伝わる六斎念仏踊りはそれが芸能化したものである．古代末期から中世に流行した田楽もともとは死者のための踊りであったという．これらは鎮魂・鎮送として行なわれた呪術であり，一遍の踊念仏とは意味が異なった(13)．

一遍の踊念仏は，人びとが「生身の阿弥陀仏」になるための念仏修行であり「南無阿弥陀仏」と合唱することで，あの世とこの世は一体化し，踊念仏という無縁の場が極楽浄土になることで人びとは救われるというものである．一遍の踊念仏は特定の死者の供養のためではなく，踊念仏に参加する自分たちが生身の阿弥陀仏の集団となり，現世で往生できるという歓喜に満ちた踊りであった．

一遍の踊念仏と田楽は，飛び跳ねて踊る形式が似ているので，共通性があるのではないかという推測もある．踊念仏の民俗信仰的解釈は，御霊鎮魂儀礼として古代から踊りが行なわれ，平安期は葬送

に念仏を取り入れたが，念仏には鎮送の意味が含まれ，一遍の踊念仏も鎮魂・鎮送のための祭祀儀礼として捉えられてきた(14)．しかし，一遍の踊念仏には宗教的意味があり，『聖絵』を解釈する際にも宗教的意味を考慮する必要がある．宗教理論を理解したうえで『聖絵』を読み込まなければならない．

『聖絵』巻四の詞書に，踊念仏は空也上人が京都の市屋や四条の辻で始めたと記されており，空也が弟子平定盛に伝えたとされる空也念仏もその中に含まれている(15)．

さらに南北朝初期の時衆託何の著わした『条条行儀法則』には，唐の阿弥陀信仰の僧少康が踊念仏の創始者であるとし，朝鮮半島にも踊念仏は多く見られ，日本では空也が先駆者であると記されている．少康や空也の踊念仏は時衆以外の文献史料では確認されていない．おそらく時衆が高名な僧の名を使い，踊念仏という新しい布教方法を正統化させる必要があったのであろう．空也や少康を踊念仏の祖としたのは時衆の教えを社会的に高めるためであったと考えられる(16)．

『聖絵』巻四の詞書に説かれている『無量寿経』に「踊躍大歓喜」と記されており，善導大師の教えを一遍が踊念仏という新しい布教方法で解釈し教化したとも考えられる(17)．熊野本宮は阿弥陀の浄土とも呼ばれ，踊念仏は熊野権現と意思疎通をはかる場である．その踊念仏の場面に市女笠の白装束姿が描かれ，また『善信聖人親鸞伝絵』に熊野権現が阿弥陀如来であると記されていることは，踊念仏と熊野権現の関係を示していよう．

踊念仏の発祥は，『聖絵』巻四第五段，信州の小田切の里とされている（図7）．ある武家屋敷の庭で，時衆と俗人が円陣を組み飛び跳ねている．屋敷の縁のかたわらで一遍が庭先に顔を向け，堤（鉢）を叩きながら拍子をとる．踊念仏の円陣にいる時衆数人が，鉢やざる，ささらのようなもので調子をとり，踊る者のほとんどが顔を上げ歓喜に満ちた表情である．口を開けた者は「南無阿弥陀仏」と唱えているようだが，踊る人々の足の動きは衣がはだけ，躍動的である．初期の踊念仏は，地面を裸足で飛び跳ねる自然発生的なものであった．

(4) 鎌倉入りと形式化する踊念仏

様々な宗派が保護を受けるために鎌倉入りしたが，真言律僧もまた北条得宗家の支援を受けた宗派のひとつであった．一遍・時衆も鎌倉に保護を求めたが，執権北条時宗に拒否され，鎌倉入りを果たすことができなかった（図8）．それを転機に一遍に多くの人々が集まり始めた．片瀬の浜の地蔵堂で踊念仏を行なったところ，紫雲がたち，花が降るという瑞相（奇瑞）が見られた（『聖絵』巻四，



図7 『聖絵』巻四第五段（清浄光寺蔵）
踊念仏のはじまり



図8 『聖絵』巻五第五段（清浄光寺像）
一遍と時衆らが鎌倉入りを阻止される

詞書）．瑞相とは仏教の奇跡的な力を目に見える形で示し，阿弥陀仏の到来や救済の世界が出現したことを意味する．瑞相とは無関係であった一遍はこのとき周囲に起こる瑞相を認めるようになる(18)．

片瀬の浜の地蔵堂における踊念仏の形態は，仮設の高床式の踊り屋で，一遍と時衆が円陣を組んで右回転で床板を踏み鳴らしながら踊っている．一遍を取り巻く時衆はしだいに増え，それにともない踊念仏は大掛かりな踊り舞台を形成し，組織化される．一遍の踊念仏は社会的現象を巻き起こし大流行するが，これが踊念仏批判へとつながる．

動的な踊念仏は，静を重んじる既成教団や貴族の批判を受けており，藤原有房は『野守鏡』（永仁三年成立）で「見苦しき所を隠さず」「狂人のごとくして」と記している．また『天狗草子』では「頭を振り肩をゆりておどる事，野馬のごとし」「男女の根をかくすことなく」「不当をこのむありさま」と記し，一遍・時衆の踊念仏を批判している．

踊念仏は人びとに浸透し，社会現象にまで発展したので，一遍・時衆教団の念仏布教は既成教団や幕府を脅かしていたと思われる．鎌倉入り以降，一遍は人びとに厚く信頼され，結縁者が増大した．

また，鎌倉入り以降は大掛かりな踊り屋が多くなると述べたが，『聖絵』巻十一第一段の淡路二の宮で行われた踊り屋は床板が組まれず，地面の上に屋根と柱が組み立てられた簡素なものである．一遍はこの頃，病におかされ，臨終が近い時期であった．そのため，踊り屋も質素である．これを最後に『聖絵』から踊念仏の場面は消える．

踊念仏を考察してきたが，一遍の踊念仏は宗教的意味と深い関わりがあり「南無阿弥陀仏」の思想に基づいた「生身の阿弥陀仏」になるための修行であった．

(5) 踊念仏と鉦の音

踊念仏に鉦の音は欠かせない．足を踏み鳴らし，「南無阿弥陀仏」の合唱と鉦の音の拍子を繰り返すことで生まれる躍動感と高潮感は，周囲の出来事や自己の雑念を消し去り無我の境地を実現させる．これがこの世に現れた極楽浄土である．極楽浄土はどこか遠くにあるのではなく，ここにあるのである．それを実感するのが踊念仏である．

踊念仏で使用される鉦（鐘）の音は一揆と深い関係があり，踊念仏は一向一揆と結びつく．一揆には「金打（きんちょう）」という誓約があり，音で誓約を交わした．武士は刀，僧は鉦，女性は鏡を打ち鳴らした．例えば『今昔物語集』巻第十六第三十七に博打好きの武士が賭けに負け，賭けを支払うことができなくなったとき，金打したことが記されている．『お伽草子』の「鴉鷺合戦」では，一揆結成のとき一味神水とともに金打がおこなわれている．

金属器を打ち鳴らすのはもともと神を迎えて呼び出すためであり，誓約を交わすとき神を立会人にするため金属器が打ち鳴らされた．金属器を打ち鳴らすことで神が出現すると考えられたのである．

また鐘の音は「土一揆お引きならし」と言われるように，土一揆結成の役割を果たし，鐘の音は「一味神水」と同様の意味があり，通常生活を非日常的なものに変えることで，人びとは平等となり，一揆は結束力を強めた(19)．

「一味同心」「一味神水」などの誓約方法は仏教に基づいていたが，それが武士や庶民に広まることでまた，仏教は民間へと普及したと考えられる．

近世史料に，宝暦三年（一七五三）成立の『自然真営道』（二五巻法世物語）に安藤昌益の浄土宗

批判についての記録がある[20].

阿弥陀阿弥陀と唱え，起請を出だして鐘を扣き，勧め弘め食い食る，是れ吾れ等が同業なり

上記は，阿弥陀と法然の起請文と僧が打ち鳴らす鐘の音を重ね合わせたと考えられる．百姓一揆と念仏を唱える聖の目的は一見異なるが，鐘の音で神仏を呼ぶことは共通である．庶民を権力下の抑圧から解放するのは信仰であり，また限られた条件のもとで庶民ができる抵抗も信仰である．中世の神仏概念は潜在化し，近世百姓一揆の「一味神水」に受け継がれた．

また「同業なり」は，一揆や浄土宗などは起請文の際，鐘を打ち鳴らし神仏を降ろす共通行為のことで，現世に非日常的世界である神の世界，救済の極楽浄土を演出する効果があった．結縁した者は生身の阿弥陀仏になったのである．

踊念仏も鉦を鳴らし，拍子をとるが，それと同時に「神おろし[21]」という行為をおこない，踊念仏の舞台を阿弥陀浄土に開く．鉦の音は，阿弥陀仏が来迎したこの地が阿弥陀浄土であることを証明するものであった．

(6) 踊念仏と一向衆

一向衆の構成は，親鸞を開祖とする真宗のほか，時衆や一向俊聖を祖師とする一向派も「一向宗」と呼ばれた．一向派は時衆と混同[22]されるが，もともとは別の宗派であった[23]．一向衆の踊念仏の目的は極楽往生を遂げることであったが，時衆の踊念仏は生きながらにして現世で極楽浄土に往生することであり，時衆は生きながらにして死者の集団といえた．そのため，中世では時衆は穢れたものとみなされ，『聖絵』巻八の詞書に「美作国一宮にまうで給けるにけがれたるものも侍るらむとて，楼門の外にをどり屋をつくりておきたてまつりけり」とあるように，神社の境内に入ることを拒まれた．死骸は疫病をもたらし，触れてはならない，穢れたものであると恐れられたのである．葬送に非人が携わったのもこのためであり，時衆も葬送に携わる非人集団とみなされた．楼門の外に踊り屋を作らせたのも，踊念仏が死者の踊りであり，穢れたものとして境内に作らせなかったと推測できる．踊り屋は遊行する一遍・時衆にとって，全国各地を布教する仮設道場として必要不可欠であった[24]．踊り屋の本尊は阿弥陀如来で阿弥陀浄土を示した．一遍・時衆らが鎌倉入りを阻止されたのも，死霊の集団として，恐れられていたため，社会から拒絶された無縁の民であった．

それに対して一向衆は，霊界に通じ死霊を救済し呪術的なものを操る，修験道的な山岳信仰と通じていた[25]．これは修験の霊山，熊野三山と時衆に関係があると考えられる．一向衆は遁世僧や異類異形の賤民集団であったが，一遍入滅後の時衆の教義は，一向衆に受け入れられ拡大した[26]．北陸地方に広まっていた一向衆は，宗派の異なる念仏僧が集まった雑行の念仏集団といえ，念仏聖や，山伏，陰陽師，巫女，下級神官，廻国聖，琵琶法師などの民間信仰者，芸能者などが多く含まれていた．このように一向衆が時衆の教えや踊念仏を取り入れたのは，時衆が賤民・非人救済のための宗派であったからである．こうして一揆と時衆の関係が生まれることになった．

Ⅱ 『聖絵』踊念仏場面に見る非人の着る市女笠

(1) 四条京極釈迦堂の構図を読む

一遍・時衆は鎌倉入りを拒否されてから，民衆の絶大な支持を得，多くの貴賤者が集まるようになった．その後も一遍・時衆一行は各地を遊行し，弘安五年（一二八二），片瀬を出発し京都に向かい，その道中，伊豆国三島神社，尾張国甚目寺，関寺と遊行した．関寺に入ろうとしたところで園城寺によって静止されてしまう．一行は近くの草堂に立ち寄ることになったが，その後許しを得て関寺で踊念仏を行なった．弘安七年（一二八四）四月十六日，関寺から四条京極釈迦堂（以下，釈迦堂）に入る．一遍の到着した日は雨で，翌日十七日まで降り続き，川の水かさが増し大洪水になったが，災害に遭っても一遍のもとに貴賤上下かかわりなく人びとが集まった．

この釈迦堂の場面（『聖絵』巻七第二段）の構図を検証してみよう（図9-abc）．釈迦堂の右側に目を向けると，賀茂川に架けられた四条大橋の上で牛車が急ぐ（図9-a）．さらに大橋左端の鳥居（祇園社の西大門）をくぐると，釈迦堂で一遍・時衆らの踊念仏が行われ，その周囲は人びとであふれている（図9-b）．この場面に動きを与えるのは牛車の方向性である．四条大橋の上を走る牛車をはじめ，群衆の賑わいに驚いた牛車二台の牛がともに興奮し，右の茶色の牛の車と左の黒牛の車が向き合い，左右対称の形をとる．黒牛の引く車を，人びとはむりやり釈迦堂内に入れようとするが，釈迦堂内は混み合い入る隙間がない．堂内に入ることのできた牛車は，狭い堂内の踊り屋を囲む．

さきほどの四条大橋と四条通りの三台の牛車の形体は良く似ているが，牛の毛並みの色や車の窓の配置が若干異なるので，同じ牛車ではないだろう．一般的な異時同図法とはいえないが，手法が似ていることから一種の異時同図法と呼ぶことができる．

多くの人びとと牛車が描かれていながら，この場面がまとまっているのは，これら三台の牛車が絵の物語を導く導線的な構図をとっているからである．絵画場面の両端に静の空間を表す「霞」を描くことで，中央の踊り屋の動的表現をいっそう際立たせ，中央に視点を集中させる効果がある（図9-ac）．群衆の固まりや動きを調和させ構成をまとめている．

(2) 四条京極釈迦堂の市女笠を検証

釈迦堂の本堂の手前の踊り屋は人びとで賑わい，境内を取り囲む建物の内部は，物売りの様子や女性の姿などが描かれ賑やかである．

境内の周囲は霞がかかり，釈迦堂とは境界線をひいたように静かな空気を漂わせる．とくに画面手前の霞がかった建物に注目したい．これは私見では賤民の住居ではないだろうかと考えられる．『聖絵』巻一第一段に，この建物とよく似た小さな家々が描かれており，碗を持って物乞いをする非人姿や，坊主頭をした人物が薪割りをする様子などが描かれる．これらの板家は非人小屋と考えられる[27]．

四条京極の通りに並ぶ画面手前の住居には非人と思われる人物は存在しないが，ほかの建物より小さく描かれている特徴から，非人の住居と判断できる．小さく描かれることは他の場面でも見られ，四天王寺の場面（『聖絵』巻二第三段）や関寺の場面（『聖絵』巻七第一段）で描かれた非人や非人小屋も，通常より小さめに描かれる．それに対して一遍は大きめに描かれている．これらは，絵画の遠近感を無視した描法である．



図 9-a 『聖絵』巻七第二段（東京国立博物館所蔵 image: TNMImage Archives Source://TnmArchives.jp/）複製禁止



図 9-b 『聖絵』巻七第二段（東京国立博物館所蔵 image: TNMImage Archives Source://TnmArchives.jp/）複製禁止

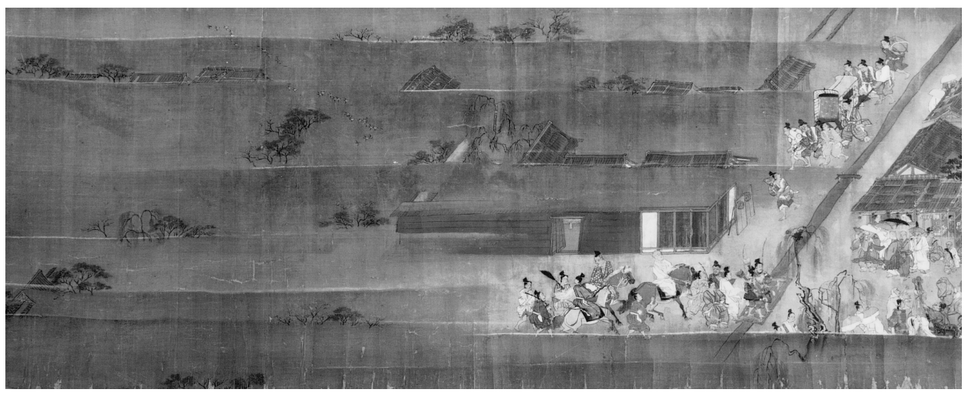


図 9-c 『聖絵』巻七第二段（東京国立博物館所蔵 image: TNMImage Archives Source://TnmArchives.jp/）複製禁止

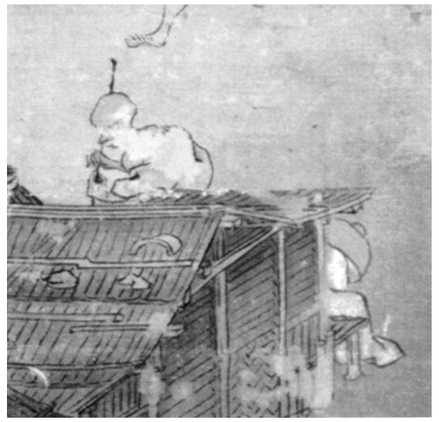


図 10 『聖絵』巻七第二段 （東京国立博物館所蔵 image: TNMImage Archives Source://TnmArchives.jp/）複製禁止

釈迦堂の場面では，賤民の板家の右端に，縁に腰を下ろす市女笠に白装束姿の者がいる（図 10）．頭を垂れ下げ，旅の疲れを癒しているのか，体調がすぐれないようにも見える．そばには武士などの従者が警護にいない．しかも板家の非人小屋が密集している場所にいるとすれば，この市女笠に白装束の者は高貴な女性ではなく非人の可能性が高い．

さらに，市女笠姿の近くに杖を持った坊主頭の聖がいるが，これも意図的に描かれたものだろう．説教節『小栗判官』で小栗が餓鬼阿弥の姿（癩者の姿）から元の姿に治癒し，熊野権現から杖を授かり帰京したが，一遍・時衆の踊念仏の場は小栗の戻った京都の，四条京極釈迦堂である．杖は熊野権現の化身であり，小栗が杖を持ち帰ることで，京都は聖地熊野と化した．この説話からも杖は神使いの象徴であり，非人の象徴と考えられる．釈迦堂の場面に描かれた市女笠姿の人物は，熊野参詣の途中で一遍の踊念仏に遭遇し，熊野権現を目撃した．もはや熊野に行かなくても熊野参詣を果たすことができたのである．市女笠と杖は非人を意味する記号なのだろう．

このように一遍の思想が色濃くでているのも，一遍・時衆が京都で受け入れられるようになったことを物語る．釈迦堂のほか，空也上人遺跡市屋道場（以下，空也遺跡市屋）の場面も同様，非人集住地に市女笠の人物像が描かれている．

(3) 空也上人遺跡市屋道場を検証する

弘安七年（一二八四）一遍・時衆は，釈迦堂から因幡堂に移る．その後，雲居寺・六波羅蜜寺などを参詣し，空也遺跡市屋に道場を設け，数日間を過ごした．

空也は平安期の念仏僧で阿弥陀聖，または市聖などと呼ばれた．空也は京で修行中，貴布禰というところに住んでいたが，いつも夜ごとに鹿の声が聞こえていた．しかし突然，鹿の声が聞こえなくなった．翌日，平定盛という人物があらわれ，鹿を殺したことを空也に告げた．悲しんだ空也は鹿の皮と角を受け，皮で衣を作り，角は杖の頭にさし，鉦を叩きながら念仏を唱えたという[28]．

鹿は神聖なものとして尊ばれ，神使いとされていた．当時の人びとは鹿の皮や角に呪力を感じ，尊ばれていたが，鹿杖の種類によっては鹿を捕える道具の一つとして使用されたものもあったと考えられている[29]．空也は嘆き悲しみ，鹿の供養のために鹿の皮を衣にし，鹿の角を杖頭にした．鹿角を上部に取り付けるのは宗教的意味があり，空也の鹿杖は狩猟のための鹿杖ではない．

また，鹿皮の衣は山中の生活には欠かせないもので，聖と深い関係があった．その例として『今昔物語集』の阿弥陀聖（巻第二十九第九）や僧仁鏡（巻第十三第十五）などが挙げられる．『聖絵』には，鹿杖をついた人物が多く見られる．

空也遺跡市屋で踊念仏は四十八日間つづけられた（図 11-a）．踊り屋は高床式で，踊念仏は鑑賞用として作られている．高床の下には柱の補強として筋交いが入り，激しい踊念仏の振動に耐えられる

構造である．床下には，子供や非人が潜り込んでいる．周囲は牛車や群衆でひしめき合い，踊念仏を見上げている．一遍は踊り屋の中央あたりに鉦を叩きながら時衆とともに踊念仏をおこなう．その踊り屋の奥（画面上）に墓が見えるが，空也上人の墓だろうか．踊念仏を見守っているようだ．

踊り屋から画面左側の堀川のほとりには，片屋根のみすぼらしい小屋が並び，碗を持って食事をする者，踊念仏を見る者，仲間と話し合う者，ふさぎこんでいる者など，多くの乞食と思われる人物を見ることができる（図 11-b）．釈迦堂の非人小屋のひと気のなさと好対照である．

そのなかでも，画面下段の堀川のほとりの左端に会話をする三人の人物像に着目できる（図 12）．三人の頭上に傘が置かれ，柄に巻物が括り付けられている．傘の記号から手前にいるアゴ髭の人物は絵解き法師とみられる．その右隣の非人は上半身に衣服を身に着けていないが，非人小屋の並びにいる非人のほとんどが上半身に何も着けず，ふんどし姿である．そして，重視すべき人物像は後ろ姿の市女笠の白装束姿である．市女笠姿が貴婦人の旅姿であれば，市女笠の白装束姿は非人の集住地に存在しないだろう．

『聖絵』に描かれた市女笠姿の多くは側に武士が警護し，女性の道者姿と考えられてきた．例えば，釈迦堂画面下の中川近くの柳の下にも，市女笠に白装束姿が見られ，武士の警護があるので，柳の下の市女笠姿は，高貴な身分の女性と考えられる（図 13）．

一方，釈迦堂や空也遺跡市屋のそれぞれ乞食の集住する場所に描かれた市女笠姿には，武士の警護もなく，非人の道者姿と見て間違いないだろう．また，空也遺跡市屋の乞食小屋に，碗を持って食事をする非人に対し念仏を唱える聖がおり，念仏聖の傍らにぼろぼろに裂けた市女笠がある（図 14）．この市女笠の持ち主は念仏聖であろう．念仏聖も非人身分であり，非人である聖がこの市女笠も着たことが確認できる．

蓑笠姿が神の化身であれば，市女笠姿の非人も熊野権現の化身であり，神聖な存在と考えられる．熊野本宮は時宗の非人救済地であり，熊野権現が一遍に告げた神託「浄不浄を嫌わず」は，市女笠を着る者に関すると確認できる．熊野権現の化身である市女笠姿の非人は，熊野聖地につながる踊念仏と密接な関係にあるだろう．

一遍は熊野に行くことのできない民衆をはじめ，癩者，身体障害者などの弱者も極楽往生できるよう踊念仏を各地で行ったと考えられる．例えば，釈迦堂の市女笠姿の非人は，うつむきかげんで，体調がよくないように見えるので，癩者や病人などの可能性がある．ここで熊野参詣を断念したとしても一遍・時衆の踊念仏を拝むことで，これらの非人は熊野詣を果たしたことになり，この世から救われ極楽浄土に到達することができた．一遍・時衆の布教は弱者のための救済だったのである(30)．

一遍・時衆らは，鎌倉入り以前は死霊の集団として疎まれたが，一遍は自らの名声が高くなっても，非人救済を怠ることなく布教を続けた．『聖絵』に市女笠に白装束を身に着けた熊野の道者姿が多く見られるのも，熊野権現の神託と一遍の踊念仏の関係を示している．

一遍が悟りを受けた熊野本宮が非人救済の中心地であれば，多くの非人が救済を求め，熊野に訪れたであろう．姿を見せることのできない癩者が市女笠の熊野道者姿となって訪れていたこともあるだろう．さらに踊念仏は，舞台を熊野聖地に変える．二つの踊念仏場面の非人集住地にいる市女笠の白装束姿は，舞台が熊野聖地に化したことを象徴している．

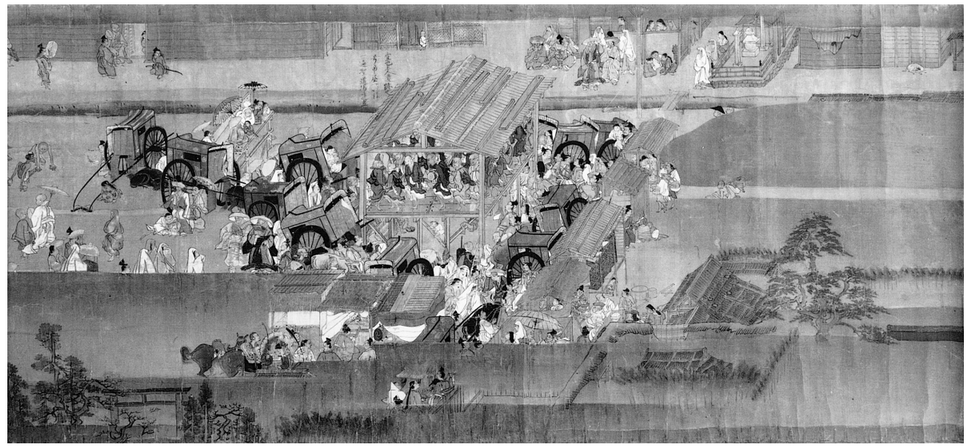


図 11-a 『聖絵』巻七第三段（東京国立博物館所蔵 image: TNMImage Archives Source://TnmArchives.jp/）複製禁止

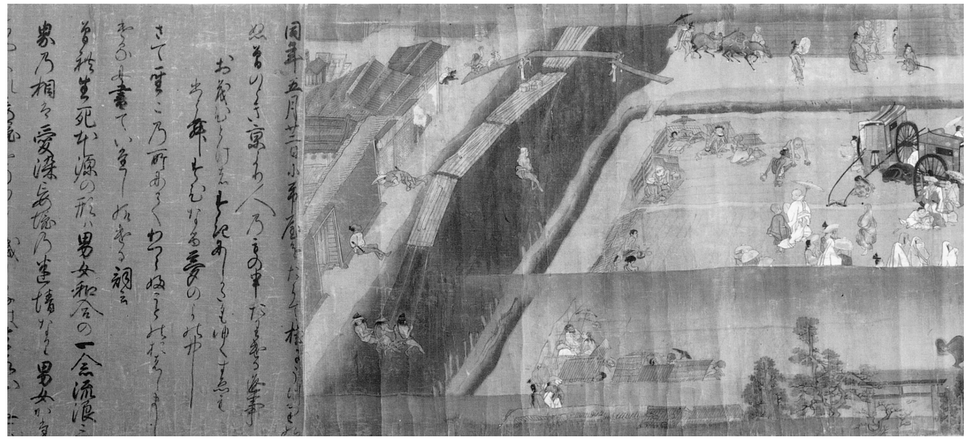


図 11-b 『聖絵』巻七第三段（東京国立博物館所蔵 image: TNMImage Archives Source://TnmArchives.jp/）複製禁止



図 12 『聖絵』巻七第三段（東京国立博物館蔵 image: TNMImage Archives Source://TnmArchives.jp/）複製禁止　部分



図 13 『聖絵』巻七第二段（東京国立博物館蔵 image: TNMImage Archives Source://TnmArchives.jp/）複製禁止　部分



図 14 『聖絵』巻七第三段（東京国立博物館蔵 image: TNMImage Archives Source://TnmArchives.jp/）複製禁止　部分

(4)　ほかの図像から非人に関わる市女笠を検証

これまで『聖絵』の踊念仏の場面を中心に市女笠姿の非人と思われる人物を検証してきたが，『聖絵』の他の場面でも検証してみよう．

『聖絵』巻一第一段の画面左端の桜の手前の道を歩く蓑を着けた旅人の後ろに，市女笠に白壺装束の道者姿で杖を持ち歩いている者がいる（図 15）．小松茂美は老女と解釈している[31]が，周囲に武士の警護がなく，赤子を抱いている．体力がなければ，赤子を抱いて長旅をすることはできず，乳もあげる必要があるので，身分の低い若い母親の可能性がある．赤子が病で熊野権現に祈願しに行くのだろう．当時，両親や子供の死者供養や病気治癒の立願，治癒したお礼の願果たしをするための熊野詣があったという[32]．

杖は身体を支える道具のみならず，神の化身であることを表象する呪術的な記号であり，この市女笠の白壺装束姿の者も非人であり神の化身であることを表象している．

『聖絵』巻一第三段の善光寺の境内，五重塔の左横に三人の非人法師と思われる人物が見える．その中央に市女笠を背負う者がいる（図 16）．善光寺では，このように非人法師などの穢れた身分の者も境内に入ることができた．ほかに『聖絵』の四天王寺場面（巻二第三段）や当麻寺の粥施行の場面（巻八第五段），阿波国の天神社場面（巻十一第二段）などの境内に非人がいる．

『聖絵』巻五第五段に小舎人に追われる複数の非人の前方に市女笠を背負う白い鉢巻姿の者がいる（図 17）．また『聖絵』巻六第一段，片瀬の館の御堂場面には非人小屋が並び，五羽の烏が非人小屋の屋根に置いてある市女笠や薦（こも）の上の乾飯を狙っている（図 18）．ヤタガラスは熊野三山の印であり，この市女笠の持ち主は熊野修験道者であった可能性がある．『日本書紀』巻第三に，天照大神が熊野の高倉下という人物にヤタガラスを使者としておくっている挿話があるように，この五羽の烏も西方浄土の使者として見立てるならば，市女笠の置かれた屋根下で，臨終を遂げた熊野修験道者を迎えていると捉えられる．

『聖絵』巻七第一段，関寺の踊念仏場面であるが（図 19），関寺の門前に集住している乞食たちのなかに，ぼろぼろに古びた市女笠を被る非人姿が二人描かれている（図 20）．

日除用の細長い板を縄で編んだ仮屋根の物陰に，市女笠の頭部のみが見える．また，破れた市女笠を被る人物像が踊念仏の方を向き，念誦を持って合掌している．踊念仏の方角から現われる熊野権現の到来を待ち受けているのであろう．その破れた市女笠の隙間から白い包帯を巻いた頭部が見えるが，白い包帯は癩者の記号である．例えば『聖絵』空也上人遺跡市屋の堀川の岸近くに，白い包帯を巻いた二人の癩者がおり，白い包帯が癩者を表す記号と分かる．市女笠の破れた箇所から包帯をのぞかせている人物も癩者と確定できる．

『聖絵』巻十一第一段，阿波国を船出する一遍と時衆の場面では，水夫が市女笠を被っている（図 21）．

『聖絵』以外の絵画では『融通念仏縁起』上巻第三段の三人の非人法師の中央に市女笠を背負う人物がいる（図 22）．先述の『聖絵』善光寺境内場面も市女笠を背負う人物が中央に描かれる図像と共通する．『西行物語絵巻』では，盲女が市女笠と杖を持ち歩いている姿が描かれている（図 23）．杖は神の化身の表す記号であり，盲女は非人である．やはり非人の記号として市女笠が用いられており，市女笠と杖で神格化された非人を表している．また，『墓帰絵詞』巻七第一段の和歌の浦の浜辺



図 15　筆者模写
『聖絵』巻一第一段

場面に，鹿杖を右手にもつ市女笠の人物がいる（図 24）．杖を持った右手首には念誦がかけられている．年老いているのか腰を曲げ，海を眺めている．従者は刀を差し，腰に手を当て波の方を指差し，何か問いかけているようだ．この市女笠姿は老僧か老尼と思われる．武士の従者がいるが，官僧ではなく遁世僧であろう．体制から逸脱した僧である．

『粉河寺縁起』に市女笠に蓑を着けた人物像が馬に乗っている場面がある（図 25）．騎乗しているので，高貴な女性と思われる．市女笠に蓑の記号は，非人を象徴する姿と推測できることから，この人物は，神の化身の表象と考えられる．これは，千手観音に病気治癒の御礼参りに出発するところであり，市女笠と蓑の記号で，千手観音の御加護を得た者を表わしているので

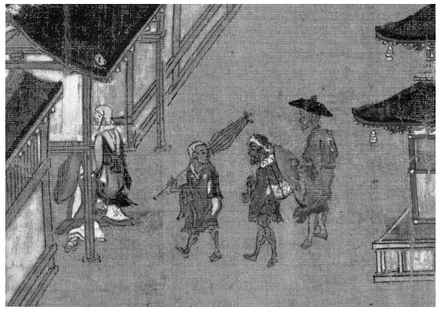


図 16 『聖絵』巻一第三段（清浄光寺蔵）善光寺境内の場面



図 17 『聖絵』巻五第五段（清浄光寺蔵）こふくろ坂の場面



図 18 『聖絵』巻六第一段（清浄光寺蔵）片瀬館の浜の場面

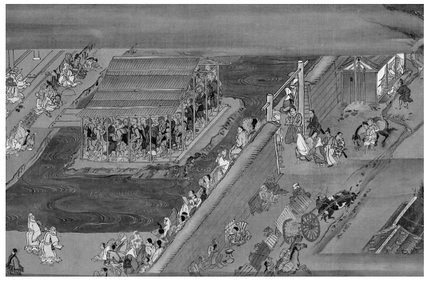


図 19 『聖絵』巻七第一段（清浄光寺蔵）
関寺踊念仏場面右方に非人小屋が並ぶ



図 20 『聖絵』巻七第一段（東京国立博物館所蔵 image: TNMImage Archives Source://TnmArchives.jp/）複製禁止　部分

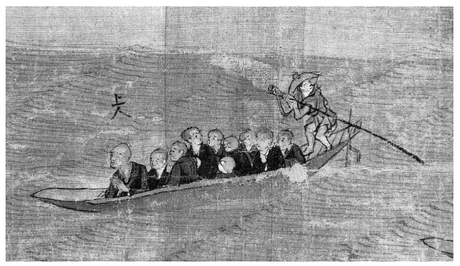


図 21 『聖絵』巻十一第一段（清浄光寺蔵）
水夫が市女笠を着けている



図 22　筆者模写『融通念仏縁起』
上巻第三段
市女笠を背負う非人と思われる人物（中央）



図 23　筆者模写『西行物語絵巻』
市女笠の盲女が杖を持って歩く姿



図 24　筆者模写『墓帰絵詞』巻七第一段
鹿杖を持つ市女笠の人物

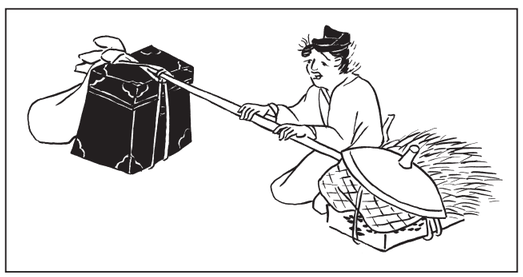


図 26　筆者模写『石山寺縁起』巻五第四段
市女笠と蓑などが一つの荷物にまとめられている



図 25　筆者模写『粉河寺縁起』市女笠に蓑を着け騎乗する人物

あろう．また，『石山寺縁起』巻五第四段に一行の従者が荷物を降ろし休息するが，従者の傍らに市女笠と蓑が旅道具のセットのように置かれている（図 26）．長旅には市女笠と蓑が必要であり，それが長旅を要する社寺参詣を示す記号になる．

中世身分の区別は，髪型や衣服の形や色，装身具などの視覚的要素が強く，実用性よりも，身分標識を意識していたと考えられる．また絵画では視覚的要素が強調されるため，日常的視点を超えた表現で，社会に起こる事象を画面上に表現する．例えば，絵巻物や屏風，襖絵などに描かれる霞の効果は，単なる霞の描写ではなく，省略・時間経過・場面展開・静と動など様々な効果を演出する手段である．物語性を視覚的に表現するには，錯覚を利用し，人の目を操ることも重要である．近世の「騙し絵」はその典型的な例である．絵画の表現方法は複雑であり，当時の作者の制作意図を読み解くことは簡単ではない．

描かれた事物を分断し類型的に判断するだけでは，絵画の物語性を読み解くことはできない．ひとつひとつの描かれた事物が組み合わされることで視覚的物語性は成立するため，絵画資料を読み解くには類型的判断は難しく，そのつど解釈する必要がある．市女笠に白壺装束姿も，単なる旅姿と判断しては，そこから熊野権現の神使い・化身という意味を読み取れなかっただろう．

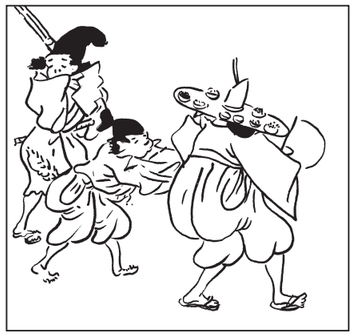


図 27　筆者模写『年中行事絵巻』巻十二



図 28　筆者模写『年中行事絵巻』巻十一



図 29　筆者模写『年中行事絵巻』



図 30　筆者模写
『信貴山縁起』「尼公」



図 31　筆者模写
『前九年合戦絵詞断簡』「帰順願図」

(5)『年中行事絵巻』から見る神の化身となる市女笠

杖や笠を身に着けることで，神使い・化身になる例を挙げたが，『年中行事絵巻』は祭祀行事に市女笠を身に着けた場面が多く見られる．神事に使われる市女笠について触れてみよう．

住吉本『年中行事絵巻』（田中家蔵）巻十一「稲荷祭の馬長の行列」場面に，装飾を施した浅型の市女笠を身に着ける人々が描かれる．草や花・稲・鳥の羽・羽付きの的などが市女笠の上に施され，それを身に着けた人々が右方向に歩く．また，烏帽子に草花などを施す者もいる．非人集団のなかに，市女笠の周囲に椀に盛った料理を並べ装飾する者（図 27），扇を半開きにして歩く市女笠姿がおり（図 28），非人法師と推測できる．同絵巻の巻十二「祇園御霊会の神幸当日の馬長の行列」場面の市女笠姿は，派手な出で立ちの異形の者と一緒の女性や馬を率いる行列の中に描かれている．

さらに同絵巻の巻十六「賀茂祭使の行列」の場面では，大傘の上に山水図を思わせるような装飾が施され，山のような丘を土台に建物や木，鳥などを配し，自然空間を表現する．

『年中行事絵巻』に登場する市女笠は，埴輪などに見られる原型的な市女笠が多く，同絵巻の虫垂の市女笠を着ける女性（図 29），『信貴山縁起』の「尼公巻」の尼公（図 30），『前九年合戦絵詞断簡』「帰順願図」の男性二人が被る市女笠も（図 31），広く平なツバで，中央のてっぺんは円柱型に突起している．市女笠や大傘に施されたモチーフは，そのモチーフに関わる神を表すと考えられる．笠を被る者は人ではなく神の化身になる．異類異形の者も笠の上に表象された神の化身であり，市女笠を

着る非人が神の化身を表わす記号であると確定できる．

『年中行事絵巻』には，女性の市女笠姿のほか，神仏を象徴する市女笠も存在した．また，神仏を象徴する市女笠姿は，男性・女性，異類異形の者など性別や身分などに関わりがなく描かれ，笠の下においてこれらの人びとは平等な無縁者となった．

笠のほか，扇・袖・覆面で顔を隠す異類異形の姿は，人ではない存在に自分を変えた．彼ら異類異形の者はしだい賤民視されていくが(33)，それでも一揆のときに非人の姿になったことは，非人が神使い・神の化身とみる思想が継承されていたことを示している．

(6)　市女笠の様々な用途

市女笠は様々な用途があり，笠の形態も異なる．市女笠は平安中期に見られ，平安中期成立（推定）の『宇津保物語』に「絹倉にあなる徳女といふ市女の富めるなり」とある．市女の名は，市で商いをする女性が被っていたことに由来する．素材は菅材で，広いツバを持ち，中央の頂部に巾形（こじかた）をつくる．市女笠の出現は，六世紀頃で，関東地方の人物の埴輪に円錐形の菅笠とは別の系統に属する笠があり，これが市女笠の原型であると考えられる(34)．原型的な市女笠は平安末期の絵巻物に多く見られ，先述の『年中行事絵巻』の女性や『北野天神縁起』第八巻の男性，『信貴山縁起』の「尼公巻」の尼公，『前九年合戦絵詞断簡』「帰順願図」の藤原経清・平永衡が市女笠を被っている．

市女笠は女性のみに限らず男女兼用で，男性の貴人は雨具や日除けとして使用，さらに身を隠すのにも用いられ，貴人が逃亡するときに市女笠を被った女装姿で落ちることがあり，『平家物語』信連合戦の事でも以仁王は市女笠の女房姿で近江の園城寺へと落ちている．『聖絵』では，僧や山伏が市女笠を身に着けている様子が描かれ（図 32・33），『遊行上人縁起絵』では熊野本宮証誠殿内の場面に若い男性が短い虫垂絹の市女笠を着けた姿が見える（図 34）．

『融通念仏縁起』上巻第五段の鞍馬寺堂内でも様々な様子の参籠者が描かれているが，市女笠を枕代わりにして仮眠をする女性や『石山寺縁起』巻五第四段の石山寺本堂にも，積み重なった市女笠の上に女性が覆い被さり寝入っている（図 35）．市女笠は旅の途中で枕代わりにもされた．

『石山寺縁起』巻三第三段に雪の中を通る菅原孝標の娘の一行の場面では，騎乗した市女笠に虫垂絹姿の女性の姿がある．雨具のほか，雪除けとしても使用された．

市女笠に多様な用途があるように，ほかの道具の用途も多種多様であったと考える必要がある．道具の用途を類型的に判断しては，絵画資料の制作意図を把握することはできない．逸脱したものを読み込む必要があるだろう．



図 32　『聖絵』巻七第三段
（清浄光寺蔵）



図 34　筆者模写
光明寺本『遊行上人縁起絵』上巻第五段



図 33　『聖絵』巻七第二段（清浄光寺蔵）



図 35　筆者模写『石山寺縁起』巻五第四段

Ⅲ　笠着連歌と時衆と非人

(1)　花の下連歌の成立

花の下連歌は，春に咲く桜の花の季節に花の下で行われた連歌会である．花の下は冥土と行き来する入り口と考えられ，御霊鎮魂の祭りであった．花の下連歌が行なわれた桜は，神木であるしだれ桜であったと推測されている(35)．『行脚随筆』は近世史料であるが，しだれ桜と連歌の関係について記している．

足利尊氏は，坂や庭の紅泉穴（冥土の入り口を意味する）から現れる戦士して餓鬼になった亡霊を慰めるため，庭に咲くしだれ桜を見て連歌会を開いたが，その後も餓鬼の亡霊が紅泉穴から出てきた．閻魔大王は，慈眼寺の観世音桜でなければ地獄に堕ち，獄卒の拷問は免れないだろうと伝えた．

しだれ桜は長い枝先が冥界まで届きそうなので，特別に霊力があるように感じるが，『聖絵』に描かれる桜はしだれ桜ではない．時衆は種類に関係なく桜を神木としていたと考えられる．『聖絵』の詞書から桜を霊験とする記述がある．

> 此の桜木は本尊出現し給ひし時の朽木の，ふたたび生え出て枝さし花さける木なり．されば，仏法最初の伽藍，霊験希有の本尊なり　（『聖絵』巻一・詞書より）

> 天人紅桜の木を礼して唱喝云，
> 稽首生木如意輪　（『聖絵』巻九・詞書より）

詞書から『聖絵』に描かれた多くの桜も，神木として描かれていたことが分かる．

花の下連歌は葬送儀礼の携わる念仏聖が中心だが，その花の下連歌の基盤である，笠を着て匿名で行われた連歌会「笠着連歌」がある(36)．笠着連歌については後述する．

花の下連歌は出雲路の毘沙門堂の歴史とともに発展した(37)．毘沙門堂のある出雲路は，平安初期に憤

死した貴族御霊鎮魂の場であり(38)，古くから毘沙門信仰があったとされる．毘沙門天は北方の守護神であり，七福神のひとつでもある．また，毘沙門信仰と芸能が結びついた地でもあったが，それに連歌が加わることで，神と人，あの世とこの世が交わる聖地として位置づけされた．

毘沙門堂は参議平親範（民部卿入道）によって創建されたが，花の下連歌開催の役割のほか，浄土信仰の場でもあった．毘沙門堂周辺に集住していた人びとは，「中世賤民」と呼ばれる散所法師・千秋万歳法師・声聞師などの芸能者と考えられ，彼らが連歌に参加したことが，花の下連歌発生の源であると考えられる(39)．『聖絵』にも寺社などの周辺に集住する非人が描かれており，非人が集住する場が踊念仏と連歌に共通している．

『筑波問答』には花の下連歌会主宰者の名の記述がある(40)．花の下連歌は，道生・是性・無生・寂忍・善阿などの「無縁の聖」を宗匠に，十名前後の連衆（れんじゅ）を中心に構成され，「よろずもの」の貴賤群衆の前で開かれ，貴賤ともに連歌会に参加できた．『沙石集』や『菟玖波集』に「忍びて」とあるように(41)，「よろづもの」「忍びて」の貴人も参加した．宗匠や連衆の多くは念仏聖で，社会的従属関係から断絶した遁世者であった．無縁の聖が主宰する場で，世俗社会に生きる有縁の人びとは身分・姓名を隠すことで無縁の場に参加できた(42)．

地下連歌の起こりは花の下連歌であるが，地下連歌は時衆と関わりが深い．善阿は七条道場金光寺の出身で，他に時衆連歌で著名な良阿，琳阿，相阿，梵阿も四条道場の出身であった(43)．

花の下連歌の系譜に，今日も続く清浄光寺の伝承催事「お連歌式」ある．催事の形式は，座敷の上段に熊野権現と一遍の図が対面した形で掛けられ，その横に遊行上人の携える熊野権現を祀った箱が置かれる．式が始まると，遊行上人が発句を詠むが，遊行上人のみ東に向かって座る(44)．これは遊行上人に熊野権現が降り，熊野権現と信者との意思疎通がはかられ，神託を受けることができた．連歌は「神のお告げ」を詠むことから，花の下連歌の系統を引き継ぐ催事として受け取ることができる．

「動」の踊念仏と「静」の連歌の場で，時衆は極楽往生のための念仏を展開させた．毘沙門堂が浄土信仰と花の下連歌の両者の場であるのも，花の下連歌は宗教的儀礼を重視し，遁世僧である念仏聖と非人を媒体にしていた．

(2)　図像から花の下連歌の系譜を探る

花の下連歌の源流は何か．図像を中心に検証してみよう．まず，『聖絵』巻十の詞書に「花のもとの教願」とあるが，教願という人物は，連歌師と推測される(45)．

教願は一遍に「四十八日間の結縁」を願っていたが，病に伏してしまい，臨終近くなって一遍に歌を送った．それに対し，一遍も返歌している．

とにかくにまよふこころのしるべせよ
いかにとなへてすてぬちかひぞ　　教願

〔返歌〕　とにかくまよふこころのしるべには
なも阿弥陀仏と申すばかりぞ　　一遍上人

一遍の教えのとおり，教願は正念し臨終を遂げた．この場面は『聖絵』巻十第一段に描かれる（図 36）．画面右側に教願の住房がある．屋敷内で教願が横になり，枕元には一遍，足元には一人の僧が座っている．住房の手前の花垣には白い小花が咲きほこる．画面左側に田園情景が浮かび，その手前に馬を連れた二人の人物，田園の遠景には次の場面展開を予兆させるかのように左画面奥に吸い込まれていく白鷺の群れが描かれている．

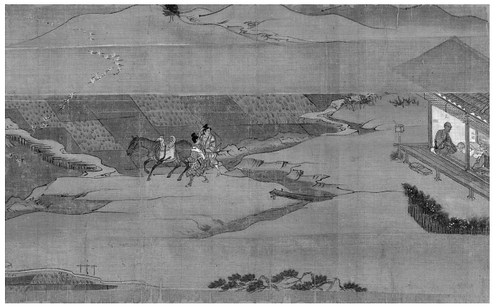


図 36 『聖絵』巻十第一段（清浄光寺蔵）教願臨終場面

本来の花の下連歌師はどのような姿であったのか，史料が少なく明確ではない(46)．「花のもとの教願」も，どのような経歴をたどって花の下連歌師になったのか把握できないが，無縁の場では実像を不明にした方が好都合であろう．



図 37 『聖絵』巻十第三段（清浄光寺蔵）大三島社の桜会

さらに，『聖絵』巻十の詞書には桜会の記述がある．正応二年（一二八九）一月二十四日，大三島社に仕える僧長観の夢の中に大明神と思われる束帯姿の者が現れ，一遍を招いて桜会を開き，生贄を禁止し，衆生済度の大念仏をするよう告げた．永観二年（九八四）比叡山の湛延と性空上人が参詣したとき，不殺生を授け，それから今日まで生贄を止めていた．お告げに従い一遍を招き，同二月九日に桜会を行なった．参詣した神官と地頭たちは夢のお告げと一遍の説法に従ったのである．



図 38 『聖絵』巻八第五段（清浄光寺蔵）太子廟の場面

この桜会の様子は『聖絵』巻十第三段にある（図 37）．堂内中央に一遍は合掌した姿で画面右側を向き，一遍は周囲の人々に説法をしている．一遍の顔の向いた方向にひどく破損した楼門があり，その脇に桜がある．堂と楼門の間に挟まれた空虚な空間に石舞台があるが，この上で踊念仏をした可能性は低く，おそらく連歌会を催したと思われる．『聖絵』の踊念仏は多く，初期を除くと，木造の踊り屋で行われた．足を踏み鳴らすのに効果的な床板だからであろう．信州の小田切の里（『聖絵』巻四第五段）や淡路二の宮（『聖絵』巻十一第一段）での踊念仏は地面で行われたが，足で地面を踏みつけるので観衆には振動が伝わり，やはり効果的であったろう．石舞台では床板や地面のような音響効果は得られない．

詞書にはないが，『聖絵』に桜会と思われる場面がある．『聖絵』巻八第五段の「太子廟の場面」である（図 38）．拝殿の奥まったところで高い桜の木が花を咲かせ，根元には花びらが散っている．拝殿の左側に一遍と時衆が拝殿に背中を向け，聖徳太子の墳墓に合掌をし，念仏を唱えている．花の下

の太子廟で，一遍は太子のために念仏供養を行った．

『聖絵』には桜会につながる要素が多くあり，桜を強調することで，花の下の連歌と同じ効果をもたらしたのだろう．

鎌倉期から室町中期のあいだに制作とされる『十界図』（当麻寺奥院）があり，六曲一双屏風・紙地彩色で，左隻の第二・三扇に花の下で曲水宴を行なう僧や貴族・武士が描かれている[47]．これで花の下連歌の様子をうかがうことができる．

また『年中行事絵巻　別本』巻三（田中家蔵）には草合わせの場面があり[48]，小さな祠のあいだに二本の大樹が左右対称の構図を取り，枝が互いに外側へ円弧を描く．幹の根元に民衆が数人集まり，左右二手に分かれ，互いに集めた草を見せ合い競い合っているようだ．二本の大樹は，競い合いを象徴している．草合わせの場所は花の下ではないが，大樹の下で行なわれ，花の下連歌との関連をうかがわせる．花は咲いていないが，桜の可能性もある．そばに祠が祀られているので，大樹はおそらく神木であろう（図 39）．さらに，周囲を見ると，祠と神木を囲う柵の端に石仏が描かれている．この石仏は，俗世と聖地との境界線ではないかと考えられる．柵の外の右側に矢を上空に向け，鳥を射ろうとしている人物がおり，殺生をあらわす．柵内の祠と神木は聖地の象徴として表現されている．石仏はあの世とこの世を分ける境を示すのではないかと考えられる．

住吉本『年中行事絵巻』巻八の「右近馬場の騎射の後の饗の場面」の屋敷の庭の左隅[49]に，一本の太い幹の老樹があり，その老樹にひざを曲げ，腰を低くし，ひたすら合掌をする烏帽子姿の人物がいる．老樹に花は咲いておらず，老木の種類は不明だが，その状況から神木であることは明らかである．桜以外の大樹や老木も神木として人びとに崇められていたことが，これら絵画資料から確認できる（図 40）．

花の下ではなくとも，人びとは神聖なる樹の下で会を催すことで，民間レベルの御霊鎮魂の神事を果たしていた．土に根を張る大木は，黄泉の国につながっているといえよう．



図 39　筆者模写 『年中行事絵巻』巻三 田中家蔵　草合わせの場面



図 40　筆者模写　住吉本『年中行事絵巻』巻八 老樹に合掌する人物

(3)　笠着連歌にみる非人と神を示す笠の記号

笠着連歌は花の下連歌の性格を受け継ぐ中世賤民を主体とした連歌会で，花の下で神と人間が信仰的交流を果たす祭祀儀礼であった．

花の下連歌師の十仏法師が記した康永元年（一三四二）の記録『伊勢太神宮[50]』や正徳三年（一七一三）の『参詣記纂註[51]』には，笠着連歌の様子が記されている．

> 一夜の会を述べて，累日の席をひらかんと申侍し程に，面目をうしなふ芸を忘れて，心肝をつゐやす席につらなる．着座十余人，笠着群集せり．其中に垂髪あひまじはりて，花やかなる句なんどをいだし侍しかば，老気いよいよまどひやすく，愚案さらにおよびがたし（『伊勢太神宮』）

> 連歌の席を開きて，連衆のほか，誰にてもその席に立寄て，笠を着ながら，句をつくるなり，故に笠着というなり，今も北野に毎月廿五日に笠着の連句あり（『参詣記纂註』）

上記に「笠着群集」とあり，連歌衆以外の者でも笠を着て参加することができた．「垂髪」は賤民の童子のことで，笠着群衆に交わり共に句を詠んでいる．人ではない，神聖なる童子[52]が参加しており，この会が賤民主体の連歌会であることが分かる．

笠着の理由は二つ考えられる．まず地下庶民の連歌会に公家や武家など身分の高いものが参加するとき，身分を隠すため笠を着たと考えられる．これは一揆と同様，非人姿に擬態することで，身分から解放された無縁共同体を形成できたのだろう．笠着は無縁共同体の象徴と考えられる．

さらに，叡尊や忍性などの真言律僧が非人救済活動に携わっていたときも，非人は文殊菩薩の化身とされた．笠も非人を神格化する記号であろう．笠の下は非人という無縁共同体を表し，笠は神の化身となるための記号と考えられる．

時衆の伝承催事お連歌式や花の下連歌では，阿弥陀仏と人との宗教的交流が開かれたが，そこでは笠の下で神が宿るという民間信仰的な意味が含まれていた[53]．民間の神事では，神に扮するとき蓑笠を着けることが多い．笠着は聖なる場の記号であり，笠は人々の前に現れる神を表す記号であったようだ．

ところで『中右記』長承二年五月八日宇治祭の条に「一ツ物」のことが記されている．一ツ物とは，修験者が神の神託を受けるときに，生身の童子や人形などに霊を宿らせてお告げを言わせるものである．

丹生神社（和歌山県海草郡西和佐竹村）では，稚児が四位の装束を着て，笠の縁に四手を長く切りかける．琴弾八幡宮（香川県三豊郡観音寺町）でも，童子を選んで心身を清めさせ，鳥の羽をつけた笠を被せている．また現在の熊野速玉神社の御船祭においても，馬に編笠を着せた人形を乗せている[54]．『年中行事絵巻』にも市女笠に装飾を施した祭祀儀礼の様子が描かれている．

(4)　賤民から時衆へと変わる花の下連歌

地下連歌師の地位が向上すると，花の下連歌以外の活動範囲が広がり，鎌倉末期から南北朝にかけ，花の下連歌の活動は衰え，その中心は中世賤民から時衆へと移行する．時衆は花の下連歌初期から携わっていたのではなく，花の下連歌後期に，時衆の参加で本来の花の下連歌の性格が崩れたとされるが，その鍵は善阿にある．花の下連歌の連歌師であった善阿は時衆とされるが定かではない．阿号を名乗るのは時衆のみならず，禅僧，東大寺勧進僧なども含めた勧進聖・遁世僧と見た方がよい．

善阿は初め禅僧であったが，連歌師に身を置くようになり，晩年に時衆と関わるようになった．そ

の活動時期は花の下連歌の衰退期であり，花の下連歌の改革を目指したが，その際に時衆と接点があったようだ．

当時の時衆は鷲尾などの下層民の集住地や堺で葬送や芸能に携わり，時衆の社会的地位は高まっていた．下層階級の身分から解放を望んだ多くの芸能民や賤民は時衆に帰依し，中世の時衆は拡大した[55]．このとき時衆連歌師が活躍し，花の下連歌師が時衆に帰依した．花の下連歌と時衆連歌は同じ性格を持ち合わせていたので，競合する状況にあり，花の下連歌は衰退した．

真教の弟子浄阿真観は四条京極十住心院敬礼寺釈迦堂あたりに四条道場を創建している[56]．四条京極のあたりは，四条大橋を東に向かうと祇園社，鷲尾へと繋がっていた．祇園社の記録『社家記録』には，時衆に関わる連歌や記事が多く残され，四条道場において時衆連歌師が花の下連歌師に変わり，連歌の主導権を握った[57]．

一遍が上洛したときの記録がある．『一遍聖絵』巻七の詞書によれば，弘安七年（一二八四）四月十六日に一遍は釈迦堂に入り，十七日には因幡堂に移った．また，三条悲田院に一日一夜，蓮光院に一時留まっている．その後，雲居寺・六波羅蜜寺を次々と巡礼し，空也上人遺跡に市屋道場を設けて数日を過ごした．

二祖他阿真教以前の一遍遊行の時期にも，鷲尾の近くまで足跡を残している．釈迦堂，空也遺跡市屋は踊念仏が行なわれた場所だが，二つの場面に市女笠の白装束姿の非人が存在したことは，不自然なことではない．それは，葬送に携わる時衆の踊念仏が花の下連歌と同様，あの世とこの世を結ぶ「無縁の空間」だったからである．踊念仏には念仏聖や遁世僧，芸能民などの下層階級の非人が集まることから，時衆と非人の関わりの深さを知ることができる．[58]

孤山隠士の『愚闇記』（正和年中）に「踊躍道場に於て連歌之事」とあるが，時衆の踊念仏は連歌と深い関わりを持つ．無縁の場は，連歌の「静」と踊念仏の「動」が表裏一体の関係で構成されていたのではないだろうか．

踊念仏の場面に描かれた市女笠の白装束姿の非人は，踊念仏や花の下連歌と同様，無縁の世界を象徴する熊野聖地の旅人として描かれたのだろう．

お連歌式で熊野権現のお告げを授かることからも分かるように，熊野権現は時衆にとって重要であった．時衆の踊念仏と連歌は，熊野権現の神託を得るための儀式であり，わざわざ熊野聖地に行かなくとも，人びとはそこで神と通じることができた．踊念仏の場面に存在する市女笠の白装束姿の非人は，群衆のひとりとして描かれたものではなく，踊念仏と熊野が深い結びつきがあることを示す記号として描かれたものである．

おわりに

わたしは，『聖絵』熊野参詣場面に登場する律僧に追従する市女笠に白装束姿の人物を非人と推定した．それは，律僧は非人を文殊菩薩の化身と考え，非人救済活動をしていたからである．このことを実証するため，釈迦堂や空也遺跡市屋の踊り念仏の場面で，非人集住地に市女笠姿の人物を見つけた．さらに，多くの絵画資料からも市女笠を着た非人と思われる人物を見つけた．特に関寺の踊念仏場面の非人集住地に，破れた市女笠を被る非人と思われる人物が描かれ，市女笠の破れた隙間から頭

に巻く白い布が見えたことは重要である．癩者が市女笠で身を隠していた証拠となるだろう．

この論文では絵画資料から図像を発見するだけではなく，時衆の思想にも注目した．そのことで踊念仏や連歌会が熊野同様，極楽浄土とつながる無縁の場であったことを明らかにできた．熊野に行かなくても踊念仏を拝めば，同じご利益がある．市女笠に白装束姿の人物はそのことを表す記号であった．このことで，現世に極楽浄土であると主張した一遍の思想と踊念仏の関係も理解できる．その後，時衆は花の下連歌と合流して死者を弔う性質も帯び，さらに一向衆との合流で北陸を中心に広まり踊念仏の作法は一揆にも受け継がれた．このように市女笠に白装束姿の人物に注目したことで，時衆の思想をより深く理解できた．絵画資料研究は絵画資料研究で完結するものではなく，文字資料研究にも大きく寄与するものといえよう．

注

（1） 勝俣鎮夫『一揆』（岩波新書，1982 年）pp. 110–11．一揆は社会的規範から逸脱した非日常集団であり，一揆の正当性・平等性を示す集団標識を必要とした．それが，非日常的な異類異形の姿であった．南北朝動乱期の武将に率いられた軍陣一揆でも，幟旗や軍装姿，軍馬など色や衣服を統一して結束力を固めたが，これも非日常的な異類異形と見ることができる．中世の一揆の作法は近世の百姓一揆にも受け継がれ，百姓一揆に参加する者は社会的身分を隠して一致団結し，公の場で「蓑笠姿」「乞食姿」「非人姿」という異類異形の姿となり，無縁化を実行したのである．「蓑着一揆」と呼称されるように，その一揆姿は身分や顔を隠す蓑笠姿であった．また，異形な帽子を被る姿や白布で頭を覆う姿もみられた．

（2）「東寺百合文書」ハ函三一二号，長禄三年八月廿九日，若狭国太良荘惣百姓等申状．

（3） 佐々木哲『佐々木六角氏の系譜 —— 系譜学の試み』（思文閣出版，2006 年）pp. 118–9.

（4） 網野善彦『日本中世の民衆像』（岩波書店，1980 年）pp. 174–5.

（5）『朝倉始末記』（『福井県史』資料編 2 古代・中世）巻八「富田与一揆合戦，附富田討死之事」に「異類異形ノ出立」とあり，また「金津溝江館一揆等攻事」に「里方ノ一揆ハ薬鑵小鍋ヲ冑トシ田蓑ヲ鎧ト引張テ」とある．

（6） 勝俣前掲書 pp. 126–32．勝俣氏は折口信夫を引用し，次のように述べている．近世の百姓一揆の蓑笠姿・非人姿・乞食姿は，自ら神または鬼へ変身させる目的でおこなわれた．幕藩体制の価値体系に反抗する，あるいは打破する正当性を得るため，自ら神や鬼に変身するという積極性をそこに認めなければならないというのである．また，百姓一揆の連判状は「天狗状」とも呼ばれ，連判状の差出人を不明にすることに由来する．天狗は民衆意識のなかにおいて妖怪であるとともに天の意志にもとづき勧善懲悪をおこなう天の使いであるという二つの意味をもっていた．自らを神の意志の代行として位置づける潜在的な一揆の思想が「世直し運動」であり，一揆の参加者は「世直し神」となって破壊を正当化した．

（7） ここでいう律僧とは，従来の律宗（官僧）の教団とは異なり，叡尊や忍性らの真言律僧のことをいう．叡尊は西大寺を中心に，叡尊の弟子，忍性は極楽寺を中心に癩者・病者・弱者，非人などの救済活動をおこなった．関東の極楽寺は鎌倉幕府の援護を受けた．鎌倉後期に最後の宗派として時宗が登場する．『聖絵』に多くの乞食や非人などの描写，また『遊行上人縁起絵』にも非人に粥施行する場面が描かれ，時衆が非人救済活動をしていたことがうかがえる．時衆と律僧はともに非人救済活動をしていたことから，競合関係にあったのではないかと考えられている（砂川博「『一遍聖絵』と『一遍上人絵詞伝』」『中世遊行聖の図像学』岩田書院，1999 年）．

（8） 松尾剛次『忍性』（ミネルヴァ書房，2004 年）pp. 22–5，細川涼一「忍性の生涯」松尾剛次編『叡尊・忍性』（吉川弘文館，2004 年）pp. 112–18.

（9） 荒木繁・山本吉左右編注「小栗判官」『説教節』平凡社 1973 年．

（10） 網野善彦『異形の王権』（平凡社，1993 年）p. 72．網野氏は宮本常一氏を引用し，つぎのように述べて

いる．鹿の肩骨はやいて占いに用いたように，当時の人々は鹿を神聖なものとして尊び，「鹿の角や皮に呪力を感じた」という．そのため鹿杖はその形状によって用途も異なり，鹿を追い，とらえるための用具というだけではなく，宗教的性格をもつこともあり，盲女や老女，僧・乞食などが突く棒や鹿杖は呪術的な意味を持つという．本論でも，身体障害者や弱者，僧・非人などが突く棒や鹿杖に宗教的意味があり，それらの人々が杖をもつことで神の化身・神使いとなることができたと考えられる．

（11） 林譲「踊り念仏の開始と展開――一遍と時衆におけるその意義――」今井雅晴編『遊行の捨聖　一遍』（吉川弘文館　2004 年）p. 107，および栗田勇『道元・一遍・良寛――日本人のこころ』（春秋社，1990 年）pp. 128–30.

（12） 大橋俊雄『一遍』（吉川弘文館，1983 年）pp. 79–85.

（13） 栗田勇『道元・一遍・良寛――日本人のこころ』（春秋社，1990 年）p. 128.

（14） 今井雅晴『捨聖　一遍』（吉川弘文館，1999 年）pp. 124–5.

（15） 林前掲書 pp. 95.

（16） 今井前掲書 pp. 122–4.

（17） 今井前掲書 pp. 157–8.

（18） 今井前掲書 p. 145.

（19） 勝俣前掲書 pp. 34–8.

（20） 安藤昌益『稿本　自然真営道』（安永寿延校注，平凡社東洋文庫，1981 年）p. 173.

（21） 峰岸純夫『中世社会の一揆と宗教』（東京大学出版会，2008 年）pp. 33–4.

（22） 神田千里『一向一揆と戦国社会』（吉川弘文館，1998 年）p. 24.

（23） 神田前掲書 p. 76.

（24） 神田前掲書 pp. 86–7，および出口治男『一向一揆余話』（方丈堂，2002 年）p. 117.

（25） 神田前掲書 pp. 27–30.

（26） 神田前掲書 p. 76.

（27） 小松茂美編『一遍上人絵伝』巻一第一段（中央公論社，1988 年）p. 9.

（28） 今井雅晴編『一遍辞典』（東京堂出版，1989 年）pp. 115–7.

（29） 渋沢敬三編『絵巻物による日本常民生活絵引』第 5 巻（角川書店，1968 年）p. 9.

（30） 渡辺喜勝『一遍智真の宗教論』（岩田書院，1996 年）pp. 256–7.

（31） 小松茂美編『一遍上人絵伝』（中央公論社，1988 年）p. 14.

（32） 豊島修『熊野信仰史研究と庶民信仰史論』pp. 29–33.

（33） 網野善彦『異形の王権』（平凡社，1986 年）p. 137.

（34） 宮崎糺『笠の民俗』（雄山閣出版，1995 年）pp. 122–3.

（35） 岡見正雄「もの――出物・物着・花の本連歌」『国語国文』1955 年 2 月号.

（36） 松岡心平『宴の身体』（岩波書店，2004 年）pp. 15–6.

（37） 廣木一人『連歌史試論』（新典社研究叢書，2004 年）第 2 章 pp. 37–43.

（38） 松岡前掲書 p. 56.

（39） 廣木前掲書 pp. 49–52.

（40）『筑波問答』に「道生・寂忍・無生などいひしもの等，毘沙門堂・法勝寺の花のもとにて，よろづのものおほくあつめて，春ごとに連歌し侍りし」とある．

（41）『沙石集』に「侍従隆祐忍びて聞給けるが，難句をば付け付けし給ける」とあり，『菟玖波集』に「鷲尾の花下にしのびて院の御車たてられ侍りける日の連歌」とある．

（42） 松岡前掲書 pp. 57–60.

（43） 松岡前掲書 pp. 15–6.

（44） 梅谷繁樹『中世遊行聖と文学』（桜楓社，1989 年）第 3 章第 5 節「時宗の歳末別時念仏と御連歌の式」.

（45） 橘俊道・梅谷繁樹訳『一遍上人全集』（春秋社，1989 年）p. 92 の下段の訳に「連歌師」と記されている．

（46） 廣木前掲書，pp. 94–100.

（47）『当麻寺』大和古寺大観二巻（岩波書店，1978 年），図版「十界図」pp. 173–3，および解説「十界図」pp. 110–2.

（48）『年中行事絵巻』日本絵巻物全集二四巻（角川書店，1968 年）p. 107.

（49） 前掲『年中行事絵巻』p. 80.

（50）『神宮参詣記大成』大神宮叢書（臨川書店，1971 年）.

（51） 前掲『神宮参詣記大成』.

（52） 黒田日出男「中世被差別民の装い」『境界の中世　象徴の中世』（東京大学出版会，1986 年），網野善彦『異形の王権』（平凡社，1993 年）pp. 52–67.

（53） 古泉圓順「笠と巫」『四天王寺女子大学紀要』第 13 号，1981 年.

（54） 堀一郎『我が国民間信仰史の研究（二）宗教史編』（東京創元社，1953 年）pp. 729–30.

（55） 廣木前掲書 pp. 105–36.

（56） 林譲「時宗四条派派祖浄阿弥陀仏伝記史料の再検討――特に三伝の成立時期を中心として――」『国史学』120 号，1983 年 5 月.

（57） 廣木前掲書 pp. 159–66.

（58） 大橋俊雄「浄土真教における踊念仏」『踊り念仏』三章一節，大蔵出版，1974 年.

論文

図像資料と民俗学

福田アジオ
FUKUTA Ajio

1　語りの民俗学・行為の民俗学

民俗学は英語の folklore の訳語としての意味を与えられている．その結果，一般には，日本の民俗学と欧米の民俗学とは同じような方法と対象をもった学問として理解されている．しかし，それぞれの民俗学の具体的な研究を見てみると，その内容において，したがって方法においても大きく異なることが判明する．

欧米の民俗学は一言で言えば「語りの民俗学」と位置づけられる．folklore という用語が 19 世紀中頃に作り出されたイギリスにおけるこの学問は，人々が伝えてきたさまざまな伝承を対象に研究するものと理解されてきた．昔話，伝説，民謡など，人々が語り，それを聞くという関係の中で存在する事象が中心的な内容を形成してきた．一般にいう，口頭伝承ということになり，また内容としては口承文芸と呼ばれる事象である．アメリカにおいては，古くからの昔話や伝説ではなく，そのような歴史的蓄積をもたない，現代社会で生成され，語られるうわさ話，世間話が専ら関心の対象であり，特に都市伝説という新しい概念が形成されることで，民俗学は現代の語りを扱う学問と理解されるようになった．このような傾向は，近年の日本の民俗学にも少なからず影響を与えていることは事実であり，日本の民俗学も語りを重視し，その復権が見られる．英語の folklore が口頭伝承という語りを示したことにより，日本の民俗学研究者も，語りとしての民俗を表現するときには民俗とは言わず，フォークロアと表現することに，その感覚が示されている．

それに対して，日本の民俗学は「行為の民俗学」と表現できる．日本の民俗学は言うまでもなく柳田国男によって開拓された．柳田はヨーロッパの民俗学から学びつつも，独自の民俗学を作り上げた．そのもっとも大きな特色は，民俗学の研究対象を人々が行ってきた行為に中心を置いたことである．日本の民俗学の各種の概説書や案内書が示しているように，行事・儀礼・組織・制度が民俗学の内容を形成している．家族・親族・地域という社会制度や社会組織，通過儀礼や年中行事という人々が行っている様々な儀礼，稲作や畑作の農耕技術や農耕儀礼，あるいは神社の祭礼行事や講集団の活動，イタコやユタの行う行為などの信仰事象である．それら人々の集合的な事象を主として聞き書という方法をとおして獲得しようとする．

言い換えれば，語りを手段として行為を把握しようとするのが日本の民俗学であると言えよう．そして，それらの事象を把握して，それらの行為を行う人々の心意に達しようとする．意識・観念・感覚，現代の用語で言えば心性とか感性というべきことがらを柳田は心意と表現した．民俗学は主として聞き書をとおして人々の行為を把握し，その類例を日本全体から集積して，類型化と比較によって

歴史的展開を明らかにすると共に，そこに秘められた心意，心性，感性をも併せて把握しようとする．フォークロアの同義語とも理解される民俗という用語は，口頭の昔話・伝説・民謡・世間話などには用いず，行事や儀礼について使用する傾向が一般的である．これは欧米のフォークロアと日本の民俗が相違することを感覚的に示しているのである．

2　聞き書は手段

もしも日本の民俗学が行為の民俗学と把握できるのであれば，民俗調査の基本的方法と考えられてきた聞き書は，民俗を把握するための手段と位置づけられる．伝承者と呼ばれる被調査者に対して質問をし，それに対する回答を得て，調査ノートに筆記する聞き書が民俗調査の基本である．その伝承者の語る内容は，行事や儀礼であったり，組織やその活動であったりする．伝承者と呼ばれる人物が体験し，自らも一定の条件が揃えば行ってきたことを，その記憶から呼び出して，言葉で語ってもらい，その内容を聞き書する．それが民俗と呼ばれる．即ち，聞き書を通して行為を把握するものである．今までに刊行され，蓄積された民俗調査報告書や民俗誌と呼ばれる記録は，その大部分がその種の民俗で占められている．聞き書をとおして語りを引き出し，記録することで終わるのではない．語りに含まれている人々の行為を把握し，記述する．したがって，人々の行為を直接調査者が目の当たりにして把握するものではなく，口づてに把握するのであり，それは行為を間接的に把握することである．

聞き書という間接的な行為の把握は効率的である．時間を短縮して行為を把握できるからである．民俗調査のなかに必ずのように含まれる年中行事は，１年間の行事である．もしも実際に行事に立ち会い，観察して記録するとすれば，１年間を要する．まして通過儀礼のように，人の生涯を記録するとなれば，一人の調査者が直接立ち会うことはほとんど不可能である．このことはまた空間的に広がりをもつ事象についても言える．あちこちで行われる事象をすべて追いかけることは困難なことである．それに対して，聞き書という方法は，１年間の行事を数時間の聞き書の中に濃縮して把握することができるし，広域的に展開する事象を同時に把握することができる．適切な質問を繰り返すことによって，民俗として必要な情報のみに絞って回答を得て，記録できる．通過儀礼であれば，それはさらに効率的であると言えよう．実際の行事や儀礼に直接接して観察によって記録を作成することは現実に不可能であるが，聞き書という方法を採用すれば可能となる．

聞き書は文字での記録だけではない．伝承者に質問し，それに対する回答を得て，記録するが，話の経過の中で概念図，模式図やスケッチをフィールドノートに記載することは当たり前のこととして行われてきた．最も早い時期に民俗調査を行った山中笑（共古）は，任地の山梨県内の民俗を記述する際に，具体的な事物を多く描き，説明している（山中笑 1902〜1903）．山中共古はおそらく現地を訪れたときに持参したノートにスケッチしたり，村人から教えて貰った図を書き込んでいたものと思われる．

柳田国男のフィールドノートというものは知られておらず，果たして存在したかどうかも疑問であるので，民俗事象を図に描いたかどうかは分からない．しかし，折口信夫にはフィールドノートを整理した記録が残されている（折口信夫 1921，1923）．それを見ると，聞き書の過程で，文字では表現

できない事項について図を描いて挿入している．それは実際に見て確認した結果を描いたものもあるであろう．聞き書の過程でノートに書き入れてあったと解することが出来る．

このようなことは誰しもが実際に行ってきたことである．民俗学研究者は誰でも，自身のフィールドノートを見てみれば，そこには聞き書の過程で描いた図が少なからず挿入されていることを発見するであろう．そのことに特に自覚することなく行ってきた．民俗学ではフィールドノートの記載方法について特に検討されたことはなく，まして書き入れられた図について考えられたことはない．そして，民俗調査報告書や民俗誌の記述に際しては，それらノートに書き入れた図を文字に置き換えて説明することをしてきた．調査の過程で描いた図は，調査結果の記述には多くが失われ，わずかな図のみが残された．

フィールドノートに図を書き入れるのは，一つには被調査者である伝承者が説明の過程で紙に筆を執って書きつつ説明するからである．伝承者が言葉で説明しても，聞いて書き留める調査者がその内容を理解できず，文字で書くことができないことは多く，それに業を煮やした伝承者が自ら図を描いてくれることが多い．また逆に，調査者が聞いた言葉が理解できず，伝承者に求めて図を描いて貰うことも少なくない．

民俗調査は従来も副次的に図像を生産してきた．しかし，そのことに自覚的ではなかった．聞き書調査における図像の生産について今後は自覚的に進めなければならない．そして積極的に図を描き，民俗の記述・分析にも活用しなければならないであろう．

3　行為の把握と観察

日本の民俗学は行為の民俗学であるところに特色がある．語りを手段にして，行為を把握することが専ら民俗調査であると理解されてきた．しかし，だれでもが承知しているように，行為は聞き書によってのみ把握する必要はない．有名な柳田国男の民俗資料の三分類は，その第１部として生活外形あるいは有形文化を掲げている．第２部が生活解説あるいは言語芸術，第３部が生活意識あるいは心意伝承である．この第１部の生活外形，有形文化を，「目の採集，旅人の採集と名けてもよいもの」と説明した（柳田国男 1934）．すなわち，行為の直接的把握を意味している．目によって観察し，記録できる事象である．

観察によって民俗を把握し，それを観察記録として資料化することが，民俗調査の方法としても採用されてきた．観察には多様な方法があることは言うまでもない．もっとも一般的には行事や儀礼を見学して，自分の目で確認したことを記録するものであるが，その際に様々な補助的方法が採用される．それが観察結果の記録法にもなる．

①文字による記録　観察結果の記録法の第一の方法は，文字で記録することである．見たことを文字でノートに書き留める．観察結果を資料として活用する研究が，文字によって行われるのであるから，資料も文字化してあるのが最も効率良いと言える．従来の観察結果の記録はほとんど疑うことなく文字化していたのは当然である．景観にしても，生産活動の様相についても，あるいは冠婚葬祭と呼ばれる儀礼や年中行事にしても，また祭礼にしても，その場にいて観察し，その場でフィールドノートに記入する．

②実測図　観察の過程で計測して，実測図を描くことも有力な方法である．物差しで長さを計測して，形状を正確に描くだけでなく，そこには観察結果も描き込まれる．民家の間取り，民具の実測図など，一定の技法に従って対象を正確に記録し，再現可能な状態で報告する．考古資料の記録法が民具調査に影響を与え，発掘された土器や石器を実測して記録すると同じように，民具やさまざまな装置を実測図として描き，報告書や論文に掲載することが行われてきた．

③スケッチ画　観察の結果を最も簡便に記録する方法がスケッチであろう．自分で観察した結果を，自分の筆で描くのであるが，実測と違い，印象に残った部分が強調される．スケッチは様々な場面で作成される．行事や儀礼に臨んで，その様相を簡単に描くことはフィールドワークにおいてしばしば行われる．フィールドノートには観察の結果として描かれた多くのスケッチ画を含んでいるものと思われる．しかし，調査結果を記述する段階で，そのスケッチ画が掲載されることは少ない．利用されることなく，ノートの中に保存されていることが多いであろう．

④写真　観察そのものの記録とは言えないが，観察して注目した事物をカメラで撮影して画像にして記録することは早くから行われてきた．民俗調査にとってカメラを携行することは古くから当たり前のこととして行われてきた．調査に出たときには，そこで注目した事物や事象をカメラに収めることは誰もが行ってきた．特に，祭礼行事の記録法として最も一般的な方法であった．かつてはフィルムに撮影して，それを焼き付けて写真をアルバムなどに整理保存し，必要に応じて参照することが行われてきた．また民具や装置を記録する台帳には，撮影した写真を貼り付けることがまた常識である．

⑤動画（ビデオ）　近年，急速に観察結果を，あるいは観察と並行して記録する手段がビデオで映像を撮影することである．ビデオ以前は，16 ミリフィルム，8 ミリフィルムの映画で撮影することが行われたが，それはごくわずかであった．撮影機材の普及はほとんどなく，映画撮影は珍しい記録方法であった．それでも早くは渋沢敬三やその仲間による映像が残されているし，第 2 次大戦後にも少なからずの作品が制作されている．

以上のように，観察を記録して資料化する方法は多様である．文字による記録が現在までもっとも普及した方法であるが，観察を文字化することは至難の業と言える．実際に，文字で記録することは，観察結果のごく一部のみを記録することであり，多くの側面は捨象して消し去っている．観察の対象は形のある事物であり，動きのある事象である．それを時間と空間の広がりの中で把握して，文字で表現することは実際には不可能である．図像，画像，映像という順序で，観察結果を写実的に，そして時間と空間をあわせて記録する方法が登場し，普及してきた．今や，観察結果をそれらで記録することは常識となっていると言って良いであろう．特に，画像と映像が基本的な方法となった．しかし，それは記録を残すという点で基本的方法となっているだけであり，記録を活用する，特に研究に活用するという点では必ずしも明確になっているわけではないし，その方法も検討されていない．多くの画像は挿絵として掲げられても，画像から直接研究が展開することは試みられていないと言って良い．まして，映像となると，16 ミリフィルムや 8 ミリフィルムの時代から，記録として残されていても，それを研究する，あるいはそれによって研究するという試みは乏しい．そして，社会教育映画として制作された作品が多くの人に親しまれ，民俗事象の観察結果としての映像はその教育映画という性格に規定されてしまった．観察をそのまま映像にするのではなく，編集して，ナレーション

を入れ，バックグラウンドミュージックを入れ，観客の感動を呼ぶように工夫をし，また興味がそれないようにする．映像についてはそれが当たり前となり，ナレーションやバックグラウンドミュージックに疑問を示すことはほとんどない．

民俗学という研究にとって図像，画像，映像を資料として活用するということはどのようなことか基礎的なところから検討しなければならないであろう．研究資料としての図像，画像，映像について理論的検討が加えられ，また資料操作法との関係を検討しなければならない．その際，図像，画像，映像を否定的にとらえる必要はない．文字記録に限界があることは明瞭であり，その弱点を克服する手段として図像，画像，映像は明らかに優れている．それを活用することを前提に，研究法を検討することが求められる段階である．

4　図像を生み出す民俗学を

聞き書は，すでに指摘したように，聞きつつ書き留めることであり，本居宣長が『玉勝間』において師の教えを学ぶ方法として提示した言葉である．それを，伝承者を師とし，聞き書をするという方法を民俗学は採用した．権力的な聞き込みや調査者中心の聞き取りに対して，被調査者を師と仰ぎ，教えて貰うという姿勢を示した用語と言って良いであろう．その聞き書の書くという行為は，誰も疑うことなく文字で書くことと理解してきた．書くという表現をする以上は，文字で書くことを必然的に示している．自覚することなく，聞き書と表現することで，文字で記録することに支配されてきた．したがって，聞き書の過程でフィールドノートに絵や図が記入されることがあっても，あくまでも付随的なことであり，補助的なことと考えられてきた．民俗調査の技法を説明する際にも，聞き書のフィールドノートへの記録は文字による記録のみが注意され，絵や図については必ずしも関心が払われなかった．しかし，実際には，フィールドノートには少なからずの絵や図が書き込まれているはずである．そのことを必ずしも自覚してこなかった．調査法の説明でも，聞き書に伴う図像記録化は取り上げられてこなかった．

このように，今まで関心の対象にはなってこなかった図像を，聞き書の結果を記録する方法として考えることが必要であろう．しかし，聞き書での被調査者の話を調査者が直接図像にすることは，調査者が勝手に頭の中でイメージを作り上げて，フィールドノートに描くことになる．それは明らかに間違いである．聞き書の過程で図像を記録するためには，何らかな形で被調査者から図像を示して貰わなければならない．そのことは，多くの調査者は経験的にはしばしば行ってきたことでもある．聞き書の過程で，話が理解できなくなると，その事項について図を描いて説明してくれるように依頼することは度々経験している．それを自覚的に行い，その方法を共通のものにしていくことが必要であろう．聞き書の過程で，被調査者に求めて，図解による説明をして貰う，またスケッチを描いて貰う，そしてそれをフィールドノートに記録する．その際，被調査者が描いてくれた図をそのまま単に写すのではなく，聞き書という特徴を活かさねばならない．すなわち，被調査者の説明や解説と結びつけて図像を記録することである．単なるスケッチではない図像による記録がなされねばならない．一種の絵引，あるいは図解の方式でフィールドノートに記載することが必要である．民俗学が古くから重視してきた民俗語彙を図像の記録に結びつけることが，その第一である．被調査者が描いてくれ

た図像の各部分について地域の人々が表現する民俗語彙を，図の中に記載する．また，図像を補う形で説明を記載する．これが絵引であり，図解である．

また，観察から図像・画像・映像を生産することも重要である．このことは前節で述べたので，ここでは再説しないが，その重要性は従来はほとんど顧みられることがなかった．そのため，方法についても検討されることはなかった．

今までも少なからず図像が民俗の記録法として採用され，それなりの量が蓄積されている．しかし，調査法としてはあくまでも中心は聞き書による文字化にあり，観察による図像化は副次的，従属的な位置を与えられているにすぎない．また，聞き書の過程で図像を作成して記録化することはほとんど自覚されることはなく，結果として資料化の方法として考えられてこなかった．全体として，民俗調査の結果を記録するということは，文字による記録のみが考えられてきた．

現在必要なのは，民俗調査の記録という行為を文字化においてのみ考える前提を破棄しなければならない．文字優先の考えを破棄し，図像化記録を文字化記録に対し従属的・副次的存在から解放し，独立した民俗資料の記録として考えなければならないであろう．文字と対等な位置を図像に与えることである．もちろん，量的に見たときに，図像による民俗資料の記録よりも文字による民俗資料の記録のほうがはるかに多いであろう．しかし，理論的には，文字による資料化と図像による資料化を対等に位置づけなければならないであろう．もちろん，そのことは図像だけについて言うのではない．図像・画像・映像による民俗の記録，データ化を言うのである．民俗調査を聞き書のみに限定しないことと大きく関係するが，観察による民俗の記録は必然的に図像，画像，映像の採用を要求する．観察結果を文字で記録することが困難であることは述べたとおりである．

民俗調査の成果の有力な表現形式が民俗誌である．特定地域の民俗を相互関連させ，全体的に描き出したものである．民俗誌は単に民俗事象が網羅されていることを意味しない．地域の民俗の特質を，民俗の相互関連性を把握して，全体像として示すことである．今までは民俗誌と言えば，当然の如く，文字で記された．民俗誌は文章で記述されるべきものであった．確かに写真，画像，図像が文章の間に挿入されて，読者の理解を助ける力となっている．またしばしば巻頭には口絵写真が挿入されることが多い．地域の民俗的特質をイメージとして理解できるようにするための設定である．これらの工夫が行われても，それだけでは民俗誌にはならないというのが常識であろう．しかし，この考えを打ち破らねばならない．

文字ではなく，非文字の民俗誌の構想を抱くことがあっても良いであろう．今までもその可能性として考えられてきたのは，画像による民俗誌である．具体的には，写真民俗誌というべき，民俗を把握し，その全体像を示す方法である．今までの主客を逆転させ，非文字である画像，写真を主役に置いて，文字の記述を脇役とする方法である．全く完全に文字を排除することは必要ない．抽象的なもの，観念的なものを表現できるという文字表現の利便性は十分有効に利用する．しかし，それはどこまでも脇役であり，補助的である．民俗誌としての，地域の民俗全般を示し，その相互関連を明らかにして，民俗の全体性を理解できるようにする方法として写真を使用する．写真民俗誌は，写真を挿絵の位置から解放して，主役に据えることである．

同様に，映画，ビデオという映像による民俗誌の可能性も考えるべきであろう．映像民俗誌は，民俗事象を動態的に把握できるという点で，写真よりもはるかに対象を正確に把握し，理解を助ける．

その場合，あまり考えもせず，一般的な映画と同じように理解してしまう危険性がある．いわゆる記録映画は必ずナレーションを伴い，またしばしばバックグラウンドミュージックが挿入され，またテロップが画面に流される．これらが映画の内容理解に貢献することは，教育映画の手法として定着していることで分かる．ほとんどの人が疑問を抱かない映画制作の方法であろう．特に，ナレーションが不可欠と考える人は多いであろう．ナレーションという説明があって，はじめて映像が見る人に理解されるという考えである．しかし，ナレーションは，映像から直接理解することを弱め，映像を見る人々を一定の方向に導き，対象からではない知識とイメージを与える．映像民俗誌を追究することは，先ずナレーション，バックグラウンドミュージック，テロップなどに依存する作品化から脱出しなければならない．そして，対象を撮影した映像そのものから，地域の民俗の全体像を理解できるように編集する．

写真民俗誌，映像民俗誌は，少ないながらも，その試みがなされてきた．必ずしも成功したと言えるものは多くないが，努力が重ねられてきた．しかし，意外にも，図像による民俗誌はほとんど存在しない．自らの目で確認した結果を，筆を執って文字であらわすのではなく，同じように絵筆を執って図像に描いて示すことはさほど困難なことではない筈である．古老が，今は消えてしまった過去の民俗を，記憶から呼び出して，絵に描き，冊子を刊行するという試みは，日本各地で行われている．地域の民俗の全体を相互関連して描いた民俗誌とは言えないが，文字で表現するよりも，はるかに今はなき民俗を具体的に示している．これを意識的に行うことがあっても良いであろう．調査結果を図像で描き出して，その全体を民俗誌としてまとめる．

民俗学は，専ら文字に依拠せずに伝えられてきた事象を扱いながら，皮肉なことに，文字化し，文章で記述し，表現することに陥ってきた．そこから脱出して，図像，画像，映像を生産し，それらによって研究し，また研究成果を示す方法を確立することが肝要なことと言える．

5　過去へのフィールドワーク

日本だけでなく，世界各地の民俗学は，現在の生きて存在する民俗で歴史を認識する学問として成長してきた．歴史離れの傾向が見られるようになったのはごく最近のことに属する．民俗学は，現代社会でのフィールドワークが前提であり，現在把握できることから歴史を再構成しようとしてきた．しかし，それのみにこだわり，そこに民俗学の特質を見る考えは必ずしも正しいとは言えない．民俗事象は現代に存在するだけでなく，過去にも存在した．民俗を研究するということは，現在生きて存在する民俗だけでなく，過去に存在した民俗も対象にすることである．

民俗学は，現在人々の行為として示されている民俗を聞き書その他の方法を駆使して把握し，分析する．フィールドワークを基本的方法にして民俗を把握する．そのフィールドワークは，民俗を行い，伝えている人から聞き書によって把握する，行為として示されている民俗あるいはその結果としての事物を観察によって把握するなどの方法が採用される．これが民俗学が民俗を把握する中心的な方法であることは間違いないであろう．19 世紀に発生し，21 世紀まで存続してきた民俗学は，そのようなフィールドワークによる把握を発達させてきた．しかし，過去に存在した民俗の把握法については十分に検討することなく，安易に過去に記録された文字資料の利用が許されるかどうかという問

題に絞られていた．1950 年代に行われた日本民俗学の性格論争がその典型的なものであった．

民俗が現在だけでなく，過去にも存在したというように単純に考えれば，民俗調査も現在の民俗を把握するためのフィールドワークだけでなく，過去の民俗を把握するフィールドワークが存在しても一向に構わないであろう．現代の民俗をとらえる方法は多様であり，フィールドワークも一種類ではない．同様に，過去に対しても，様々な方法を駆使して民俗を把握する多様なフィールドワークが試みられねばならないであろう．問題は，現在の民俗を把握するということは，たとえの通り，生きている民俗を把握することである．変化したり，変動したり，動きが見られる．それ故に動態的に民俗を把握することが可能である．それに対して，過去の民俗は，過去が確定していることによって，先ずは動きのない，固定的なものとして把握することになる．そこに限界がある．しかし，時間軸にそって長期にわたっての事象を，実年代的にとらえることができる．

過去に存在した民俗は，伝承という行為によって現在に引き継がれている．そのことは現代の民俗を対象とする民俗調査というフィールドワークによってとらえる．しかし，特定の時間軸の中での過去に存在したことは立証できない．特定の時間の中で存在したことを，過去へのフィールドワークによって把握することが必要になる．過ぎ去った過去は確定している．過去に踏み込んだ途端に，民俗は固定した動かないものとして姿を現す．それが過去の姿のまま把握できるとすれば，特定の過去に記録されていることが重要である．

民俗学の基本的性格は，現代の民俗の調査研究によって歴史的世界を認識するところにあるが，過去へのフィールドワークもその歴史認識にプラスになる．現代の民俗と特定の過去に存在した民俗を総合することで，より豊かな歴史的世界が現れてくる．それは変化を明らかにする場合もあれば，変化しない場合もあるし，あるいは途中での消滅を教えてくれることになるかもしれない．いずれにしても，現代の民俗と特定の過去の民俗を総合することは無駄なことではない．

過去に生産され現在に残されている資料群へ踏み入ることが，過去の民俗を把握する手段である．過去に生産された民俗を教えてくれる資料を探し出し，そこから民俗を抽出する．現代の民俗調査のように，民俗を記録することを目的に一定の方法を確立し，それに基づいて作成されることはなかった時代において，民俗の記録を発見することは，意図せずに民俗を記録した偶然記録のなかを探索することである．

無文字社会ではない日本では，民俗が過去にも文字によって大量に記録されたことは多くの事例から判明している．したがって，過去の特定の時間軸のなかで民俗を発見する，記録すると言えば，文字資料のなかから探し出すことを意味してきた．近世の随筆，日記，地誌などは民俗を発見する素材であった．また，村方史料のなかの各種の文書に記載された民俗事象を拾い出すことも行われてきた．近世以降の豊かな文字資料の存在は，そこに民俗が記述されていることを知って以降，しばしば活用されてきた．そして，量的にははるかに少ないが，中世の記録からも民俗を取りだし，古代の記録からも民俗を読み取る努力がなされてきた．『古事記』，『日本書紀』，あるいは『風土記』の記述の中に民俗を発見することも行われてきた．

日本が豊かに文字を残す社会であることが，ややもすると特定の過去における民俗の発見を文字に限定することになったと言えよう．特定の過去に生産された民俗の記録と言えば，誰しもが文字による記録と思ってしまう状況が現出した．しかし，前節までに見てきたように，民俗を記録する方法は

文字だけでなく，図像，画像，映像，あるいは音響など多様な方法がある．当然，過去に偶然記録されたものにも，文字ばかりでなく，多様な形態があると推測して良いであろう．

明治以降であれば，少ないながらも写真という画像資料が作成され，残された．最初，写真は記念写真として写され，残された．次第にその量は増したが，畏まった記念写真を脱して，さまざまなスナップ写真が撮影され，残されるようになったのは近年のことと言わねばならない．時間をさかのぼれば，写真のような機械的に記録する方法は存在せず，人が自ら筆を執って生活を記録することのみが方法として存在した．日記や書簡，あるいは様々な随筆という文字資料に加えて，筆を執って描く図像が残された．図像の中心は絵画，絵図である．近世には大量の絵画，絵図が作成された．中世以前になると，その量は急激に少なくなり，絵師・画工の描く職業的絵画のみになってしまう．

民俗調査は現代の地域社会に赴き，地域で行われ，伝えられている民俗を聞き書や観察などによって把握する．そこには必然的に動く民俗を動態的に理解することが含まれる．変化であり，消滅であり，生成である．特定の過去において存在した民俗を，現代に生きる人間が把握しようとする場合，生身の人間がそのままで過去に戻って聞き書とか観察をすることはできない．現在に生きつつ，過去を間接的に把握することになる．その間接的に特定の過去の民俗を教えてくれるものが，先ずは文字で記録された資料であった．しかし，同様に図像資料や画像資料も間接的に民俗を教えてくれる．その資料群に分け入り，自己の問題意識にそって，民俗を選択し，抽出する．聞き書や観察は不可能であっても，それに相当する行為として資料群から民俗を導き出す．その場合，聞き書に相当するのが日記，随筆，地誌などから文字資料を取り出すことであり，観察に対応するのが各種図像資料，画像資料，時には映像資料を読み取り，民俗を引き出すことであろう．過去へのフィールドワークによっても，聞き書や観察に相当することを行い，資料を獲得し，記録化することが可能になるのである．

6　民俗資料としての図像

聞き書や観察の結果を文字で記録するのが，従来の基本的方法であり，そのことが疑われることはほとんどなかった．しかし，たとえば写真民俗誌や映像民俗誌が構想されるように，調査結果を文字以外の方法で記録することも考えて良い．そのことを過去に適用すれば，過去の時間の中で民俗を表現する文字ばかりに注意するのではなく，民俗を示す図像，画像，映像にも注目する．過去へのフィールドワークで，図像・画像・映像の発見を積極的に行わなければならない．ここでは，そのなかの図像について考察してきた．以下でも，過去に描かれ，民俗の資料として現代に登場してくる図像資料について整理しておこう．

［1］絵画　　文字以外で最も親しく接してきた表現形態が絵画であろう．日本では中世にも少なからずの絵画が描かれ，近世以降にはその総量は急激に増大した．もちろん，日本における鑑賞用の絵画は，職業的な絵師・画工が描くもので，中国の影響を大きく受けていた．その描き方は約束にしたがって描き，実際の事物や風景を写生するということは少なかった．中国の絵画と同じように，山水画や花鳥図が理念化された構図で描かれた．あるいは粉本に従っての描写が行われた．これは大和絵においても同様であった．

しかし，日本では，東アジアの他の諸地域に比較すると，はるかに，実際の風景を写生し，また

人々の行為を描き出すことが盛んになった．中世末・近世初頭に描かれた「洛中洛外図」や「江戸図」は，対象とした地域の様相を詳細に描くと共に，そこに行き交う人々，商いをする人々を生き生きと描いている．それらは，図幅それ自体が，特定の地域の特定の時間における民俗誌という側面をもっていると言える．また，近世中期以降に人々の日常で楽しむ材料となった浮世絵も，人々の生活を描いている．近代以降には，ヨーロッパの絵画技法が入り，写実的な動向も作ったが，また抽象的描写，イメージによる組み立てが盛んになった．生活を直接描いている絵画は必ずしも多くない．そうであっても，絵画によって，特定の過去の民俗を知ることができる．特に「洛中洛外図」のような広い範囲を対象に描いた絵画は，民俗世界を描いた民俗誌としての性格を持っている．

近代学校教育は，図画工作を科目として設定し，絵画を自ら描く教育を行った．図工の中では，写生が大きな意味を与えられた．対象を写実的に描く訓練がなされ，様々な機会に絵を描くようになった．近世にもすでに知識人たちが文人として登場し，絵を描くことを趣味とした．素人絵ともいうべき種類の絵画が日常的に制作され，それらの中には観察結果を描いたり，かつての体験を描いたりすることが行われた．

［2］挿絵　　近世の大きな特色は，書籍の出版が多くなったことである．多くの部数が印刷公刊された．庶民層が楽しんだ書物は，文章によって筋を立てているが，そこには必ずのように挿絵が挿入されていた．近世中期以降の各種の戯作文学は大量の挿絵を入れており，読者の興味をかき立てた．またなかば公然と出版されたと考えられる多くの春本も大量の春画を描き出した．このような挿絵を挿入した文学作品は近代にも受け継がれ，新聞小説はじめ多くの小説類において同様に挿絵が挿入されている．近世以降の日本では，出版物に絵画が入っていることは何ら不思議なことではなかった．そこから多くのことを情報として入手していたと思われる．

多くの文芸作品の挿絵は，挿入されたという意味では，文章が主体であり，あくまでもその文章を引き立てるための副次的，脇役的な存在であった．しかし，次第にその位置は対等なものに近づいていった．その様相を見せてくれたのが近世後期に次々に刊行された名所図会である．1780 年に刊行された『都名所図会』がベストセラーになったと言われるように，大いに歓迎された．その書名が示すように図会である．絵画と文章がほぼ対等な位置になっている．文章に対応した大量の挿絵が実際の観察結果として挿入され，その場所の具体的な姿や行事が示されている．読者は，挿絵を追いかけることで，特定の地域を旅した感じになると共に，また実際に訪れた際のガイドブックの役割を果たした．今日のビジュアル本である．名所図会の挿絵を現在の場所に持参して，そこの事物を比定しても，その具体的様相が容易に分かる．それほどに正確に写生をしていた．

挿絵はもちろん職業的な絵師が描くものであった．多くの著名な絵師が挿絵を描いており，日常的な収入源としては，出版物の挿絵を描くことが重要であったと思われる．名所図会では，現地へ足を運んでスケッチをして描く必要もあり，少数の絵師が担当したのでは不可能だったと思われ，実際に多くの絵師の競作となっている名所図会もある．

［3］絵日記　　各地の文人たちのなかには，絵を描くことを学んだ人も少なくない．しかし，その学び方は手本・粉本による学習であり，結果として描かれたものも大部分が山水画であり，花鳥図であったりする．地方文人の子孫の家に残された作品がそれを教えてくれる．しかし絵心を身につけた文人たちが旅に出ると，その絵心が旅のなかで発見した興味深い事物を写生することとなった．旅の過

程で日記を付けるということは古くから行われてきたが，その表現方式として絵を挿入したり，絵を中心にして言葉を添えるということが行われるようになった．旅日記であるが，絵日記としての性格を帯びたものが登場した．有名な菅江真澄の遊覧記は，このような旅日記である．行く先々で人々の生活を観察し，スケッチを描き，日記のなかに挿入している．あるいは，鈴木牧之の『秋山記行』も，信越国境地帯の秋山を訪れ，村々を訪れた際の日記であるが，やはり注目した事物を絵にして挿入している．旅という行為が感動を呼び，観察結果を絵にすることが行われたが，それが次第に日常生活に及んだと思われる．日々の生活を絵日記として書き残すようになった．特に近代の学校教育が絵を描くことを教育課程として組み込んだ結果，子どもの段階から絵に親しむようになった．そして自ら絵を描くことが行われた．

［4］絵図　　近世の村方文書のなかに多くの絵図が残されている．多くが自村の概況を地図として描いたものである．領主の交替に際して提出したもの，幕府の巡見使を迎える際に準備したもの，あるいは紛争に際して論所を描いたものなど，その作成の目的は多様である．それはもちろん実測図ではない．概念図というべきものであるが，それだけに人々が自分たちの生活空間をどのように認識していたか知ることができる．そこでは，近代のような記号化は行われず，実際の事物をイメージできるような形で描くことが多い．家屋，寺院，神社，高札場，堰，橋などいずれも実際の姿をイメージできるように描いている．また多くの街道絵図が作成された（山本光正 2006）．このような絵図は，近代になると急速に作成されなくなり，実測図に取って代わられる．自分たちが描いた絵図ではなく，外から与えられた実測による地図になる．各種の地図が作成され，それらを必要に応じて利用するようになるが，その徹底した記号化は，地図を見る人に生活世界の具体的なイメージを与えることがなくなってしまった．絵図から地図への変化は，空間認識においては後退をもたらした可能性が大きい．

以上のように，近世に始まり，近代，そして現代まで，日本では多くの図像が作成され，人々は日常的に親しんできた．そこには，山水や花鳥のような定型的な絵も多いが，しかし同時に風景や生活を写生したものも少なくない．これらの図像生産，そしてその資料の残存は，恐らく世界的に見ても，日本が最も豊富な地域であろう．同じ東アジアであっても，中国や朝鮮半島においてこのような図像資料を見ることはほとんどできない．日本の歴史研究，民俗研究がこれを活用しないということは大きな損失である．

すでに述べたように，現在の民俗調査が聞き書だけでなく，観察を行い，民俗を記録する．過去への民俗調査は，文字資料から民俗を発見する．過去での聞き書と言って良いであろう．それに対して，過去での観察が図像資料の活用ということになる．図像，画像，映像を観察して，そこから有効なデータを取り出し，民俗として記録する．日本の近世以降は，図像資料が大量に生産され，また今日に残されている．その図像の森に分け入り，観察して民俗を発見する．今までは余り試みられてこなかった方法である．たまたま発見した民俗の図像を，挿絵として挿入することはあっても，研究資料として活用する努力はほとんどなされなかった．民俗学の世界で唯一試みられた図像資料活用のための工夫と努力は，日本常民文化研究所が行った『絵巻物による日本常民生活絵引』全 5 巻の編纂であった（渋沢敬三 1965〜1968）．

7　民俗学も図像資料を

本稿では，図像資料と民俗学の関係について，二つのことがらを述べてきた．

一つは，民俗学は，民俗調査および研究の過程において積極的に図像を生産し，図像を活用すべきことを述べた．現代日本の民俗学は行為の民俗学という基本的性格を持ち，フィールドワークという民俗調査を前提にして組み立てられている．そのフィールドワークにおいては，聞き書が重要な方法であるが，それに加えて観察をもっと重視しなければならないということを述べ，聞き書と観察を基本とする民俗学を主張した．そして，その調査過程において文字による記録だけでなく，図像を積極的に生産しなければならないことを述べ，民俗の資料化には，文字化に加えて，図像化，画像化，映像化が採用され，多様な方法で記録される必要があり，またそれらによって研究されなければならないことを主張した．

そして二つ目には，民俗学が過去の民俗を把握することは，民俗を記述した文字資料のみを対象にするのではなく，過去に制作された図像資料，画像資料などを積極的に活用すべきことを述べた．民俗学は現代から歴史を認識する学問であるが，同時に過去に向かってもフィールドワークをすることが必要であり，特定の過去に存在した民俗を把握して，それをも研究対象にすることで，より豊かな歴史像が形成できることを指摘した．そして近世においては絵画，絵図などの図像資料を，そして近代以降であれば画像資料，さらには映像資料を対象にして民俗の発見と記録をするべきことを主張した．たとえて言えば，民俗調査における観察に相当する行為が，図像資料，画像資料などにおける民俗の発見行為である．民俗調査において，聞き書だけでなく，観察を積極的に行うことに対応して，特定の過去の民俗を把握するために図像資料，画像資料に対する観察が不可欠と言える．

そして，本稿で果たせなかった問題点を掲げておこう．それは図像資料，画像資料，映像資料による民俗学研究法の開拓である．聞き書結果としての文字記録だけでなく，図像資料，画像資料での民俗の資料化は述べたが，それらによって如何に研究するかについて検討することができていない．図像資料から民俗を読み取るという言葉を述べただけでは研究法にはならない．図像資料，画像資料を分析する方法，そして分析結果としての解答・主張を画像，図像で提示していく方法が考えられなければならない．資料化と研究成果の中間に位置する民俗誌について，写真民俗誌，映像民俗誌の可能性を提示したが，写真民俗誌，映像民俗誌とは如何に制作すべきなのか，それらの内容を議論する方法，旧来からの文字による研究とどのように関連づけるのかなどは検討していない．図像資料を民俗の研究資料として解析する方法を検討することが果たせて，はじめて図像資料が研究書の挿絵の段階から研究の中核的な位置へと上ることができる．そして，旧来からの文字化された民俗資料と図像としての民俗資料を，統合，融合して研究をする方法を確立することに向かわねばならないであろう．

民俗学にとって図像資料による研究は今後の大きな課題である．

参考文献

朝岡康二編
　2004『民俗学的画像に関する基礎的研究』（国立歴史民俗博物館研究報告 117）
大森康宏編
　2003『マルチメディアによる民族学』（国立民族学博物館調査報告 35）
小川直之
　2004「画像資料と民俗学」『人文科学と画像資料研究』（國學院大学学術フロンティア事業研究報告）1
小川直之
　2007「民俗芸術写真と民俗研究」『折口博士記念古代研究所紀要』10
小川直之
　2008「画像資料研究の課題」『國學院大学日本文化研究所紀要』100
折口信夫
　1921「沖縄採訪手帖」（『折口信夫全集』16，中央公論社，1976）
折口信夫
　1923「沖縄採訪記」（『折口信夫全集』16，中央公論社，1976）
香月洋一郎
　2007「風景としての情報」『手段としての写真』（神奈川大学 21 世紀 COE プログラム調査研究報告 4）
香月洋一郎
　2007「『澁澤写真』の活用に向けての一試行」『「景観」と「環境」についての覚書』（神奈川大学 21 世紀 COE プログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」研究成果報告書）
川森博司
　2005『遠野民俗誌 94／95』（研究映像）国立歴史民俗博物館
北村皆雄・新井一寛・川瀬慈編著
　2006『見る，撮る，魅せるアジア・アフリカ―映像人類学の新地平』新宿書房
倉石忠彦
　2004「画像資料と民俗誌」『人文科学と画像資料研究』（國學院大学学術フロンティア事業研究報告）1
黒田日出男
　2007『増補絵画史料で歴史を読む』（ちくま学芸文庫）筑摩書房
篠原徹
　1993『黒島民俗誌』（研究映像）国立歴史民俗博物館
渋沢敬三編
　1965 ～ 68『絵巻物による日本常民生活絵引』角川書店（神奈川大学日本常民文化研究所編『新版絵巻物による日本常民生活絵引』平凡社，1984）
福田アジオ
　1994『景観の民俗誌』（研究映像）国立歴史民俗博物館
福田アジオ
　2004「図像資料としての素人絵―生活絵引き編さん資料としての可能性―」『年報人類文化研究のための非文字資料の体系化』2
福田アジオ編
　2006『松原の民俗―長野県南佐久郡小海町松原―』第一部写真民俗誌，（神奈川大学歴民調査報告 3）神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科
矢野敬一
　2005『写真家・熊谷元一とメディアの時代』青弓社
柳田国男
　1934『民間伝承論』（『柳田国男全集』8，筑摩書房，1998）
山中笑
　1902 ～ 1903「甲斐の落葉」『東京人類学会雑誌』199 ～ 210（『甲斐の落葉』郷土研究社，1926）
山中速人編

2002『マルチメディアでフィールドワーク』有斐閣
山本光正
2006『街道絵図の成立と展開』臨川書店

研究ノート

日系チャプスイレストランにおけるフォーチュンクッキーの受容

中　町　泰　子
NAKAMACHI Yasuko

はじめに

フォーチュンクッキーは，アメリカ全域の多くの中華料理店において，食後のサービスに出されている占い紙片入りのクッキーである．アメリカ人客の大半は，それが中国の伝統的な食習慣に由来し，中華料理に欠かせない菓子と認識している．しかし，実際のところ，これは，戦前にサンフランシスコへ移住した日本人が，煎餅菓子の一つ（辻占煎餅）として製造を始めたものであった(1)．

アメリカでは近年になってフォーチュンクッキーの起源と受容，日本人移民による初期製造の事例を主題とした論考，ルポルタージュが相次いで発表されている．その一人である，フィッツアーマン・ブルーの先行研究に拠れば，現在アメリカ全域で行われているフォーチュンクッキーサービスの端緒は，第二次世界大戦直後のチャプスイレストラン（「チャプスイ」という料理を看板にする中華料理店）にあると説明される．1945年，サンフランシスコの海軍基地に帰還したアメリカ人兵士達は，それぞれの郷里に戻る前に街に繰り出した．彼らは中国人が経営するチャプスイレストランで食事をし，サービスで出されたフォーチュンクッキーを初めて楽しんだ．当時，中華街の内外には300を超える中華料理店があり，その大半でクッキーを出した．すっかりそのクッキーを気に入った兵士達は，帰郷後に地元の中華料理店で「本物の中国のクッキー」を次々に注文し，それが次第にカリフォルニア全体へのクッキーサービスに発展したとされる(2)．

このエピソードは，中国人経営のチャプスイレストランが，1945年には独自にフォーチュンクッキーサービスを導入しており，彼らがサービスを広く根付かせた根拠として提示されるのだが，この点，再考の余地がある．なぜなら，カリフォルニアに流行した，日本人経営の100を超えるチャプスイレストランで，戦前には既にフォーチュンクッキーが流通していた経緯が認められるからである．

本稿では，フォーチュンクッキーだけに焦点を絞るのではなく，むしろその受容の受け皿となったチャプスイレストランという舞台に注目し，そこでの日本人移民の飲食をめぐる楽しみのあり方を理解することを目的にしたい．チャプスイレストランとは，アメリカで流行した中華料理店の一様式であるが，日本人が経営することにより，一部の店舗は独特の発展を遂げた．そこは，空腹を満たす場であるだけでなく，社交，娯楽の場でもあり，日本的な文化とアメリカ，中国文化が出会う多文化空間であった．非文字資料研究の観点より，写真，図像を重要な資料として，そこがどのような場であったのかを明らかにしたい．

Ⅰ　小東京（リトルとうきょう）

かつて繁栄したチャプスイレストランが存在し，筆者が2007年11月に訪れ，主な調査対象とした地域は，カリフォルニア州ロサンゼルス市内に現存する小東京という名の日本人町である．まずはこの町の沿革を述べたい．

ロサンゼルスに日本人が住み始めたのは19世紀末であり，市内に日本人の定住が公的に認められたのは1888年のことである．1900年にはロサンゼルス市の総人口が十万人を超え，職を求めた日本人が150名流入した．移住初期の日本人は，まずチャイナタウン近辺に居住し，それからダウンタウン全体に広がった．

1890年頃までの在米日本人の歴史は，専らサンフランシスコが中心であった．ところが，1906年にサンフランシスコで大地震が発生した以降は逆転する．サンフランシスコの日本人は，地震後の混乱に不安を覚え，ロサンゼルスの日本人社会を頼って大挙して移動してきた．ロサンゼルスはそれまで，さほど排日ではなかったのだが，1907年に，急激な日本人の増加に反応したローカル紙が日本脅威論を唱え，これを契機に排日都市に転じる．サンフランシスコからの移住者は，既に排日の空気にさらされた経験があるため寄り添う傾向が強く，ロサンゼルスでも集団で居住し身を守る必要から，彼らは将来の小東京の地（ロサンゼルス街とアラメダ街間の一街北側）に集住した．そのため「1907年を小東京誕生元年と言ってよい」との見方がある（五明　2008：125）．1908年初頭，それまでユダヤ系で占められていた町の半数の住人が日本人になり，日本人店舗も増加したため，この町にはLittle　Tokioという名が付けられた．同年のロサンゼルスタイムス紙上に，この名称は頻繁に登場している．Tokioの表記は1921年にヘボン式でTokyoと改められた．(3)

その後もロサンゼルスに住む日本人は増加し，1930年代には二万人を超え，6000人台のサンフランシスコ人口をはるかに凌いだ．小東京は米国最大の日本人町となったのである．1940年には，ロサンゼルス市内日本人人口は3万8千人となるが，小東京の発展は，戦争のために中断する．1941年の12月に真珠湾攻撃が行われると，翌42年には，アメリカ，カナダ在住の日本人の強制収容が始まり，アメリカ西海岸に居住していた約12万人の日系人は，強制立ち退き，収容を余儀なくされた．戦時中に日本人不在となった町には，5000人の黒人が入居し，ジャズの流れる「ブロンズビル」へと様変わりした．終戦で収容所から小東京に戻ってきた日系人は，困難の中から復興し，町は急速に日本人の町に戻っていったが，以前同様の勢いが戻ることはなかった．それには，戦前の小東京の繁栄を支えた農業関係者が土地を失い，漁業関係者に対しては，戦中に日本人漁業禁止法ができるなど，生業の基盤を奪われたからとの指摘がある．(4)現在の小東京には韓国人店主の出店が増加し，開発も進むが，開発業者が日系人ではないので，日本文化の香りが薄れているという危惧が持たれている．

Ⅱ　移住の足がかりとしての飲食店経営

1　都市開拓者達の選択

都市にやってきた日本人は，移民初期時代より，飲食店経営に着手するものが目立った．大きな資本や熟練を要さなくとも，開業できたという要因が背景にあったらしい．「南加州に於ける日本人商業の歴史は，他の農業や漁業よりも余程古い．それは対外人のものと対日本人のものに大別されるが，農園，鉄道，家庭労働者として移住した日本人の集まるところ，自ら日本人商店が生まれ，また外人社会に対しては洋食店，美術店など，農業の如く余り大きな資本，経験を必要とせず容易に着手することが出来，また失敗の危険度も少なかつた為であつた．」（『南加州日本人七十年史』1960）

1870年に渡米した赤羽忠左ェ門はサンフランシスコにやってきて，白人家庭に就労の後，1882年，同市スタクストン街に料理屋兼宿屋を始めた．1884年頃のロサンゼルスには24，5名の日本人が在留し，家内労働や洋食店，バーで労働をしていた．1888年には，ロサンゼルス市の住所録に，初めて日本人経営が明らかな亀食堂，唐沢食堂が登場する．亀食堂の店主はサンフランシスコ港に寄港した日本船から脱船したコック重田浜之助と言われているがその証拠はない．メニューは玉ネギ，ポテト，ベーコンを煮た団子汁のようなもので値段は八セントから十セントであった．(5)1886年，山梨県出身の萩原眞が渡米し，サンフランシスコに大和屋という名の料理店を出した．1891年6月，ロサンゼルスに日本人が「コーカー・デイリー」という15セント均一の洋食店を始めた．1893年には，長崎出身の木村省太郎が「見晴亭」という日本料理屋を開業する．1894年にはいわゆる「10セントミール」の元祖となる，一食すべて10セント均一の料理を看板にした小洋食店が，ロサンゼルスの商店街外れにオープンした．店主は奥平洋三であり，これが当たって日本人，アメリカ人の同業者間に10セントミール店の大流行を巻き起こした．

1880―1890年代とは，ロサンゼルスの日本人にとって，飲食店経営という生業で道を切り開く時代であった．この時代を“restaurant　era”と称する研究者もいる．(6)この時代の客は主にアメリカ人を対象とした．安い食堂の客には労働者も多く，洋食店は日本人店主と日本人従業員を除いては，全くアメリカ的であり，洋風の料理を出した．例えば，猪瀬伊之助の「サンライズ食堂」，ムタヒデオ経営の「ミカド食堂」は1898年に広告を出しているが，それを見ると，サンライズ食堂ではディナーにプディングやフルーツのシロップ煮をデザートとして無料でサービスし，ミカド食堂では10セントミールにワインとアイスクリームを添え，パイやプディングを毎日サービス，チキンやターキーがメインのディナーを提供するという具合で，和食とは程遠いメニューがうかがえる．この時代には飲食店経営の他，竹細工店やアメリカ人富裕層を狙った日本の美術，骨董品を扱う商店があったが，成功した飲食店はそうした店を凌ぐ利益を得た．

2　日系移民の増加と飲食店

南カリフォルニアの日本人商業界は，1890年から1910年の初期頃より，第一次世界大戦を経て1930年前後までロサンゼルス市を中心に発展期を見る．ロサンゼルスには1906年のサンフランシスコ大地震以来，日本人人口が増加し続ける．ひとつ注意すべき点として，日系移民の人口統計を当時の史料から参照するには正確な数字の把握が難しいことを断っておかねばならない．それぞれの調査機関により，数字に相違があるのだ．その理由を，『南加州と鹿児島県人』（1920）では次のように述べている．「南加に於ける日本人の人口を正確に調査する事は，頗る至難の事である．何となれば其大部分は各々働口を求めて各地に移動し，必しも一定の場所に定着する事がないからである．昨年南加各地の日本人會に於いて，執行せる在留民登録によれば，ロスアンゼルス市を中心として南加八郡に散在する，在留日本人の総数は三萬をこへて居る．」（古川1920：12）流動層があるため，調査が困難だったという背景があるらしい．こうした状況を踏まえつつ，本稿では，概数としての人口統計を参照していきたい．

表1「都市居住日本人数比較表」

都市名	1900年	1910年	1920年	1930年
サンフランシスコ	1,781人	4,518人	5,385人	6,250人
ロサンゼルス	150人	4,238人	11,619人	21,081人

米国国勢調査をもとに南加州日本人七十年史刊行委員会が作成した「加州内主要都市居住日本人数年代比較表」より上記都市を抽出し作成．

「加州内主要都市居住日本人数年代比較表」（『南加州日本人七十年史』）から，ロサンゼルスとサンフランシスコの二都市の人口を抽出し，表を作成してみた．人口の比重がサンフランシスコからロサンゼルスに移っていくことがわかる．ロサンゼルスは1900年にはわずか150人であったが，震災後の1910年には4,238人と急激な増加をしている．1920年には11,619人，30年には21,081人と増加の一途を辿った（表1）．

日本人人口の増加に伴い，対日本人向けの店舗が増え，職業の種類は細分化し増えていった．初期日本人移民がアメリカ人の嗜好に合わせた洋食店や美術品店などを経営し，マイノリティーとしての立場から，なんとか生活の基盤を築いていったのに比べ，日本人が集住し，彼ら同士で協力し合える土地に成長した町では，その先の豊かさを求める方向性が表れていたと思われる．それは日本人の嗜好や必要性に合わせた様々な商品やサービスを扱う商店や施設ができていったことからうかがえる．『羅府の日系人The　Japanese　of　Los　Angeles』（1969）によれば，1906年2月の職種一覧表では，ホテルはまだなく，受け入れる日本人を宿泊させる施設は25軒の下宿屋しか見当たらないが，サンフランシスコ大震災後の1908年には様子が一変し，下宿屋は16軒，ホテルが64軒，貸し部屋業は30軒へと急増している．湯屋の数も二倍以上に増え，床屋や靴修繕業など細かなニーズに応える職種が現れている．1915年にはホテルは105軒になる．職種は更に細分化し，米屋，味噌屋，酒造業，助産婦，写真家も登場し，個人医院ではなく，病院と診療所ができている．町はますます成長していることがわかる（表2）．

以下，表2を参照し，改めて飲食店に注目してみたい．1906年，日本料理店は32軒，洋食店は22軒，1908年には，日本料理店が34軒，洋食店は27軒である．日本料理店の優勢は，“restaurant　era”からひと段落し，日本人向けの食事を出す店が増えたという

表2「ロサンゼルスの日本人職種一覧」

職種	1906年	1908年	1915年
美術商	13		
美術雑貨商		16	4
和洋雑貨店			8
竹家具店	5		
竹細工店		2	
製造業		2	13
鍛冶屋			2
洋服仕立て屋	4	16	
洋服屋			25
造園業	10		
ホテル		64	105
下宿屋	25	16	35
貸し部屋業		30	
本屋	5		4
雑誌店		5	5
新聞雑誌店	3		
新聞業者		5	7
食料雑貨店	10	40	
雑貨店		4	
よろず屋		21	
文具店		4	
医師	3	2	
歯科医師		2	3
助産婦			9
薬局		3	4
病院・診療所			7
魚屋	25	5	4
肉屋			1
野菜市場			35
豆腐屋		6	2
菓子屋		6	5
米屋			2
味噌屋			2
食品加工業			35
日本料理店	32	34	13
洋食店	22	27	36
飲み屋		30	35
酒屋		4	5
酒造業			1
宝石店	20		
花屋		20	3
印刷業	3	2	3
写真館		6	
写真家		0	10
銀行	2	2	
湯屋	11	25	26
床屋		47	65
桂庵	27	7	
通訳業	8		
玉突き場	20	36	45
射的場	3		
アーチェリー			1
クリーニング業	4	9	10
ハウスクリーニング業		21	78
タバコ屋	5		
鉄道関係業	3		
時計製造業		5	
時計修理業	3		6
靴修繕		17	
靴製造業		0	13
バイリンガルの学校	7	7	
日本人学校		2	
貿易業	7	12	14
有限会社		2	11
雑業	7		

※『羅府の日系人』(1969) より Appeddix I, II, vi を基に作成.

ことではないだろうか．1908年には飲み屋が初めて30軒登場している．人々に，食事をするだけでなく，店で飲酒して楽しむ余裕が出てきたと見える．ところが，1915年になると変化があり，洋食店が36軒，日本料理店は13軒へと減少してしまう．娯楽の場，飲み屋は35軒に増えている．もちろん移住地では，日本人移民の生活にアメリカの食材，調理法が取り入れられ，次第に食生活がアメリカ文化の影響を受けていくのだろうが，この時点で日本人の食嗜好がアメリカナイズし，和食の人気がなくなったと判断するのは早計であるようだ．1917年に調査がなされた別資料，「羅府日本人商業及び雑業種別表」(『南加州と鹿児島県人』) を見ると，「営業種別」，「軒数」，「従業人員」，「一ヶ年売上又は収入高」の項目があり，洋食店は35軒で従業員数は121名，日本料理店は17軒で従業員数は132名である．つまり，少ない日本料理店のほうが雇用している従業員数が多いのである．また，売上も日本料理店のほうが収益を上げており，洋食店は273,500ドルであるのに比べ，日本料理店では330,000ドルと56,500ドル多いのである．上記の表から個々の店の詳細を読み取ることはできないが，軒数が多いのに従業員が少ない洋食店の内容は，おそらく，多くが10セントミールを代表とするような安価な洋食を提供する簡易な「食堂」であり，その反対に日本料理店は，従業員を多く抱え，それなりのサービスと料理を提供する店であったのではないかと推測される．日本料理店の利用には，贅沢をする，少し特別なこと，という付加価値が伴っていた可能性がある．日本料理店の要素を取り込み，大人数客を迎えることの可能な宴会場を備えた，一部豪華チャプスイレストランの土壌は，ここに整えられつつあったのかもしれない．

Ⅲ　チャプスイレストランの成立と発展

1　中国系チャプスイレストラン

チャプスイとは，アメリカでアレンジされた「アメリカ風中華料理」の一つである．豚肉や鶏肉，あるいはハムなどの肉類と玉ねぎ，シイタケ，もやしなどの野菜類を炒め，スープを加えて煮たのちに，片栗粉でとろみをつける．そのまま食べることもあるが，麺や白飯にかけたりするのも一般的である．

起源には諸説があり真偽のほどは定かでないが，そのひとつは，初期中国系移民の出身地である山東省の泰山で作られていた料理を原型にすると伝え，別説では19世紀に大陸横断鉄道工事に従事した中国人労働者のコックが，この料理を発明したと説明する．また広く信じられているのは，李鴻章がこの料理誕生に関わったとする説である．当説では，清朝末期の政治家，李鴻章（1823―1901年）が，1896年に大使としてニューヨークを訪れ，そこに連れてきたコックが発明したことになっている．李鴻章は滞在中，用意された豪華な西洋料理が口に合わず，自らが連れてきたコックの料理だけを食べた．8月29日，ニューヨークに滞在中の李鴻章は，自らが主催する宴に訪れたアメリカ人客をもてなすため，コックに料理を作らせた．コックは，セロリにもやし，肉をおいしいソースでからめた料理を出し，アメリカ人と中国人双方を満足させた．それがチャプスイの始まりとなったという．このような上流の人々に供した起源説を持つ一方，チャプスイは別名レフトオーバー（残り物）やごちゃまぜ料理とも呼ばれる．それは，くず野菜，肉の切れ端など何でも刻んで調理すればできあがる，手軽で腹持ちのする料理だからである．

李鴻章にまつわる新しい料理に関心を持ったアメリカ人は，1896年以降に初めて中華料理店という場所に足を運び始め，チャプスイの流行はニューヨークからサンフランシスコにまで広がった(7)．この説を根拠にすると中国人経営のチャプスイレストランは1896年以降開業ということになる．チャプスイレストランの外観を，ロサンゼルス公立図書館が所蔵する写真資料で見ると，町中のアパートの二階にある簡易食堂風の店もあるが，大規模で豪華な中華風建築の店もある．1938年に撮影された大型店舗，“Tuey Far Low”は，不夜城のようにイルミネーションを輝かせ，その繁盛ぶりをうかがわせる(8)．

中国系チャプスイレストランの繁栄ぶりを目にし，ぜひ自分でも，と銀座に中華料理店を開いた日本人がいる．銀座アスターの創業者である矢谷彦七（1888―1967）は，20歳の時に東洋汽船株式会社に勤務し，貨物船の事務長として二年間アメリカ丸（横浜―ハワイ・サンフランシスコ航路）に乗りアメリカを見聞した．その後会社を辞め，バター会社を興した後，昭和元年（1926）銀座一丁目に，高級広東料理の店「銀座アスター」をオープンさせた．開業当時の「銀座アスター」は，チャプスイを洋風にナイフとフォークで食べさせるハイカラな店だった．矢谷は，サンフランシスコで食べたことのあるアメリカのチャプスイが，銀座にふさわしいハイカラな料理と考え，これを看板メニューに据えた．店の入口の硝子戸には「アメリカン・チャプスイ・ハウス・レストラン」と書き，一階はアメリカンムードの内装にしたが，二階は座敷にして宴会用のコース料理を出した．開店を知らせるチラシは矢谷自身がデザインし，チラシ中央には，中国服を着た給仕人がお茶を運ぶイラストがあり，下にはチャップスイー（料理），ヌードルス（そば料理），チャウメン（焼麺料理）の文字がある．コピーはさらに以下のように続いた．「米国其儘を日本で　初めての試み　米国式中華料理　十一月一日開店」「嘗て渡米せられし方には特に御思出深き……」「料理人は特に米国より中華人揚阿財一行を招きました」「階下給仕人は可憐の少女が接待！　チップ厳禁」「階上は素人娘が家庭的に御接待！」(野口・井上 2002：37―38)

矢谷の渡米時期は1908年～1909年頃であり，1910年代後半の日系チャプスイレストラン登場までは10年ほど早いため，彼が目にした成功しているチャプスイレストランとは，中国人経営の店であったと判断できる．銀座アスターは，チャプスイをナイフとフォークで食べさせるという，「ハイカラ」な作法で料理を提供したが，それはサンフランシスコのアメリカ人客がそのように食べていたのを模倣したためであろう．ナイフとフォークのチャプスイを除けば，当時の銀座アスターは，料理は中華を出すが，座敷でのサービスは日本風という店だったようだ．

2　日系チャプスイレストラン

日本人によるチャプスイレストランの開業は，1917年前後のことである．ここで，当時の日本人社会で成功した人物を集めて記載する「人物大観」を主な資料に，ロサンゼルスで初期チャプスイレストラン事業を開始した経営者達を紹介したい．

○小野栄亀

「熱心なる弓道研究家　チャプスイ業の元祖」

山形県出身者であり，1903年に渡米し，サンフランシスコの大和商会で三年働き，ロサンゼルスに来て美術雑貨商を経営する．次いでロサンゼルスの大和商会に入り1915年に一時帰国し，日本で伴侶を得た上で再渡米する．そして1917年にロサンゼルスにドラゴン・チャプスイ店を廣瀬眞平と共同の下に開業した．「之れ南加に於ける白人相手のチャプスイ業の嚆矢である．彼曾てシカゴ在住の際，同地に於ける支那人経営の様子を見事業の有望なるに着眼せる結果に基くそうである．爾後彼は廣瀬と分離して親戚関係ある古屋弘と共同の下に，ドラゴン・チャプス（ママ）を持続して今日に及ぶ．」（『第十冊：加州人物大観　南加之巻』）

小野もまた，「銀座アスター」経営者の矢谷同様，中国人が経営するチャプスイレストランの繁盛ぶりを見て，経営を思い立った．ドラゴン・チャプスイは随分人気の出た大型店舗だったが，開店当初の顧客は，「白人相手のチャプスイ業の嚆矢」という箇所から，白人であったことがわかる．

○長谷川久重

「幸運なるチャプスイ・キング」

長谷川久重は山梨県出身で1901年に渡米した．サンフランシスコで美術雑貨店を開業した後，ロサンゼルスに移り，1917年よりチャプスイ店を開業した．「目下羅府市の第八街でブロードウェーとスプリング街間の目抜の場所に於いて蝶々チャプスイ店を経営し，同業者のキングと称せらるる程事業も盛ん」，「近日支那料理の白眉として日支白人間に賞美されつつあるチャウメンを，圓く輪形にしてキープし得る様に成れるは，実に彼の創案に基くもので，タイムをセーヴする必要に迫られた事が彼をして発案の動機たらしめた．」とある（『第十冊：加州人物大観　南加之巻』）．

ここではチャウメンをチャプスイの原型とし，「圓く輪形にしてキープし得る様に成れる」という記述は，型にでも入れて，あんかけを丸く整えたということなのかもしれない．「蝶々チャプスイ」は，「ドラゴン・チャプスイ」と同年の開業である．

○廣瀬眞平

「チャプスイの元祖」

明治18年生まれ，山梨県出身で1902年に渡米し，ロサンゼルスにやってきて「未だ邦人間で営業した事のないチャプスイ店を開業」した．「当時非常な繁盛を来した結果更に数万弗を投じて蝶々チャプスイ又はドラゴンの如き大規模の店舗を新設して大活動したのである．」その後サンタモニカに移りチャプスイ店を開業する（『在米甲州人奮闘五十年史』）．

1917年，ロサンゼルスにドラゴン・チャプスイ店を小野栄亀と共同経営でスタートさせた．長谷川久重とも共に蝶々チャプスイ店を経営した．上記引用文から推察すると，年代は不明だが，廣瀬は蝶々，ドラゴン以前に，それより小さなチャプスイレストランを経営しており，それが非常に繁盛した結果，さらなる投資をして新店舗を開業したといえる．そうなると，元祖と呼べるのは小野栄亀ではなく，廣瀬眞平である．

○天野義雄

1903年に渡米，サンフランシスコに上陸後，ホテル，洗濯所，美術店の経営など様々な事業を手掛けた後，1919年にロサンゼルスに転居した．同年廣瀬眞平と共同で第一蝶々チャプスイ店を経営，翌20年は第二の蝶々チャプスイ店を野澤，長谷川と共同経営する．その後もホテル業，薬販売，ゲーム店経営と職業を転々とする．34年当時はゲーム店支配人である（『在米甲州人奮闘五十年史』）．

チャプスイレストランの先駆けである，「蝶々」，「ドラゴン」は，共同で経営され，大規模店舗を構えて成功した．経営者の一人，小野栄亀は山形出身であったが，「元祖」である山梨出身の廣瀬眞平が同郷の者に呼びかけたのだろうか，他は同県出身の者が共同経営者となっている．チャプスイレストランで成功した彼らは，それまで飲食店を専門に仕事をしてきたわけではなく，むしろ機を見るに敏であったために，チャプスイレストラン経営に乗り出した人々といえそうである．大規模な中華料理店は，その少し前から現れており，それは，簡易食堂経営の段階から，豪華レストラン経営の段階へと，経済的な豊かさを背景に，日本人事業家が歩を進めた時代に入ったことを意味すると考えられる．

ロサンゼルスの日系新聞『羅府新報』大正3年（1914）7月1日広告欄に，大型中華料理店の開店広告があるので引用したい．

支那料理店開業
東一街三三九（石光商店二階）
室内器具清潔材料精選料理好妙　日光樓
▲四百人迄パーティーを引受申候
今般前記の通り高等支那料理店開業仕候に就ては特に桑港より一等の料理人を雇入れ材料の精選料理の巧妙を以て本とし万事に清潔を旨とし大勉強にて開業仕候に付き何卒弊樓同様御愛顧御引立の程奉希候
日照樓主人　敬白

日光樓は，日照樓の姉妹店として開業した．開店広告にチャプスイの文字はないが，後にチャプスイ店の仲間入りをしている．1940年刊行の住所録『加毎年鑑』には，日光樓の記載が創業時と同住所で見えるが日照樓の記載は無い．中国人経営のチャプスイ店に続き，日本人経営のそれも好評を博したが，同業者が増えたため，次第に競争が激しくなりなくなってしまったのかもしれない．『全米日系人住所録』（1959）の広告では，当時の日光樓は舞台を備えていることを謳っている．

同業日本人の間にはチャプスイ組合も創立された．沖縄県出身の大城仲助は，明治24年の生まれであり，1909年にハワイに渡米したが，1924年にロサンゼルスに移住してくると，チャプスイ店を始めた．1926年にはカリフォルニア州の南，ロングビーチ市に移住し，そこで「パピイチャプスイ」を開業した．1931年には，同業者の増加を見て必要性を感じ，チャプスイ組合を創立して以後幹事を務めた．ロングビーチの組合員のチャプスイ店は，他に，1927年創業の「ダルマチャプスイ」，1937年創業の「ラッキーチャプスイ」などがある．

1930年代には日系人社会にチャプスイレストランがすっかり定着していた．「支那料理店」が「チャプスイレストラン」と同義になっている．34年の資料『在米甲州人奮闘五十年史』には，日本人が従事する商売のうち，最も多い商売の一つに挙げられている．「其当初に於ける日本人の商売は日本人のみを顧客本位として営業するものが十中の八九までであったが，近来日本人専属の商売は其の数を減じて異人種間に進出したものが多い，そして日本人が従事する商売の中で最も多いものを挙ぐれば，美術雑貨，日米食料品，洋食店，白人専門グロセリー，野菜果物店，チャプスイ（支那料理）（後略）」とある（旧字は常用漢字に改めた）．

3　高等支那料理店

成功したチャプスイ店のうち，大広間や宴会場，舞台などを持つ大規模店は，「高等支那料理」店を名乗った．中でも「三光樓」，「遠東樓」などは名の知れた大型店舗である．「三光樓」は日系人向けの刊行物に広告を出し，例えば『在米広島県人史』（1929）には「米国の名所の一に数えられる，ロスアンゼルス市の日本人町，『小東京』は東一街とサンピドロ街の十字街が中心……その中心にあって有名評判の料理店は……高等支那御料理　三光樓」，『全米日系人住所録』（1959）には「四百五十人までの大宴会場　大小宴会及び御家族連れは── 皆様の三光樓　味とサービス本位」などと宣伝した．写真より，店舗は一階がテーブル席であることがわかる．階上には宴会のできる大広間があったといい，三階建てのホテルのような立派なビルである．（写真1，2）

「遠東樓」は，創業年不詳だが，現在まで三階建て

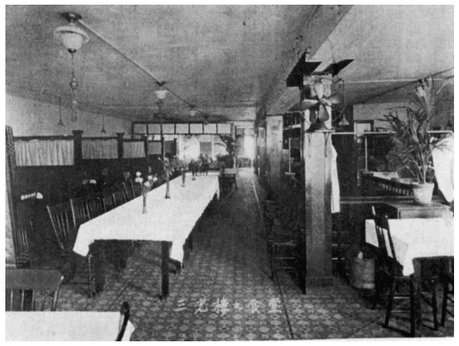


写真1「チャプスイレストラン「三光樓」一階」（『在米広島県人史』1929より転載）

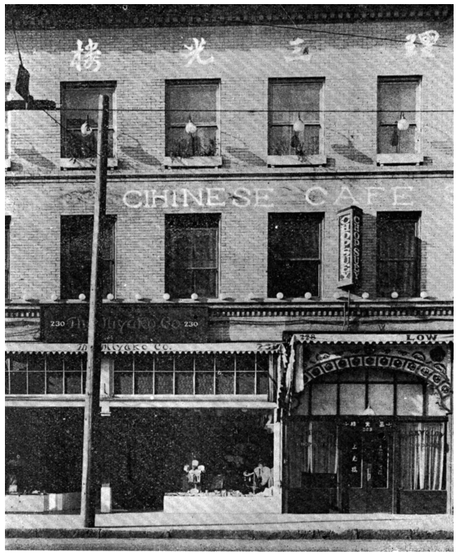


写真２「三光樓外観」(『Directory of Japanese in Southern California』1922 より転載)

の店舗ビルが残り，チャプスイレストランとして小東京で営業がなされている唯一の店である．遠東樓は，1940，49，59 年の住所録に記載があり，59 年の広告には「二階で百人迄の宴会」が出来，夜 12 時まで開店し，会席料理を出すと謳っている．同店は 1994 年のノースリッジ地震をきっかけに閉鎖されたが，日系人の間には，ここを歴史的建造物として保存，再開発を進めたいという意向があり，2006 年に，日系三世を始めとする三人の実業家の手によって営業が再開された．正式名称は「チャプスイ・カフェ・アンド・ラウンジ」だが，ネオン看板には「ファー・イースト」とかつての名称が輝いている．店内は一階のみの営業であるが，チャプスイを含めた手頃な中華料理や洋食をサービスする立ち寄りやすい店である．筆者もこの店舗を訪れ，チャプスイを注文してみたところ，食べきれないほどのボリュームがあり，食後にはフォーチュンクッキーがサービスされた．近隣の住民やビジネスマンが利用するカジュアルなレストランとして利用されている（写真 3，4）．

一富士亭もまた，羅府料理屋組合に加入している大型店のひとつであるが，こちらは和食と中華料理の両方を出している．1922 年ごろの外観を見ると，三階建てのビルに入っているが，一，二階は別会社が入居しているようなので，店舗は三階部分だけかもしれない（写真 5）．和食と洋食を出す店は他にもあり，すき焼きと中華の組み合わせなど，いかに中華料理に人気があったかが伝わってくる．



写真３「遠東樓ビル」2007 撮影筆者



写真４「チャプスイカフェでフォーチュンクッキーを楽しむ客」2007 撮影ゲイリー・オノ



写真５「一富士亭」(『Directory of Japanese in Southern California』1922 より転載)

Ⅳ　日本的遊興とフォーチュンクッキーの関係

1　辻占煎餅と遊興の空間

さて，日系チャプスイレストランの成立と繁栄の過程を述べたところで，戦争直後のチャプスイレストランにおけるフォーチュンクッキーサービスの逸話にまで立ち戻りたい．1945 年，サンフランシスコの海軍基地に帰還したアメリカ人兵士達は，街の中国人経営のチャプスイレストランにおいて，サービスで出されたフォーチュンクッキーを初めて楽しんだという．この逸話が，中国人によってクッキーサービスが始められ，普及した根拠とされているが，どうだろうか．チャプスイレストランでのフォーチュンクッキーサービス，いや，辻占煎餅のサービスは，日本人経営のチャプスイレストランにおいて，既に戦前には行われていた可能性が高いと考えられるのだ．なぜなら，戦前辻占煎餅を大量生産し，日系チャプスイレストランに販売していたと証言する煎餅屋が存在するからである．

ロサンゼルスで現在も辻占煎餅（フォーチュンクッキー）を製造する「ウメヤ」は 1924 年に創業の歴史を持つ．戦中には中断を余儀なくされたが，戦後に事業を再開し，現在は各種煎餅，あられを製造し，ロングセラー商品のフォーチュンクッキーを，日本をはじめとする諸外国に輸出している．ウメヤは，自社の歴史を記す記事の中で，戦前には手焼きで日に 2000 個の辻占煎餅を焼き，サンタマリアからサンディエゴのレストランや小売店，フルーツスタンドなどに配送していたと述べる．中でも得意客だったのは，カリフォルニアの中心部と南部にあった 120〜150 軒もの日系人経営のチャプスイレストランだったという[9]．戦争直前，1940 年のロサンゼルスにおける日本人経営レストラン数について，「羅府日本人職業別数統計表（1940 年度）(『南加州日本人七十年史』) では，日本料理店が 55 軒，洋食店 128 軒，支那料理店が 83 軒との調査結果を発表している．筆者が『加毎年鑑』(1940) でロサンゼルス市内の住所録を調べたところ，日本料理店は 56 軒，洋食店 99 軒，「支那料理店 Chop Suey House」は 90 軒と，チャプスイ店に関して大きなずれのない数が求められた．市内のみで 90 軒あるので，ウメヤが顧客にしたと述べるカリフォルニア中心部と南部の 120〜150 軒のチャプスイレストランとは，誇張した数ではないといえる．残念ながら，ウメヤは彼らの辻占煎餅が，戦前のレストランでどのように享受されたかを明らかにしていないが，多くのチャプスイレストランでの需要は，そこで辻占煎餅のサービスが行われていたことを示唆するのではないかと思わせる．そうでなければ，成人，おそらくは男性客が多く集まり，飲食し，店舗によっては大宴会を開くレストランで，そう頻繁に客が辻占煎餅を注文するとは考えられないからである．辻占煎餅は，サービスかつまみ，コースの中に含まれる菓子として提供されたのではないかと考えられるのだ．

そもそも日本において，辻占煎餅を始めとする占い紙片付きの菓子，辻占菓子は，飲酒や娯楽，夜の街に縁のある菓子であった．宴会の席でこれを開いて楽しむとする江戸時代の史料もある．『守貞謾稿』(1837—1853) 巻之二十八「書占」の項には「今世，辻占昆布，辻占煎餅等ノ類，似レ之タリ．(中略) 宴席等，開レ之テ興トスルコトアリ．」と見える．為永春水の『春の若草』三編巻之上（天保年間・1830—1843）には吉原の妓楼で芸者達が辻占煎餅を開く情景が描かれている．明治，大正と，夜間に花街や繁華な場所などで，辻占売りと呼ばれる行商人が辻占菓子を売り歩いた．辻占紙片の内容は，芸者と客など主に男女の恋のかけひきをテーマにし，その判断は，どどいつやことわざ，口語文などの短文で書かれ，詳しく真面目な占いというよりも，短く遊戯的な要素の強いものだった．

日本国内での事例だが，昭和に入っても辻占菓子は料亭やカフェなどに流通し，粋すじの菓子として存続した．新潟県長岡にあった「よし兼」という料理屋の生家で幼少期を過ごした女性から聞いた話では，戦前から戦後しばらくまで「よし兼」では豆菓子やかきもちなどに油紙の占い紙片が混ぜられた辻占菓子を鉢に持って出していた。たいていは吉や大吉と判じられた良い占い文句が出ると，芸者衆はうれしそうに皺をのばして懐にしまっていたという．また，神戸で珍味製造販売業を開業した「浜の院」は，戦前から戦後の 20 年代までは神戸工場で辻占昆布を製造し，関西と関東の料亭，小料理屋，カフェーへ卸していた[10]．料理

屋やカフェーなどといった，成人が食事や飲酒を楽しみ，時に芸者や酌婦といった女性を傍らに，宴会を開く席では，辻占菓子は人気の菓子であったようだ．戦後の写真資料となるが，大阪で辻占紙片を小料理屋やカフェーの客に売り歩く少女の姿が撮影されている（『アサヒグラフ』1949）（写真 6，7）．

辻占菓子は大人が遊戯的に占いを楽しみ，宴席を盛り上げる機会に使われ，そうした場所でのお茶請けとしても好まれた．このような母国の文化を背景に渡米した日本人にとって，辻占煎餅と外食産業を結びつけることは，経験から来る身近な発想であったのかもしれない．日本人移民は，日本での辻占菓子の嗜好のあり方を，カリフォルニアのチャプスイレストランでも踏襲していたのではないだろうか．



写真 6 「大阪のカフェーで辻占を売る少女」（『アサヒグラフ』1949 年 1 月 26 日号より転載）

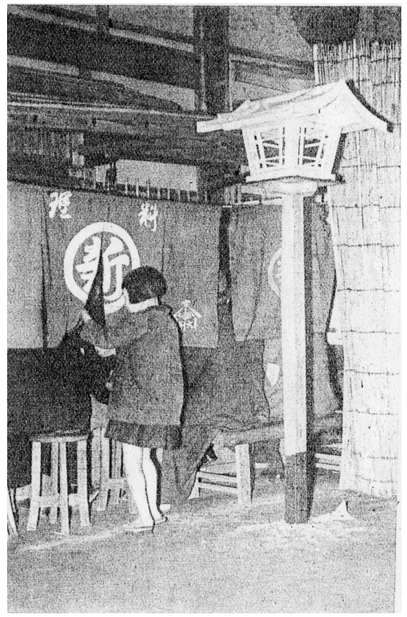


写真 7 「小料理屋の暖簾をくぐる辻占売りの少女」（『アサヒグラフ』1949 年 1 月 26 日号より転載）

2　チャプスイレストランに見える「料理屋」の機能

戦後しばらくまで，料理屋などの宴会場に芸者を呼び，彼女らの歌や踊りを楽しみ，もてなされることは，日本社会で一般的であった．そうした遊興のイメージを表現した古写真が残る（写真 8）．こちらは幕末～明治期に撮影され，撮影地も未詳であるが，小料理屋の男性客が芸者を呼び，楽しんでいる設定である．芸者の一人は三味線に合わせて踊りだそうとしており，客の傍らには酌婦がいる．男性一人の小さな宴ではあるが，当時の日本の宴席とはこのようなものという典型的な情景を示した一枚と思われる．



写真 8 「小料理屋の客と芸妓たち（1）」（幕末・明治期日本古写真コレクション）長崎大学付属図書館所蔵

特に一世と呼ばれる日本人移民の人々は，日本で生活し，成長してきた世代である．おそらくは，彼らの中に日本的な生活や娯楽の明確なイメージと記憶があり，可能な範囲で移民地にそれを移入しようとした．1906 年，ロサンゼルスの日本人社会は「日本内地そのまま」に，正月に獅子舞を行い，年始廻礼をし，天長節を祝ったと，現地在住の医師が振り返って述べている（『羅府新報』1929 年 10 月 1 日）．初期移民の多くは男性であり，日本さながらの年中行事をとりおこなうばかりでなく，余裕ができたときには，母国の遊興の形，すなわち，芸者を呼び宴会を行うことをも楽しんだ．同紙はその有様を記事にしている．

羅府の料理屋の歴史 ── 夫れももう三十余年からにならう．（中略）移民地は娘子軍から夜が明けて，荒涼なその生活に潤ひを与へ，それから料理屋へと移って行く ── これが移民地の常の姿だ（中略）▲初めて組合が組織された時は六十軒位の飲食店があり十七軒は純粋な料理屋だった．その頃地廻り連の人気を得ていたのは八重園と松亭，新富，みやこ，若福……（略）▲御神燈がともる頃になると下町は嬶客の天下で料亭からはさんざめく雑音，歌，三味と戸外からでも手に取るように聞かれ，更けて行くに従って千鳥足の三々五々声高々と流行節を唄ひながら料亭から料亭へと梯子して廻った．（後略）（旧字は常用漢字に改めた．『羅府新報』1929 年 10 月 1 日）

同記事は，料亭での遊興人気の要因が，移民地に日本人女性が少なかったためであるとし，その後写真結婚で既婚者が増加して，一時人気が衰退したとするが，1915 年には盛り返してピークを迎えたと述べる．同年は，好景気と日系人口の増加により，大山領事が初代「代官」として赴任し，酌婦も百五十名を数えた．引用文中「組合」とは羅府料理屋組合を指し，記事によれば創立は 1899 年で，しばらくは日系商業会議所の会員になれず日陰の身であったが，帝国練習艦隊が寄港した折りに歓迎会を主催したことから社会的に認められるようになったという．「六十軒位の飲食店」のうち，「十七軒は純粋な料理屋だった」という箇所から，43 軒のいわゆる「料理屋」が存在したと考えられる．後者の「料理屋」について，加藤政洋は以下に定義している．「料理屋　客室を設け，客の注文に応じて料理を出すことを本業とする店．客は芸妓を招いて遊興することもできるが，地域によっては禁じているところもある．」（加藤　2005：2）

それまで芸者の出先は日本料理屋だけだったのだろうが，宴会場を備え，「会席料理」をも出せる大型中華料理店の出現と流行は，その流れを変えたと見られる．1929 年の羅府料理屋組合の広告には，「一富士」，「川福」，「三光樓」といったチャプスイを出す大規模店の名称が見え，そこが芸者の呼ばれる料理屋であったことを示唆する(11)．大きなチャプスイレストランは他にもあり，実際の出先は組合加入のこの三軒に限定されなかった可能性もある．「高等支那御美食所」では，「会席料理」の準備があると宣伝する（写真 9）．中華料理店の「会席料理」については疑問が残るが，まだメニューなどの資料を入手できず，内容が不明である．本来，会席料理とは，日本料理屋などの宴席で供されるはずの正統な日本料理の形式であり，日本料理であれば吸い物，刺身，焼き物などが供されるが，中華料理では果たしてどのような内容であったのか，中華風な料理での会席が構成されていたということなのだろうか．この点今後も資料を探していきたい．

大規模，高級チャプスイレストランは，高級日本料理店が持つ機能を備え，かつ顧客に新しさを打ち出す工夫をこらす店も存在した．高級チャプスイレストランは，宴会場や舞台といった遊興用の設備を備え，さらに宴席での最高の料理，会席を提供することができた．

一部の店には，カクテルラウンジさえ備えられ，斬新さを売り物にした．「東洋チャプスイ」は最新スタイルのカクテルラウンジを自慢とし，カウンターの背面には装飾的な花の額縁，中には富士山の絵皿らしきものを飾っている．チャプスイレストランには，和洋中のモダンな飲食店の魅力がつまっていた（写真

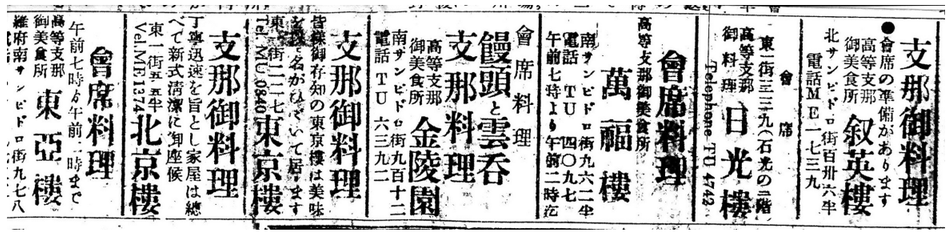


写真 9 「会席料理を謳う中華料理店」『羅府新報』1929 年 9 月 12 日広告欄



写真 10 「東洋チャプスイカクテルラウンジ」1940（『奉祝記念大鑑』より転載）

10）.

芸者を呼んで日本風の宴会をも楽しむことが可能なチャプスイレストランで，宴席を盛りあげる小道具，あるいはささやかな食後のサービスとして，辻占煎餅が持ち込まれた可能性があるのではないかと考えている．それもまた，日本料理屋に続いていた酒席周辺の文化の移入である．そして高級チャプスイ店での辻占煎餅のふるまいが，次第に気軽な食堂形式のチャプスイレストランにサービス菓子として伝わり，戦前のカリフォルニアで日系人が経営した，多くのチャプスイレストランでの普及に発展したのではないかと推測する．この点，裏付けとなる証言や資料に関して，今後も調査を続けたい．

おわりに

日本人移民によるチャプスイレストラン事業の始まりと成功は，在米日本人の経済的発展期に重なっている．南カリフォルニアの日本人商業界は 1890 年代頃より 1930 年以前頃までロサンゼルスを中心に発展した．同市の中でも日本人が集住し，米国最大の日本人町として栄えたのが小東京である．小東京の歴史を振り返れば，1880〜1890 年代あたりの “restaurant era” では，日本人移民は洋食店を開くのがもっぱらであり，アメリカ人客の嗜好に合わせた食事を提供し，自分たちが贅沢な食事をする店を開業するには至らなかった．しかし，1906 年の，サンフランシスコ大地震以後はロサンゼルスへの日本人の大量移住が状況を変化させ，町を活気づかせるようになる．1908 年にはそれまでなかった飲み屋が 30 軒登場している．『羅府新報』記事では，1915 年に日本料理屋人気が頂点に達したと述べ，羅府料理屋組合の盛況を伝えた．好景気の当時は，400 人もの宴会が可能と謳う，大型中華料理店「日光樓」のような「高等支那料理」店が現われており，1917 年に誕生する，初期大型チャプスイレストラン，「蝶々」，「ドラゴン」を予感させる状況となっている．

経済的な豊かさを背景に誕生した大型日系チャプスイレストランは，先に成功した中国系チャプスイレストランの料理と宴会場重視のスタイルをまず取り入れ，加えて日本料理店の要素を組み込み，日本人客，アメリカ人客の双方に好感を持たれる様式となった．大型チャプスイ店舗は，日本料理店が持っていた料理形式，「会席料理」を採用し，宴会場や舞台を配して，芸者も呼べるといった宴席にまつわる周辺の日本文化をも移入した．

そのような大型店には日本料理店の機能を包含し，さらに洋風のモダンな設備を備えたところも存在した．ダイナータイプの気軽なチャプスイ店の増加は，客層を広げて人気を押し上げたことに貢献しただろう．辻占煎餅は，まずは宴会可能な大きなチャプスイレストランにおける，食事と飲酒の席で享受され，その後日系チャプスイレストランのネットワークに乗り，中規模，小規模な店舗へも普及したと考えている．それが中国系チャプスイレストランにどのように持ち込まれたかという事象については，稿を改め，次の課題としたい．

謝　辞

本研究は，嗜好品文化研究会による，平成 18—19 年度　第一回研究奨励事業（平成 19 年 4 月 1 日から平成 20 年 8 月 31 日）の研究助成を受けて，サンフランシスコ，ロサンゼルスで実施した調査成果の一部である．文献収集では，Japanese American National Museum 内，Hirasaki National Resource Center のスーザン福島氏，フィールドワーク及び写真撮影では Gary　Ono 氏に協力を頂いた．幕末明治期の古写真掲載では，長崎大学付属図書館のご協力を頂いた．

記して心より感謝申し上げたい．

注

（1）　フォーチュンクッキーは，山梨県出身の日本人，萩原眞が 1907 年から 1914 年頃にサンフランシスコで作ったという説が，1983 年の発祥地を決定する裁判時に持ちだされ，認められている．萩原眞は 1894 年から，請われてゴールデンゲートパーク内にある日本庭園の監督者を務め，その土地に居住を許され，1925 年に没するまで家族と共にそこに暮らした．萩原家は，庭園を訪れる観光客に，お茶屋で煎茶と何種類かの瓦煎餅を販売していた．客はアメリカ人であり，出された何種類かの煎餅のうちの一つが占い入りの煎餅，つまり英文メッセージ入りのフォーチュンクッキーだった．

（2）　フィッツアーマン・ブルーは，論考 “The Fortune Cookie in America”（2004）で，フォーチュンクッキーの発祥地を巡る模擬裁判（1983 年）の内容を分析し，アメリカの白人系住民にとって，この菓子はアジア系住民の他者性を表していたと述べる．もっとも，このクッキーが中国的エキゾチシズムを象徴していたのは 1980 年代初頭までであり，以降はそうした象徴性が薄れ，今やアングロサクソン系アメリカ人の共同体における，まさにアメリカ的な菓子として受容されていると指摘する．

（3）　1877 年頃に中国人排斥の声が高まり，1882 年に米国中央議会が成立させた中国人移民禁止法の影響で，農園，鉄道，鉱山での労働力不足が起こり，彼らに代わる労働力として日本人労働者の需要が高まった．日本人間には労働者供給業が増え，カリフォルニア州各地からロッキー以西，後にはコロラド，ワイオミング州まで日本人労働者が送り込まれた．1882 年頃の在米日本人はわずかに 200 名ほどだったが，中国人移民が禁止された後はバンクーバーやヴィクトリア，タコマ，シアトル方面からもカリフォルニア州へ移住する日本人が増加し，日本からの渡米者も数を増した．

（4）「小東京は急速に日本人町に戻ったが，戦前の破竹の勢いは昔を今になす由もがなであった．それは戦前の小東京の繁栄を支えた大黒柱，農業や漁業が昔の姿に戻れなかったからである．農地は七五％が工業用地や宅地に変わり，漁業は日系人のいない間に日本人漁業禁止法が出来ていたからである．この法律が違憲であるとの裁定が最高裁で一九四八年下ったが，時既に遅く利権はすべてイタリア人のものになっていた．」（五明 2008：192）

（5）「（iii）日本人店舗の出現（一八八八）」（五明 2008：103）参照.

（6）　“The Japanese of Los Angeles”（William M. Mason Dr. John A. McKinstry1969：3）参照.

（7）　“Chop suey was invented, fact or fiction?”（America's Story from America's library）では，チャプスイの起源説を図像と共に説いている．

（8）　ロサンゼルス公立図書館がホームページ上で公開する写真コレクションは，ロサンゼルス中央図書館の歴史部が第二次世界大戦以前に収集を始め，1950 年代後期までに約 13,000 点の写真を集めた．ロサンゼルスの街中やレストラン，日系人など様々なテーマの写真が所蔵されている．

（9）　1924 年にロサンゼルスで浜野兄弟が創業した「梅屋」は，創業から現在までの歴史を当時の写真資料を交えてホームページ上に公開している．

（10）　この辻占昆布は「縁結び」という商品名で，するめと昆布を共に結び，5—6 個に一つだけ占い紙片を挟んであった．

（11）『羅府新報』1929 年 9 月 25 日の広告欄に「羅府料理屋組合」会員店の一覧広告が見え，「一富士」，「川福」，「三光樓」の三軒のチャプスイレストランの他，日本料理店 17 軒が載る．また，川福が戦後に出店した姉妹店，和食とうどんの店「だるま」の広告（『全米日系人住所録』1949）には三味線の絵があり，「特別料理部（後部客室専用）」を謳っていることから，こちらも芸者の出先の一つであったといえる．

引用文献

朝倉治彦・柏川修一編
1992『守貞謾稿』第 4 巻「書占」（「遊戯」）東京：東京堂出版
赤司郁撮影
1922『Directory of Japanese in Southern California』アメリカ，ロサンゼルス：パリス写真館
加藤政洋
2005『花街　異空間の都市史』東京：朝日新聞社
五明洋
2008『リトル東京』大阪：青心社
城戸三郎
1959『全米日系人住所録 1959 版』アメリカ，ロサンゼルス：新日米新聞社
竹田順一
1929『在米広島県人史』アメリカ，ロサンゼルス：在米広島県人史発行所
野口均・井上喜久子（銀座アスター食品株式会社創業 75 周年プロジェクト）
2002『銀座アスター物語』東京：文藝春秋企画出版部
廣瀬守令
1934『在米甲州人奮闘五十年史』アメリカ，ロサンゼルス：南加山梨海外協会

古川栄次
1920『南加州と鹿児島県人』日本警察新聞社（小沼良成編 2003『初期在北米日本人の記録　北米編』第4冊　東京：文生書院）
松本本光
1929『加州人物大観　南加之巻』（奥泉栄三郎監修　2003『初期在北米日本人の記録　北米編』第10冊　東京：文生書院）
南加州日本人七十年史刊行委員会
1960『南加州日本人七十年史』アメリカ，ロサンゼルス：南加日系人商業会議所
籾井一剣編
1949『全米日系人住所録』アメリカ，ロサンゼルス：新日米新聞社
羅府新報社
1937『羅府年鑑』アメリカ，ロサンゼルス：羅府新報社
羅府新報社編
1940『奉祝記念大鑑』アメリカ，ロサンゼルス：羅府新報社
「日光樓広告」
1914年7月1日『羅府新報』アメリカ，ロサンゼルス：羅府新報社
「震災直後の羅府とその頃の思ひ出」
1929年10月1日『羅府新報』アメリカ，ロサンゼルス：羅府新報社
「辻占売りの少女―夜の綴方教室」
1949『アサヒグラフ』1月26日号　東京：朝日新聞社
M. Mason, William.and John A. McKinstry
1969『羅府の日系人 *The Japanese of Los Angeles*』Los Angeles: History Division, Los Angeles County Museum of Natural History
The library of congress
Chop suey was invented, fact or fiction? *America's Story from America's library* 2008年1月10日
〈http://www.americaslibrary.gov/cgi-bin/page.cgi〉
History *UMEYA RICE CAKE Co* 2008年1月10日
〈http://www.umeyaricecake.com/index.htm〉
Restaurant in New Chinatown, View of New Chinatown, Chop Suey restaurants, Chinatown, Chop Suey Restaurant, *Los Angeles Public Library* 2008年1月10日
〈http://www.lapl.org/index.html〉

参考文献

田中亮平編・後藤義策撮影
1940『加毎年鑑』アメリカ，ロサンゼルス：加州毎日新聞社
1913『南加州同胞発展写真帖』文林堂書店（奥泉栄三郎監修 2003『初期在北米日本人の記録　北米編』第3冊　東京：文生書院）
中町泰子
2004「辻占菓子についての一考察――運をひらく・縁をむすぶ――」『和菓子』11号　東京：株式会社虎屋虎屋文庫
Fitzerman-Blue, Micah.
2004 The Fortune Cookie in America. *Northwestern University Journal of Race and Gender Criticism* 1, no. 2 Spring Evanston: Northwestern University
Gary Ono
2007 Japanese American Fortune Cookie: A Taste of Fame or *Fortune Discover Nikkei*〈http://www.discover-nikkei.org/forum/en/node/1935〉
Jennifer 8. Lee
2008 The Fortune Cookie Chronicles Adventures in the World of Chinese Food New York: Twelve

研究ノート

女性に対する呼称語の使用意識

――“小姐”“阿姨”“服务员”を中心に――

宮　本　大　輔
MIYAMOTO Daisuke

はじめに

本稿は，中国人の女性に対する呼称語の使用意識に関する研究である．

呼称は英語の address terms の訳語であり，「相手を呼びかける際の言語形式で，さまざまな対人的な関係やコミュニケーション上の慣習を表す社会言語学的な現象の1つである」[1]とされており，代名詞，固有名詞，親族呼称，役職名などを含んでいる．

杨（2004）によると，本稿で取り上げる“小姐”という呼称語は，1度はほぼ使用されなくなっていたが，90年代における改革開放路線の4つの現代化の中で，息を吹き返したものの1つである．しかし，21世紀に入ってから，香港や台湾の影響を受け，各メディアが風俗業にたずさわる女性の呼称に“小姐”を用いたため，多くの女性が“小姐”と呼ばれることに対して嫌悪感を抱くようになったという．

また，莫（2002）は次のように述べている．

> 「80年代の半ば頃のことだが，デパートで女性店員に商品を見せてもらおうと想って，「同志」と呼ぶと相手にしてくれなかった．そこで，「小姐」という呼称に変えてみるとにこやかに応対してくれた，というエピソードが残っている．
>
> だが，最近はこの「小姐」という呼称のイメージがどうも悪くなっている．ホテルやレストランで若い女性の従業員に対して「小姐」と呼ぶと，彼女らはあからさまに嫌な表情をする．その理由は売春や性的サービスを売り物にする風俗業の跋扈にある．風俗業に従事する若い女性もまた「小姐」と呼ばれている．かつては西側文化の薫りを漂わせていたこの呼称がすっかり薄汚れてしまったために，「小姐」と呼ばれた若い女性が拒絶反応を見せたというわけだ．」[2]

では，辞書の“小姐”という項目の記述はどうなっているのだろうか．日中両国で出版されているいくつかの辞書を確認しておきたい．

①『中日大辞典』[3]：「1．お嬢様：旧時，使用人が主人の娘に対する称．また広く他人の娘に対する尊称．2．……嬢．ミス……：多く外国人の未婚の女性に用いる．3．旧時，職業婦人の呼称に用いた．」

②『中日辞典』[4]：「1．（主人の娘に対して使用人が用いる呼称）お嬢様．2．（未婚女性に対する呼称）お嬢さん．おねえさん．……さん．」

③『現代汉日辞海』[5]：「1．お嬢さん．令嬢；革命前の社会で雇われている人の主家の未婚の女性に対する呼称．また，広く上流家庭の女性を指した．2．革命前未婚女性に対する尊称；現在は広く若い女性に対して用いられる．3．旧時の妓女．4．モンゴル人の妻・夫人に対する呼称．5．旧時の側室，側女．」

④『現代中国語新語辞典』[6]：「1．（旧時，使用人が主人の娘に対して用いた呼称）お嬢様．2．（若い女性や未婚の女性に対する呼びかけ）お嬢さん．……さん．3．風俗業や水商売などに従事する若い女性を指す．」

⑤『现代汉语词典』[7]：「1．旧時，裕福な家の使用人が主人の娘に対して用いる呼称．2．若い女性，或いは未婚の女性に用いる．」

⑥『应用汉语词典』[8]：「1．旧社会の官僚や地主，資産階級家庭の使用人が主人の娘に対して用いる呼称．2．未婚女性に対する尊称．3．単身で現れた女性に対する尊称，年齢制限はなく，60〜70歳の女性に対して用いることもできる．4．美女コンテストの優勝者．5．何らかの職業に就いている女性に対する呼称．」

①〜⑥の辞書の中では，④『現代中国語新語辞典』だけが「風俗業にたずさわる女性」を連想させることに言及しており，“小姐”は「風俗業にたずさわる女性」という意味を含まないとするものの方が多いと思われる．

本稿の目的は次の通りである．(1) インフォーマントは意味範囲が曖昧になりつつある“小姐”をどう使い分けているのか．(2) インフォーマントは“小姐”の代わりにどういった呼称語を使用するのか．(3) インフォーマントはどのように“小姐”と“阿姨”を使い分けているのか．

Ⅰ　先行研究

まず，呼称語の社会的機能に視点を当てたものとしては，杨 (2004) をあげることができる．

杨 (2004) は，現代中国語において，“小姐”という呼称語はすでに権威や礼儀を表すものではなく，多くの状況下において水商売（売春を含む）の代名詞となっていると述べている．表1は杨 (2004) が“小姐”の持つ社会的機能について，“先生”“同志”との比較という形でまとめたものである．

次に，“小姐”に焦点を当てた新聞記事には东 (2000)，陶 (2005)，郭 (2005) 等がある．また，学術的に調査・分析した研究には次のようなものがある．

樊等 (2004) は，24の省都及び直轄市において，一定以上の学歴を有する18〜40歳の者を調査対象としたアンケート調査を実施して得た各都市：10部，合計：240部のサンプルを用いて，「小姐」の語用論的な特徴と地理的な分布について論じている．これによると，“小姐”の第一指示――つまり，“小姐”が最初に意味するものは以下の通りである．

表2を見ると，“小姐”という呼称語を「一般的な社会女性」に対するものとしているのは，香港（100%），南京（90%），ハルピン（70%），天津・石家荘・ウルムチ（60%），南昌（50%），西安（40%）となっている．これに対して「水商売の女性」に対するものとしているのは，合肥（50%），昆明・蘭州・長春・銀川・貴陽（40%），重慶・太原（30%），西安（20%）となっている．樊等の調査は，中国全土24都市に及んでいる．だが，質問項目が全て明示されていないことや，各都市のサンプル数が少なすぎるといった問題点も見られる．

また，李 (2003) は，“小姐”という呼称語の使用を歴史的な変化の過程という視点からその広義化の傾向を分析しており，語用論的な分析を通して，「小姐」を用いるコンテクスト中に見られる特徴を提起している．だが，文学的記述や歴史的記述からの分析に偏っているといった問題点も見られる．

本稿では，調査地域を北京にしぼり，サンプル数や質問項目を増やすことによって，更にミクロな視点での分析を試みている．また，具体的な場面を設定したアンケート調査を実施することによって，抽象的な使用意識をできる限り実際の使用状況に近い形で捉えることを試みている．

表1　A semantic comparison between Tongzhi and Xiansheng / Xiaojie[8]

Address Terms	Power	Politeness	Gender Marker	Marriage Status	Semantic Degradation
同志	−	−	−	−	+
先生	+	+	+	+/−	−
小姐	+/−	+/−	+	+	+

表2　“小姐”の第一指示

地名	第一指示	地名	第一指示	地名	第一指示
瀋陽	40%(2) 20%(4)	香港	100%(2)	鄭州	50%(4) 40%(2)
南京	90%(2) 10%(4)	西安	40%(2) 20%(3)(4)(5)	太原	40%(4) 30%(5)
北京	60%(4) 30%(2)	ハルピン	70%(2) 30%(4)	長沙	60%(3) 40%(4)
上海	60%(3) 20%(2)(4)	蘭州	40%(5) 30%(4)	天津	60%(2) 20%(3)(4)
南昌	50%(2) 40%(4)	重慶	30%(2)(5) 20%(4)	銀川	40%(5) 30%(4)
ウルムチ	60%(2) 40%(4)	福州	50%(2)(4)	貴陽	40%(5) 30%(3)
昆明	40%(5) 30%(3) 20%(4)	南寧	60%(4) 40%(2)	合肥	50%(5) 20%(2)(3)
		長春	40%(5) 30%(3)		
		石家荘	60%(2)	フフホト	90%(4)

(1) 家庭内の最も若い姉
(2) 一般的な社会女性
(3) 地位のある社会女性
(4) サービス業の販売員
(5) 水商売の女性

Ⅱ　研究概要

本稿では，“小姐”という呼称語の意味が拡大したことを受け，流行に最も敏感であると考えられる大学生がこの呼称語をどのように使用するのかという点に着目し，北京師範大学において大学生155名を対象とした意識調査を実施した．

本稿の研究地点及び調査対象は以下の通りである．

調査地点と場所：中華人民共和国北京市北京師範大学
調査実施期間：2007年4月12日〜4月16日
調査対象：北京師範大学学部生　155名（男性：22名（14.2%），女性：133名（85.8%））
年齢構成：17〜22歳

調査には自由記述式の調査票を配布し回収する留置法を用いた．これは，インフォーマントが日常生活において頻繁に出遭うだろう様々な場面において，11〜20歳（設定した場面の多くに11〜15歳程度の女性が現れる可能性は極めて低いが便宜的に11〜20歳とした），21〜30歳，31〜40歳，41〜50歳，51歳以上の各年齢層に見える女性に呼びかける時に，どういった呼称語を用いるかを調べることを目的としている．アンケートの内容は表3，表4の通りである．

表3　調査票内容（パターン1）

(a)空港・駅で
- 11〜20歳に見える女性従業員には＿＿＿＿と呼びかける。
- 21〜30歳に見える女性従業員には＿＿＿＿と呼びかける。
- 31〜40歳に見える女性従業員には＿＿＿＿と呼びかける。
- 41〜50歳に見える女性従業員には＿＿＿＿と呼びかける。
- 51歳以上に見える女性従業員には＿＿＿＿と呼びかける。

表4　調査票内容（パターン2）

(f) レストラン・食堂で
- 高級店
  - 11〜20歳に見える女性従業員には＿＿＿＿と呼びかける。
  - 21〜30歳に見える女性従業員には＿＿＿＿と呼びかける。
  - 31〜40歳に見える女性従業員には＿＿＿＿と呼びかける。
  - 41〜50歳に見える女性従業員には＿＿＿＿と呼びかける。
  - 51歳以上に見える女性従業員には＿＿＿＿と呼びかける。
- 中級店
  - 11〜20歳に見える女性従業員には＿＿＿＿と呼びかける。
  - 21〜30歳に見える女性従業員には＿＿＿＿と呼びかける。
  - 31〜40歳に見える女性従業員には＿＿＿＿と呼びかける。
  - 41〜50歳に見える女性従業員には＿＿＿＿と呼びかける。
  - 51歳以上に見える女性従業員には＿＿＿＿と呼びかける。
- 低級店
  - 11〜20歳に見える女性従業員には＿＿＿＿と呼びかける。
  - 21〜30歳に見える女性従業員には＿＿＿＿と呼びかける。
  - 31〜40歳に見える女性従業員には＿＿＿＿と呼びかける。
  - 41〜50歳に見える女性従業員には＿＿＿＿と呼びかける。
  - 51歳以上に見える女性従業員には＿＿＿＿と呼びかける。

設定したのは（a）空港・駅（机场・车站），（b）道ばた（路上问路），（c）医療機関（医疗机关），（d）行政機関（行政机关），（e）大学事務（大学教务处），（f）レストラン（餐厅・食堂），（g）デパート（商店・商场），（h）バー（酒吧），（i）ディスコ（舞厅），（j）ホテル（宾馆・旅店），（k）美容院（美发厅）の11場面である．但し，場面（f）（g）（j）に関しては，調査票内容（パターン2）を採用し，一つの場面を更に高級，中級，低級の3つに分けた．その他の場面に関しては調査票内容（パターン1）を採用している．

Ⅲ　結果と考察

（1）　全体像

表5は設定した全ての場面に現れた呼称語とその出現率を示したものである．

各年齢層において出現率が10％を超えている呼称語は，ほぼ全ての場面において，比較的多く出現しているものである．11～20歳では“小姐”“服务员”“その他”，21～30歳では“小姐”“服务员”“その他”，31～40歳では“服务员”“阿姨”“小姐”“その他”，41～50歳では“服务员”“阿姨”“その他”，51歳以上では“服务员”“阿姨”“その他”がこれにあたる．ここで“その他”はゼロ呼称，つまり呼称語を省略した挨拶表現――“你好（こんにちは）”“请问……（お尋ねしますが……）”“打扰一下（お邪魔いたします）”“不好意思（すみません）”などを含んでいる．

また，各年齢層において出現率が10％未満の呼称語は大きく2種類に分けることができる．つまり，①ほぼ全ての場面に現れるもの，②ある特定の場面でしか使用されないものの2つである．

①にあたるのは，11～20歳では“姐姐”“妹妹”“女士”“同志”，21～30歳では“姐姐”“阿姨”“女士”“同志”，31～40歳では“姐姐”“女士”“同志”，41～50歳では“小姐”“姐姐”“同志”，51歳以上では“小姐”“阿婆”“大妈”“大姨”“同志”である．

②にあたるのは，11～20歳では“医生”“护士”“老师”“同学”“美女”“师傅”“售货员”“理发师”“老板娘”，21～30歳では“医生”“护士”“老师”“同学”“美女”“师傅”“售货员”“理发师”“妹妹”“老板娘”，31～40歳では“医生”“护士”“老师”“美女”“师傅”“售货员”“理发师”“妹妹”“老板娘”，41～50歳では“医生”“护士”“老师”“美女”“师傅”“售货员”“理发师”“妹妹”“老板娘”“大妈”“大姨”，51歳以上では“医生”“护士”“老师”“美女”“师傅”“售货员”“理发师”“妹妹”“老板娘”である．

呉（1999）には，大学生及び社会人の中で，“同志”という呼称語は市民権を失いつつあるという記述があるが，本調査結果によると，極めて低い出現率ではあるが，ほぼ全ての設定場面において出現している．更に，場面（d）行政機関においては，20.4％～24.7％と比較的高い率で現れており，全ての年齢層の女性職員に対して使用できる呼称語と認識されていることが分かる．

表5　年齢別の呼称語使用状況

11～20歳		21～30歳		31～40歳		41～50歳		51歳以上	
小姐	34.2%	小姐	33.2%	服务员	33.7%	服务员	33.2%	服务员	32.5%
服务员	31.3%	服务员	31.0%	阿姨	17.9%	阿姨	28.4%	阿姨	21.6%
その他	11.8%	その他	10.6%	小姐	16.2%	その他	11.3%	その他	11.1%
姐姐	3.9%	姐姐	8.4%	その他	11.0%	小姐	7.5%	小姐	6.4%
妹妹	3.4%	老师	3.8%	老师	4.7%	老师	4.6%	大妈	5.3%
同志	2.8%	同志	3.0%	姐姐	4.2%	医生	3.2%	阿婆	5.0%
老师	2.6%	医生	2.9%	医生	3.1%	同志	3.0%	老师	4.7%
医生	2.6%	售货员	1.4%	同志	2.8%	姐姐	1.8%	医生	3.2%
同学	2.1%	阿姨	1.3%	女士	1.5%	售货员	1.5%	同志	3.1%
售货员	1.4%	护士	1.2%	售货员	1.5%	女士	1.2%	售货员	1.4%
护士	1.4%	女士	0.93%	护士	1.2%	护士	1.1%	女士	1.2%
女士	0.75%	～＋小姐	0.56%	师傅	0.45%	大妈	0.79%	护士	1.1%
～＋小姐	0.71%	妹妹	0.49%	老板娘	0.45%	老板娘	0.68%	姐姐	0.83%
美女	0.45%	美女	0.45%	美女	0.41%	师傅	0.60%	老板娘	0.71%
师傅	0.34%	师傅	0.37%	～＋阿姨	0.26%	美女	0.34%	师傅	0.56%
老板娘	0.08%	同学	0.19%	～＋小姐	0.15%	～＋阿姨	0.23%	美女	0.34%
理发师	0.04%	理发师	0.07%	妹妹	0.15%	妹妹	0.15%	～＋阿姨	0.23%
		老板娘	0.07%	理发师	0.11%	理发师	0.11%	大姨	0.19%
		～＋姐姐	0.07%	～＋女士	0.04%	～＋小姐	0.08%	妹妹	0.15%
		～＋阿姨	0.04%	～＋同志	0.04%	大姨	0.08%	理发师	0.11%
						～＋女士	0.04%	～＋小姐	0.08%
						～＋同志	0.04%	～＋同志	0.08%
								～＋女士	0.04%
合計	100%	合計	100%	合計	100%	合計	100%	合計	100%

（2）“小姐”の使用実態

図1は，呼びかける相手の年齢を考慮せず，筆者が設定した各場面において“小姐”という呼称語がどれほど用いられているのかをグラフ化したものである．

図1から，ディスコやバー，美容院（中国には夜になるとピンク色の明かりを灯し，性的サービスを提供する美容院がある）といった中国では多少なりとも水商売を連想させ得る場面において多く用いられる傾向にあるといえるが，これと同時にデパート（高級），デパート（中級）においてもかなり高い数値を示している．

デパート及びレストラン，ホテルにおいては，高級→中級→低級と店のランクが下がるにつれて“小姐”の出現率が減少していく傾向にある．“小姐”のこのような使用傾向には，“小姐”が元来持つ高級感が影響を及ぼしていると考えられる．

李（2003）は改革開放以後の“小姐”の用いられ方について，以下のように述べている．

「改革開放期に入ると，人々の政治に対する関心は次第に薄まり，社交場面において人々が礼儀を重視するようになった．それにつれて，“小姐”という呼称語は，その語呂の良さと上品さから，全ての社会的コミュニケーションの場において，代表的な呼称語となった．」(9)

また，ディスコやバーといった場面で，“小姐”という呼称語が多く用いられていることについては，そこで働いている女性従業員自身が，自分たちの仕事が「三陪小姐」につながるということを自覚しており，“小姐”と呼ばれることについて，余り反感を抱かない可能性がある．そのため，ディスコやバーといった場面では“小姐”という呼称語が回避されないのだと筆者は考える．

ここまで見てきたように，“小姐”はバーやディスコといった娯楽場面の他に，高級なデパートやホテル，レストランにおいても高い出現率を示しており，それには“小姐”が元来持つ高級感が影響を与えたのではないかということはすでに述べたとおりである．つまり，高級なデパートやホテル，レストランといった場面では，“小姐”は李が述べたような美称としての機能を残していると言えるのではないだろうか．したがって，“三陪小姐”と混同されるとして，使用が回避されていることと合わせて考えると，現在の“小姐”は貶義と褒義の両方を兼ね備えている可能性を示唆することができる．

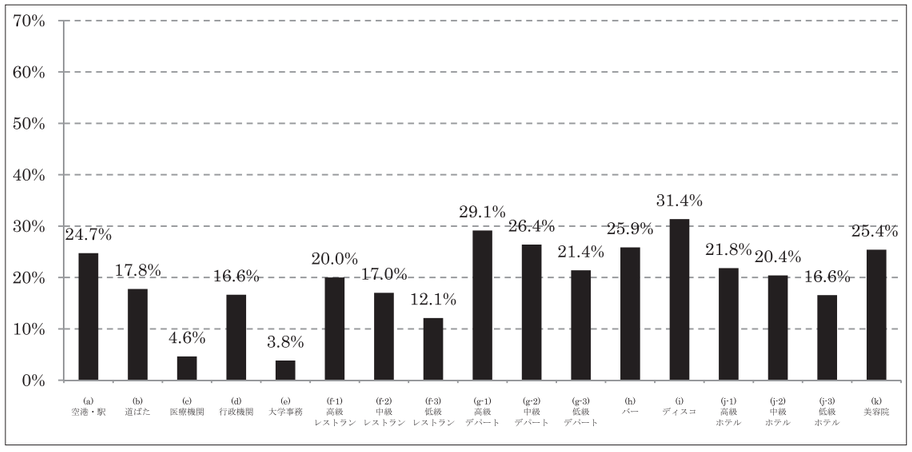


図1　場面別に見る“小姐”の使用実態

(3) “阿姨”の使用実態

図２は，呼びかける相手の年齢を考慮せず，筆者が設定した各場面において“阿姨”という呼称語がどれほど用いられているのかをグラフ化したものである．この図から，道ばたにおいて出現率が最も高くなり，大学事務において最も低くなっていることが分かる．

ホテル及びレストランでは，高級→中級→低級と店のランクが下がるにつれて，“阿姨”の出現率が増加していく傾向にある．また，デパートでは，中級における“阿姨”の出現率が最も高い数値を示し，高級がこれに準じ，低級で最も低い数値を示しているが，中級と高級の間に見られる差は極めて小さく，両場面における“阿姨”の出現率は同程度と考えても差し支えないだろう．

また，図２の結果は，大きく３つに分けることができる．グループ① 20% 以上の数値を示している場面（b）（a）（d），グループ② 20% 未満の数値を示している場面（f-1）（f-2）（f-3）（g-1）（g-2）（g-3）（h）（i）（j-1）（j-2）（j-3）（k），そしてグループ③場面（c）（e）だ．グループ①と②の間の違いは，31〜40歳の女性に対する呼称にある．前者では，“小姐”よりも“阿姨”が多用される傾向にあるのに対し，後者では，“阿姨”よりも“小姐”が多用される傾向にある．では，なぜこういった違いが現れるのか．本調査結果の範囲から明らかにすることは難しい．

グループ③に属する場面では，“小姐”“阿姨”共にほとんど用いられていない．この２つの場面では他にふさわしい呼称語があるのだろう．

(4) “服务员”の使用実態

図３は，呼びかける相手の年齢を考慮せず，筆者が設定した各場面において“服务员”という呼称語がどれ程用いられているのかをグラフ化したものである．レストラン（低級）において最も高い数値を示し，道ばた及び医療機関，大学事務において最も低い数値を示している．

レストランでは，呼びかける相手の年齢別に見ると，（f-3）レストラン（低級）が最も高い．その値は，それぞれ11〜20歳（58.0%），21〜30歳（63.7%），31〜40歳（61.1%），51歳以上（60.0%）となっている．

レストランでは，低級→中級→高級と店のランクが上がるにつれて，“服务员”の出現率が減少していく傾向にある．これは店のランクが高くなるにつれて，高級感を備えた“小姐”の出現率が高くなっていること，そして，“服务员”という呼称語に対して“土”——つまり，田舎くさいという印象を持つ人がいることに起因していると考えられる．

ホテルでは，中級における“服务员”の出現率が最も高く，高級における出現率がこれに準じ，低級における出現率は最も低くなっているが，３者間の数値の差は極めて小さく，これらの場面における“服务员”の出現率は同程度と考えても差し支えないだろう．

図３を見ると，レストランやホテルでの“服务员”

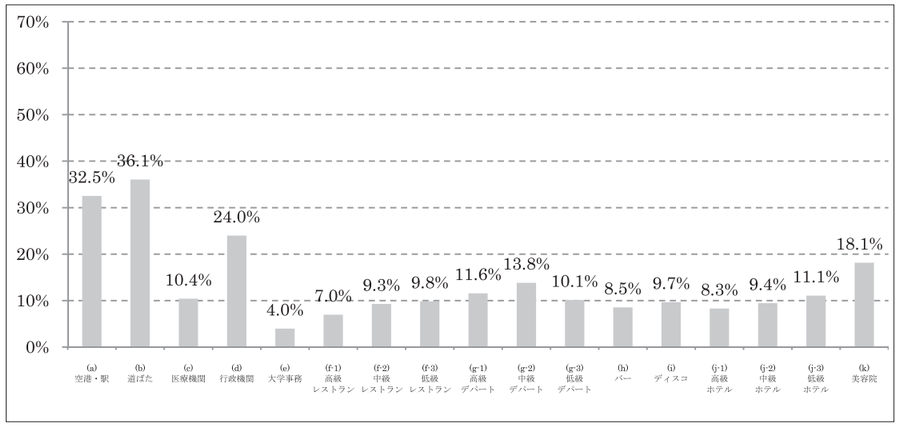


図２　場面別に見る“阿姨”の使用実態

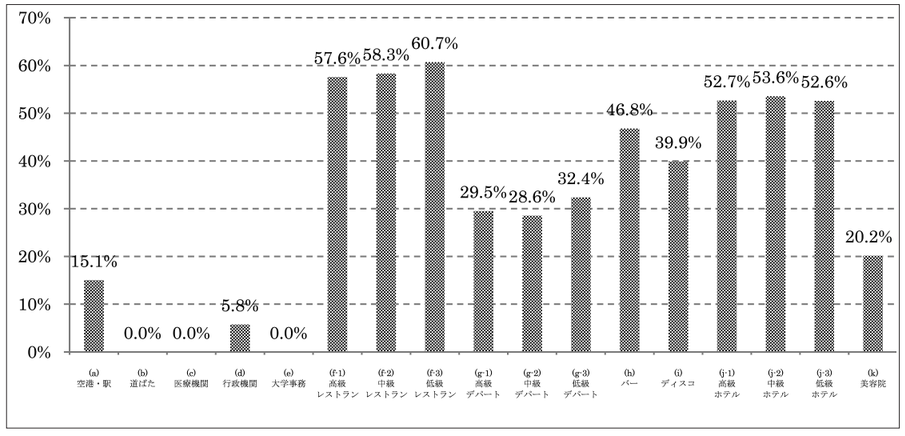


図３　場面別に見る“服务员”の使用実態

の出現率は50% 以上となっている．本調査の結果を見る限りでは，レストランやホテルでは，「風俗業にたずさわる女性」という誤解を招く可能性のある“小姐”の代わりに“服务员”を多く使用するという傾向をかいま見ることができる．

そして，医療機関や大学事務，行政機関における“服务员”や“小姐”，“阿姨”といった呼称語が余り用いられていないことを鑑みると，これらの場面では，“小姐”“阿姨”“服务员”の他に更に適した呼称語があることが分かる．具体的に言うと，医療機関においては“医生”“护士”，大学事務においては“老师”，そして，行政機関においては“同志”が呼びかける相手の年齢に左右されない呼称語として多用される傾向にある．日本の大学では，学生が大学の事務員を「先生」と呼ぶことはないため，違和感を覚えるかもしれないが，中国では事務員に対して“老师”と呼びかけることによって，相手への敬意を表すようである．

(5) レストランに見る呼称語

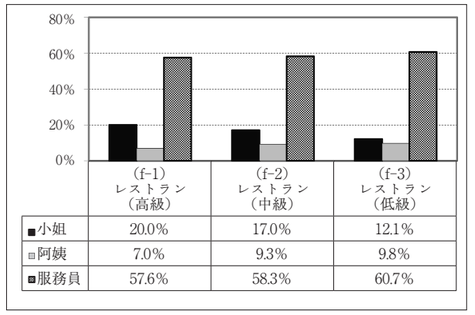
“小姐”“阿姨”“服务员”の場面別使用実態において，特徴的な傾向を見せた「レストラン」に焦点を絞り，その店のランクと３つの呼称語の使用について見てみたい．

図1〜図３ですでに述べたように，レストラン（高級）において，“小姐”の出現率は最も高く，中級，低級とレストランのランクが下がるにつれてその出現率は減少している．“阿姨”については，高級で最も低く，中級，低級とレストランのランクが下がるにつれてその出現率は増加傾向にある．最後に“服务员”については，“阿姨”と同様にレストランのランクが下がるにつれてその出現率は少量ではあるが増加している．

また，図４で“服务员”の数値が，他の２つに比べて，かなり高い数値を示している原因の１つは，他の２つの呼称語が呼びかける相手の年齢層によって制約を受けているのに対し，“服务员”は呼びかける相手の年齢層によって左右されることがないことにある．

(6) 年齢別の呼称語の使用実態

また，これまでは場面別の呼称語の使用実態を明らかにするために，呼びかける相手の年齢層を考慮せず，主にデータを場面別に平均化した数値を基に議論を進めてきた．ここからは呼びかける相手の年齢層別



	(f-1) レストラン（高級）	(f-2) レストラン（中級）	(f-3) レストラン（低級）
■小姐	20.0%	17.0%	12.1%
▫阿姨	7.0%	9.3%	9.8%
▪服务员	57.6%	58.3%	60.7%

図４　レストランに見る呼称語の比率

に各呼称語の出現率を分析したい．

次の図5は職業の別を考慮せず，呼びかける相手の年齢層によって“小姐”から“阿姨”へのシフト状況がどう変化するかを示したものである．グラフ中の数値は，本調査によって得られた全ての呼称語から“小姐”と“阿姨”を抽出し，これらの呼称語の出現率の合計を100％として算出したものである．

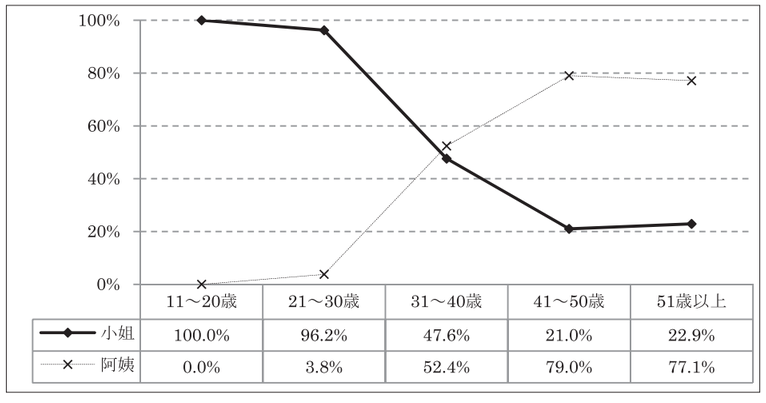
図5を見ると，“小姐”の出現率は11〜20歳において最も高い数値を示し，その後，呼びかける相手の年齢層が上がるにつれて徐々に減少し始め，31〜40歳の年齢層に入ると，急激に低下して“阿姨”の数値とほぼ重なり，年齢層が高くなるのと比例して減少し続ける．だが，51歳以上においては，わずかではあるが出現率が上昇している．これにはどのような要素が影響を及ぼしているのだろうか．

“阿姨”は，11〜20歳及び21〜30歳の女性に呼びかける場合，全く，あるいはほぼ用いられていない．これに対して“小姐”はすでに述べたように，41〜50歳及び51歳以上の女性に呼びかける場合であっても，場面によっては，比較的高い率で用いられる．

次に，“小姐”と“阿姨”の使用状況を飲食・宿泊・販売業とその他の職業で比較すると，図6，図7のようになる．

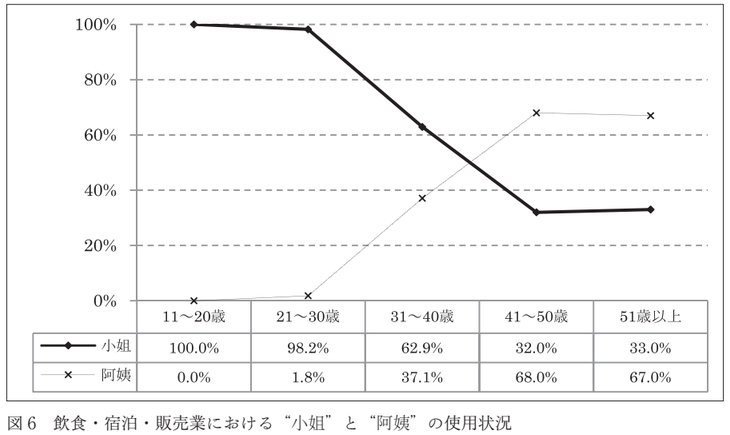
図6と図7を比較すると，図6において“小姐”の出現率は全ての年齢層において，図7のそれよりも高くなり，図7においては“阿姨”の出現率が全ての年齢層において，図6のそれよりも高くなる．

図7における“小姐”の出現率は11〜20歳，21〜30歳という年齢層において100％，或いは100％に極めて近い数値を示し，31〜40歳で急激に低下し，“阿姨”の出現率を下回り，その後，呼びかける相手の年齢層が上がるにつれて，10％以下にまで低下する．



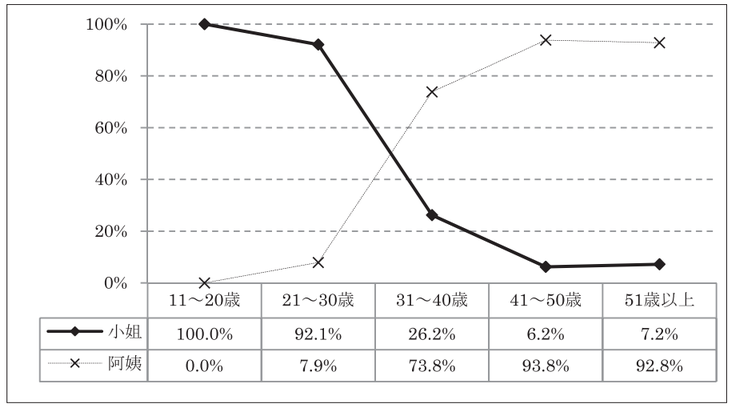
	11〜20歳	21〜30歳	31〜40歳	41〜50歳	51歳以上
小姐	100.0%	96.2%	47.6%	21.0%	22.9%
阿姨	0.0%	3.8%	52.4%	79.0%	77.1%

図5 “小姐”から“阿姨”へのシフト状況



	11〜20歳	21〜30歳	31〜40歳	41〜50歳	51歳以上
小姐	100.0%	98.2%	62.9%	32.0%	33.0%
阿姨	0.0%	1.8%	37.1%	68.0%	67.0%

図6 飲食・宿泊・販売業における“小姐”と“阿姨”の使用状況



	11〜20歳	21〜30歳	31〜40歳	41〜50歳	51歳以上
小姐	100.0%	92.1%	26.2%	6.2%	7.2%
阿姨	0.0%	7.9%	73.8%	93.8%	92.8%

図7 他の場面における“小姐”と“阿姨”の使用状況

これに対して，図6における“小姐”の出現率は11〜20歳，21〜30歳という年齢層において100％或いは100％に極めて近い数値を示し，その後，31〜40歳において急激に低下し，41〜50歳及び51歳以上において，“阿姨”の出現率を下回る．ただし，51歳以上においてわずかではあるが，“小姐”の出現率の上昇が見られる．職業及び年齢を加味した数値を詳細に見ると，飲食・宿泊・販売業の高級店において，特に51歳以上の女性に対する“小姐”の出現率（レストラン（高級）：47.1％，ホテル（高級）：40％，デパート（高級）：39.2％）の上昇が確認された．つまり，飲食・宿泊・販売業――特に高級な店舗においては，51歳以上の女性に対しても比較的高い確率で“小姐”という呼称語を使用するということになる．

まとめ

本稿は北京の大学生155名を対象とした意識調査に基づいて分析を行ったものであるため，本調査の結果から中国人全体の「女性に対する呼称語」の使用実態を示すことは難しい．ここに示す結果は，あくまでも本調査のインフォーマントに見られる「女性に対する呼称語」の使用傾向を示したものである．

（1）“小姐”の使用意識は，場面（i）ディスコにおいて最も高く，場面（e）大学事務において最も低くなる．また，場面（f-1〜3）レストラン・食堂及び（g-1〜3）デパート・商店では，店のランクが低くなるにつれて，“小姐”の使用が減少する傾向にある．

（2）“阿姨”の使用意識は，場面（b）道ばたにおいて最も高く，場面（e）大学事務において最も低くなる．また，場面（f-1〜3）レストラン・食堂及び（j-1〜3）ホテル・旅館では，店のランクが低くなるにつれて，“阿姨”の使用が増加する傾向にある．

（3）“小姐”に替わるものであると考えられる「服务员」の使用意識は，場面（f-3）レストラン・食堂（低級）において最も高く，場面（b）道端及び場面（c）医療機関，場面（e）大学事務において最も低くなる．また，場面（f-1〜3）レストラン・食堂では，店のランクが低くなるにつれて，「服务员」の使用が増加する傾向にある．

（4）呼びかけ相手の年齢層別に分析すると，11〜30歳までの女性に対しては，“小姐”が多く用いられ，年齢が上がるにつれて減少する傾向にある．また，31〜40歳の女性に対しては，“阿姨”が多く用いられ始め，その後，41〜50歳の年齢層で最高値に達し，51歳以上の年齢層では，また減少している．

（5）飲食・宿泊・販売系の業種では，他の業種と比べて，高い年齢層の女性に対しても“小姐”という呼称語を用いる傾向にある．

今回の調査では，調査地点が師範大学であったためか，女性の割合が多くなってしまった．そのため，調査結果にも女性の意識が多く反映されていると考えられる．今後の調査で，男性の意識を調査してみなければ，断定はできないが，男性の方が女性に対して“小

姐”と呼びかけることについて抵抗を持っており，この呼称語を回避する傾向にある可能性を指摘することができる．

注

（1） 小池 2003: 217.
（2） 莫 2002: 172.
（2） 愛知大学中日大辞典編纂処編 1996: 2041.
（3） 相原 2002: 1712.
（4） 大東文化大学中国語大辞典編纂室 1999: 3405.
（5） 相原 2007: 451.
（6） 中国社会科学院语言研究所词典编辑室 2005: 1498.
（7） 商务印书馆辞书研究中心 2000: 1383.
（8） 杨 2004: 86.
（9） 李 2003.

参考文献

愛知大学中日大辞典編纂処編
　1996『中日大辞典（増訂第２版）』東京：大修館書店
相原茂
　2002『中日辞典（第二版）』東京：講談社
相原茂
　2007『現代中国語新語辞典』東京：講談社
大東文化大学中国語大辞典編纂室
　1999『現代汉日辞海』北京：北京大学出版社
东景
　2000「不叫“小姐”叫什么」,《中国文化报》2000 年 10 月 30 日
樊小玲・胡范铸・林界军
　2004「“小姐”称呼语的语用特征，地理分布及其走向」,《语言文字应用》第 4 期：41-47 頁
郭紫纯
　2005「北京四成女性拒绝小姐称呼 认为其等同三陪小姐」,《法制晚报》2005 年 10 月 12 日
小池生夫
　2003『応用言語学事典』東京：研究社
李成军
　2003「“小姐”称呼语的泛化及其他」,《桂林市教育学院学报》http://www.xslx.com
宮本大輔
　2007「場面別に見る「小姐」の使用実態 ── 北京大学生の意識調査に基づいて ── 」,『日本中国語学会第 57 回全国大会予稿集』（琉球大学）pp. 110-114
莫邦富
　2002『中国「新語」最前線』東京：新潮社
商务印书馆辞书研究中心
　2000『应用汉语词典』北京：商务印书馆
陶菲
　2005「“美女”成最受欢迎女性称呼“小姐”受抵触」,《金陵晚报》2005 年 10 月 19 日
吳世平
　1999「呼称語の変容」,愛知学泉大学『経営研究』13（2）：205-218
杨永林
　2004『社会语言学研究：功能・称谓・性别篇』,上海：上海外语教育出版社
中国社会科学院语言研究所词典编辑室
　2005『现代汉语词典（第 5 版）』,北京：商务印书馆

執筆者一覧 （執筆順による）

北　原　糸　子　非文字資料研究センター　研究員
神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科　教授

田　中　　傑　非文字資料研究センター　研究員
武蔵大学　非常勤講師

高　野　宏　康　非文字資料研究センター　研究協力者
神奈川大学日本常民文化研究所　特別研究員

田　上　　繁　非文字資料研究センター　研究員
神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科　教授

津　田　良　樹　非文字資料研究センター　研究員
神奈川大学工学部建築学科　助手

佐々木弘美　元 COE 研究員（RA）
神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科　博士後期課程在学

福田アジオ　非文字資料研究センター　センター長
神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科　教授

中　町　泰　子　元 COE 研究員（RA）
神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科　博士後期課程在学

宮　本　大　輔　元 COE 研究員（RA）
神奈川大学外国語学部中国語学科　非常勤講師

■編集後記

非文字資料研究センターとしてのはじめての年報ができあがりました．21 世紀 COE の年報を引き継ぎ，通巻では第 5 号となりますが，センターとしては第 1 号であり，表題も『年報　非文字資料研究』と改めました．センターは実質的には，まだ半年の活動実績しかないので，論稿の大部分は 21 世紀 COE の研究・調査の成果およびセンター研究員の個人的蓄積をまとめたものになっています．いずれにしても，内容は，非文字資料研究に関するものであり，研究のたゆみない進展を示すものであることはまちがいありません．

論文執筆，編集作業とも，グローバル COE の申請書類作成と同時並行でやらざるをえず，担当者としての実感としては，よく発刊にこぎつけたというところです．

今後，センターとしての研究成果を発表する中心的媒体として，一層内容の充実を図りたいと思います．

（橘川）

年報　非文字資料研究　第 5 号
The Annual Report: the Study of Nonwritten Cultural Materials　No. 5

発　行　日　2009 年 3 月 20 日
編集・発行　神　奈　川　大　学
日本常民文化研究所　非文字資料研究センター
〒 221-8686
横浜市神奈川区六角橋 3-27-1
http://himoji.kanagawa-u.ac.jp/
印　　刷　株式会社 精興社
雑誌コード　ISSN 1883-9169

NO.5
March, 2009



THE ANNUAL REPORT :
THE STUDY OF NONWRITTEN CULTURAL MATERIALS

- Refugees from the 1923 Great Kanto Earthquake and Shelters for them
  — On Public Shelters Funded by the Mitsui Combine —

  KITAHARA Itoko
- Barracks Accommodating Sufferers after the Great Kanto Earthquake and Activities Done by the Mitsui Companies

  TANAKA Shigeru
- Documents of the 1923 Great Kanto Earthquake in the collection of the Tokyo Memorial Hall for the Victims of the 1923 Great Kanto Earthquake and for the World War II

  TAKANO Hiroyasu
- Interpreting the Illustration of Land Surveys in the Kaga Domain

  TAGAMI Shigeru
- The Continuance and the Transformation of the Farm Houses in Kanagawa Prefecture

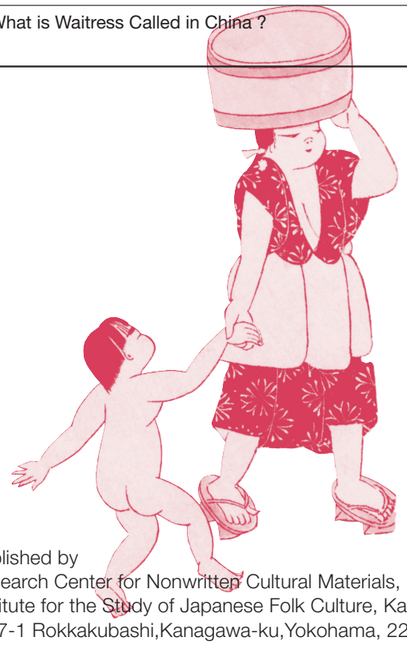
  TSUDA Yoshiki
- *Ichimegasa* as a Tool of Disguise

  SASAKI Hiromi
- Illustrated Materials and Japanese Folklore Studies

  FUKUTA Ajio
- The Relationship of the Japanese Chop-Suey Restaurant's Style and Fortune Cookies Service

  NAKAMACHI Yasuko
- What is Waitress Called in China ?

  MIYAMOTO Daisuke



Published by
Research Center for Nonwritten Cultural Materials,
Institute for the Study of Japanese Folk Culture, Kanagawa University
3-27-1 Rokkakubashi,Kanagawa-ku,Yokohama, 221-8686 Japan
Tel 045-481-5661 Fax 045-491-0659 URL http://himoji.kanagawa-u.ac.jp/

ISSN 1883-9169